

第一百十六年(通卷一七四号)

山

岳

二〇二一年

山岳 二〇二二年 目次

【巻頭寄稿】

古道の風景に魅せられて——北山・奥美濃で学んだもの……………竹内康之……………8
コロナと登山、模索を続けた2020年……………柏澄子……………20

【記録】

「グレート・ヒマラヤ・トラバース」の幕開け……………重廣恒夫……………64
カンチエンジュンガ撮影記——新型コロナウィルスとの攻防戦……………中島健郎……………86

【読物】

深田久弥没後50年、果敢に人生を歩む……………雁部貞夫……………110
世界の山岳信仰——私が眺めて選んだ「世界百名山」より……………黒田洋一郎……………126

【調査・研究】

団体の設立に見る登山の大衆化……………城島紀夫……………180
信州の「教育文化財」、学校登山の行方……………菊地俊朗……………197
小島烏水が遺した飛騨に関する著作……………木下喜代男……………213

図書紹介

ヒマラヤ縦走(鹿野勝彦)……江本嘉伸…229 / 人間の土地へ(小松由佳)……井上
優美…232 / 山の旅人(栗秋正寿)……水越 武…235 / 下山の哲学(竹内洋岳)……
荒井正人…238 / リュックサククXV(早稲田大学山岳部)……節田重節…240 / デ
ス・ゾーン(河野 啓)……飯田年穂…242 / 追憶のヒマラヤ(尾上 昇)……谷山宏
典…246 / 地図づくりの現在形(宇根 寛)……近藤雅幸…249 / Into Wild
Mongolia (G.B.Schaller)……児玉 茂…252

追
悼

大橋 晋さん(越田和男)…257 / 神尾重則さん(大谷映芳)…260 / 中村純二さん(根
深 誠)…266 / 平井一正さん(井上達男)…272

会務報告	279
支部の活動報告	299
委員会の活動報告	358
山岳図書目録	A19
英文サマリー	A11

表紙デザイン 小泉 弘

表紙画 小谷 明

油彩 バタゴニア トレス・トーレヒアマルガ湖

卷頭寄稿

古道の風景に魅せられて

——北山・奥美濃で学んだもの

竹内康之

元三大師道

「掃除場」——四角柱の石の側面に彫られた文字が何を意味するのか、初めは全く想像できなかった。場所は延暦寺の寺領。回峰行者が通る道であり、その一環で決められているかとも思った。だが、修行の内実は口伝なので、一般に知らせる必要などないはずである。

よく観察すると、表面は摩耗して読み難いものの、上に寺院名が刻まれている。道に面する側には梵字(キリーク)の下に町数があつて、距離を示していた。いわゆる丁(町)石だった。

比叡山の「掃除場」標石探しは、このようなきつかけから始めた。そのころ、親しくさせてもらった定光院(横川

にある日蓮聖人の修行地)の方々の協力を得て、文字の解読だけでなく、埋もれている標石の発掘などに取り組んだ。長谷出(走出) 京都市左京区八瀬秋元町)から横川の元三大師堂(四季講堂)まで三十六町(二里)あることや、数字の下に施主(寄進者)の名前が彫られていること。横に「大師講中」とあることから、商人を中心とする信者集団(講)によって、道の維持・管理がなされていることを知る。

この参詣道は、京都と堅田(滋賀県大津市)・湖西方面を結ぶ峠道(「横川越」)を利用しており、途中の不二門で分かれて横川へ向かう。京都から元三大師堂まで最短距離で達することができる、便利なルートである。往来する人々

が多かったのか、走出ノ茶屋のほかに宿（休憩所・茶店）が2ヶ所営まれており、平坦な跡地が往時を偲ばせる。『虞美人草』（夏目漱石）の場面、宗近君らが比叡山へ向かう情景とも重なった。

なにより興味深いのは、どの標石も横川から八瀬へ下山する方向の正面に、「従是西（一町）」「掃除場」が帰途の参詣者に見えるよう設置されていることだ（現状で逆の場合は、移設されたと考えられる）。信者は、割り当てられた寺院の担当区間（一町）を、後から参拝する人々のために掃除しながら（功德を積む意味で）、帰路についたのではないだろうか。もちろん、講による定期的な保守活動もなされたとはいえない。

伝教大師（最澄）が開いた延暦寺の三塔（東塔・西塔・横川）のなかで、当時は横川全体がよほど隆盛だったと見え、現在に名を残す寺院だけでなく、廃絶した坊名を見ることができるといえる。

『比叡山三塔諸堂沿革史』（武覚超・叡山学院・1993年）に載る、「比叡山の山坊変遷一覧表」で確認してみる。江戸時代初期の『山門并葛川記』（1652年）と江戸時代中期の『山門三塔坂本惣絵図』（1767年）には記されるが、明治12（1897）年の『山上坊宇間教調簿』に記載

のない名称は、恵心院・鶏頭院・龍禪院である。また、享保19（1734）年に纏まった膳所藩の『近江輿地志略』（寒川辰清編）には、「横川十四坊」としてほかに顯壽院の名が挙がる。

江戸時代の坊の数はほぼ一定しているものの、明治時代の横川では3分の1に減っており、現況は7寺院しかない。堂舎区域を歩けば、山坊跡の平坦地があちこちに広がるばかりである。確認できた町石だけをここに示したが、新たに見付ければ僧院の数は増えるはずだ。

これらを勘案すると、江戸時代中期までに標石は設置されたと推測できる。「奉再興」として、三十五町石が元三大師堂の門前にあることを踏まえると、元三大師道の歴史はさらに遡ることができるのではないかと推測される。

「比叡山中興の祖」と言われる慈慧大師（良源）は、正月三日に入滅したことから「元三大師」と呼ばれてきた。優れた高僧として名を成し、鎌倉仏教につながる土壌をつくったことでも尊崇を集める。護符「角大師」「豆大師」のほか、定心房（漬物）とおみくじ（観音百籤）の元祖として知られ、今も参拝者の姿が絶えず、相談に訪れる人は多い。商業の発展に伴う社会的な背景があったにせよ、民衆（特に商人）の心を握った証があることに、人々の暮らしや

元三大師道のルートと「掃除場」の標石位置図



峰辻(せりあい地蔵)の道標

- 「『よかわ 元三大師道』
- 「西ハ京ミち并に大原くらま道/南ハこんほん中堂并にくろたに道』
- 「願主 西京 橋甚三郎』

べんてつ千手観音の道標(建立年代不明)

- 「右くろ谷へ十二丁(右ひ糸いさん さいたう 志やかとう さうりんたう ほつけとう 志やうけうとう てんけう大しかうとう ちうとう もんしゆろう 坂本山王大江道)」
- 「左 よかわちうとう 元三大師 いむろ あんらくみん ひ糸い山坂本道』

登山口(八瀬秋元町)の標石

- 「横川 元三大師道」(明治十九年)
- 「御旧蹟 叡山横川香芳谷定光院迄四拾町」(明治二十五年)
- 「圓光大師旧跡黒谷青龍寺 是ヨリ十五町」(明治三十七年)

*この図版は、国土地理院発行2.5万分1地形図を背景に使用し、加工して作成しています。

「從是西 禪定院掃除場」の標石
 「壘六八町 國井傳四郎」

「從是西 龍禪院掃除場」の標石
 「壘二十六町 松屋彌兵衛」

「從是西 鷄頭院掃除場」の標石
 「壘六五町 堺屋大兵衛／伊勢屋市左衛門」

「從是西 定光院掃除場」の標石
 「壘六四町 大坂屋七郎兵衛」

「從是西 華藏院掃除場」の標石
 「壘六三町 山田宗清」

「從是西 一音院掃除場」の標石
 「壘六一町 田中傳(?)左衛門」

「從是西 恵心院掃除場」の標石
 「壘十八町 山形屋五郎衛門」

「從是西 顯壽院掃除場」の標石
 「壘十四町 大坂屋六兵衛」(約100m上部の斜面で発見、移設)

「壘十三町」の標石(?) 上部欠損で判読不能

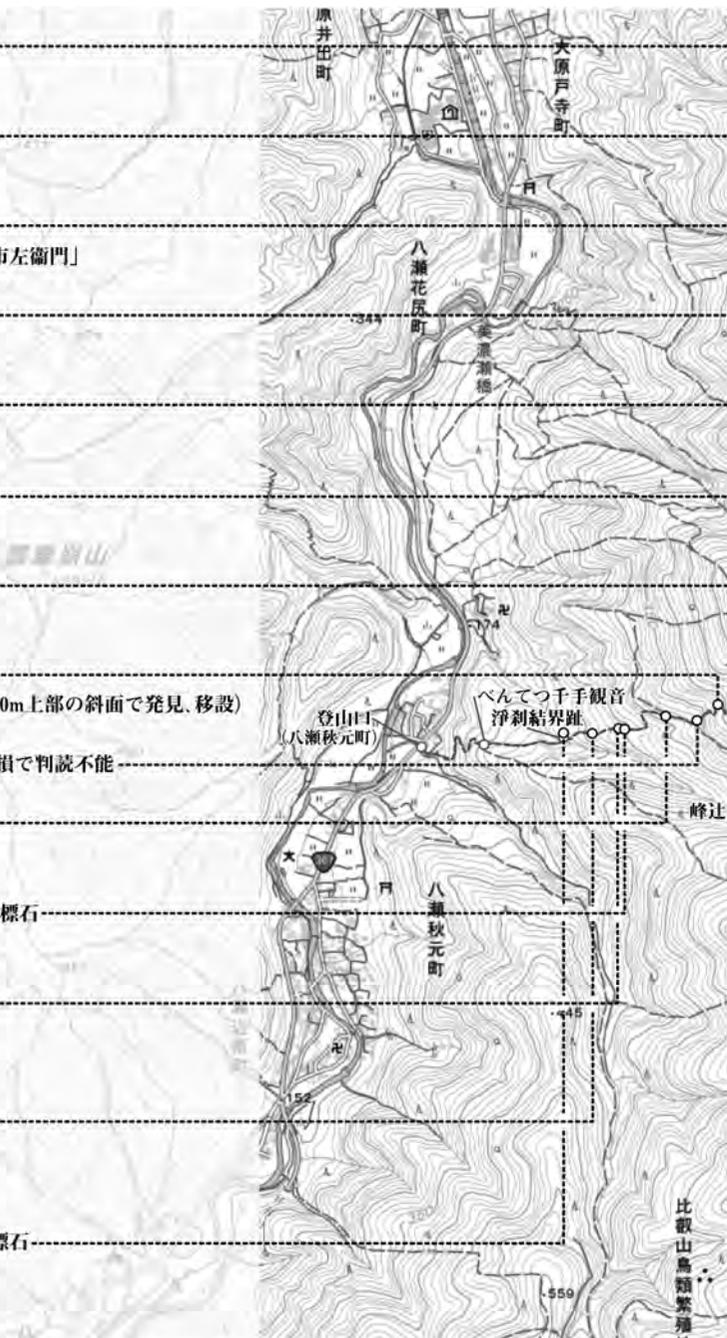
「從是西 定光院掃除場」の標石
 「壘十町 永原屋平兵衛」

「從是西 南樂坊(?) 掃除場」の標石
 「壘九町 □□(下部欠損)」

「從是西 藤本坊掃除場」の標石
 「壘八町 井筒屋太□(?)」
 「大師講中」

「從是西 一音院掃除場」の標石
 「壘七町」
 「大師講中」

「從是西一町 鷄足院掃除場」の標石
 「壘六町 錢屋伊兵衛」
 「大師講中」





十八町の標石

連綿と続く歴史を思わずにはいられない。

歩いて参詣することが少なくなった戦後まで、標石と丁(町)石は何種類も建立されてきた。形の違う石が並ぶ光景はあちこちで見られるが、奉納年代をおよそ特定できるものでは、長谷出(走出)現「登山口」(バス停)から横川へ向かう一連のものが、最古のものである可能性は高い。

五寸五分角の大きな石柱は、往時の人々の強い信仰を具現化したものとして貴重である。点在する「町」石は元三大師堂に向けて数が増えるのに対し、「丁」石は出発地点か

ら逆に減っていく(起点⇨元三大師堂)。明治・大正・昭和と時代が下がるにつれ、目的地までの残りの距離を明確にする様式へと変化した。それは、近代の合理性を反映したものと見える。たとえば、別ルートでこの道に合流しても、参拝者にとって先が読めるのでありがたい。

横川へ続く道には、ほかに「横川(横河)」と表記するものがある。また、「定光院」「日蓮聖人」を掲げるものもあって、詳細な目的地を案内する必要から出てきた工夫だろう。これらは、元三大師(横川・横河)道の標石と並んで立てられている場合が多く、信奉する対象をあえて示している。2018年9月に近畿地方を直撃した台風21号(国際名

⇨Typh.)は、比叡山でも甚大な被害を残した。倒木や斜面の崩落が各所で起き、今も樹木の整理と復旧作業が行なわれている。参詣道のなかには、埋もれていた丁石や石仏が、災害によって地表へ現われる例も出てきた。まだ発見に至らない町(丁)石を求め、今後も探査は続けるつもりである。

おおみねおくがけ 大峯奥駈道

紀伊半島を南北に縦断する大峰山脈は、延長100kmを超す大山脈である。若いころから、白川又川しらこまたなどスケール

古道の風景に魅せられて



並び立つ横川を示す道標(不二門)



元三大師堂(四季講堂)



伊勢路に残る鎌倉時代の石畳(新鹿～波田須)

のある沢登りや、山上ヶ岳をはじめとする主な山峰に足跡を残してきた。近年になって「熊野古道」を歩き始め、同じフィールドながら異なる世界があることを知った。修験道の修行ルートはもちろんのこと、人々がなぜ熊野を目指すのかという根源的な動機に惹かれる。

後白河上皇(法皇)は、生涯に33度(もしくは34度)も熊野へ詣でた(熊野御幸)。やがて、民衆が加わり活況を呈したとされ、「蟻の熊野詣」と呼ばれる。各所に残る石畳がその盛況ぶりを伝え、古いものは鎌倉時代まで遡るらしい。

なかでも伊勢路は、東国の人々にとって人生を懸けるべき対象として広がりを見せた。まず伊勢神宮に参拝し、その後は海辺から峠を越えて次の海辺へ向かう。紀伊の国は広く険しい地形で、熊野三山(熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社)を巡る行程は困難を極めた。途中で斃れた人たちの供養塔がそれを物語る。旅はなお西国三十三所観音巡礼に引き継がれ、故郷へ戻るのに数ヶ月から1年ほど要したらしい。盛んだった江戸時代の「道中日記」には、生き生きと出来事が綴られる。

伊勢路のほか、紀伊路と一体になった中辺路や高野山を出発する小辺路。往時の人々の心に想いを馳せながら、その道筋をおおむね歩き終えた今、残るは大峯の奥駈で本宮大社へ参拝することである。精神的な要素が芯となる一本の道。古くは熊野から吉野へ向かう順峰が多く、近世になってから逆峰(吉野から熊野へ)が主流になった。

霊地とされる「大峯七十五里」(本来は七十五里)の、七十五番目は吉野川の「柳ノ宿」(六田の橋)である。峰入り(奥通り)は、ここから金峯山蔵王堂を経て大峰山脈の稜線を南へたどる。修行なら熊野本宮大社まで一度で済ませたいが、古道を理解するため何回にも分けて歩きたい。元三大師道で培った足元や周囲を見る習慣。回数を重ねる



小辺路(果無越)から望む大峰山脈。遠景左は八経ヶ岳、中央の鋭鋒が釈迦ヶ岳、手前を横切るのは中八人山・石佛山の尾根

ことで、見えるものがあると信じる。

この春に、同好の士で吉野をスタートした。靡のほか歴史的・文化的に重要な場所を意識して、少しずつ先へ進むつもりでいる。現地では、人々によって踏み固められ掘り込まれたルートが、同じ道でも複数存在する様子を目にした。先人の痕跡や時間の経過による変遷を解き明かすことができれば、道が持つ積み重なった構造の内奥に、少しは迫れるかもしれない。古道を歩く魅力とは、日常にはない体験を基礎に、隠れたり、忘れ去られた未知なる心の奥を推し測ることであろう。

「北山」「奥美濃」の峠道

古代の道は、国を治める基盤として整備された。日本の歴史に登場する表舞台だが、人々の営みや個々の感情・意識が伝わってくることは少ない。それよりも、峠や山岳を紹介してつながる地域・地方を俯瞰すれば、遥かに興味深い内容が浮かび上がる。水系が異なると、建物の構造や景観が変わる農山村のたたずまい。風雪に耐え鎮座する峠の地藏尊と石室は、行き交う人たちに何を施し、どのような気持ちを与えたのだろう。古道の核心は、生業や信仰で往来する人々の心と姿にある。



由良川と桂川の分水嶺、佐々里峠に残る石室



かつて旅籠だった京見峠茶家。丹波方面から来ると、初めて京都の街を見下ろすことができた

高校に入学した登山の入門者が、まず目指したのは「北山三十山」だった。これは、大正時代の「山城三十山」（京都府立第一中学校山岳部）を改定したもの。登るべき目標や指針として受け継がれ、高校時代の3年間で登頂数を競い合った。在籍時の三十山表は、京都市街近郊から若狭湾近くまであって、とても広義な「北山（京都北山）」という概念で捉えている。

現代と比べて奥地は不便であり、徒歩が格段に重要だった。1色刷りの5万分の1地形図に描かれた山中の小道が、当時の交通体系と社会状況をよく示している。針畑川（安曇川支流）流域では、1日歩いても車1台すら通らないことがあった。下山して山里を歩いていると、住人からとさどき声を掛けられる。マツタケをいただいたり、材木搬送のトラックに便乗させてもらうことは、ごく普通の出来事だった。

現在では、「鯖街道」と呼ばれる若狭から京都へ魚を運ぶ道。かつては人の背に担がれ、峠をいくつも越えて続いていた。目的地に応じて幾筋ものルートがあり、私たちはピークを目指すアプローチとしてよく利用した。多くの谷筋には、伐採した木を搬出するための木馬道が敷設され、油で滑る丸木を慎重に歩いたことが懐かしい。



1942年に建てられた北山荘。当時の姿を現在もとどめる

直谷（鴨川・雲ヶ畑川上流）にあるクラブの山小屋も、山を学ぶ場であった。貴船（京都市左京区鞍馬貴船町）から芹生峠を経てよく通った。「二ノ瀬ユリ」「小豆坂」など、周辺には山道が四通八達している。その「北山荘」（鴨沂・洛北高校山岳部）現OB「北山の会」管理が、京都市の「京都を彩る建物や庭園」に選定された（2020年・第101046号）。これまで、個人的な美意識や価値観を養ってくれた存在が登山文化と結び付き、評価されたことに驚く。周辺の広葉樹林は自然度が高く、小屋を取り巻く風景は美しい。

もう一つ、印象深いものに『北山の峠』（全3巻・1978～80年・ナカニシヤ出版）がある。著者の金久昌業氏は、「村から峠へ、峠からまた村へと、そして最後に国境の峠を越えると若狭の海が見えるのである。それは、緑の山の中に蜿蜿と延びる一条の白道にも似ている」として、木々や雑草に覆われ、役目を終えた古い道も「生きている」という感情が静かに身を包む」と表現されている（「はじめに」より抜粋）。自然景観と人文景観。両者のバランスと、幅広い要素の一体感が大切だと教わった。

次のステップとして、活動の中心は「奥美濃」に移る。揖斐川の上流には、1987年まで岐阜県揖斐郡徳山村

（現・揖斐川町）があった。支流（西谷）の最上流は門入という集落で、下流に戸入が並ぶ。「にゆう」は「丹生」の意だろうが、奥地から順に「門」「戸」を経て中心地（本郷）という関係（位置）がおもしろい。隔絶された山住みの人々にとつて外界との接点は、川沿いでなくホハレ峠しかない。この道は、さらに八草峠や鳥越峠を越えて近江国（滋賀県）に続く。徳山ダムに伴う廃村まで、地名の考察を基に古い辰砂の採取地などを、地元の方々と一緒に踏査した。

ホームグラウンドと言える「北山」「奥美濃」で学んだのは、風土を受け止める広い視野である。古道を指向する原点は峠道にあり、自身の目を通して探究する心をこれからも携えていたい。

（元京都支部会員）

コロナと登山、模索を続けた2020年

柏澄子

「withコロナ」のなかで

新型コロナウイルス感染拡大と登山を主軸に、2020年を振り返るといふ題目をいただいた。私は、登山全般をテーマにしたライターであるが、2020年はライターとして取材したのはごくわずかだ。それよりも、自分自身が感染拡大のなかで生き抜くことにもがいていたし、見たり書いたりする以前に、私自身も身を置いている登山の社会と業界をどうしたらよいか、模索していた。経験したこととはごくわずかであるが、ここで報告したい。登山界が、それぞれの立場からコロナと向き合い、山に向き合った1年。この先の登山社会を育むヒントを少しでも見出してもらえ

るとしたら望外であり、できれば登山に関わるあらゆる方々と意見交換をしながら、未来を考えていきたい。

「Team KOI」（コロナ対策のため集まった私的チーム）は、「コロナ元年」と言われる2020年4月に生まれた。政府が非常事態宣言を出し、登山者にとっては、山に登ることともままならない時期だった。それぞれどこか、日常生活すら変わった人が、大半だったのでないだろうか。

山岳4団体（一般社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会、公益社団法人日本山岳ガイド協会、日本勤労者山岳連盟、公益社団法人日本山岳会）が、登山の自粛を呼びかけたのは、20年4月20日。「自粛」を辞書で引くと「自

ら慎む」とある。他者に強要されるのではなく、自ら考え、自らの意思で、登山をすることをひかえるという意味になる。けれど、山岳4団体から自肅が呼びかけられるとなると、影響力は大きい。私自身、4団体のなかの3団体の会員であり、当会においては、当時、理事を務めていたこともあり、「出口」を見つけないと考えていた。「withコロナ」のなかで、どのように登山が再開できるのか、探っていた。4月末の時点で、なにができるのかまったくわからなかったが、そのように考えた。

それには山岳団体だけでなく、登山をとりまく社会に関わるあらゆる立場の方々と、垣根を越えて意見交換し、協力する必要があると考えた。

まず山田淳に相談をした。山田とは、「withコロナ」の登山だけでなく、今後の登山全体のことを考えていきたいという話をした。このことについて、山田が『山と溪谷』2020年9月号に端的に書いているので、一部抜粋しながら引用したい。

*

登山業界が、いや、登山という行為そのものが、社会全体のなかで、独りよがりな理解できない人たちのもの、と見られないように、何らかの動きができないか。そのため

には、いろいろな視点を含めよう。ドクター、山小屋、山岳ガイド、旅行会社。つながりの深い人たちから選ぶのではなく、全体感をもって論議できるメンバーにしよう。そうやって声かけをしてチームメンバーを集めました。(中略)

今後の山登りに、team KOIは明るい未来を見えています。自然のなかで遊ぶという、人として当たり前な行為が、社会のなかで認められるように。そして、山という、先鋭的な冒険野郎から健康のためのハイカーまで、多くの人を楽しませてきたものが、これからもより多くの人を魅了してくれるように。(中略)

新型コロナウイルスとは、ちょっと長い付き合いになりそうです。ただ、これも一つのきっかけ。どんな明るい未来が描けるか、みんなで考えていきましょう。

*

山田が2020年7月中旬に書いた文章であるが、4月に、最初に2人で話したときと、ほぼ同じ内容であり、普遍的内容だと思っている。この考えを共有したうえで、山を仕事の場とする人たちに声をかけ、以下の9人でスタートした(肩書は当時のもの)。

浅井悌（医師、利尻島国保中央病院副院長、日本山岳ガイド協会ファーストエイド委員、災害人道医療支援会理事）

稲垣泰斗（医師、北里大学医学部総合診療医学特任助教、

「ウイルドネス メディカル アソシエイツ

ジャパン」医療アドバイザー）

柏澄子（ライター、日本山岳会理事）

近藤謙司（国際山岳ガイド、アドベンチャーガイド、ス

トーンマジック、日本山岳ガイド協会理事）

佐々木大輔（国際山岳ガイド、ガイド盤溪、日本山岳ガ

イド協会理事）

佐藤泰那（編集者、『ランドネ』編集長、KUKKA）

花谷泰広（甲斐駒ヶ岳黒戸尾根・七丈小屋、山岳ガイド）

柳沢太貴（赤岳鉱泉・行者小屋）

山田淳（やまどうぐレンタル屋、フィールド&マウンテ

ン）

緊急事態宣言下でのメッセージ

4月24日にオンラインでミーティングを設けた。山田と私は、2人で練った「出口戦略」の草案をもって臨んだ。時間を要し段階的になるだろうけれど、思うように山に登

れない登山者たちに、山に戻る道筋を示すことができるのではないかと考えた。感染拡大の状況や医療現場の状況を鑑み、医療的根拠を得たものにしたと考えていた。しかし、それは甘い考えだった。

医師の2人は、いま（4月末）は出口を示すよりも、伝えたいことがあると言った。医療現場がひっ迫している現状を理解してもらいたい。通常診療もおぼつかなくなってきた。各地の行政のメッセージも読み込んでもらいたい。いま登山するのが難しい状況であることを理解してもらいたい、というのが2人の話の大筋だった。その詳細を聞き、医療現場の日ごとの現状を聞き、山を仕事の間、生きる糧としているわれわれであっても、苦しいながらも納得せざるを得なかった。

そこで発信したのが「なぜ、いま『登山を自粛』なのか。その先の出口はどこにあるのか——」。医師2名を含む、山を生業にする関係者8名の声（ヤマケイ・オンライン、5月2日）だった。どうして「登山を自粛」することを考えなければならぬのかをまとめた。この先へ進むために、よりよい出口戦略を見つけていくためにも、医療現場の生の声を伝えようという意図でもある。

この記事については、大きな反響をいただいた。同感だ

というのが大半であったけれど、否定的な声も幾つもあった。私にも直接届いているので、その数が少なくないことは自覚している。

しかし、けっして「自粛」だけを強調したのではなく、その先を見据えての発言だった。初回ミーティングの翌々日26日には、事業者側の視点に立った内容をテーマとしたミーティングをした。Team KOIに集う人たちの大半は、山を生業としている。終息するまで山で仕事をしないと、いうわけにはいかなかった。また、山に戻ることも、人間としても健やかな選択だと考えていたし、登山というわれわれが人生をかけて大切にしているものを、育み続けたいという考えだった。

事業者の視点に立ったミーティングの内容を、外部に発信することはなかったが、いかにこの窮状をしのぐか、山の事業者たちもが、健全に事業を再開できるようにするためにはどうしたらよいか、という意見交換も行なわれた。

急場をしのぐ方法として、登山・山岳ガイド達に向けたアルバイトなど働き口の紹介、「ふるさと納税」の返礼品に登山ツアーを入れる、などのアイデアが挙がった。山田からは、登山に特化したふるさと納税のプラットホームを作る展望が話され、これについては実現した。

なによりも、本業再開に向け、モチベーションの維持が重要だという話もあった。山小屋も登山・山岳ガイドも、登山ツアーの旅行会社も、顧客あつての商売だ。自粛によって顧客不在の期間に、いかにモチベーションを保つかは重要だった。

佐々木大輔からは、「登山の本来のよさを見つめなおす機会を作りたい」という話があった。山で事業を行なえない期間であっても、街で仕事を作ることではある。それぞれの山域の自然の魅力、歴史、山小屋のことなどを文章や写真、動画で表現し発信していくのはどうか、という話だった。このような企画には執筆、撮影、編集、媒体のほか、登山・山岳ガイドや山小屋などの事業者も関わることができ、雇用を確保できる可能性がある。そしてなによりも、「登山は素晴らしい」「山は素晴らしい」ということを発信することによって、登山者たちの気持ちをつなぎとめておくことができるかもしれない。それは顧客を確保したいというよりも、登山そのものを守りたいという思いだ。

医師の2人が積極的に参加していたことも、印象的だった。現在も変わらないが、当時もさぞ医療業務が大変だった時期だと思う。稲垣泰斗は、「登山に限らず」自粛をお願いすることで、われわれの医療現場が救われている。医

療従事者の雇用は守られているが、犠牲になっている人たちがいることは、いつも考える。たとえば、山小屋や登山・山岳ガイドを応援するキャンペーンができないだろうか」と提案があった。また利尻島の病院に従事する浅井悌は、北海道のガイド達に昆布干しの仕事を提供する仕組みをあっという間に作った。浅井曰く、「利尻島は、ガイドが登山者を大勢連れてきてくれるから潤う。少しでもその恩返しをしたい」と。医師2人のこういった考え方は、その後 team KOI の活動のベースにもなっている。

登山再開のために

政府が緊急事態宣言を段階的に解除するのに合わせて、登山を再開するときを配りたいことを書いた「登山を再開するために。『登山 with コロナ』のリスクマネジメント」を、ヤマケイ・オンラインに載せた。

前編では、計画・準備段階のことを書いた。準備段階で大切にしたいのは、次のことだ。出発地（自分が居住する地域）、経由地、目的地（登る山がある地域）の行政のメッセージや感染状況、医療の状況を調べることを、計画立案のスタートとする。健康管理に気を配り、不調が感じられたら登山を控える。計画にはいつもよりも安全マージンを

大きく取り、余裕のあるものとするなど。コロナに直結するトピックもあれば、本来的な登山のリスクマネジメントに通じる内容も多い。

後編は登山中と下山後のこと。なかでも山小屋の宿泊についてはポリユームを使った。山小屋での感染予防は山小屋側の努力だけでは成立しない。利用者側が気を配れること、協力できることも多くあると考えたからだ。

いずれの内容も、team KOI からの提案であり、これをたたき台として、登山者たちがそれぞれの山岳会や仲間同士、あるいは家族で話し合い、自分たちのルールを作り、登山を再開するときの助けになってほしいと考えた。

なお前記2編以外に、ガイドと山小屋が、それぞれ業務を再開するにあたって気を配るべきことについても、多くの時間を割いて議論した。ガイド業に関しては、日本山岳ガイド協会のように、職業ガイドが所属する団体が指針を出す、山小屋については不透明だった。山小屋をまとめる全国組織はない。山域ごとに自然環境も運営体制もまちまちである。しかし議論の末、山小屋営業に関する提案「登山 with コロナのリスクマネジメント 山小屋営業について」を公表することは、やめた。理由は、なによりも山小屋を運営するご当人たちが一番考えていることであり、

山域によっては組織的な動きも出てきていたからだ。

しかし、柳沢大貴から「八ヶ岳観光協会では、こういった提案を待っている。何らかの基準がないと営業再開にも不安だ」という意見があった。八ヶ岳観光協会の意向を確認したうえで、提案を配布した。

一方的に提案を配布するだけでは不完全と考えており、これを機に、team KOIの山小屋訪問（後述）が始まったことは、われわれにとっても貴重な機会となった。

より多くの登山者に親しまれるポスターを

「登山再開のために」という文章は長く、繰り返し読んでもらうことは難しいと考え、ポスターを作ることを考えた。これは山田のアイデアであり、4月下旬からたびたび話題に挙がっていたところに、佐藤泰那が編集者としての手腕を発揮した。出来上がったのは夏山シーズンが始まる直前、7月上旬だった。イラストを描きデザインしてくれたのは、旅するイラストレーターとして活躍する大野舞だった。「できることだったら、なんでも協力したい」と、限られた時間で力を発揮してくれた。彼女の力添えがあつて、朗らかな雰囲気のパスターが出来上がり、多くの人に愛されるものになった。

ポスター制作にあたって、50以上の企業・団体が資金的協力をしてくれた。2021年8月現在、約2700セットのポスターが全国各地に発送されている。掲示先は山小屋、山岳地域へ向かう交通機関（バス、ロープウェイ、ゴンドラなど）、登山用具店、山麓の登山者が集うカフェやレストラン、温泉や駅、さらには山岳関係施設など多様だ。イベントで掲示してくれた人たちもいた。直接送付したケースもあるが、友人が各地に配ってくれたり、そのまた友人が掲示してくれたり、私たちの知らないところまで広がっていった。掲示数よりもなによりも、登山の愛好者から愛好者へとポスターが広がっていくことに、感謝した。發送費をまかなうために、クラウドファンディングをしたところ、191人もの方々からご支援いただき、総額92万2500円が集まった。

ポスターの内容は、今後、新型コロナウイルスの研究が進み、治療やワクチン、薬品などの開発が進み、感染が拡大と縮小を繰り返すなかでも、なるべく活用できる内容にしようと思つた。

幾つかご意見をいただいた。「グループでも1人用テントを中心に」という記述についてだ。本格的に登山が再開される前に作文したものであり、今後のことが読み切れて

も多かった。登山の業界には、業界団体が無い。山小屋もメーカーや小売店も、全国組織はない。組織はなくとも、隣同士が繋がりは始めたと感じているし、その繋がりをさらに広め、確かなものにしていくことができる、可能性も感じる。

team KOIは、出入り自由で変容していく単なるひとつの集まりである。コロナに限らず、これからも登山社会全体のことを考えていきたい。

感染対策のための山小屋訪問

方法

2020年6月8日～7月28日の期間に、夏営業を行なっている(予定している)八ヶ岳および南アルプスにある山小屋のうち12ヶ所へteam KOIメンバーで訪問し、新型コロナウイルス感染対策に関する現状の確認、対策の検討・提案を行なった。訪問した山小屋には5月下旬にteam KOIで作成した山小屋営業に関する提案「登山with コロナのリスクマネジメント 山小屋営業について」を予め共有しておいた。

「事前スクリーニング」「感染経路対策」「有症者発生時の



2年連続訪問した八ヶ岳・オーレン小屋(①)

対応」を意識し、感染対策を考えた。「事前スクリーニング」は、宿泊人数をコントロールする、ハイリスクな宿泊者を把握／制限する、来訪前から行なってもらいたい感染対策について協力を得る、ことを目的とした。「感染経路対策」では、新型コロナウイルスの3つの感染経路である、飛沫感染／接触感染／エアロゾル感染のリスクの高い箇所、場面を洗い出し、対策を検討した。

「有症者発生時の対応」として、有症者が発生した際に感染の拡大を防ぐための隔離策を講じ、また、クラスター対策のための情報共有を可能にする方策を検討した。

前提とした考え方

・登山のなかで最もリスクが高い場所は山小屋

登山口を出発して下山するまでの間、室内に多くの人が集まり、長時間共に過ごす場所は、唯一山小屋と言えるだろう。山小屋は登山というアクティビティのなかで最も感染リスクが高い場所といえ、その対策を行なうことは登山全体の感染リスクを下げる意味において価値が高い。

・持ち込みをゼロにすることは不可能

一定割合の無症状病原体保有者がいる、発症前から感染力を発揮する、といった新型コロナウイルスが持つ特徴か

ら、どんなにスクリーニングをしてもウイルスを持ち込む可能性をゼロにすることはできない（事前スクリーニングは万能ではなく、その確率を下げるために「できること」である）。

・クラスター化させない、クラスター化してもできる限り小規模で抑える

事前スクリーニング以降の対策は、ウイルスが持ち込まれた際にほかの宿泊者やスタッフを守り、グループ間を超えて感染が広がることをできる限り防ぐためのものだ。クラスターを発生させない、クラスター化しても最小限に抑えるのが目的である。

実際に訪問して

まず山小屋のスタッフにインタビューを行ない、山小屋の基本情報（標高、ロケーション、管理者、スタッフ人数、水源ほか）、例年との営業規模の変更点（営業期間、宿泊定員、テント場幕営数、スタッフ人数）、などの情報を得た。「事前スクリーニング」に関連して、宿泊を原則完全予約制としているか、予約時に宿泊可能条件（症状、居住地の流行状況、宿泊時の必需品、個人で行なってもらおう感染対策ほか）を定めているか、また、それらのインフォメーショ

ンをしているか、宿泊者到着時に検温・症状確認を行なうか、スタッフの検温・体調確認を行なうか、などを確認し、対策を考えた。

その後「感染経路対策」として、受付・売店、宿泊室、食堂・厨房、共有スペース、スタッフルーム、有症者対応スペース、(それぞれの)清掃の場面に分けて、各所を回りながら、宿泊者、スタッフの各視点を意識し、3つの感染経路となり得る箇所、場面を洗い出し、対策を考えた。

また「有症者発生時の対応」として、隔離法、動線を確認し、対策を考えた。最後に追加で質疑応答を行ない、疑問点、不安に感じている点の洗い出しを行なった。コロナ対策のためにこれまでどのような情報ソースを活用したかを尋ね、それ以外に有用と考えられるソースの紹介を行なった。

結果と考察

・訪問先の基本情報

訪問先は八ヶ岳、南アルプス山域の山小屋であった。比較的アプローチしやすい山小屋も散見され、登山口からの最短コースタイムの平均は2時間10分であった。

水の確保は感染対策に重要な要素である。各山小屋の水

源は湧水を筆頭に多彩で、水量は豊富な山小屋が多かった。特に八ヶ岳山域の山小屋は通年営業が多く、冬季には水の確保状況が変化する山小屋もあり、懸念材料と考えられた。

ほとんどの山小屋で原則完全予約制としていた。宿泊者数のコントロール、という意味だけでなく、予約時に情報収集することで「事前スクリーニング」としてハイリスクな宿泊者を把握、制限する、来訪前から行なってもらいたい感染対策・山小屋での感染対策の方針についてインフォメーションし、協力をお願いするという効果も考えられた。すべての山小屋で宿泊者の定員を減らすことを想定していた。密集の回避のためというだけでなく、感染対策やスタッフ数の削減のために増えた業務負担にも考慮し、対応できる宿泊者数を定めていた。明確な定員数を定めず、状況を見て可変としている山小屋もあった。

ほとんどの山小屋はスタッフ数を削減して営業する方針としていた。理由として、宿泊者数の削減が見込まれるため、状況から経験あるスタッフのみでの営業、経済的な判断などが挙げられた。

・受付

多くの山小屋の入り口では入館時マスクの着用を促す注意喚起や、手指消毒用品の設置がなされていた。受付だけ



CO2 モニターは管理側だけでなく宿泊者も換気状態を確認することができ、安心
①



受付で体温測定中。ハケ岳・オーレン小屋にて①

でなく、館内のほぼすべての場面でスタッフのマスク着用は必須となっており、宿泊者にも原則マスク着用を義務付けていた。多くの山小屋でビニールカーテンや開閉式ガラス窓を用いた飛沫感染対策がなされていたが、風の吹き込みなどにより設置困難という山小屋もあった。

スタッフの手袋の装着、キャッシュトレーの利用といった対策をとっていた山小屋も散見されたが、これらが不完全な接触感染対策であることは都市部でも意外と認識されていない。行為を行なった後、手指消毒を行なうことが基本であることを確認し、スタッフ側に手指消毒薬が設置されていない山小屋では設置を提案した。

キャッシュレス決済は接触感染対策になると考えられるが、電波状況や維持費などの関係で多くの山小屋では整備が進んでいなかった。

これまで団体客に対しては代表者のみの情報取得としていた幾つかの山小屋も、今シーズンより受付時（あるいは事前予約時）に宿泊者全員の住所、氏名、連絡先の情報取得を行なうようにしていた。これは、万一感染者が発生した際の連絡態勢など、迅速な対応に有用と考えられた。

受付時にすべての山小屋で体調確認を行なっており、到着時間や体調を加味した上で、可能であれば有症者には下

山をお願いしていた（不可能な場合は隔離へ）。体調確認の方法は、検温、口頭での体調の確認、アンケート用紙への記入などであった。

・宿泊室

宿泊室の感染対策で特に注意を要するのは、不特定多数が共用する大部屋であろう。物理的距離（いわゆるソーシャルディスタンス）の確保に必要なだけの個人スペースを取ることは、重要な飛沫感染対策となる。

今回訪問した山小屋のうち4分の1にあたる山小屋が20年シーズンの大部屋の利用を中止し、個室のみでの営業としていた。大部屋利用可能な山小屋の多くは、1人当たり4㎡ないしは2畳以上の確保を目安に大部屋の定員数を定めていた。個人スペースの間に簡易の壁を増設したり、カーテンを設置して仕切りとしている場所も見られた。仕切りのない山小屋においては、テープでラインを引き境界を明示するなどの方法を提案した。

宿泊室で共用となるものの代表として寝具が挙げられる。意外にも毎回のシーツや枕カバー交換で接触感染対策しているケースが多かったが、立地条件や運搬方法等によって、困難であることが想像された。布表面でのウイルスの不活性化までの期間を考慮し、使用する布団をロー

テーションする方法は、より簡便で現実的であると考えられた。可能な限りの天日干しや、乾燥が不活性化までの期間を短縮する可能性があることを、アドバイスとして加えた。それぞれ一長一短があるものの、ほかに不織布で作成したシーツを利用するケース、補助的に簡易シーツを販売しているケースなど、さまざまな工夫が見られた。

宿泊室のエアゾル感染対策として、まず挙げられるのが換気である。どの山小屋も換気に留意しており、できる限り持続換気、完結的な換気回数の確保に気を遣っていたが、具体的な回数や頻度は定められてはいなかった。ほとんどの山小屋は立地的にも換気が良かったが、訪問期間が6、7月ということもあり、今後、冬季営業を行なう際は夏季同様の換気は困難となることが想像される。最低限の換気を目安を把握するための一案として、室内二酸化炭素濃度のモニタリングを行なうことを提案した。

・食堂・厨房

マスクを外して過ごす時間が多くなる食堂や、食物を扱う厨房は重点的な対策を要する場所である。新型コロナウイルス感染対策に限らず、厨房は清潔のレベルを上げる場所であることをまず再確認した。

素泊まり以外の宿泊者全員と一堂に接する配膳スタッフ



パーティションで区切った就寝スペース。必要十分のサイズに留め、上部が抜けているので部屋全体の換気を妨げることもない。広河原山荘で(②)



赤岳鉱泉の食堂のパーティション。グループ構成によって可動できる(③)

と、厨房スタッフとは分けることが理想と考えられるが、マンパワーが十分でなく兼任せざるを得ない山小屋も散見された。このようなケースでは食堂と厨房を出入りする際に手指消毒をするだけでなく、着用するエプロンを変えることを提案した（調理用、接客用）。飛沫からの物理的防御だけでなく、清潔レベルの切り替えを意識させる目的でも、簡便で効果が期待できる方法と考えられた。

受付の項でも述べたが、接触感染対策として手袋をすることの注意点についても再確認した。

接触感染対策としては、使用中、使用済みの食器の取り扱いにも注意を要する。

半数の山小屋では宿泊客に下膳の協力を求めず、すべてスタッフが行なうこととしていた。カトラリーなどに限り、あるいはすべての食器を使い捨てとし、使用済みの食器をすぐに捨てることで（主にスタッフ側の）感染対策としている山小屋もあったが、そのことによる費用やゴミの増加も問題と考えられた。

「おかわり」は使用中の食器を扱う行為であり、しゃもじや行為者の手などを介して病原体を媒介する可能性は否定できない。半数以上の山小屋で従来通りのセルフサービスとはせず、不潔とならない手順を理解したスタッフが担当

することとしていた（必要に応じて手順についてのアドバイスも行なった）。また、食事の都度、新しい食器で食事を提供している山小屋もあった。訪問した山小屋のなかでは、おかわり禁止としている山小屋はなかった。

使用済み食器は、洗剤と熱湯による洗浄でウイルス不活性化することが見込まれるが、その他の感染対策も含め自然乾燥がより望ましいと言えるだろう。実際は布巾での拭き上げをしているところが多く、できるだけ頻繁に布巾を交換することを提案した。訪問した山小屋の多くは水を豊富に確保できる環境であったが、そうでない場合、食器洗浄の方法はより大きな問題点として挙げられるだろう。

新型コロナウイルスの主な感染経路は飛沫感染である。食堂での飛沫感染対策は、より重要であると言える。3分の2の山小屋では、食堂内の配置を変更するなどして座席間隔を空け、距離を取る方法を取っていた。横並びを原則としている山小屋もあり、これらにアクリル板を併用している山小屋もあった。

これらの対策には一定の効果があると考えられるが、実際にリスクが高くなる場面として想定されるのは、これらの対策を超えた状況、即ち食事後に食堂に残った不特定多数のグループが交流して団欒を行なうことであると言える



山小屋入り口にある感染予防対策に関する案内。わかりやすく図解されている。オーレン小屋にて(①)



復活したオーレン文庫。使用前後の手指消毒と、一定期間ローテーションさせることによって接触感染予防を講じている(①)

だろう。時にマスクを外した状態で、盛り上がるほどに声は大きくなり、距離を保つのが難しくなる。このような交流が山小屋滞在の最大の魅力の一つに挙げられることは理解できるが、クラスター対策としては最も避けるべき状況と言わざるを得ない。スタッフはこれらに抑制的な声かけを行なうこと、予め注意喚起をしたり掲示を行なうこと、食堂利用時間に制限を決めるなどの対策を行なうことが非常に重要であると確認し合った。

・共有スペース

共有スペースや、そこに置かれている共有物は、接触感染予防の対象となる。

書籍は半数近い山小屋で撤去されていたが、特徴ある書庫の存在もまた山小屋の魅力の一つと考えられる。撤去、通常通りとしている山小屋双方に、書棚を解放する際のリスク低減法として、書棚の前に手指消毒用品を配置し、書籍を手取る前後での使用を促す、という方法を提案した。また、図書館の例を参考に、用紙表面でのウイルスの不活性化期間などを考慮に入れ、貸し出し+その後の休止期間を含めたローテーションという方法を採用している山小屋もあった。

また、火気を取り扱う自炊スペースでアルコールを含む

手指消毒用品（特にスプレータイプ）を使用することは、火災発生のリスクを高めるため、設置場所や方法に注意を要することが確認された。

共有スペースのみならず、山小屋内のハイタッチサーフェス（不特定多数の人が高頻度に触れる箇所）の消毒は接触感染対策のキーとなる。過半数の山小屋でハイタッチサーフェスのリストを作成していた、または作成中であった。しかしながら、多くの山小屋で具体的な頻度を決められておらず、その背景に、高頻度の消毒にマンパワーを避けないという現実もあった。

より有用で現実的な接触感染対策は、やはり宿泊者自身の手指消毒であり、食堂の出入り口、階段の最下部、大部屋の出入り口など宿泊者自身が手指消毒を行ないやすい場所へ、新たに手指消毒用品を設置することを提案した。

・スタッフ、スタッフスペース

スタッフは共同生活者であり、頻度の高い接触や長時間の空間の共有は避けられない。スタッフ間の感染リスクは常に高いため、個々が予防策を徹底することが重要であり、また、スタッフエリアは「聖域」として保護すべき場所である。

しかしながら、スタッフエリアへ入る際に予防策を講じ

ることへの意識は高いとは言えず、出入り口に手指消毒用品を設置することや、入室に際し防護衣（接客用エプロンを含む）を脱ぐことなどを提案した。

どの山小屋でも原則的にスタッフスペースに宿泊者が進入することを禁止していたが、常連客などが進入するケースはしばしば見られることで、注意すべき点として挙げられた。現実的にはスタッフエリアは小さな個人スペースのみ、そもそもスタッフスペース自体が特に定められていないという山小屋もあり、感染予防以外の問題点としても考えられた。

・有症者対応

いずれの山小屋も、宿泊者が到着した際に症状があると判明した場合は、到着時間、体調が許せば下山してもらうことをファースト・チョイスとしていた。それが叶わない場合、または宿泊中に体調不良となった場合は隔離措置の適応となる。

50%の山小屋ではテントでの隔離を想定しており、テント場が山小屋から離れている場合は、必要時に対応しやすいよう、より山小屋に近い場所に幕営スペースを設けている。そのほか個室、冬季小屋を隔離場所としているところもあった。



お客がマスクを外す食堂の掃除、消毒はより入念に。従業員はPPEを着用して保護している(①)

ほかの宿泊者との接触を避けるため、有症者の動線には留意しなければならない。屋内の個室を隔離場所とした山小屋は、出入り口やトイレまでの動線が最短となる部屋を設定するなどといった工夫をしていた。トイレを共同利用することは、宿泊者との接触機会となるだけでなく、(新型コロナウイルス感染症に限らず) 便飛沫やハイタッチサーフェスを介しての接触感染のリスクを高めることとなる。これについては普段使用されていない屋外の別トイレを利用する、簡易トイレを用いる、共同トイレの1個室を占有として使う(＋スタッフによる交通整理と清掃)、などで対応することとしていた。

スタッフは有症者と接触せざるを得ないが、その機会を必要最低限とすることは重要である。隔離場所にハンディ無線機を置き、スタッフとのコミュニケーションツールとして利用してもらい、対応するスタッフを限定する、といった方策が想定されており、有用と考えられた。

ほかに、有症者の同行者(濃厚接触者である可能性が高い)の対応法についてもデイスカッションを行ない、有症者やほかの宿泊者と別の隔離スペースを用意することを推奨した。

・清掃

清掃は汚染物を扱う行為であり、新型コロナウイルスの感染対策に限らずプリコーション（予防）に留意すべき場面である。特にトイレ清掃の際は飛沫との接触リスクが高く、ガウンやレインウェア、専用の長靴などを着用し防御レベルを上げることが推奨される。ほとんどの山小屋でマスク、手指消毒用品といった基本的な感染対策用品の用意はなされていたが、レインウェアや長靴の用意がある山小屋は半数程度に留まっており、準備と使用の検討を提案した。

リスクレベルの違いで場所を分け（ゾーニング）、清掃担当者や清掃順を決めることは感染予防に繋がる。マンパワールのあるなしで方法が分かるところだが、トイレの担当者を決める、順番を最後にするという考え方は比較的浸透していた。

清掃後は清掃者自身が汚染している可能性が高く、すぐに感染対策を行なうことが非常に重要となる。トイレ掃除を行なった際に着用していたガウンやレインウェア、ほかの着衣などは異なった箇所に移動する前に脱衣する必要がある。また、汚染しているガウンやレインウェアなどのPEの外側に触れないよう脱衣する方法には慣れが必要であり、要望のあった山小屋ではトレーニングを行なった。

使用後のPPEは感染源となり得るため、再利用の前に洗濯、消毒を行なう必要がある。連日の洗濯、消毒は業務負担となり得るが、実行可能な方法を検討してもらうことを提案した。

場面に合ったPPEを選ぶことは防御レベルを上げるが、扱いについて一定の注意を要すことがあり、簡便な方法であるとは言いきれないと考えられた。

訪問をすべて終えたのち、各山小屋から多く寄せられた質問、多く挙げられた問題点をまとめ、それに回答する形でフォロワーを送った。

訪問を終えて

・指導ではなく共に考える

そもそもわれわれは、感染対策にお墨付きを与えたり、営業を制限したりする立場ではない。営業を決めた山小屋は、それぞれ多くの時間を費やして対策を考えてきていた。われわれが行なってきたことは、それらをベースに、よりよい方法、追加でできる対策を共に考えようといったものだった。

また、実際に足を運んだことで、それぞれ異なる山小屋の状況・特徴を知り、画一的な対策だけではフィットし得

ないということ強く実感した。

「山小屋 with コロナ」の経験値は、どこにも存在しないなかで始めた訪問で、われわれ自身も多くのことを学ぶ結果となった。

・「感染経路の理解」がキー

基本的なことだが、実際に感染対策を考えていくなかで、「感染経路の理解」を深めることがキーであると再認識させられた。これを押さえることができていれば、さまざまに変わりゆく状況や場面において、応用を利かせることができると考えられた。

・実行可能、持続可能な対策

対策は実行可能、持続可能なものでなければならない。ディスカッションをする、実際に試してみることで「できっこない」という心理的ハードルを下げることも大切だったが、許容できる負担の範囲を探ることも重要だった。山小屋は病院ではない。より完璧な感染対策を求めるあまり、山小屋の魅力がなくなってしまうのは、営業する意味もまたなくなってしまう。われわれはこれからも求めに応じて、実行可能な対策を山小屋と共に考えていくつもりである。

最後に

「ある程度の感染を受け入れつつ社会活動を維持していく」方針である日本で、with コロナを生きていくには、感染リスクを常に意識していかなければならない。その大きさは流行状況だけではなく、個人の考え方や背景（自身や周囲の重症化リスク等）によっても大きく異なるだろう。多様な考え方が存在するのは当然なことである。万人にとって明確な線引きが存在しない以上、そのラインは自分で作る必要がある。それは山小屋にも宿泊者にも言えることだ。そしてそれは、新しい知識や自身の考え方によって、いつでも変えてよいものだろう。

山小屋は自分たちの考え方をできるだけ発信し、宿泊者と共有できるとよいだろう。宿泊者は自分の宿泊先を選ぶために情報収集を行なうことが大切だろう。

考えるのをやめないこと、お互いを知ろうとすること、多様な考え方を受け入れること、登山や山小屋に限らず、with コロナを生きていく上で心に留めておきたいことである。

われわれの訪問を受け入れていただいた山小屋関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

(文Ⅱ 稲垣泰斗)

山小屋スタッフのトレーニング

つぎに、スタッフトレーニングで訪問した赤岳鉱泉と、コロナ対策2年目になった2021年5月に再訪したオーレン小屋について報告する。

赤岳鉱泉・営業再開に向けて

八ヶ岳南部にある赤岳鉱泉は、2020年7月からテント場と売店の営業を再開し、8月から山小屋の宿泊営業を再開した。当主の柳沢太貴がTeam KOIのメンバーであることがきっかけとなり、7月下旬にメンバー3人で、赤岳鉱泉を訪問した。

赤岳鉱泉・行者小屋は、4月の時点で11月末までの休業を発表した。八ヶ岳のなかでも規模の大きい山小屋であり、盟主と言われる赤岳にアクセスしやすいこともあり、赤岳鉱泉・行者小屋の休業宣言は、大きなインパクトがあった。何よりも4月の時点で、そこまで長い休業を発表した山小屋はここだけだった。

休業の理由は、得体の知れない相手である新型コロナウイルスに対して、十分な感染予防対策が取れないこと。営業しても休業しても赤字覚悟であるが、営業をして万が一

山小屋で感染が起きた時のリスクを考えると、休業する方が赤字額の目途が立ちやすい。そして、何よりも登山者と従業員を感染から守りたいという率直な気持ちだった。

しかし、動いていなかったわけではない。通常通りの従業員たちが山小屋に詰め、山小屋の維持管理、登山道整備など日常の業務を行なっていた。そのなかで、柳沢の気持ちや考えが徐々に変わってきた。日々の情報収集を続け、今後の再開に向けて従業員たちと議論を続けるなか、これであればできるのではないかと、という見通しが立った。赤岳鉱泉に限るが、7月にテント場と売店を再開、8月から山小屋の宿泊営業を再開することに決めた。

・山小屋訪問のノウハウを使って（受付、居室、食堂や厨房）

柳沢とともに、医師の稲垣泰斗を含むTeam KOIのメンバー3人が赤岳鉱泉に入ったのは、宿泊営業を2週間後に控えたころだった。まずは、これまでの山小屋訪問通り、「チェックリスト」に沿って情報や意見の交換を始めた。このチェックリストは、宿泊者が入館するところから始まる。

受付にあったリーディンググラスや公衆電話は、ハイ

タッチサーフェスになり消毒が行き届かない場合もあると
考え、撤去された。宿泊者に記入してもらう問診票は、
team KOIのなかで議論を重ねて作ったものだった。

続いて、寝床を含む居室スペース。大部屋はカーテン
レールを使った可動式の仕切りがあった。手指消毒薬が随
所に置かれていたが、ストーブに引火する恐れのあること
も確認した。寝具は2日間のローテーションを行なうこと
としている。

食堂と厨房に移り、従業員のPPEが徹底されているこ
とを確認し、使用するカトラリーや食器を並べ、実際に洗
浄と乾燥を行なってみた。ビールジョッキは口がふれる縁
だけでなく、持ち手や胴の部分も念入りに洗う必要がある
など、さまざまな意見が出た。

おかわりについても慎重だ。使用した食器は、飛沫が飛
んでおり、汚染されていると考え、おかわりには新しい食
器を使うことにした。これは、赤岳鉱泉が十分な数量の食
器を持っていて、水が豊富で、また皿洗いに十分なスベー
スが取れるという環境からできることである。すべての山
小屋がこのようにはできないが、一度使った食器は汚染さ
れているとみなして、おかわりをよそうときには、しゃも
じやお玉が食器に触れないよう気を付けなければならな

い。

配膳や下膳のタイミング、それぞれの導線の確保など、
あらかじめ従業員の間でよく話し合われていたが、私たち
を客と想定し練習した。

・ 小屋の楽しみを活かす方法

興味深かったのは、談話のスペースと本棚の扱いだ。

赤岳鉱泉の地下には、壁沿いにベンチがあり、真ん中に
テーブルが置かれているスペースがある。これまでであれ
ば、ベンチに登山者が座り、テーブルを囲んで床にも登山
者が座り、お酒を飲んだり語ったりする、いわゆる談話の
スペースだった。ここが密になりやすいということで、ど
うしたらよいかと考えたところ、従業員のひとりが言い出
した。「マネキンを置こう」と。スポンサーが提供する最
新のウエアを着たマネキンが飾つてあるが、それをベンチ
に座らせ、人と人の距離を取るようにした。遊び心があり、
宿泊者をなごませてくれる。

本棚は地階の談話スペースにある。本は無数の人が触る
ので、接触感染の源になりかねない、と言われていた。け
れど、山小屋で本を読む楽しみは、ほかには代えられない
ものだ。雑誌のバックナンバーを読むのも、普段手に取る
機会のない古書を読むのも楽しい。登山者からその楽しみ



団らんスペースは閉鎖せずに、マネキンを置くことによって人との距離を保てるようなレイアウトにし、静かに利用してもらうようにした(③)

を奪いたくない。じつは、赤岳鉱泉以前に訪問していた山小屋でも同じような意見が出た。そこで考えたのが、本棚の前に手指消毒液を置くことだ。読書前後、本を棚に戻したあとも、手指消毒をしてもらう。そうすれば感染のリスクを下げるができる。さっそく赤岳鉱泉の従業員たちにも提案したところ、皆が賛成してくれた。

感染予防対策が最優先であるが、がちがちに対策を講じることばかりに目がいつてしまうと、山小屋の居心地の良さが損なわれかねない。せっかく山に来たのだったら、少しでも安らいでほしい。そういう山小屋側の思いが、どうにかして登山者に楽しんでもらえる方法を探そうという姿勢に結び付いた。

・有症者スペースの確保

咳や発熱などの症状がある登山者を、ほかの登山者から隔離するスペースを、多くの山小屋が準備している。赤岳鉱泉の場合、大型のテントだった。なかに従業員が作ったベッドを設置し、症状がある人が少しでも休めるように工夫してある。当初、テントは山小屋の入り口近くに設置するつもりだったが、人通りが多く、ほかの登山者と動線を分けることができないという理由で、山小屋の裏手に設置することになった。そうすると、登山者の症状が悪化した

ときに、すぐに従業員が向かうことができなくなる。そこで考えついたのが無線。有症者と担当従業員が無線を持ち、いつでも会話できるようにした。

・従業員の安全を守る

登山者を守ることに同時に、従業員を守ることも重要だ。食堂や居室、談話室、廊下、トイレなど宿泊者が使うスペースと、従業員だけが使う厨房や従業員用の寝室を区別する必要がある。従業員専用のスペースに入るときには、エプロンを替える、手指消毒をするなどの切り替えが必要だ。また、親しい常連客であっても、従業員専用スペースには立ち入らせないようにするなどの事項を確認した。

・具体的なトレーニング内容

以上は、ほかの山小屋訪問でも行なってきたことであるが、そのほかに、具体的なトレーニングもした。主なトレーニングは手を洗うことと掃除用のPPEの着脱だ。

手を洗うなんて誰でもできる、と軽視してはいけない。どのような手順で洗うのが良いか、医師の稲垣が見本を見せ、一人ひとり実践した。

掃除用のPPEは、赤岳鉱泉の場合、つなぎと登山用雨具、それにマスクだ。正しい装着と、脱ぐときの手順を確認し、これも一人ひとり実践した。脱いだあとは、毎回洗

濯することとし、洗濯場までの持ち運びも確認。

ここに挙げたのは、準備のごく一部だ。ほかにも多くの準備をした。感心したのは、医師からの提案を受け、自分たちが講じてきた対策をフレキシブルに変えていくことだった。より良い方法を見つけるために、常に柔軟な思考を持っていた。

スタッフ全員が常にもものすごく真剣だったことも、印象的だった。ビールを注ぐジョッキの洗い方について話題に上ると、すぐにジョッキと専用の洗浄スポンジが出てくる。味噌汁やご飯のおかわりシーンでの感染予防の話になると、水をはった大鍋とレードル、椀、炊飯器にしゃもじと茶碗があつたという間に用意され、動作の確認をした。

また、私たちが訪問する前に、どれほどスタッフ達が真剣に感染予防について考え、討論を重ねてきたかがい知れた。

彼らが講じた策は、決して形式的ではなかったし、マニュアルや提言をなぞっただけでもなかった。飛沫、接触、エアロゾルといった感染経路の原則を踏まえ、クリティカルに発想し、より確かな感染予防、登山者が使いやすい方法、宿泊者が少しでも快適な方法を選んでいった。さぞ、試行錯



おかわりの方法について検討中。赤岳鉱泉のスタッフトレーニングにて③



手洗い方法について確認し、従業員全員がトレーニング。赤岳鉱泉にて③

誤を繰り返しただろうと、その過程がうかがい知れた。

八ヶ岳・オーレン小屋を再訪

2年目のオーレン小屋の再訪は、当主の小平岳男さんからの依頼だった。2021年6月に行なった。

これまで述べてきたようにTeam KOIでの山小屋訪問は、共に新型コロナウイルス感染症対策を考える場である。対策に基本はあれど、どのような形で実行できるかは、山小屋によって異なる。山小屋の規模、間取り、水源の有無や事情、周辺の地形や自然条件、荷揚げの方法や頻度、スタッフの人数、さらには運営形態や経済的状況も関係する。

こちらからは、新型コロナウイルスの医学的特徴や感染のパターンや感染状況を、アップデートしながら伝え、山小屋からはいろいろな事情が示される。それらを重ね合わせ、到着できる場所を共に探すのだ。なるべくリスクを低くすること、登山者に心地よく過ごしてもらうこと、スタッフが継続して気持ちよく働ける環境を作ることのバランスも大切だ。最終的に結論を導き出すのは、当事者である山小屋であり、それぞれの考え方による。

再訪して印象的だったのは、次の3点だ。

一つ目は、すぐに目を引いたのは玄関を入れて右手の宿

泊者たちが憩うスペース。昨年は、予防対策が十分に講じられないとして閉鎖していた。かつて囲炉裏があったところに薪ストーブが設置され、四方をチベタン絨毯で囲んだ雰囲気のある場所だ。ストーブのおかげで暖かく、干し物の乾きも良い。窓際の「オーレン山の文庫」と共に復活していた。読書の前後に手指消毒を勧めるよう消毒液を設置し、読んだ本は専用ボックスで回収。万が一ウイルスが付着しても不活性化を待つために2日程度休ませて書棚に戻すという仕組みだ。さらには、硫黄岳側の窓辺に古くからのテーブルを使ってカウンターを作り、くつろぎスペースを作った。

2点目は寝具。昨年は不織布の使い捨てシートと襟布、枕カバーを使っていたのを、宿泊者にインナーシートを持参してもらうことにした。昨年からわれわれは、2〜5日程度のローテーションをさせた上で布団利用の可能性を話してきた。布団をやめてシユラフ持参、毎回リネンを交換する対策もあったが、いずれも登山者や山小屋側への負担が大きい。布団とインナーシートであれば、互いの負担も少ない。この1年で接触感染のリスクが低いことがわかったため、よだれなどの唾液付着を中心に気をつければよいだろうという見解だ。

一方で、飛沫感染のリスクは高い。人が集う楽しさは山小屋の醍醐味であり、それを山小屋の当主たちは誰よりもよく知っている。しかし、オーレン小屋名物の日本酒飲み比べのサービスは中止のままだった。一度再開したけれど、お酒が入ると気が緩むことがよくわかったからと、通常のアルコール販売に留めている。

窓の開放に加えて、食堂を中心に換気扇を増やした。CO2モニターが置かれ、スタッフはもちろん宿泊者が換気の具合を確認できる。食堂のパーティションや座席の配置は変わらぬままであり、宿泊者は「黙食」に協力してくれるという。

以上は、接触感染のリスクが低いことがわかったので、開放できるところは開放する。しかし飛沫感染、エアロゾルによる感染のリスクは高い。マスクを外す食事シーンはリスクが高まるので重点的に対策するという考えだ。

あれもダメこれもダメとするのではなく、感染対策を講じながら、できる限り山小屋本来の魅力を取り戻していこうと考えていた。

山小屋当主の考え方を聞く

次に、北アルプス、南アルプス、八ヶ岳を代表する山小屋の当主に、それぞれの山域の様子を聞いた内容を紹介する。

北アルプスの2020年

山小屋運営と登山者の山岳地域利用の根幹から、北アルプス山小屋友交会会長・山田直さんに聞く。

——2020年の北アルプスの山小屋は、どのようにスタートしましたか。

山田 北アルプスには、北アルプス山小屋協会があり、96軒の山小屋が所属しています。地域別に、黒部観光旅館組合、立山山荘協同組合、北アルプス北部山小屋組合、飛騨山小屋友交会、北アルプス山小屋友交会に分かれます。私がお会長をしている北アルプス山小屋友交会には、槍・穂高連峰、アルプス銀座、上高地、乗鞍岳周辺にある43軒の山小屋が所属しています。山麓にある施設から、樹林帯や山腹、稜線に位置するものまで、自然環境はそれぞれ異なります。

20年の営業は、7月15日から営業再開する山小屋が多かったです。黒部・立山方面はそれよりも少し早く6月中旬から再開していました。しかし、いずれの山小屋も、例年通りの日程で入山し、除雪作業や施設の維持管理、登山道整備などを行っていました。私が経営する横尾山荘がある槍・穂高連峰では、例年通り4月下旬に入山する山小屋が多かったです。営業はできなかったため、スタッフの数を絞らざるを得ませんでした。それでもいつも通り除雪をし、小屋開けをして施設の維持管理を続けました。

——「山小屋における新型コロナウイルス感染症対応ガイドライン」策定の経緯と内容は？

山田 北アルプス山小屋協会で作りました。第1版を発表したのが、6月15日です。外部から差し出されるのではなく、当事者である私たちがガイドラインを作るべきと考えました。ガイドラインは、必要に応じて見直していくべきものだと思います。

内容は、専門家会議の提言に沿ったものであり、主な感染経路である接触感染と飛沫感染、エアロゾル感染、また従業員や宿泊者の動線や接触に考慮した対策としています。山小屋の規模、業態などの実情はそれぞれになりますので、ここでは原則を示しており、これをもとに各山小屋

が実情に合った対策を講じることとしました。

——シーズンを終えて、各山小屋の状況はいかがですか。

山田 一部通年営業のところもありますが、多くの山小屋が9～11月に営業を終えました。例年より早くに終えたところもあります。

ほかの山域と同様ですが、宿泊定員数を絞ったために収入は減りました。一方で、コロナ感染対策のための作業は増えましたので、従業員数を大幅に減らすことはできませんし、対策を講じるための費用も掛かります。どこも収益は大幅に減っています。

北アルプスは長野県、岐阜県、富山県の3県にまたがりますが、それぞれの県から春の休業中の支援措置があり、またその後、山小屋の公益性を維持する必要があることが認められ、各山小屋に30万円ずつの支援がありました。後者については、北アルプス山小屋友交会と北アルプス北部山小屋組合で、長野県にお願いし上がったものです。

来年以降のことを長期的に考えると、山小屋が持つ本来の役割を再認識し、持続可能な管理体制を考えていかなければなりません。コロナ以前の課題が顕著化しました。

—— 山小屋の役割について、改めて教えてください。

山田 私が経営する横尾山荘は、中部山岳国立公園内にあります。ここに位置する北アルプスの山小屋について考えると、登山者に宿泊環境や食事などを提供するだけでなく、そこで得た収益をもとにして、登山道の巡視、登山道を維持するための整備や補修、宿泊者だけでなく通行する登山者も利用するトイレの維持や管理、登山道や山小屋の周辺環境の衛生や美化を保つためのさまざまな作業をしてきました。さらには、国立公園の利用者である登山者たちの相談ののったり、ときには指導をし、安全登山の一役を担ってきました。また、遭難が発生した場合は、警察や消防と協力をし、救助活動にも従事してきました。

山小屋は宿泊施設や食堂、売店を運営するだけでなく、山小屋が置かれている国立公園内の環境を維持するための仕事も担っており、その費用の一部は行政が負担する場合もありますが、人手は山小屋から出ていますし、多くの費用を山小屋が負担しています。

—— 山小屋は現在、どんな状況にあるのでしょうか。

山田 たしかにコロナによる影響は甚大です。けれどそれ以前から難しい課題を抱えていました。主に5つの課題です。

一つは、ヘリコプターによる物資輸送が困難になってきていることです。

ほとんどの山小屋が、ヘリコプターを利用して物資の輸送をしています。燃料、食材・食品、そのほか山小屋を維持するさまざまなものです。近年、民間空輸会社の機体と人材の不足や、燃料を含む物資輸送価格の高騰などによって、ヘリコプター会社との契約を継続していくことが難しくなってきました。現状では、ヘリコプターによる物資輸送なくして山小屋の経営は成り立ちませんので、深刻な問題です。

二つ目は法律に関することです。

山小屋は特殊な立地条件にあります。けれど、建築基準法や消防法、労働法など山小屋に関連する法令は、街での生活に照準を合わせており、山小屋で遵守することは難しいです。それゆえに、山小屋を建て替えたり、増改築するのが困難です。山小屋の従業員の労働環境にも影響があります。山岳地域の場合、特殊事情を鑑みた緩和措置があつてしかるべきだと思います。

三つ目は、持続可能な労働力を確保することが困難であるという現状です。これは労働法の問題もありますし、また昨今、山小屋で働きたいという人が減ってきているとい

う状況もあります。年間雇用ができるケースは限られています。年間で雇用できない場合、シーズン終了と同時に一度解雇し、次のシーズン始めに再び雇用するという形式をとります。そうになると、オフシーズンの間は社会保険などから外れることになります。

四つ目は、登山者と山小屋の間に起こる問題です。

登山者から助言を求められることもあり、山小屋が登山者に指導をしなければならない場面も多いです。遭難救助の件数も増えており、警察や消防だけでなく、現場で救助にあたる山小屋の負担も大きくなっています。

そして最後が、新型コロナウイルス感染拡大です。

2020年は休業したところも営業したところも、大幅な収入減です。行政から入山の自粛が要請された期間でも、登山道の利用について規制はかかっていないので、宿泊客はとらなくとも山小屋を開けていなければなりません。これにも多額の人件費がかかっています。

これらの問題は、山小屋の自助努力では解決できない規模と内容になってきています。事業を閉じざるを得ない山小屋も出てくるかもしれません。一つの山小屋が閉じただけで、周囲に及ぼす影響は大きいです。たとえば、3泊4日で縦走するとします。2日目に宿泊予定だった山小屋が

廃業した場合、そのコースを縦走すること自体が難しくなるのです。だから私たちは、一つの山小屋たりとも落とさず、持続可能な状態にすることを目指しています。

山から山小屋がなくなつたときのことを想像してみてください。登山道を整備してきた人たちがいなくなるのですから、登山道が荒れてきます。トイレを管理してきた人たちもいなくなるので、し尿で汚染するかもしれません。そのような状況では、山岳地帯の素晴らしい自然環境が守れないですし、登山を続けることも難しくなります。

——山岳環境に関わる法令にはどのようなものがあるのでしょうか。

山田 北アルプスの場合、国有林と国立公園、特別名勝や特別記念物である文化財に関わる法律、さらには長野県の条例が関わってきます。

国有林に関する法律は、林野庁の森林法と国有林野法。国立公園については環境省の自然公園法。文化財については文化庁の文化財保護法です。また、長野県には登山安全条例というのがあります。許認可権限を持つ機関は複数あるものの、統括的な管理を所管する機関は不在です。それも理由となって、登山道やトイレの維持管理が山小屋に依存された形になっていると考えます。

——積極的に行政に働きかけていらっしやいますね。

山田 長野県、それから環境省や林野庁、文化庁を視野に入れて超党派議員団体などに働きかけています。主要要望は3つです。

一つは山岳地域の利用環境がこれまで通り維持されるためには、早急に、行政による直接的な管理へと転換されることです。国なり県なりの機関が、予算措置をして維持管理するということです。登山道整備を例にとると、現状は資材資金に対して補助制度があるけれど、人件費を含めたそれ以外は山小屋が負担しています。修繕が必要になった措置が取られるけれど、日々の整備は山小屋の負担となっていて、計画的に予算措置が講じられ、維持管理が事業として行なわれるようになることを望んでいます。

二つ目は、山小屋事業の継続のために、当面の措置としての経済的支援と業務負担の軽減の施策を求めています。

最後に、長野県の登山安全条例に沿って、登山者の山岳利用の質を向上させ、適正な利用を推進するための具体的な施策の検討と実施を要望しています。難しい言葉になりますが、それによって登山の安全が図られ、おのずと遭難や遭難救助の件数も減ってくると考えています。

——国立公園の利用者である登山者にも果たすべきことが

あるとお考えですね。

山田 はい。ごみの持ち帰りのように、これまで登山者のマナーや良心で行なわれていたことを法令化し、登山者の責務と位置付けることも必要だと考えています。登山の基本は自己責任であり、安全な登山をすることは登山者の責任であり、万が一のトラブルに対しても、登山者自身が対応することが基本となりますよね。やむなく救助依頼することがあっても、最初から救助を当てにしているわけではない。自然環境や景観を守るために登山者が担うものもあります。また、登山道のハシゴやクサリに関して、今後それを管理するところが明確になった場合、では万が一ハシゴやクサリが崩壊して事故が起きたら、誰の責任になるのか。自然環境のなかに設置されたものであって、そのハシゴやクサリの状況は、極端なことを言えば変動していきます。使った際に、それが安全であるかどうか見極めるのは使う人になります。そういった責任の所在も明らかにしておかなければならなくなってきます。

——最後に、2021年に向けてお話ください。

山田 水源は天水に頼っているなど厳しい条件の山小屋もあります。そういった条件の厳しい山小屋は、ほかと比べて宿泊料が高くて良いと思います。倍額になってもまか

ないきれないところもあります。

一方で、横尾山荘のように街に近い印象のある山小屋では、水が出て当たり前、トイレがきれいでも当たり前と思われがちです。けれど横尾山荘であつても、水源を確保するのは大変です。豪雨になれば水は濁りますし、梓川が氾濫しそうになる時もあります。そうなると、山小屋の存在そのものが危うくなります。そんな厳しい環境で営業していることを、気に留めておいていただけるとありがたいです。

どの山小屋も、それぞれの自然環境と折り合いをつけて営んでおり、日々緊張感があります。登山と同じで、自然を相手にし、危機管理をしながら緊張して業務を行なっています。トイレの掃除は汲み取り業者が来るのではなく、従業員たちが手を汚してやっています。春に山小屋を開けると、山小屋の周辺がし尿や使用済みのトイレレットペーパーで汚れていることも珍しくありません。その片づけも山小屋がやっているわけです。そのうえで、山小屋が成り立っています。

また、せっかくの大切な山行ですから、それが楽しいものになるようにと、私たち山小屋側も思っています。隣合わせて、一晚を同じ屋根の下で過ごすのですから、皆さんが快適に過ごせるように気を配りたいですね。

南アルプス北部の2020年

指定管理は休業が多く、民間を中心に営業。特定非営利活動法人芦安ファンクラブ・清水准一さん・竹本清香さんに聞く。

——まずは、南アルプス北部の山小屋について教えてください。

清水、竹本 山小屋を軸に南アルプスを南部と北部に分けると、北岳を含む白峰三山、仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、北沢峠周辺、鳳凰三山の山小屋を南アルプス北部と考えます。ここに22軒の山小屋があります。

白峰三山周辺には、広河原山荘、白根御池小屋、北岳肩ノ小屋、北岳山荘、農鳥小屋、大門沢小屋、両俣小屋があります。北岳肩ノ小屋、農鳥小屋、大門沢小屋が民間経営で、ほかは山梨県南アルプス市の指定管理受託者制度を受けて運営しています。

北沢峠周辺に、こもれび山荘と長衛小屋、仙水小屋があります。こもれび山荘は長野県伊那市、長衛小屋は南アルプス市の指定管理、仙水小屋は民間経営です。

仙丈ヶ岳には、大平山荘、馬ノ背ヒュッテ、仙丈小屋があり、伊那市の指定管理です。

鳳凰三山は、夜叉神峠小屋、南御室小屋、薬師岳小屋、鳳凰小屋、早川尾根小屋があり、民間経営です。

これ以外に、甲斐駒ヶ岳・黒戸尾根に、山梨県北杜市の指定管理である七丈小屋があります。

2020年、営業したのは鳳凰三山の早川尾根小屋を除く4軒と、甲斐駒ヶ岳の七丈小屋であり、白峰三山、北沢峠、仙丈ヶ岳周辺の山小屋はすべて休業しました。南アルプス南部の山小屋はすべて休業だったので、南アルプス全体の状況は例年と大きく異なり、登山者が極端に少ない年となりました。

それぞれの山小屋は営業・運営形態が異なり、指定管理の場合も長野県と山梨県の両県から3つの地方自治体が関わっていることが、山小屋を運営する上での大きな相違となつています。今回は、私たちが南アルプス市から指定管理受託者制度を受けて運営している広河原山荘、白根御池小屋、長衛小屋の3軒を中心にお話します。

——2020年の休業の理由や経緯を聞かせてください。

清水、竹本 南アルプス市から指定管理を受けている山小屋については、「感染予防対策を十分に行なえないため、登山者に対応することができない」という結論で、休業が決まりました。南アルプス市と指定管理の山小屋を受託して

いる人たち、それから周辺の個人経営の山小屋の当主たちとの会議は、相当数に及んでいます。5月の会議では7月には山小屋が開けられるかどうか、夏山シーズンを迎えられるか。それが無理となつた6月の会議では8月に再開できるかどうか。それも無理となり、9月から開けても仕方がないということで、シーズンを通じての休業が決まりました。

南アルプススーパー林道の閉鎖も決まったので、おのずと北岳肩ノ小屋、農鳥小屋、大門沢小屋といった白峰三山の民間経営の山小屋も休業となりました。

一方で、鳳凰三山の民間経営の山小屋は、「宿泊定員数を絞り、できる限りの対策をする」という方針で、6月中旬から営業を再開しました。甲斐駒ヶ岳・黒戸尾根の七丈小屋は、登山口が限られるため、登山者の動きが読みやすい、一定以上の体力や経験を要する尾根であり登山者も絞られるので、営業しやすい面もあったと思います。

北沢峠や仙丈ヶ岳周辺では山梨県南アルプス市と長野県伊那市が指定管理をしている山小屋が多いですが、営業の再開について双方で調整することはありませんでした。あくまでも決定事項を連絡し合うというものです。

——山小屋休業には、南アルプススーパー林道の現状も関

わっていますね。

清水、竹本 南アルプススーパー林道が開通しないと、実質的には広河原や北沢峠を登山口とする登山は難しいので、大きく影響します。山梨県側は、林道にまつわる観光関連の事柄は観光資源課が管理し、林道そのものの管理は林務部の中北林務事務所の林道担当の管轄です。

南アルプススーパー林道に関連する行政や事業者を束ねているのが、南アルプス交通適正化協議会です。国土交通省、山梨県、南アルプス市、早川町の行政担当セクションのほか、山梨県警察、バスの運行をする山梨交通、山梨県タクシー協会、山梨県山岳連盟の担当者がメンバーです。山小屋が営業できないのに、登山者を山中へ送り込むのはいかなるものか、というところから林道を開通させないことにしました。これで事実上、白峰三山、仙丈ヶ岳、北沢峠側の甲斐駒ヶ岳周辺が開山となったのです。

しかし実は、コロナがなくとも南アルプススーパー林道を北沢峠まで開通させることは難しかったです。2019年の台風19号の被害が甚大であり、復旧の目的が立っておりません。広河原までの開通であれば可能性はあったけれど、広河原と北沢峠の間の崩落箇所の記事は、山梨県の単費ではどうにもならない規模であり、国の災害査定を取っ

ています。今年は測量にとどまり、実際の工事は始まっています。あと数年かかると見込まれています。

私（清水）も長年ここ地元の山小屋や山に関わってきましたが、これほどひどい被害があったのは、昭和57（1982）年の台風10号以来だと思います。両俣小屋の星美知子さんが、41人の宿泊客を連れて避難した、あの台風です。

長野県戸台から北沢峠に入る林道も、台風19号の影響に加えて、今年の長雨でも崩落がありました。2021年、山梨県側が広河原までしか開通しないとしても、長野県側を北沢峠まで開通させることができれば、北沢峠周辺や仙丈ヶ岳の山小屋を開業する後押しになると思います。

——働き手や経済状況はどのようになっていましたか。

清水、竹本 芦安ファンクラブの3軒については、例年、管理者と副管理者を置き、さらにアルバイトを雇っています。2020年は長年来てくださったっているアルバイトの方々も雇えませんでした。管理者と副管理者は、シーズン中に何度も山小屋を往復し、登山道や水場の確認、施設の管理維持、来年の準備をしました。林道の記事、高山植物の保護や調査・研究などの方々も入山しました。少人数なので、感染予防対策が講じられるだろうということで、山小屋に宿泊してもらいました。

鳳凰三山の個人経営の山小屋の多くも、例年より小規模の態勢で臨んでいました。

——この周辺の救助体制についても教えてください。

清水、竹本 基本的に警察と消防が救助に当たりますが、われわれ民間も協力しています。2000年に立ち上げた「大久保基金の会」というのがあります。北岳の池山吊尾根で遭難死した大久保泰伸さんを偲んで、彼のご家族からご寄付いただいた資金などをベースに作ったものです。遭難救助だけでなく、登山道整備や救急法の講習会など安全登山に関する活動をしています。メンバーは、該当地域の山小屋、地元南アルプス市のガイドだけでなく、北杜市など近郊の市に住むガイド達も協力してくれています。昨年まで私が会長をしておりましたが、各山小屋がフラットに分け隔てなく関わってくれるし、ガイド達も積極的に取り組んでくれるので、心強いです。

来年の遭難救助や安全登山の啓蒙については、コロナのことを念頭に置かなければなりませんね。

——2021年に向けた取り組みを教えてください。

清水、竹本 当クラブも会員になっている南アルプスエコツアーリズム推進協議会が環境省の「国立・国定公園への誘客の推進事業」の補助事業に採択され、withコロナ時

代の登山ツアーにおける山小屋のコロナ対策をシミュレーションしたモニターツアーを、広河原山荘で行ないました。1シーズン休業しましたが、営業した山小屋から有益で実際的な情報をもらうこともでき、準備しました。

たとえば、食卓のパーティーションです。頑丈なものも良いかもかもしれませんが、それが倒れて食事がダメになってしまったケースを、当クラブのメンバーが経験しています。がちりとテーブルに固定するようにしました。寝室のパーティーションは、天井から床まで吊ったものを使用するケースもあります。けれど換気がしづらくなります。カーテンは清掃や消毒が難しいです。それであればと、天井よりも低い位置までのついたてを作りました。感染予防を最優先させるべきですが、同時に宿泊者の方々に快適に、そして安心して過ごしてもらいたいとも思っています。登山者目線を忘れずに、対策していきたいと思います。就寝スペースは、1人当たり2畳使用してもらおう予定です。

来シーズンの前に、実地の練習ができたことは、とても良かったです。南アルプスの山岳観光関係者はこういった取り組みや活動をして次年に備えていますので、ぜひ2021年こそ、安心して南アルプスに遊びに来ていただきたいです。

——山小屋の予約についてはどのように考えますか。

清水、竹本 危急時の飛び込みはあったとしても、基本的には予約制が望ましいです。山小屋も街の宿泊施設同様に予約が必要だという理由を理解してもらおうよう情報発信していけば、それほど難しい話ではないと思います。

北岳肩ノ小屋まで登つたけれど、余力があるから北岳山荘まで歩を進めよう。そうすれば翌日の間ノ岳行きが楽になると考える人もいるかもしれません。けれど、それは計画段階で熟考し、どちらに宿泊するのが良いか決めてもらうしかありません。

ゆくゆくは山域全体で予約受付を一本化するシステムを作りたいと考えています。そうすれば、ダブルブッキングやキャンセルも減ります。登山者も予約しやすいはずです。そこに交通手段の予約も入れ込めたら、さらに良いです。そして、登山計画も提出してもらいます。不備がある場合は、アドバイスもできますし、有事の際の救助とも連携させることができます。

——今後の展望や見通しをお聞かせください。

清水、竹本 予約システムは、この山域だからこそ可能性があると考えています。指定管理をするのが南アルプス市であり、大久保基金の会などを通じて横の連携があります。

予約システムにとどまらず、山域全体で、コロナ対策を含めた今後の山小屋運営について取り組んでいきたいと考えています。それには、南アルプス市の協力も必要であり、今後、ともに頑張っていきたいですね。

南アルプス北部山小屋連絡協議会というのがあります。これまでは大規模工事や災害のときなどに集まるが多かったですが、もっと積極的に繋がりを作り、私たちが目指しているものを、南アルプス北部、さらには南アルプス全域へと広げていくことができましたら良いと考えています。

八ヶ岳の2020年

いち早く山小屋を再開した、八ヶ岳観光協会会長・浦野岳孝さんに聞く。

——全国の山小屋に先駆け、6月から営業を開始しましたね。

浦野 高山植物が美しい6月は、八ヶ岳にとってハイシーズンです。先駆けるには苦勞もしました。けれど、「営業する」という意思を持った山小屋が複数ありましたので、始めることができました。

八ヶ岳にある33の山小屋がすべて、八ヶ岳観光協会に所

属しています。山小屋をとりまく自然環境、経営形態、山小屋が持つカラーはそれぞれですが、日頃から、情報や意見の交換が行なわれています。広報活動でも互いに協力し合い、「八ヶ岳」の魅力を発信するようにしています。それぞれの考えや方針を持っていますが、根っここのところで協力し合うことができるのが、私たちの山域の強みだと思っています。

今回も年明けごろから情報交換を始め、その後会議を持ち、休業やその後の営業再開について、それぞれの山小屋が決断する材料を作ることができたと思っています。

結果的に、6月1日から宿泊営業を始めたのは11軒、売店やテント場のみの営業だった山小屋や休業を決めた山小屋もあります。

——どんな感染予防をされましたか。

浦野 感染予防対策は、山小屋によって違います。

早い時期にTeam KOIから「登山withコロナのリスクマネジメント 山小屋営業について」という書面での提案をいただいたので、全山小屋に回覧しました。メンバーの方々が、実際に山小屋を訪問し、意見や情報の交換をしながら、一緒に感染対策について考えてくれたことも、助かっています。山小屋ごとに個別に医療従事者と関係のあ

るところもありますので、そういった方々からもご意見や指導をいただきました。

全体を通じて共通している対策は、定員を減らしたことと完全予約にしたことです。テント場は予約不要もありましたが、山小屋は完全予約です。

そのほかの具体的な対策方法は、それぞれです。たとえば、寝室について。登山者にインナーシートなどの寝具の持参を求めた山小屋もあれば、不織布で布団や枕を覆った山小屋、当社のようにシートや布団カバー、枕カバーといったリネンすべてを毎回クリーニングに出した山小屋もあります。いずれの山小屋でも共通しているのは、寝具をローテーションさせたことです。一度使った寝具は、次の宿泊客が使うまで一定期間を置き、万が一ウイルスが付着していてもその不活性化を待つということ。これはTeam KOIも、一定の効果があるとお勧めしていましたね。宿泊定員数を減らし、不使用の部屋やスペースも出てくるので、寝具のローテーションはほとんどの山小屋でできることでした。

——登山者の様子はいかがでしたか。

浦野 日帰り登山から始まり、やがて宿泊へと移行したと言われていますが、必ずしも、山小屋に泊まるのが怖いと

いって避けていたとは限らないと思います。そもそも山小屋は定員を大幅に減らしたので、受け入れられません。そうなるのとテントや日帰りの計画を選択したのではないかと考えています。バスの本数も減ったので、マイカー登山が増えます。山小屋や公共交通機関といった密になりやすい状況を避けた人もいるでしょうけれど、山小屋に宿泊したくても難しかった人もいます。

予約にはほとんどの登山者が協力的で、私たちも助かりました。将来的には、システムを整えてデポジット制にすることも考えたいですね。

——経営状態や従業員の様子はいかがでしたか。

浦野 4～5月に休業したことで、定員数を減らしたことだけでも絶対的に厳しい状況です。当社の場合、3月の時点で例年の3分2の売り上げでした。八ヶ岳全体で見ると、良かったところで例年の30%、厳しいところでは10%ぐらいまで落ち込んだ時期もあったと思います。

雇用は、山小屋によってまちまちですが、当社の場合、従業員の雇用を減らすことはありませんでした。赤字は最初からわかっています、赤字をいかに圧縮するか考えなければならぬ状態で、10人を超える従業員の雇用をそのまま守ることは、経営者として言えば、怖かったです。4～5

月は雇用調整助成金を使って勤務してもらっていました。給料のベースアップやボーナスは支給できないし、いつまで雇用できるかもわからない。けれど、会社を辞めて来てくれた人もいますし、営業を自粛するから採用できないとは、言えませんでした。本心を言えば、首の皮一枚で繋いだ感じです。

当然売り上げだけでは成り立ちません。貯蓄を食いつぶす、公的支援を受ける、クラウドファンディングやご寄付をいただくというのが、主な道でした。

長野県からの公的資金は、4～5月に営業自粛したことにより、1事業者当たり30万円の山小屋公益的機能支援金が給付されました。何軒山小屋を持っていても1事業者当たり同額です。次に、山小屋1軒当たり30万円が給付されました。

ほかに、市町村別に支援金があったところもあります。茅野市の宿泊業への支援金は、宿泊定員数に応じて金額が異なりますが、硫黄岳山荘の場合30万円でした。

山と溪谷社の「山小屋エイド基金」とヤマップの「#山小屋支援プロジェクト」のクラウドファンディングをいただいた山小屋もあります。山小屋に愛着を持ってくださっているのだなあということが伝わってきて、感謝しました。

とてもありがたいことであり、これで乗り切れた面もありますが、クラウドファンディングは持続性のあるものではありません。頼ることはできません、カンフル剤と考えるようにしています。

また、多くの山小屋がこれまで宿泊してくれた登山者の皆さんから直接ご寄付をいただいていると思います。その気持ち嬉しくて、本当に感謝しています。

——コロナ以前からの問題もありますね。

浦野 公共性のある問題としては、登山道整備とトイレがあります。八ヶ岳の場合、いずれも八ヶ岳観光協会が行政に申請し、行政の支援を受けながら進めています。

登山道整備の場合、資材は行政が提供、現場で働くのは山小屋の従業員が中心です。一つの山小屋では間に合わない場合もあるので、周辺の山小屋が手伝うことも多いです。技術的に難しくなると、工事自体を外注することもありません。登山道に水がたまりはけない、強風による倒木の撤去といったようなことは、各山小屋が日常的にやっているの、負担も大きいです。アウトドア関連の企業から資金的援助をいただいたこともあります。行政の支援はともあがりがないのですが、これだけでは十分にまかないきれないので、現在、白馬山荘の松澤真一さんや横尾山荘の山田直

さんが長野県に陳情してくれていることに、追従させてもらっています。

トイレの整備も同様ですね。当社では、利用料をもらうようにしています。

こういったことは、金銭的にもマンパワー的にも負担が大きいので、今後改善されていくと良いと思います。

八ヶ岳の多くの山小屋が利用しているヘリコプター会社については、「将来的にここまで値上げしたい」という、複数年にわたる計画を示されています。2つのヘリポートから、16〜17軒の山小屋にヘリを飛ばしています。ヘリコプター会社にとって、山小屋の事業はごくわずかであるけれど、山小屋にとってヘリコプターというインフラはいまや基本となっています。これができなくなったら、死活問題です。長い目で見てドローンなどの技術進化にも期待したいと思います。

——2021年の展望をお聞かせください。

浦野 当社は今年がコロナ以前から値上げを決めておりました。10000円の値上げで事足りるわけではありませんが、値上げばかりしていてもお客様が離れてしまう。ギリギリのところに来ていると思っています。

自助努力でどこまでやるか考えなければならぬと思います。

ます。コロナを機に、登山者の意識も変わってきたなかで、山小屋経営だけでなく、登山道整備や環境保全、救急医療対応も求められており、これについて行政がどう考えるか、どのように交渉できるかが肝心だと思っています。

八ヶ岳の山小屋は若手が頑張ってくれています。観光協会の役職につき、試行錯誤を繰り返しながら、八ヶ岳全体のことを考えて仕事をしてきています。信頼して任せられる次世代も育ってきていますので、皆で力を合わせて、「明るい八ヶ岳」を作っていききたいですね。

今後の展開

以上は、2020年に経験したことの一部をまとめたものだ。ひとりの登山者でもあるライターが経験したことにすぎない。多くの方々に関わっていただいおかげで、幅広い内容を取り上げることができたけれど、日本全国を見渡せば、ごく限られたことである。

現在、この原稿を書いているのは、2021年8月半ば。その間に何があったか、幾つか記したい。

まずは、昨年から続けているteam KOIの山小屋訪問に

ついて。昨年、多くの山小屋が、登山者を、山小屋を、山小屋従業員を守ることで精一杯であり、その方策も手探り、試行錯誤だった。しかし2年目を迎え、万全な感染対策をしながらも、本来的なところに立ち返り、登山者がより快適な環境、登山を楽しめる環境を作り出す努力をしている山小屋を多く目にした。持続可能な感染対策を模索し、また、従業員達の負担が少しでも減るようにも務めている。

この1年で、接触感染のリスクが低いことがわかってきたが、飛沫感染やエアロゾル感染は依然として高く、恐るべきものだということも認識されている。

それに合わせて、たとえばハイタッチサーフェスの消毒を1日数回から1回程度に留めるとか、寝具はローテーションさせながら使用すること、インナーシユラフもしくは不織布の使い捨てカバールの併用に留めるなどの工夫をしているところが主流だ。これは経費や労力を抑えられるだけでなく、それによってより警戒すべき点を強化できる。

一方で、飛沫感染やエアロゾル感染の対策を強化し、換気設備の一層の充実化を図っているところも多い。CO2モニターの設置は、山小屋側だけでなく、宿泊者にも換気の状態がわかる点が安心であり、これも山小屋側の配慮だと、ありがたく確認させてもらっている。

今年から営業再開した山小屋もある。昨年は全ルートの山小屋が休業した富士山についても、静岡・山梨両県が富士登山に関するガイドラインを示し、全館が再開した。なかには、昨年のうちに感染対策の工事を進めていた山小屋もある。

しかし、昨年に引き続き、どの山小屋も経営不振だ。富士山については、お盆のころの悪天も影響しているためか、2019年の予約状況の3割にも満たないという状況だという。

また、南アルプス南部については、昨年に引き続き、ほとんどの山小屋が休業している。昨年と異なるのは、水場とトイレの環境を整えテント場を開放しているところ、山小屋の一部を避難小屋扱いとして開放しているところがある点だ。

さらに直近で入った連絡によると、山梨県が8月20日から9月12日の期間で、「新型コロナウイルス感染症まん延防止等重点措置」の区域となったことを受け、南アルプス市の指定管理受託制度を受けている山小屋が、この期間は休業となった。今後の感染状況次第で先行は不透明であり、また、ほかの行政区域や他県の山小屋についても動向が注目される。現在は「第5波」と言われているが、今後

も感染拡大の波を受けて山小屋の休業は起り得ることだろう。

経済的に困窮しているのは山小屋だけではない。登山ツアーを扱う旅行会社、登山・山岳ガイド達も同様だ。ガイドについては、公益社団法人日本山岳ガイド協会が、所属ガイド達に向けて、感染状況をクラス分けしながらそれぞれの段階に応じたガイディングの指針を出している。また、環境省の補正予算を使った事業の提案や、ガイド業の環境を整えるために行政への陳情なども行なっている。

感染状況の段階によるガイディングの指針は、ホームページに一般公開されており、登山者が読んでも役に立ち参考になる内容だ。

ほかにも、力強い動きがある。

南信州山岳文化伝承の会は、信州側から光岳に登山する環境を整えた。これは、登山家の大蔵喜福や、長野県が他県に先駆け「信州山のグレイディング」を作ったときの立役者である原一樹らが中心となって行なっているものだ。

南アルプス南部は、テント場が開放されたとはいえず、静岡県側の林道を走るバスが運休しているため、週末など休

暇の限られた登山者が入るのは難しい。しかし、南信州山岳文化伝承の会が作ったシステムであれば、信州側から2泊3日程度で光岳を登ることができる。

易老度から入山し、面平にある飯田市の土地を借用したテント場で1泊。ここには常設のテントとトイレ用テントがあり、コンロなどの炊事用装備もデポジットされている。トイレ用テントは、なかに便座型の椅子がある。ここに各自が専用のビニール袋をセットし、排便後は、糞便を持ち帰る。食糧や燃料は当人たちが荷揚げし、ゴミは持ち帰る。コロナ感染対策を考え、寝袋は持参し、テントは1人ひと張り使用する。いずれも、これまで大蔵がヒマラヤやアラスカで展開してきた登山のベースキャンプと同じ仕様だ。山麓では、遠山森林鉄道の軌道跡を使ったトレイルを歩き、かつての遠山郷の暮らしぶりを知る機会にもなっている。また、南アルプスは年間4mm隆起すると言われていることや、近年の集中豪雨により林道を維持するのが大変になっっている。そうであれば、林道閉鎖になったときのために、徒歩用の巻き道を造ろうと、登山道も開拓した。

林道が閉鎖になれば、登山道や森林鉄道軌道跡のトレイルを歩けばよい。山小屋という「箱もの」に頼らず、自分たちでキャンプすればよい。そうやって山に向かってみよ

うではないか、というのが大蔵らからの提案だ。

驚いたのは、コロナ以前からこの計画を立て、準備していたということである。山麓の文化や暮らしと山深い南アルプス南部の自然を、外国人にも知ってもらおうとインバウンドを見込んだ試みだったという。外国人の来日はほとんどなくなったが、何かに頼ることなく、自分の足で歩くというスタイルは、コロナの時代に合致した。そして、それは登山本来の姿でもある。

前述の山田直のインタビュにあつた登山道整備については、今年秋に大きな一歩が踏み出せそうだ。

北アルプス登山道等維持連絡協議会が中心となり、北アルプス南部の山々を登山する人たちに向けて、登山道整備のための協力金を仰ぐ実証実験が行なわれる。具体的には、燕岳以南の北アルプスの長野県側の登山道を歩く登山者に向けて、一口500円程度の協力金をお願いする予定だ。9月中旬から1ヶ月間の実証実験を経て、来シーズン以降に本格始動する。

エリアが限られていることなどの課題もあるが、まずは北アルプス南部から始めて、今後の展開を考えたいという。

新型コロナウイルスが感染拡大したことは、登山社会にも大きな影響を与えている。

しかし、そのいくつかは、コロナ以前から潜在していた問題でもある。事業者や山岳団体、行政は、登山者を巻き込みながら、登山の環境を維持し、継承していく責務もある。いまこそ、横の繋がりを持つべきときだろう。

登山者ができることもたくさんある。とても小さな一例であるが、使用済みの不織布や空き缶は自分で持ち帰る。ヘリコプターの燃料高騰も大きな影響を与えている。しかし、自分が使ったものは自分で持ち帰るのは、登山の基本だ。そんな登山の基本をひとつひとつ思い起こしていきたい。

現在は、第5波が押し寄せている。このように幾回もの波が繰り返し押し寄せながら収束へと向かうのか。すでに災害時の状態にある医療現場はこの先いつまで保ってられるのか。まったく先が見通せなくなってきた。

いまこそ、登山者が自分自身の登山のあり方を考えるときでもあると思う。新型コロナウイルスとの付き合いは、まだまだ続きそうだ。

〔注〕本稿は『山小屋とコロナ禍』（山と溪谷社刊）に寄稿したものを、加筆修正した。各人の肩書きは当時のもの。「山小屋訪問の実際」の項は、医師の稲垣泰斗の筆による。

写真提供：高橋郁子・『ランドネ』①、特定非営利活動法人芦安ファンクラブ②、中野淳平（赤岳鉱泉・行者小屋）③

記録

「グレート・ヒマラヤ・トラバース」の幕開け

重廣恒夫

実施にあたって

「雪の棲み家」を意味するヒマラヤは、古くから人類の知識の地理的空白を埋める探検時代を経て、20世紀初めには地球上最高所の山々―8000mを超える山々―への挑戦が始まった。1950年になって人類最初の8000m峰アンナプルナがフランス隊によって登られて以降、1953年の世界最高峰エベレスト登頂をクライマックスとして、14座の巨峰は1964年までにすべて登られた。

日本山岳会においても、1956（昭和31）年のマナスル（8163m）初登頂を嚆矢として、多くのヒマラヤの高峰に挑戦してきた。ヒマラヤ・ラツシュの時代にあつて

は一つの頂が登られても、それは登山行為の終焉を意味するものではなかった。ルートを変え、登り方を変え、季節を変え、登山家たちはすでに登られた頂に対しても、果敢に挑戦すべき課題を見出ししてきた。

70（昭和45）年エベレスト（8848m）登頂、マカルー（8463m）南東稜初登攀、76（昭和51）年「日本山岳会創立70周年記念」のナンダ・デヴィ（東峰7434m）西峰7816m）縦走、80（昭和55）年チヨモランマ（8848m）北東稜登頂・北壁初登攀、84（昭和60）年「創立80周年記念」のカンチェンジュンガ（南峰8491m）中央峰8478m）縦走に主峰（8598m）登頂、88（昭和63）年チヨモランマ・サガルマータ（エベレスト884

8 m) 交差縦走、92 (平成4) ナムチャバルワ (7782 m) 初登頂、95 (平成7) 年「創立90周年記念」マカルー (8463 m) 東稜初登攀、96 (平成8) 年K2南南東リブよりの大量登頂、97 (平成9) 年K2西稜上部西壁初登攀、98 (平成10) 年カンチェンジュンガ主峰 (8598 m) 北西壁へ北稜無酸素、2002 (平成14) 年パドマナブ (7030 m) 初登頂、04 (平成16) 年パチュムハム (6123 m)・ギャンゾンカン (6123 m) の初登頂、06 (平成18) 年ローツェ (8516 m) 南壁初完登、16 (平成28) 年ナンガマリII峰 (6209 m) 初登頂などである。

グレート・ヒマラヤ・トラバースは、2025年に創立120周年を迎える日本山岳会の、これまでのヒマラヤ登山の足跡をカンチェンジュンガからK2までの5000 kmを辿り、これからの新しいヒマラヤ登山を模索する「温故知新」の旅である。

目的は、以下のとおり。

① ヒマラヤ地域の変遷 (初登頂時代との生活と環境の変化) 調査

② 探検的ヒマラヤ登山による未踏峰・未踏ルート登山の実施

③ 1枚の地図から、夢を描き・計画を作り・実行する探究精神を、5000 kmにも及ぶ長大なヒマラヤ山脈横断という踏査を通じて次代に伝承する

踏査計画は、いくつかのステージに分けた。

第I期 (2020年春～2022年秋) ネパール国内

第II期 (2023春～2024年秋) インド国内

第III期 (2025年春～秋) パキスタン国内

ネパール国内踏査コースとして、

2020年 プレ・モンズーン

ステージI…カンチェンジュンガ南北BCへグンサへパ

クカン (6244 m) へオランチュンゴラ

2020年 ポスト・モンズーン

ステージII…オランチュンゴラへティプタ・ラ往復へ

ルンバサンバ山群へクーンブ山群

2021年 プレ・モンズーン

ステージIII…ロールワリン山群へジュガール山群へラン

タン山群

2021年 ポスト・モンズーン

ステージIV…ガネッシュ山群へマナスル山群へアンナプ

ルナ山群



残照のジャヌー（クンバカルナ）

2022年プレ・モンスーン

ステージV…カンジロバ山群

2022年ポスト・モンスーン

ステージVI…アピ・サイバル山群

ステージI 2020年プレ・モンスーン

1…隊の名称 日本山岳会東ネパール登山隊2020

East Nepal Expedition of The Japanese
Alpine Club 2020

2…派遣母体 (公益社団法人) 日本山岳会

3…目的 グレート・ヒマラヤ・トレイル カンチエ

ンジュンガ・エリア踏査およびネパール・チベット国境上の Pabukang (62

44m) 登頂

4…期間 2020年3月初旬～4月中旬

5…メンバーおよび事務局

重廣恒夫 (7931) 1947年10月11日 (72歳)

松田宏也 (11748) 1955年12月28日 (64歳)

吉井 修 (12342) 1961年3月4日 (58歳)

事務局 伊丹紹泰 (7490)

カンチエンジュンガ山群の探検・登山の歴史

探検と登山

ネパール北東部カンチエンジュンガ山群は、西のアルン川と東のティースタ川の間であり、ネパール側のアルン川支流のタムール川の源頭にある山々である。

外国人で初めてこの山群に近づいたのは、イギリス人植物学者ジョセフ・ダルトン・フーカーで、1848（嘉永元）年から2年間にわたってシッキムやネパール東部地域の植生などの調査を行なった。ネパール北東部へは、ダージリンからイラムを経由してタムール川を遡り、ヤンマまで到達した後、カンチエンジュンガ氷河やヤルン氷河に回り、シンガリラ尾根を越えてダージリンに戻っている。帰国後、上下2巻の一般向け紀行『Himalayan Journals』（1854年、邦訳『ヒマラヤ紀行』葉師義美訳・白水社・1979年）を公刊した。

1871（明治4）年、ヒンズー教徒のバンディット（イギリスのためにインドの北方地域での探検・踏査に従事した現地出身者）の一人であるハリ・ラムがダージリンからシンガリラ尾根を越え、部分的には1848年にフーカーが通ったコースを辿ってタムール川の源流に至り、タイプ

タ・ラを越えてチベット入りし、エベレスト山群の探検を行なった。

1879（明治12）年、インドのチベット学者のサラト・チャンドラ・ダス（バンディットでもあった）は鎖国中に2度入蔵したが、1度目の時にタムール川上流のヤンマ谷からカン・ラ（5752m）を越えてチベットに抜けている。ダス師は河口慧海の入蔵を手助けした人物でもあり、1915（大正4）年、慧海師の帰国に同伴して来日し、神戸に上陸している。

1899（明治32）年にはダグラス・W・フレッシュユフィールドが7週間かけて踏査を行なった。カンチエンジュンガ山麓一周の記録『Round Kanchenjunga』（1903年、邦訳『カンチエンジュンガ一周』葉師義美訳・あかね書房・1968年）は探検記として、その後この地域に入った探検家・登山家の必携の書となり、ヒマラヤ学の原点とされている。フレッシュユフィールドは1913（大正2）年に来日、鳥ヶ谷より徳本峠を越え上高地に入っている。下山後は日本山岳会の有志歓迎会に招かれ、その後亡くなるまで交流が続いたそうである。

インド平原から目立つ山群だけに、登山の歴史も8000m峰では古く、1895年のママーリーのナンガ・パールバツ

ト試登、1902年の国際隊によるK2北東稜試登に次いで3番目である。

1905(明治38)年秋、5人の国際隊(J.ジャコ・ギヤルモ隊長)がヤルン氷河から6300mまで登った。29(昭和4)年、P.バウアーを隊長に8人のドイツ隊がシッキム側のゼム氷河から北東支稜を7200mまで登った。30(昭和5)年、G.O.ディレンフルトがイギリス、ドイツ、オーストリア、スイスの11人からなる隊を編成、カンチエンジュンガ氷河から挑んだが雪崩事故で断念、ジョンサン・ピーク(7483m)に登頂した。31(昭和6)年再びバウアー隊が9人のメンバーで北東支稜から7750mに到達したが撤退。その後51年、53年、54年とヤルン側から登路が探られ、55(昭和30)年イギリス隊(C.エバンス隊長)がヤルン氷河ルートから登頂に成功した。最初の挑戦から初登頂まで実に半世紀を要したのである。ちなみに8000m峰では6番目に登頂された。しかし、以降ネパール政府はカンチエンジュンガの登山許可を出さなかったが、77(昭和52)年に再び解禁された。シッキム側もインドの独立以来入山が禁じられていたが、同時期に解禁となり、その後多くの登山隊を迎えるようになった。

日本人の足跡

このネパール北東隅に入った最初の日本人は、1912(大正元)年、西本願寺から派遣された青木文教(1886~1956)である。青木は9月9日にダーズリンを出発し、10日にイラムに入り、15日タプランゾン、現在のカンチエンジュンガ・エリアの登山基地タプレジュン(1820m)を通過して、タムール川を北上し18日ウルンゾン(ワルンチュンゴラ)現在のオランチュンゴラ 3191m)に到着した。21日ウルンゾンを出発し、ティプタ・ラ(5095m)を越えてチベット領内最初の集落タシラカに到着している。最初にダーズリンに入ってから3年が経過していた。

世界第3位の高峰カンチエンジュンガは、ネパールとインドのシッキム州の国境に聳える山で、「五つの宝庫を持つ偉大な雪山」として、南峰、中央峰、主峰、西峰(ヤルン・カン)、カンバチェンと5座を連ねる巨峰である。インドの避暑地ダーズリンから遠望できるため、古くから多くの人達の関心を集めてきた。また、ダーズリンから75kmと近いこともあって、早くから日本人の目にも触れられている。日本人画家・石崎光瑠(1884~1947)は16(大正5)年、ダーズリンからシッキムに入り、サンダクプー

まで足を延ばしてカンチェンジュンガ山群を遠望している。日本山岳协会会员だった石崎は、09（明治42）年に剋岳に登頂している。また、画家では吉田博（1876～1950）が30（昭和5）年にダージリンを訪れ、いずれもがヒマラヤやカンチェンジュンガを題材にした絵や版画を制作している。

登山を目的としてこの地域に入ったのは、留学先のドイツを足場にベルナー・オーバールントの山岳地帯やチロル・アルプスを歩いていた慶応義塾大学山岳部の初代部長鹿子木員信（1884～1949）である。鹿子木は18（大正7）年にダージリンからシッキムに入り、ゴチャ・ラを越えてタルン氷河に達し、帰路、黒カプア（カプール4810m）に初登頂した。日本人によるヒマラヤ登山の先駆者である。

チベット研究者青木文教がタムール川流域に入域してから半世紀後の62（昭和37）年、大阪市立大学東北ネパール学術調査隊（中尾佐助隊長）が足を踏み入れ、ヌプチュ（6044m）の初登頂のみならず、植物・昆虫の調査を行なっている。翌年には3つの隊がヤンマ谷に入っている。63（昭和38）年には東京農業大学東部ネパール学術隊が、パプク・コーラの山岳地帯を中心とする概念図を完成させ

ている。これは前年62年と63年に分けて行なわれた遠征の一部であり、前年62年の第1次隊（栗田匡一隊長）の向後元彦隊員（『一人ぼっちのヒマラヤ』ベースボール・マガジン社・1964年）が単独でアルン側のツダムからルンバサンバのカン・ラを越え、ワルンチュン（オランチュン）ゴーラ、ゲンサを経由して山岳エリアを探っている。さらに同年、日本鱗翅学会のヒマラヤ蝶蛾調査隊（春田俊郎隊長）が花盛りのモンスーン期に入域し、成果を残している。晩秋には東京都立大学山岳会・大阪府立大学山岳会合同東部ネパール調査隊（石原憲治隊長）がシャルプー主峰（I峰6410m）に初登頂した後、3名の隊員がヤンマ谷の支谷の調査などを行なった。

カンチェンジュンガ・エリアにおける日本隊の登山活動（2016年まで）については、次ページの通りである。詳細については「掲載文献」を参照されたい。

西暦	和暦	月日	山名	組織	掲載文献
1962	昭和 37	3～9	ヌブチュー (6690 m) 初登頂	大阪府立大学 隊長 中尾佐助	THAKTO1961 ～63
1962	昭和 37	9～10	ラガラ・ヒマール、ルンバサン パヒマール踏査	東京農業大学 隊長 栗田匡一	山岳 59 向後元彦
1963	昭和 38	4～6	トゥインズ断念、ツイシマピーク (6370 m) 初登頂	東京農業大学 隊長 宮沢憲	岳人 189 向後元彦
1963	昭和 38	8～11	シャルプー (6410 m) 初登頂ザ ニエ (6400 m)、ツイシマP	東京都立大・大阪 府立大学合同隊	山岳 59 THAKTO6163
1973	昭和 48	3～5	ヤルン・カン (カンチェンジュ ンガ西峰 8505 m) 初登頂	京大士山岳会 隊長 西堀栄三郎	岩と雪 34 報告書、上田豊
1974	昭和 49	3～5	ジャヌー (クンバカルナ 7710 m) 第 2 登	成城大学 隊長 川瀬幹夫	岩と雪 42
1976	昭和 51	3～5	ジャヌー (クンバカルナ 7710 m) 北壁初登攀	山学同志会 隊長 小西政継	山と溪谷 456 岩と雪 51、他
1980	昭和 55	3～5	カンチェンジュンガ北壁 (8598 m) 初登攀	山学同志会 隊長 小西政継	山岳 75 岩と雪 77、他
1981	昭和 56	3～5	カンチェンジュンガ主峰 8598 m、西峰 8505 m 登頂	日本ヒマラヤ協会 隊長 山森欣一	岩と雪 88 岳人 410、他
1982	昭和 57	3～5	オンミ・カンリ (7028 m) 初登 頂	東京都庁山岳部 隊長 金子利三	岩と雪 95 報告書
1984	昭和 59	3～5	カンチェンジュンガ南峰～中央 峰初縦走、主峰登頂	日本山岳会 隊長 鹿野勝彦	山岳 80、報告書 岩と雪 109
1991	平成 3	3～5	カンチェンジュンガ主峰 (8586 m) 北東支稜第 3 登	日本ヒマラヤ協会 隊長 尾形好雄	山岳 86、岩と雪 148、山と溪谷 674、岳人 530
1993	平成 5	9～10	トゥインズ東峰 (7005 m) 初登 頂 (シッキム側より)	明治学院・東京農 大隊長 伊丹紹泰	山と溪谷 703 山岳年鑑 94
1994	平成 6	10～11	トゥインズ (7350 m) 初登頂 (シッキム側より)	日本シッキム登山隊 隊長 大滝憲司郎	岳人 574 山岳年鑑 95
1995	平成 7	9～10	トゥインズ (7350 m) 北西稜初 登攀、通算第 2 登	東京農大 隊長 山下康成	山岳 91 山と溪谷 726、 岳人 583
1998	平成 10	3～5	カンチェンジュンガ主峰北西壁 ～北稜登頂	日本山岳会青年部 隊長 谷川太郎	山岳 93 山と溪谷 755、 岳人 614
2013	平成 25	9～10	アウトライヤー東峰 (7035 m)	青山学院大学 隊長 萩原浩司	山岳 109 山と溪谷 946
2016	平成 28	9～11	ナンガマリ II 峰初登頂 (6209 m)	日本山岳会関西支部 隊長 重廣恒夫	山岳 112 山と溪谷 982、 岳人 836

第1回グレート・ヒマラヤ・トラバース行動記録

No.	月日	天候	場所	標高(m)	距離(Km)	昇累積高	降累積高	所要時間	食事
1	2月29日	曇	NRT・KIX~ICN~Kathmandu	1300					
2	3月1日	晴	Kathmandu	1300					Restaurant
3	3月2日	晴	Kathmandu	1300					Restaurant
4	3月3日	晴	Kathmandu	1300					Restaurant
5	3月4日	晴	Kathmandu~Itahari	300				11.34	Restaurant
6	3月5日	晴後雨	Itahari~Tapejung	1820				11.55	Restaurant
7	3月6日	晴	Tapejung	1820					Restaurant
8	3月7日	曇後雨	Tapejung~Lali Kharka	2266	10.9	910	505	7.05	Bhatti
9	3月8日	晴	Lali Kharka~Kande Bhanjyang	2129	10.8	790	911	8.41	Bhatti
10	3月9日	晴	Kande Bhanjyang~Phumpe Danda	1858	10.5	549	793	8.35	Bhatti
11	3月10日	曇後晴	Phumpe Danda~Sherpa Gaon	2080	12.5	1053	826	10.40	Bhatti
12	3月11日	晴	Sherpa Gaon~Laslya Bhanjyang	3310	8.1	1531	156	9.15	Bhatti
13	3月12日	晴	Laslya Bhanjyang~Torongding	3006	5.5	374	691	7.43	Bhatti
14	3月13日	曇・晴	Torongding~Tseram	3870	9.6	1017	80	8.21	Bhatti
15	3月14日	曇・雪	Tseram	3870					Bhatti
16	3月15日	晴・曇	Tseram~Ramche	4580	7.0	704	16	6.15	Tent
17	3月16日	晴	Ramche~Tseram	3870	10.3	197	726	6.50	Bhatti
18	3月17日	晴	Tseram~Selele Camp	4210	9.9	1147	729	16.37	Bhatti
19	3月18日	晴後曇	Selele Camp~Ghunsa	3423	7.3	161	948	7.55	Bhatti
20	3月19日	曇後雪	Ghunsa	3423					Bhatti
21	3月20日	曇・晴	Ghunsa~Kangbachen	4060	11.2	874	194	6.51	Bhatti
22	3月21日	晴・曇	Kangbachen~Lhonak	4780	9.7	795	69	6.18	Bhatti
23	3月22日	晴後雪	Lhonak/KanchenjungaBC~Lhonak	4780	16.5	783	735	11.48	Bhatti
24	3月23日	雪後曇	Lhonak~Kangbachen	4060	10.0	125	732	5.43	Bhatti
25	3月24日	晴・曇	Kangbachen~Ghunsa	3423	10.9	175	783	6.30	Bhatti
26	3月25日	晴・曇	Ghunsa	3423					Bhatti
27	3月26日	晴後曇	Ghunsa~Nango camp	4160	5.8	959	101	5.36	Tent
28	3月27日	晴後曇	Nango camp~Stone Hut	4391	6.7	777	458	7.22	Tent
29	3月28日	晴	Stone Hut~Yangma KholaCS	3489	9.1	284	1083	8.12	Tent
30	3月29日	晴後曇	Yangma KholaCS~Yangma	4143	13.0	935	238	10.01	Tent
31	3月30日	晴・曇	Yangma	4143					Tent
32	3月31日	晴後雪	Yangma~PabuktarBC	4665	9.9	770	157	7.35	Tent
33	4月1日	晴後雪	PabuktarBC	4665					Tent
34	4月2日	晴後雪	PabuctarBC	4665					Tent
35	4月3日	晴	PabuctarBC~C1	5197	6.6	752	59	5.32	Attack
36	4月4日	晴	C1~ABC	5526	3.8	468	109	6.01	Attack
37	4月5日	晴後曇	ABC~5797m~ABC	5526	4.9	401	322	8.22	Attack
38	4月6日	晴	ABC/5920m~ABC	5526	5.8	567	307	12.56	Attack
39	4月7日	晴後雪	ABC~PabuktarBC	4665	16.5	243	936	7.20	Tent
40	4月8日	晴後雪	PabuktarBC~Yangma	4143	10.0	124	549	5.34	Tent
41	4月9日	晴後雪	Yangma~Yangma KhoraCS	3489	13.4	256	891	8.05	Tent
42	4月10日	晴	Yangma KhoraCS~Olangchun Gola	3191	15.0	737	981	8.51	Bhatti
43	4月11日	晴後雨	Olangchun Gola~Iladanda	2051	14.8	347	1466	10.36	Bhatti
44	4月12日	晴	Iladanda~Lelep	1750	8.1	275	580	5.12	Bhatti
45	4月13日	晴後曇	Lelep	1750					Bhatti
46	4月14日	晴後雨	Lelep	1750					Bhatti
47	4月15日	晴	Lelep~Tapejung	1820	55.4	2205	2068	5.31	Restaurant
48	4月16日	雨	Tapejung	1820					Restaurant
49	4月17日	晴	Tapejung~Ilam	1300				5.53	Restaurant
50	4月18日	晴	Ilam~Kathmandu	1300				14.50	CosmoTrek
51	~5月15日		Kathmandu	1300					CosmoTrek
78	5月16日		~Narita	1300					

※CS = キャンプサイト ※ 沿面距離 登高 下降 ※所要時間には休憩・昼食
 BC = ベースキャンプ 積算 (m) 積算 (m) を含む
 ABC = 前進基地

パブクカン (6244 m) の登山

4月3日 (金) 晴

パブクータルBC (4665 m) 7:57 ↓ 13:30 C1 (5197 m)

一昨日も、昨日も昼過ぎから雪が降り始め、山は冬に戻ってしまった。交易路は雪に閉ざされてしまったが、これ以上待機する時間的余裕もないので行動を再開した。パブクカン登頂のために用意した食料・装備は4日分だったので、昨日のうちに4月3日、5320 m地点にC1設営、4日ガン・ラ (5746 m) にABCを設営し、5日に6100 mまでフィックス工作をして、6日にパブクカン (6244 m) を往復、7日にBCに戻るプランを立て、装備や食料の準備をしていた。

ルートコンディションが悪く義足での歩行は無理だったので、残る松田さんに見送られてBCを後にした。キャンプサイト裏手の丘に上がり、雪の残る台地を進む。目の前に広がるチベット国境の山々はまだ遠い。パブクータル湖からもかなり東に外れているようで、湖面を確認することはできない。豊富な残雪に加えてこの2日間の降雪で道形が見えないだけでなく、石積みなども目にする事ができない。コースを北東に取り始めた右前方に、スノードーム

(ナンガマリI峰、6547 m) 西面が見え始めた。しかし、いつの間にか左手の谷に入り込んでしまった。コンパスで確認すると、チェンジャムポカリに向かっていることがわかり、慌てて軌道修正する。広い谷を進むと再びナンガマリI峰が見え始め、南方に延びる稜線の先に2016年に初登頂したナンガマリII峰 (6209 m) も見える。13時30分、ナンガマリI峰が正面から右手に見える場所にC1 (5197 m) を建設した。もう少し高度を上げたいところだが、テントが張れるような平坦地がなかなか見つからなかったことと、同行してくれたポーター達を明るいうちにBCに帰さなければならなかったからである。(重廣)

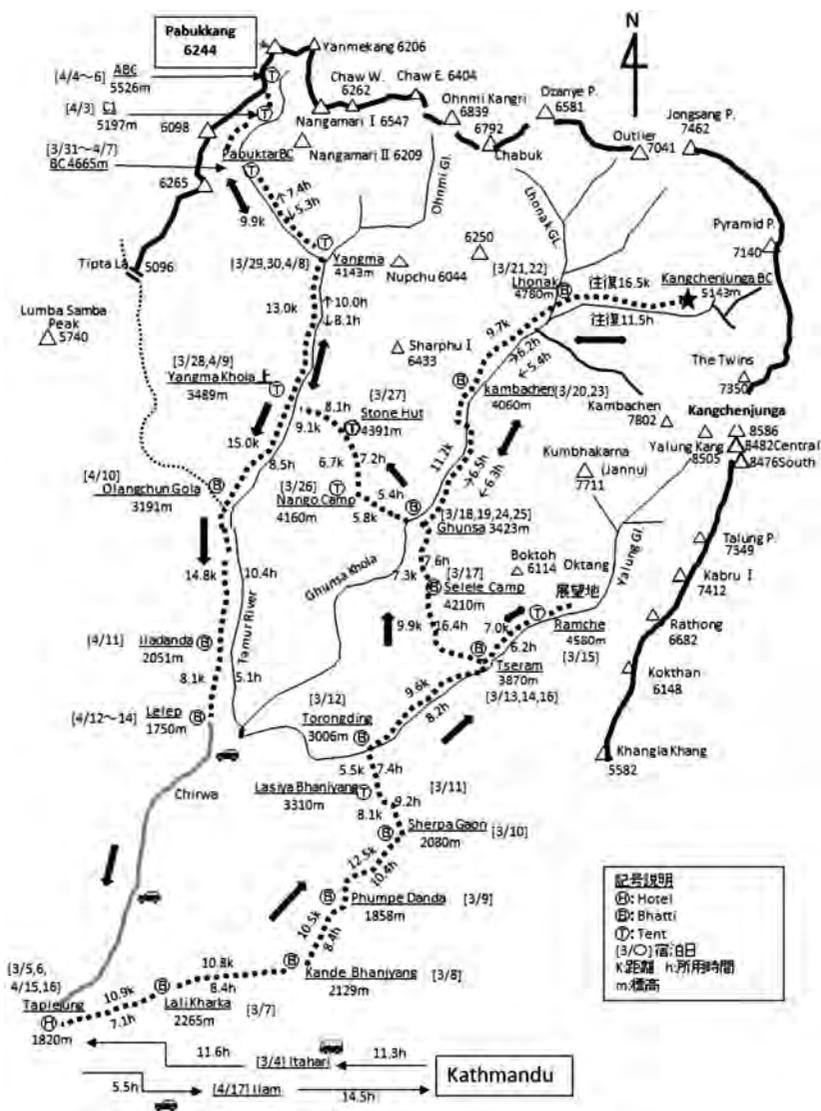
4月4日 (土) 晴

松田・BC滞在

登山隊・C1 8:14 ↓ 13:30 ABC (5526 m)

昨日はアタック隊の重廣さん、吉井さん、シエルパのラムカジの3人を見送った。私はBCキーパーだ。上部は雪が多くラッセルを強いられ、また、ロープを使う箇所も多はずだ。私の実力では無理だろう。未踏峰に挑戦できなくても後悔はない。それよりもあと残りわずかで完遂できない第1回G・H・T踏査に全力をあげるの方が、私に

「グレート・ヒマラヤ・トラバース」の幕開け



第1回グレート・ヒマラヤ・トラバース踏査ルート



チベット国境に近い村、ヤンマ

とっては大きな挑戦であり最大の目標である。このBCで足の傷を治し、下山に備えるのが私のやるべきことだろう。モーニングティを持ってきたコックのパンカが私のテントの前で「ユキヒヨウの足跡」と騒いでいる。確かにユキヒヨウがいてもおかしくはない地域。滅多に現われぬユキヒヨウが私のテントまで来たということは、G・H・Tはもちろんパブクカン登頂もうまくいく前兆かも？ と思えてくる。何かにつけて人は縁起を担ぎたくなるものだ。

しかしながら翌朝、テントの前で黒々したものが私を見つめている。ユキヒヨウかと思ったがどうも怪しい。「犬だー」。ヤンマにいたチベット犬だ。なんと昨日のユキヒヨウの足跡は、目の前のチベット犬に違いない。(松田)

4月5日(日) 晴のち曇

松田・BC滞在

登山隊・ABC 7:00↓12:32 偵察終了点(5797m)↓15:23

ABC(5526m)

5時起床、朝食をとって、7時ルート工作に出発する。ABCの左手岩壁帯の中にガン・ラに至るヤク道があるはずであるが、見つけ出すことができない。一縷の望みを抱いて、岩壁帯の裾をトラバースし、氷河の切れ目から左の



パブクカンのベースキャンプを開いた

ミックス壁を登り（フィックスロープ2本）、上部プラトールに出た。ガン・ラと思しき所は遙か左前方（西側）にあり、P6100からパブクカンに続く稜線も鋭い。さらに雪原を東に進み、2つのピークを経由しないで、直接パブクカン頂上に向かうルートを確認して、ABCに引き返した。今日の到達高度は5797mであった。

私がABCに戻ったのは15時23分。この時間から考えて明日、頂上に向かって、果たして勝算はあるだろうか？しかも、なんと私は帰り道、アイゼンを紛失するという大失敗を犯していた。寝袋に入ったのは20時近かっただろうか。上部に行く手を阻む岩壁と懸垂氷河も見えた。寝ているうちにアイゼンが見つかるか、見つからないかを占いるように考えて、もし見つかったならば、その時は最後まで全力を尽くそう、自分自身精一杯、頑張ってみようと決めた。(吉井)

4月6日（月）晴

松田・BC滞在

登山隊・ABC 1:40 ↓ 5:04 偵察到着地点 ↓ 9:50 最高到達点 (5920m) ↓ 17:09 ABC (5226m)

今日中の登頂を期待して零時過ぎに起床、2時前にAB



BC から C1 に向かう途中、ナンガマリ I 峰(左)と II 峰(右)

Cを後にした。ラムカジ、吉井さんの順番で出発するが、すぐに間があいてしまった。2つのヘッドランプの光の輪を追うが、引き返してくる明かりはないので、吉井さんのアイゼンが見つかったのだと安堵する。当初予定では、ABCの眼前に屹立する岩壁帯のどこかにガン・ラに通じるヤク道があるはずだ。だが、昨日は見つけることができず、岩壁の下端を迂回しながら北上することになり、昨日ガン・ラに続く雪原に到達していた。空が白み始めた5時過ぎ、昨日のデポ地点で、やっと2人に追いついた。

デポ地から昨日の最高到達点まで登り返すが、それ以降はウインドクラストした深い雪に悩まされルートが延びない。トップをラムカジから吉井さんに代わってもらい、ヒドンクレバスの可能性もあるので、アンザイレンして前進を続ける。雪原が雪稜に変わって傾斜も増したので再びラムカジがトップに立ち、2ピッチ、フィックスロープを延ばした。吉井・重廣が合流した時点で、9時30分過ぎであった。10m程高度を稼いで以後のルートの偵察を行なう。GPSの高度で5971m、頂上までまだ標高差273m、888mの距離がある。これまで入手した写真やグーグルアースの画像から、頂上稜線には雪が着いていると想像していたが甘かった。雪稜の先は急な岩と雪のミックス壁に



最高到達地点、5920 m から望む頂上(右奥)

なっており、チベット側は切れ落ちている。その先には懸垂氷河が強固な鎧のように立ちはだかり、われわれの行く手を阻んでいた。そして、その後方に目指すパブクカの頂が鎮座していた。時間的な問題もあったが、その威圧感に恐れおののき、撤退を決意する。

最高到達点から写真と動画を撮る。パブクカの頂上から時計回りに目を転じれば、6371 m 峰からナンガマリ I 峰の頭がちよこんと見え、さらにナンガマリ II 峰(6209 m)から5944 m 峰の稜線が続き、その後ろにはシャルプーⅡ(6328 m)、シャルプーⅢ(6220 m)の頂上部分が見える。その左手の山々は、残念ながら雲に隠れて見えない。南西方向にはセヌツプ(6265 m)、ノブツク(5945 m)やチベットの無名峰が屹立していた。さらに西の国境稜線の後ろにはチャムラン(7321 m)やバルンツェ(7152 m)、マカルー(8485 m)など、次回の G・H・T 踏査地域の山々の頂上が望まれた。眼下の雪原のどこかがガン・ラ(5746 m)のはずだが、深い雪に覆われて判然としない。積雪の状態を考えると、なまじガン・ラに登りパブクカの頂に向かったとしても、今回の最高到達点までは到達できなかっただろう。(重廣)



ABC からバブクカンへのルート

4月7日(火) 晴のち曇のち雪

松田…BC滞在

登山隊…ABC 8…04↓15…24 BC

昨日の夕方、アタック隊のラムカジが一人で下りてきた。頂上アタックするも、雪と岩壁に阻まれ登頂ならずとのことだった。彼は最高到達点から一気にBCまでを駆け下りてきた。さすがに疲労困憊している。重廣さん、吉井さんは、明日BCへ下山することだった。今朝は前夜からの降雪で20cmほど積もっている。ポーター3人が荷下げのためにABCに向かった。下りてくる2人は疲れ切っているだろう。登頂できなかったことは残念だが、ケガなくBCに辿り着いてほしい。幸いに天気は回復傾向だ。そろそろ帰ってくる頃だと目を凝らしていたら、2人の姿が見えてきた。一段と日焼けし真っ黒になっている。「お疲れさまでした」と声をはりあげ、2人にハグする。思わず目が潤んできた。安全を見守ってくれた祭壇に手を合わせ、無事下山の感謝をする。1時間半遅れで荷物を背負ったポーター3人が元気に戻ってきた。バブクカンへの挑戦が終わった。明日は8日間世話になったBCに別れを告げ、ヤンマへと下る。(松田)



最高到達地点から、8000 m 峰マカルーを遠望する

姿を変えるヒマラヤ（2020年3月～4月の踏査から）

インド北部の洪水

2021年2月7日午前10時半（日本時間同午後2時）ころ、インド北部ウッタラカンド（旧ウッタール・プラデシュ）州で発生した洪水は、下流の2つのダムを壊し、5つの橋を流した。また、8日にはマスコミ各社が18人の死亡と、約180人が行方不明者になっていることを衝撃的な映像（粉塵を立ち上げる洪水）と共に報じた。現場は1976年のナンダ・デヴィ縦走登山の時に通過したジョシマートの近くにあり、9日には航空機から撮影されたロンティ峰（6063 m）の東稜直下の、標高5500 mからの斜面が1000 mにわたって崩落している写真が提供された。GLOF（氷河湖決壊洪水）とは特定されていないが、岩盤や懸垂氷河の崩落によるロンティ氷河からダウリ・ガンガへの流れ込みに端を発していると思われる。

カンチエンジュンガ山域の変化

2015年6月11日、雨季に入ったタプレジュン郡内の多くの場所で山腹崩壊が多発し、家屋などの流失により53

名の死亡が確認されたほか、多くの行方不明者を出すなど被害が出た。2016年のナンガマリII峰登山の際は、今回と同じようにイタハリからタプレジユンにチャーターバスで入ったが、まだ前年の爪痕があちこちに残っており、流失した道路の修復箇所通過などに時間を取られ、タプレジユンのホテルに到着したのは深夜であった。今回もまだ工事中の箇所もあったが、明るいうちにホテルに到着してほっとした。

1984年3月2日、カンチェンジュンガ縦走を目指す日本山岳会隊は、キャラバンの山場となるラストム峠(3450m≡当時の呼称・標高)を越えた。1973年のAACKによるヤルン・カン隊をはじめプレモンストーン期にこのルートを辿った各隊は、いずれも急崖の雪道に苦労している。今回われわれは3月12日にこの峠(ラシア・バンジャン、3319m)を越えたが、頂上稜線からシンバ・コーラにそぎ落ちている崩壊地は、前にも増して規模が拡大しているように見えた。

3月20日、ゲンサからカンバチェンに向かった。村を出ると左岸沿いの樹林帯は歩きやすい水平道だ。見上げると右岸(シヤルプー側)には連続する屏風のように岩壁が立ちほだかっている。ランブツク・カルカ(3807m)に

は右岸に通じる橋があった。昔の地図には橋を渡ってカンバチェンに向かう道が載っていたが、今は左岸をそのまま進む。大岩から樹林帯を抜けると崩壊地に刻まれた一筋の踏み跡を辿る。右岸は大崩落地となつて、かろうじて昔の道形が両端に残っているのが見える。グレート・ヒマラヤ・トレイル・ハイルートのカンチェンジュンガ・トレッキングマップ(NP101)には、以前は右岸側のルートが記載されていたが、2020年に入手した新版では左岸ルートに変更されていた。

いずれにしても、この辺りは地図上にも「Dangerous Rock Fall Area」と記載された箇所があり、カンバチェンからパンベマ(カンチェンジュンガBC)の間のカンチェンジュンガ氷河沿いは、いたるところに落石箇所の通過があり気が抜けなかった。

ナンガマ・ポカリの決壊

2016年のナンガマリ登山では、ヤンマ村を出てチェ・ポカリの手前から右手の急峻な尾根に取り付き中段の平坦地で1泊した後、ナンガマ・ポカリ下流の台地に下った。モンストーン後ということもあってか、ヤンマ滞在中は村の東側の5144m峰と南西の5021m峰から毎日ガ

ラガラと落石の音が響いていた。

今回のナイケ（ポーター頭）はナンガマリ登山時のナイケを務めていたし、2019年にはカンチエンジュンガ地域における歴史的な氷河湖決壊洪水（GLOF）調査隊（これまでの調査によってカンチエンジュンガ地域では1921年以降、6つもの大きなGLOFが発生したといわれている）にも参加していたので、キヤラバンの道すがら、この地域の変化を聞くことができた。今回通過したチェ・ポカリは、1980年にナンガマ・ポカリ上端の懸垂氷河の崩落によるGLOFで流出した大量の土石によって、パブク・コーラが堰止められて出現したといわれている。ヤンマのキャンプサイトから集落の裏手の台地に向かって高度を上げる。眼下はヤンマ・コーラ（左手）とパブク・コーラ（右手）の合流点で、広大な扇状地を形成していることがよくわかる。登り着いた丘の上には3基のチオルテンが建っている。丘から西方を見れば、1848年秋にヤンマからパブクタールに向かったJ・D・フーカーも見た光景が広がっていた。広い河岸段丘に刻まれた交易路を進むこと3時間で、ナンガマ・ポカリから流れ出る川に架けられた木の橋を渡る。すぐにナンガマ・ポカリ決壊時の爪痕の残る深い懸崖を右手に見るようになる。201

6年秋はこの深い谷に登路を見いだすことができなかったが、V字型に刻まれた深い懸崖と、河原に点在する大岩が当時の土石流のすさまじさを今に伝えている。

辺境の地の変貌

日本人のヒマラヤ登山が始まってから103年、この地域での登山隊の活動から59年、その昔ターランから長いキヤラバンを経てたどり着いた登山基地タプレジュン。1984年にはなかった自動車道がタプレジュンからチベット国境に向けて北上している。青木文教が越えたティクタ・ラからは、自動車道が南下して中国製品がオランチュンゴラの村に入っている。しかし、いずれも粗削りな自動車道で、開削による自然破壊と、開通後の地球温暖化による氷河湖決壊や豪雨によって痛めつけられた姿を目の当たりにして、暗澹たる気持ちになった。

ネパール・チベット国境における自動車道の延伸は、外国製品などの流入やスマートフォンの普及による情報の伝達など、豊かな生活を辺境の地の人々にもたらしている。しかし、世界の人々の豊かな生活をもたらした地球温暖化という気候変動が、辺境の地の人々に与える脅威を大きくしているとも案じる踏査となった。

第1回G・H・T踏査と新型コロナウイルス (COVID19)

コロナ禍の影響

2019年12月、中華人民共和国湖北省武漢市において確認され、20年1月30日、世界保健機関(WHO)により「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態(PHEIC)」を宣言された新型コロナウイルスは、準備を進めていた渡航予定にも大きな影響を与えた。当初は、中国南西航空のチケットを購入していたが、武漢市での感染拡大によりカトマンズ→ラサ便がフライトキャンセルになった情報を2月4日に入手、ほかの航空会社への変更の模索を始めた。その後、予定していた羽田→広州便のフライトがキャンセルされたという報告もあって、急遽、成田・関空発仁川経由カトマンズ行の大韓航空に変更した。

2月29日、踏査隊は成田と関西国際空港から出発した。いずれの便も搭乗者はわずかであったが、乗り継ぎの仁川空港で状況は一変した。マスクは言うに及ばず、ゴーグルやゴム手袋姿の人達で席は見る間に埋まった。なかにはレインコートを羽織った一団もいる。韓国国内で就労していたネパール人の一斉帰国で、機内は異様な雰囲気包まれ

た。「健康証明書」の提出や入国時のスクリーニングの強化も懸念されたが、空港到着時は特に問題なく、カトマンズ市内のホテルに入った。準備活動にも支障はなく、3月2日ブリーフィング、4日予定通りチャーターバスでタブレジュンに向かった。途中の町の出入り口や、大きな橋の袂には「Visit Nepal 2020」のアーチが架かり、観光客倍增計画への大きな期待を感じさせた。

登山基地タブレジュンからの行程は天候にも恵まれ予定通り進んだが、3月20日グンサからカンバチェンに移動中、コスモトレックの柳原さんからの電話で、国際線の運航が停止されたこと、ロックダウンが発令されそうなことと、ネパール国内の日本人を帰国させるために日本政府のチャーター便が4月11日に予定されているとの連絡があった。踏査を中断して帰国すべきかどうか迷ったが、続行することにして電話を切った。

14日にはネパール国内への外国人の入国も禁止となっていたので、踏査中に会ったトレックカーもセレレ・キャンプ、グンサ、カンバチェンでそれぞれ数人だった。新型コロナに関する情報は、ネパール国内の感染状況を毎日ラジオで聞いていた。カンチェンジュンガ北面のベースキャンプ往復後、カンバチェンからグンサに戻る途中のニュースで、

「東京オリンピック・パラリンピックの中止」とネパール国内の「ロックダウン開始」を知った。ゲンサではW.H.H.が使えたが、通信状況が悪く本部に近況報告をしたただけで、最新のニュースを入手することはできなかった。その後ヤンポディンで感染疑いが出て、村から村を跨ぐ移動も禁止されたが、踏査隊は警察官が駐在しているゲンサを出発し、最奥の村ヤンマへと向かっていた。

4月11日、バブクカン登山後は予定通りの日程でオランチュンゴラに到着、駐在している警察官にロックダウンの状況確認をしたが、電話が通じず不明ということで移動を止められることはなかった。しかし、12日に到着したレップの警察署に赴くとタプレジュンへの移動は禁止だと告げられ、状況は一変した。タプレジュンの本署との連絡を依頼するが、昨日の雷で電話の中継器が壊れ通話ができないという。それでもタプレジュンでの車の手配にはOKを貰い、村役場の職員のW.H.H.を使って車のチャーターを依頼することができた。車での移動の目途がついたのでポーターを解雇、賃金の支払いを済ませた。日中の大人数での移動が禁止されているので、彼らは夜通し歩いてタプレジュンに戻るといふ。

63回の検問

15日、昨日のうちに到着していたジープに隊員とガイド、コック、カトマンズ・ポーター3名と屋根に装備を載せて出発した。新型コロナウイルスのお陰で、いつもはトレッカーで賑わうタプレジュンの町も今はひっそりとして、バスターミナルや商店街にも人影はなく、運良く開いていたリゾートホテルに落ち着いた。もちろん宿泊客はわれわれだけである。やっとW.H.H.が使えるようになったので、在ネパール日本大使館の安全情報を確認、タプレジュンに到着した報告とカトマンズまでの通行許可の手配を所轄官庁に図ってくれるよう要請した。その後、大使館領事班の根本さんから連絡があり、必要書類の提出を行なった。また、4月27日までのロックダウンの延長と、4月30日までの国際線の運航中止を確認した。翌日、所轄事務所へ通行許可の取得に行くが、許可は出なかった。大使館との連絡で、内務省の許可を取得するために日本への帰国便の予約証明が必要とのこと。コスモトレックに連絡し、ダミーの航空券の入手を依頼した。

17日、13時過ぎにダミーの予約証明を入手して大使館に送付した。併せてビザの有効期限が5月28日までであることを伝えた。しばらくして大使館よりタプレジュン地区管

ネパール国内における新型コロナウイルス対応

1月14日	ネパール人初の感染者の男性が武漢より帰国し発症、入院（17日退院）
1月24日	上記、ネパール人の32歳男性が、新型コロナウイルスに感染していたと発表
2月26日	日本からの入国者に対して、ネパール入国時のスクリーニング強化を発表
3月3日	3月10日より日本、中国、韓国、イタリア、イランの5カ国のアライバルビザ発給停止を発表
3月4日	5カ国の国籍者に対し、ネパール入国の際、健康証明書の提出を求めると発表
3月10日	アライバルビザの発給停止を5カ国の他にフランス、ドイツ、スペインを追加。健康証明書の有効期限をネパールに入国する最大7日前までとする決定をした
3月13日	3月14日から、4月30日までの間、すべての外国人に対するアライバルビザの発行停止、PCR検査結果の提出、すべての外国人は入国後14日間自主隔離措置を執る、2020年春の期間の全ての登山許可証の発行停止を発表
3月20日	3月22日から31日まで、すべての国際線の運行停止を決定、23日から長距離移動バスの運行停止
3月23日	ネパール／国内2例目の感染者が報告される。3月24日～31日のロックダウン（外出禁止）決定、Visit Nepal Year（ネパール観光年）2020の中止を決定
3月24日	在ネパール日本大使館、ネパール滞在の短期旅行者の滞在状況確認「旅レジ」に掲載
3月25日	外務省海外安全情報（危険情報）が全世界レベル2に（不要不急の渡航は止めて下さい）
3月29日	ロックダウンを4月7日まで、国際線運航停止を4月15日まで延長する決定がされる
3月30日	在ネ日本大使館より、ネパール国内滞在中、カトマンズへの移動手段がない旅行者への連絡要請
4月1日	ネパール官公庁は4月3日深夜まで、帰国希望の外国人を地方からカトマンズに移送するが、4月4日以降移送中止を発表。4日以降は、移動手段は自ら手配また Chief District Officer の承認必要
4月1日	在ネ日本大使館より、日本行きチャーター便（ネパール航空）の搭乗希望調査
4月6日	ネパール政府ハイレベル委員会、ロックダウンを4月15日まで延長することを決定
4月7日	国際線運航停止を4月30日まで延長することを決定
4月10日	ネパールから日本（成田）行チャーター第1便が運行される
4月25日	ネパール／国際線フライト停止を5月15日まで延長
4月26日	ネパール／ロックダウンを5月7日まで延長
5月4日	日本では非常事態宣言が、5月6日みだりから5月末までに延長された
5月6日	ロックダウンを5月18日まで国際線フライト停止を5月31日まで延長
5月11日	在ネ日本大使館の安全情報でカトマンズの旅行代理店の日本行チャーター便の運航予定を知る
5月12日	在ネ日本大使館の安全情報でチャーター便の運航予定の連絡がある
5月13日	在ネ日本大使館の安全情報でチャーター便利用の際は大使館発行のレター持参することの連絡がある
5月16日	ネパール／同国初めての死者が報告される

出典：在ネパール日本国大使館、他

理事務所宛のレターを受け取り提出、ほどなく通行許可証が発行された。地区管理事務所所長からカトマンズまでの道中、70回以上の検問が待ち構えていると脅かしの演説を聞いた後、慌ただしく荷物を纏めてホテルを後にした。出発5分後には早くも1回目の検問があった。カベリ・コーラに架かる橋の袂での3回目の検問では、防護服に身を包んだ係官による検温も行なわれた。12回目の検問が終わった後、イラム郊外のホテルに到着した。ダルバートをビールで流し込み、ベッドに横になった時には22時を過ぎていた。

18日、暗闇のなか、3時にホテルを出発した。今日も幹線道路に合流した4時過ぎから検問が始まった。夜が明けるとともに検問の回数が増えて、多い時には1時間に10回前後も行なわれ、橋の両端で行なわれることもあり、げんなりした。出発してから15時間以上が過ぎた17時39分、夕暮れのカトマンズ市内に入って、最後の検問となる63回目が終わった。いつもは車と人の往来でごったがえす喧騒の街も、ロックダウンで車の往来や外出が厳しく制限されており、人影はなかった。長期滞在になることが懸念されたので、コスモトレックの事務所に寝泊まりすることにした。

カトマンズでの生活

事務所での生活は、外に出ることはできないので起床後のストレッチや洗濯、隊荷の整理、読書に費やした。5月13日には第1回グレート・ヒマラヤ・トラバースの報告会をオンラインで行なった。食事は敷地内の家族に3食作ってもらったので問題なかった。滞在した27日間のうち、踏査隊のコックの家（徒歩15分）の食事会に呼ばれた以外、一歩も事務所の敷地内からは出なかった。Wi-Fiとの通信状態は良好で、国内外のニュースの入手には問題なかった。また、NHK取材班の貫田宗男氏とも連絡を取り合い、チャーター便のチケット手配の労を取ってもらった。

新型コロナウイルスのお陰で、200万人の観光客を見込んでいた観光年は頓挫し、エベレスト登山の中止による損失だけでも300億円に上るといふ。ネパールの新型コロナウイルスによる影響は計り知れず、今後の外貨獲得には暗雲が立ち込めている。

カンチエンジユンガ撮影記

—新型コロナウイルスとの攻防戦—

中島健郎

スケジュール前倒し

例年通りの年報であれば、海外遠征の原稿依頼で執筆したことはあっても、まさか今回のようなテーマで依頼をされるとは思ってもいなかった。それもそのはず、2020年は新型コロナウイルスによって世界中がパンデミックに陥ってしまった。日本では1月早々に感染確認され、多くの国への海外渡航が制限された。そんななか、海外へ行って登山してきたチームがいるというだけで希少価値が高い。普段なら相手にされなかったであろう僕たちにも、白羽の矢が立った。そもそも撮影記と聞くと、僕なら読むのを後回しにしてしまう内容だが、これは単なる撮影の旅ではなく、この状況下でいかなる苦悩と困難、気付きがあつ

たかが少しでも伝われば、と思い執筆している。

ヒマラヤの撮影となると、何より準備が大切だ。2ヶ月にも及ぶ期間になるので、撮影機材はもちろん、食糧や装備など現地では手に入らない物資の手配で、出発前はバタバタと忙しい。出発当日は撮影機材だけでも相当な物量になってしまうので、超過手荷物料金を考えたと出来るだけEMS（国際スピード郵便）で別送した方が安くなる。そのEMS梱包作業中の慌ただしい最中に1通のメールが舞い込んだ。件名には「スケジュール前倒し」の文字。こんな忙しい時に何事かと思ったら、予定の1週間後を待っていたら発てなくなる可能性があるがあるので、出発日を前倒しに

出来ないかという番組ディレクターからの相談であった。それもそのはず、巷では新型コロナウィルスの影響で学校が休校になるなど、感染拡大が続いていた。海外からの入出国も同じように、状況は日々悪化していた。目の前に広がっているのは、EMSで発送しなければならぬ装備や食糧の山。今までひとつひとつ丁寧にパッキングリストを作成して梱包していたのが、急にどうでもよくなり、一気にガバーッと段ボールにぶち込んでガムテープで封をした。

3月10日、予定より5日早めて成田に集合。国際線でカウスターに並ばなくてチェックインが出来るなんて初めての経験だ。チェックインを済ませてセキュリティへ向かうという段階で、「ちょっと待て」となった。僕自身はすっかり出発する気満々であったが、今一度どうするかの話合いが持たれた。チェックインして今さら行かないという選択肢があることに正直驚いたが、出国すると無事に帰って来られるという補償もない。旅を中止する理由を並べたらキリがないが、わずかな可能性があるのなら、なんとか活かしたいという気持ちだけだ。30分のスタンディング会議は、最終的にチームとして向かうという決断がなされた。

マレーシアで乗り継いで、15時間後には予定通りネパールの首都カトマンズへ着陸。日本は感染拡大に指定されていたので入国管理での審査の目は厳しかったが、必要書類を用意していたので無事入国出来た。スケジュールが合わず、1名だけ後発で13日にカトマンズに到着。同日に今年のエベレストなどの遠征隊はすべて中止が決定し、翌日からは到着ビザも発給しなくなった。予定通り15日に出発していたら、EMSの梱包作業はすべて水の泡となるところであった。

当時、ネパールでは新型コロナ感染者数は一桁しか報告されておらず、首都カトマンズは感染者が出ていないという事になっていたため、住民たちはまだそこまで気遣っているという雰囲気はない。観光客はほとんど歩いておらず、人気レストランも予約なしで入れるのはありがたいが、普段のような活気がないのが寂しい。路上の物売りはいつも以上に必死になって集まって、なかなか引き下がらない。観光客が激減している状況では、日々の生活費を稼ぐのもままならない様子だ。

当初は陸路を使用してカンチェンジュンガ山域の麓まで行く予定であったが、一刻も早く山へ入らないと、いつ入山規制がかかるか分からないとのことで、14日にはトレック

キング玄関口のタブレジューンへフライト。本来ならまだ日本で出発準備に追われていたはずが、いきなり標高2400mへ降り立ったため、なかなか山モードに切り替わらない。しかし、肌身を感じる澄んだ冷気と、はるか遠くに見えた大きなカンチエンジュンガに、気持ちは抑えきれない。もはやここまで来たら、あとは山へ向うだけ。さすがにここまで来ると、マスクを着けている人はおらず、従来通りの生活を送っている。

GHTに行く

今回の目的はグレート・ヒマラヤ・トレイル（以下、GHT）撮影の旅で、昨年のマカルー、エベレスト山域に続いて第3弾となるカンチエンジュンガ山域へ向かう。東西に1700km続くこの道は、世界で最も標高の高いトレイルであるが、大半は山岳民族の生活の道として利用されている。すべてを踏破するには、通常5ヶ月ほどかかってしまうが、欧米のトレッカーなどには人気のトレイルの一つで、セクションごとに分けて楽しむこともできる。ドローなども駆使して、今までに誰も見たことのない景色を撮りたいという一心で始まった撮影の旅である。

少しヒマラヤを知っている人ならカンチエンジュンガと

いうワードを聞いたことがあっても、それがどこにあつて、どれほど日数がかかるかなど知らない。かく言う私もその一人だったが、現在はジープ道が延び続けており、途中の行程を大幅にスキップできるようなもなっている。タブレジューンからイラダンダ村の少し手前まで林道が進んでおり、ジープで快走。今日は歩く予定はなさそうだと思つてサンダルを履いてのドライブ気分だったのが、突然、車道が終わり、荷物とポーターとわれわれは降ろされた。歩道は河岸近くを通つているため、ここ下るの？ というジャングルの急斜面を下ることからトレッキングが始まつた。

藪漕ぎ斜面を下ると突然、街道に出た。見慣れた街道風景だが、何かが違う。あまり気にせずにはばらく歩いていしたが、やはり物足りない。それはすれ違う人や動物がほとんどいないということである。普段ならトレッカーや荷物を運ぶロバなどで、すれ違いが面倒だったりするのだが、声をかけてくれたり、立ち休憩したりと、そんな時間も悪くはなかった。それが一切なくなると、ただ単調に歩くだけ。もちろんこんな静かなトレッキングをわれわれだけで満喫できるというのはとても贅沢なことではあるが、なんだか物足りなさも感じていた。

そんなことも2日目にはどうでもよくなった。タモール

「グレート・ヒマラヤ・トラバース」の幕開け



カンチェンジュンガ南面。左から主峰、中央峰、南峰



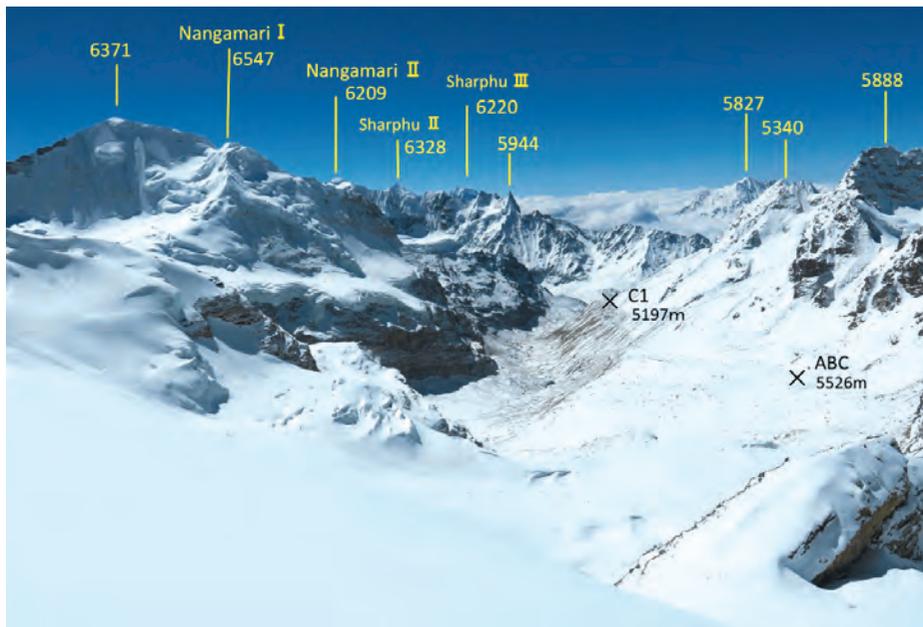
カンチェンジュンガ北面。バンベマより望む



パブクカン最高到達地点から南西に見える山々



まだ遠いパブクカン頂上(右奥)



5920 m、最高到達地点から南東に見える山々



パブクカン(中央)を遠望する





ドーモ南東峰の 6000 m 付近から望むカンチェンジュンガ北面。圧倒的な山容の大きさが



ボクタ・ピーク山頂にて



重量に限界があるため、厳選された撮影機材



ボクタ・ピークから北東を展望する。左からジャヌー、カンパチェン、ヤルン・カン、主峰、中央峰、南峰、カブルー



小型軽量のミラーレス1眼カメラをメインに撮影



雲の切れ間を待つこともしばしば



ボクタ・ピーク 5900 m 付近の最後の登り

川に沿って快適なトレッキングが始まったと思つた翌日には、突如、林道が現われた。実は中国が協力してチベット国境からずっと道造っており、貫通するまであとわずかという所まで延びていたのだ。コロナウイルス感染の影響で工事自体はストップしていたが、こんな奥地で車道を歩くとは思つてもみなかった。恐るべし、チャイナパワー。

早々に2日目でオランチュンゴラにたどり着く。この村はチベットとの国境から近いだけあつて、昔から交易の街として栄えており、建物自体は古いが多くの人々が昔ながらの生活を送っている。主にヤクのバターや肉、絨毯などを中国へ売って日用品や食料を買って売る交易だ。もちろん今は国境が閉鎖されているため、村の活気もなく、子どもやヤギの鳴き声が聞こえるぐらい。商店を覗いても、寂しそうにタバコをふかしている店主がいるだけ。こんな状況下で一番売れているのは何かと聞くと、タバコであつた。約1800円で中国から仕入れてきた1カートンは、ここでは2100円で売られている。安いのか高いのかよく分からないが、貴重な現金収入であることには間違いないものの、国境が開くまでに在庫がなくならないか心配である。

オランチュンゴラからいよいよGHTを東端に向けて

出発するという段階になって、天候が急変。これまでのポカポカ陽気が一転し、朝起きると真つ白の銀世界が広がっている。この積雪で5000m近い峠を越えるのは、穴開きスニーカーを履いたポーター達には厳しいだろう。そこで二手に分かれることにした。装備貧弱シテイポーターにはGHTを外れて安全な遠回りルートへ行つてもらい、クライミングシェルパや高所慣れしたポーター、そしてわれわれ撮影チームは最低限の機材と食料、幕営具を別してナンクラ峠を目指した。

峠手前からは雪が深くなりラッセル地獄となる。それまで意気揚々とはいしゃいでいたポーター達はいつさい前を歩かなくなり、クライミングシェルパが先頭に行く。しばらくは頑張つていたものの、なかなかスピードが上がらず渋滞になる。峠からの景色を撮影するという目的もあつたので天候の良い午前中には抜けたと思つていたが、このままでは間に合わない。道中の撮影はほどほどにして、日本人シェルパの私が先頭を切つた。実のところ、クライミングシェルパはそれほどラッセルには慣れておらず、黒部横断などで慣れていた私の方が圧倒的に早かつた。日本の豪雪と湿雪を知っていれば、ある程度のことでは対処できると確信した。しかし、ヒマラヤでこれほど真面目にラッセル



グンサ村で出会ったグレート・ヒマラヤ・トラバース隊と記念撮影



NHK 撮影隊の、左から渉外・貴田、撮影・門谷、ディレクター・山田、撮影出演・石井

したことあったかな、と思うほどの腰までラッセルを2時間続けてようやく峠に到着。残念ながら峠に到着したのは午後を回っており、辺り一面真っ白のホワイトアウトであったが、ここでシエルパ達との堅い絆が生まれた。余談だが、サポート隊長の「天国じい」貫田宗男率いる遠回り隊は、1日遅れでグンサに到着。歩行距離は圧倒的に長いのだが、みんな清々しい顔。「いやあ、亜熱帯の気候で植生が豊か。シャクナゲもきれいでした」と、われわれがラッセル地獄で苦しめられていたころ、存分にトレッキングを満喫していたようだ。

ここグンサ村は昔から人が1年を通して生活している最奥の村で、畑が多く生活の営みが今も感じられる。トレッカー向けのロッジも多くあるのだが、コロナの影響でほとんどが閉鎖。泊まれる宿は限られているが、偶然にも隣のロッジから関西弁が聞こえてくるではないか。なんと重廣恒夫隊長率いる日本山岳会創立120周年記念事業のグレート・ヒマラヤ・トラバース隊であった。海外のトレッカーすらいないこんな村で、カンチエンジュンを初縦走した本人と出会うとは思ってもみなかった。当時の話を伺いつつ、カンチエンジュンが美しく見える瞬間を教えてくださいました。

われわれ一行はGHTの東端を目指して北上。この先はトレッカーがいないので宿も開いていないため、ロッジのオーナーを連行して宿を確保する。すると今まではまた違った出会いがあった。それはウンコの多いこと。もちろん人間のものではないのだが、ヤクやロバなど荷運び動物のものでもない。それは普段街道沿いでは余り見ることのないブルーシープや雪豹など、野生動物のものだった。トレッカーが来なくなった影響で、野生動物はのびのびと街道で用を足すことができるようになったのだ。やはり動物たちも不安定な岩稜帯よりは、フラットな街道の方が落ちていて出せるようだ。

ジャヌーの勇姿を撮り終えて、いよいよカンチエンジュンガ北面から本峰を望む。8000m峰が4つも連なっているだけあって、山容が大きすぎて全貌が見渡せない。6000m弱のピークへ登って、ドロロンを飛ばしたら全容が見渡せるかと期待したものの、敢えなく予想は裏切られる。なんとかして五大宝蔵と呼ばれるカンチエンジュン山群の5つのピークを撮影したい。地図と睨めつこすると、やはり南面からある程度標高のある山へ登らなければ見渡すことが出来ないかと判断した。6000mほどで比較



ジャヌーを目指して進む撮影隊のスタッフ



圧倒的な迫力で屹立するジャヌー北壁

的登りやすそうな山、それがポクタ・ピークであった。

グンサ村へ一旦戻って態勢を立て直す。ところが8日ぶりに戻ってきた村は状況が一変していた。ネパールのロックダウンは3月24日から始まっていたが、コロナウイルスの影響は収まるどころかジワジワと感染者数が増え、このカンチエンジュンガ・エリアにまで感染疑いの症状があるネパール人が現われた。その村は少し離れた場所なので、影響はないかと思えたが、ポクタ・ピークのベースキャンプとなるヤルン谷へ行く許可がなくなってしまった。ほかの人との接触を極力避けるために新たなルートでのトレッキングは禁止され、最短経路で麓の街に戻るよう指示が出された。早く下りたとしても国際線は止まっているし、チャーター便がすぐに出る情報もない。ここまで準備してきて、途中で終わってしまうのは悔しいので、何かの手段はないものかと地図を広げていたら、グンサ村から直接ポクタ・ピークへ取り付くルートを見つけた。ジャヌー南面へ延びるヤマタリ氷河側の北面からアプローチして南面の通常ルートと合流して山頂を目指せば、ほかの人と触れ合うこともなく登山が出来る。現地警察に確認を取ると、それなら大丈夫とのこと、ひと安心したものの、こちら側から登った人は誰もいないとのこと。実際に見て

みないと分からないが、最後の可能性にかけて、われわれはグンサ・ベースキャンプを後にした。

ポクタ・ピーク登頂

アドバンス・ベースキャンプ（以下、ABC）となるヤマタリ氷河右岸にあるドウード・ポカリまではヤクの放牧道があつて快適なトレッキングだ。その先は登山記録がない箇所になるので一度偵察に向かうことにした。ABCからいきなり急なサイドモレーンを下り氷河へ下り立つ。そして左岸へ横断するのだが、クレバスはなく石と氷のガラ場歩きの氷河だったので、ロープは必要なかった。氷河横断はあつさり終わり、目的の氷河末端まで辿り着いたため、泊まり装備を持ってきておいた方が良かったのか？ と、一瞬後悔したのも束の間、ブルーアイスの懸垂氷河が行く手を阻む。今回は完全に油断した装備で来ており、縦走用アックス一本に平爪のアイゼンしか持ってきていない。同行のクライミングシェルパは、さらに酷いことにハーネスもアイゼンもキャンプに置いてきたという。おいおい、何しに来たんだ、おぬしは。

傾斜は急なところで60度、登攀距離も80mぐらいなので弱点をつけばなんとか手持ちのスクリュー4本でも足りそ



バンベマのベースキャンプより望むカンチェンジュンガ北面

うだったので取り付く。氷は硬く刺さりにくいだが、昔の人はこれより悪い装備で登っていたのだなと思えば、登れないことはない。その先はなだらかに見えた氷河だったが、深いラッセルに苦しめられ目標のハイキャンプ建設予定地5600mのゴルまでまったく届かずに時間切れとなった。仕方なく登攀装備をデポしてABCまで戻ることにした。

偵察は登頂日並みに疲れた1日となったが、天候チャンスはあと2日間ある。2泊分の装備を背負って、翌朝、ABCを出発。昨日のデポ地まではルートが出来上がっていたので4時間ほどで到着。その先はまたラッセルが始まるが、ヒドンクレバスも出てきたのでロープを繋いで行動する。撮影機材の荷揚げのために、クライミングシエルパも同行してくれてはいるが、クレバスに墜落する恐れのある場所では、いつの間にか後方へ回っていて先頭を譲られる。クレバスを縫うように進むが、深い雪でスピードが出ない。午後1時を過ぎると周囲はガスに包まれホワイトアウト。ルートも判別できない程になったので、コル手前の5500mでテントを張り、翌日の山頂アタックに備えることにした。

久しぶりにパートナーの石井さんとの2人きりの夜。撮

影となると機材やバッテリーが多くなるため、なんだかんだサポートのシエルパが同行したりすることが多いが、この先はわれわれだけ。石井さんは探検部出身であり、仕事として高所登山などの経験はあるものの、プライベートでクライミングをしているわけではない。しかし、本人のポテンシャルは高く、フォローであれば苦戦しながらも、なんだかんだついて来てくれていた。明日はどんなルートが待っているか分からないが、天候さえ許せば、山頂まで行って帰って来られるはず。山頂アタック前夜のワクワクと不安でなかなか眠れないことはよくあるが、今回はそれだけではなかった。バッテリーを冷気から守るためにシユラフ内に入れていたが、そいつに身体の体温も奪われている気分になる。こっそり2人のシユラフの間に挟んで、なんとか耐え抜いてもらおう。

朝2時に起きて天候を確認すると、残念ながら周辺はホワイトアウト。もう1時間仮眠を取って起きると先ほどの霧が嘘のようになくなり、満天の星空が輝いている。急いで出発準備を整え、4時15分にハイキャンプを出発。ヘッドランプの明かりを頼りに、1時間ほどでコルに到着。うっすら明るくなって、ようやく目指す東面のルートが見えてきた。広い雪壁から徐々に狭いルンゼ状になり、傾斜

が強くなりだしたら東稜へ出て稜線をたどる。基本的にロープは出発からコンティニユアスで繋ぎっぱなしで、危険な箇所にはスノーバーやアイス・スクリューを中間支点に取った。スタカットに切り替えるほどの難所はないが、滑落は許されない。稜線に出てからは風が強くなり、リッジの上もブルーアイスが混じっていていやらしい。「健郎、この先どうかな？」石井さんの足がストップする。

「風も強いし、あまり無理はできないけど、行きたい？」行きたいかどうかと聞かれると、もちろん行きたいに決まっているのだが、パートナーが行かないとなると1人で行くという判断はできない。アルパインクライミングの経験がほとんどない石井さんが、フォローではあるが1本のアックスでよくここまでついて来てくれた。今回は山頂がゴールではなく、撮影が目的の旅。行かない理由はたくさんあるが、まだ朝の8時過ぎで天候も安定している。「……行きたい。」

パートナーの不安をよそに、自然と言葉が出てしまった。それから1時間後、われわれは無事にボクタ・ピーク東峰の頂にいた。奇跡的に風も弱まり、五大宝蔵の撮影と空撮にも成功した。結果的には成功であったが、背伸びをし



日の出に喜ぶ石井。まだ余裕があった

た登山となってしまうた感は否めない。撮影でしかお互いにロープを結ばないので、日頃からトレーニングをしよう
と夜のテントで反省会をした。

このカンチェンジュンガ・エリアで出来る撮影は終わってしまつたので、本来の予定の次のエリアに移動したいところだが、すでに入山規制が始まっているため、一刻も早く日本へ帰国するほかはなさそう。感染者は日に日に増加してチンタラしてられないものの、国内線も国際線も飛んではいけない。ならば、せめて国際線が回復するまで山中で待機しておきたいところではあるが、いつチャーター便が飛ぶか分からない状況では、カトマンズでスタンバイするしかない。しかし、カトマンズへ戻るのも一筋縄では行かない。ロックダウン中で国内移動が制限されている。まずは在ネパール日本大使館に依頼して、ネパール外務省宛にカトマンズ帰還願いを送ってもらう。外務省発行の通行許可証が出れば、それを持って現地警察に移動許可をお願いする。ほかにも帰路のフライト予約やカトマンズのホテル予約確認書の提出などを求められ、手続きに丸1日がかかった。ようやく出発できたと思ったら、カトマンズまで70ヶ所に及ぶ検問。医療体制の乏しいネパールとあって、絶対に感染を広めないという本気度合いは分かるが、その

度ごとに時間がかかって仕方ない。レストランや商店も開いておらず、開いているのは薬局ぐらいなもの。せつかく街に下りたから美味しいダールバートを夢見ていたのに、まさか車内で山の残りの行動食を食べさせられるとは思わなかった。

軟禁地獄のカトマンズ

1泊2日でカトマンズに戻って来たわれわれを待つていたのは、酒池肉林のカトマンズ・ライフではなく、軟禁地獄の始まりであった。各国のチャーター便が飛ぶなか、日本へのチャーター便はボクタ・ピークに登っている時にすでに飛んでしまっていた。ロックダウンは延長を繰り返し続けているので、国際線の復活を待つよりはチャーター便狙いとなる。食事はホテルのレストランのみで、外出は食料品の買い出しだけが許されている。ホテル生活の外国人は食事提供されているので、基本的に散歩することは許されない。憧れのホテルライフと言えば聞こえはいいが、外出できないければ、単なる軟禁生活だ。しかし、人間とは思議なもので、3日が過ぎ、1週間が過ぎてきた頃には軟禁生活にも1日のリズムが出来上がる。朝起きてストレッチとヨガ、朝食を食べ洗濯や部屋の掃除、メールの返信をしてい

たらいつの間にかお昼で、午後は今後の動きのミーティング(単なる井戸端会議が多い)や撮影などをしていたらあつという間に夕方になっている。2週間が過ぎ、3週間目に入ると、いいかげん男5人の同じ顔では飽きてくる。軟禁生活24日目、噂話は幾度となくあつたが、ようやく正式に3日後のチャーター便が決まる。待ちに待った帰国の日だが、なんだか不思議と寂しさも残る。ホテルの庭では苺を収穫して苺ラッシーやストロベリーアイスをたくさん食べた。身体が鈍らないようにと、スス汚れたテラスの梁にぶら下がってボルダリングを繰り返し続けたら、随分と梁は綺麗になった。何よりわれわれ5人のためだけに、ホテルから一歩も外に出ずに、毎日美味しい食事を作ってくれていたホテルスタッフたちには頭が上がらない。

帰ると決まったら忙しい。寂しいと思ったのも束の間、帰ったら何を食べようか、日本に帰っての自宅待機は何をしようかなど、気持ちはすっかりジャパン・モード。チャーター便は予想外に日本人10人以外はすべてネパール人。日本で家族が待っていたり、日本に留学中だったり、こんなにも日本に帰らなくてはならないネパール人が多いことに驚いた。



撮影隊のカメラマントリオ。中央が筆者の中島

今回の撮影の旅は、何度も通ったネパールであるはずなのに、まったく新しい世界が広がっていた。山では本来の生態系に戻った動物たちが生き生きと暮らしており、村人は昔ながらの豊かな自給自足生活を送っている。新鮮な野菜のタルカリと地鶏のチキンカレーは絶品だ。街でも車がほとんど走っていないので、クラクションの騒音がないことはもちろん、鼻毛の伸びるスピードが遅いことに気づい

た。大気汚染の酷い普段のカトマンズなら1週間滞在しているだけで鼻毛伸び率が半端ないが、今回はひと月過ごしても成長を感じなかった。さらに驚くべきことに、カトマンズから200kmも離れたエベレストが遠望できたようだ。観光客が増えるにつれ、便利で快適な世の中になってきたことを思えば、大切なものをたくさん失ってしまったことに改めて気づかされた。

日本に帰国して、すでに1年以上が経った現在でも、まだ海外へは行っていない。大学の海外遠征時代から、毎年どこかしらへは渡航していたが、これほどまで日本にいるのは初めてだ。すぐにネパールへ戻れると思ってデポしてきた装備や食料は、もはや悲しいことになっているだろう。新型コロナウイルスはそう簡単には収まってくれないが、海外に出ることがなくなったことで、家族と過ごす時間が圧倒的に増えた。ネパールの山の変化には気づいたが、もっと身近で大切な存在である子どもたちの変化に今までも気づいていなかったことに落胆した。子どもは黙っていても成長すると勝手に思っていたが、単に妻の努力のおかげであった。今ではワクチン接種が始まって、海外登山もそう遠くはない未来となってきたが、焦らず着実に山と向き合っていこうと思う今日この頃である。

日程概要

- 3月10日 日本出国、カトマンズ着
- 3月14日 カトマンズ出発
- 3月15日 タブレジュン出発
- 3月18日 オランチュンゴラ
- 3月29日 カンチエンジュンガ北面BC
- 4月5～8日 ボクタ・ピーク登山
- 4月15日 タブレジュン着
- 4月18日 カトマンズ着
- 5月15日 カトマンズ発
- 5月16日 日本着
- 5月31日 自己隔離から解放

地図は73ページ参照

読物

深田久弥没後50年、果敢に人生を歩む

雁部貞夫

はじめに

『山岳』編集部より、深田久弥氏との関わりを今のうちに
なにか書いてみたらどうか、というお話があった。かつて
山岳雑誌『岳人』に諏訪多栄蔵氏宛の未公開の深田書簡を
6回にわたり連載したときに、雑誌のスペースの都合で掲
載を見送った分を、いい機会なので紹介しようと思って調
べ直すと、まだ二十数通残されているのが分かった。

その書簡はかなり長いものも多く、一部引用するとい
う形式とったのでは、資料としての意味がなくなるので、こ
の際、深田久弥没後50年の節目ということもあり、日ごろ
から深田久弥の「人と作品」について考えていることを書
いてみようと思う。

深田の百名山については、その内実はともかく、いまだ
に人気が高く、テレビでは今でも「百名山」を紹介する番
組が毎日のように放映されている。また、今年は前述のご
とく節目の年なので、山岳雑誌でも一冊まるごと「百名山」
特集を組んだ例もある。

「百名山」がますます世の人びとに受容されているのは大
いに慶賀すべきかもしれないが、そのどれもが原作者たる
深田久弥を語ることがない。ほとんどが「百名山」のコ
ース案内である。つまり、あれほど深田が心血注いだ名著へ
の配慮がまったくないのが現状である。

深田がなぜその「山」を選んだのか、その山のどんな点
に魅せられたのか、その山と先人との関わりはどのようなか。



深田久弥肖像(志げ子夫人提供)

そういう肝心なところに無頓着で、ただ深田の名のみ冠したような現状は実に情けないかぎりだ。

深田久弥の『日本百名山』は、山のコース案内の本ではないのだ。

果敢だった人生

これから、深田久弥と言えはすぐ頭に浮かんでくることから、スペースの許すかぎりいくつか記したい。

出版社や雑誌社の編集者たちの間では、深田久弥の「遅筆」は有名だった。遅筆と言えは、物事への対処の仕方がのろく、不器用だったかのような印象をもたれかねない。それは深田という人物像の表面的な印象でしかない。

執筆する側から言わせれば、深田の戦後に書かれた膨大な量の「ヒマラヤ物」は、長大な連載となったが、月々の締切りギリギリになって原稿が出来るのが、当然なのである。

たとえば「エヴェレスト」を書くとしよう。1900年代初頭から第2次大戦後のイギリス隊の初登頂（1953年）に至るまでの物語を描くためには、少なくとも英・米・独・仏ほかの山岳会ジャーナルを読んで勘どころを押さえないければ登山の細部は描けない。実際に執筆する前の作業

が大変な努力を必要とするのだ。

昭和34年から雑誌『岳人』に連載された「ヒマラヤの高峰」は、その後の10年間、120回におよんだが、月々、この締切りとの格闘の10年でもあったのである。

では、実生活、実人生における深田は、鈍^{のろま}間で不器用な人物だったのか。答えはノーである。むしろ、その生涯の節目節目で彼は機敏に、果敢な決断をしつづけた人であった。

今ではよく知られている実例をあげてみよう。例えば、東大に在学中に改造社の編集部員に正式になり、東大を中退してしまった。常識人ならば、あと1年くらいなんとか学校と職場を両立させる方法を考えたであろうが。

そしてその頃、北島八穂と知り合い、親の承諾を得ず、「深田流」の結婚をしてしまう。

その後、深田は鎌倉文士の一人として成功を収めるが、作家中村光夫の結婚披露宴の場で、中村の実姉である木庭志げ子と「再会」し、恋愛に突き進む。病身の妻八穂（脊椎カリエス）を捨てることになるのであるから、これも常識人の行動ではあり得ない。結局は鎌倉文士の座を捨て、恋愛を貫いてしまう。

志げ子と正式に結婚したのは、昭和22年であり、そのときすでに長男の森太郎は6歳になっていた。

深田家の出自

前述のごとき深田久弥の積極的で果斷に富んだ性格はどこから発したものでしょうか。

私はその大きな要因として、大聖寺（現・加賀市）の深田家の「出自」を考えている。深田家は大聖寺においては代々にわたり紙商を営んでいた。深田自身、小さい頃は、「紙屋のタンチ」と呼ばれていたと記している。タンチは「坊ちゃん」という意であろうか。

私は深田没後の深田家に何度か招かれ、兄久弥に代わって当主となった弥之介夫妻と語り合う機会があり、その折に、かなり古い時代に遡る家系図のコピーをいただいたことがある。そのコピーをどこかに仕舞い忘れて困っているが、だいたいのは覚えていて、それによれば、大聖寺の城下に移って、中興の祖となったのは三代目の深田屋宇平衛（嘉永4年没）が挙げられるが、それ以前は、大聖寺に近い海岸べりの橋立町深田がこの一族の居住地であった。

深田家は旧深田村の称名寺（現存）の門徒であり、私も

その寺を訪ねたことがある。本堂の欄間に奇進者の木の名札が掲げられているが、その筆頭近くに弥之介老の名があった。なお、初代の俗名は不詳だが、寛永9年に没している。

日本海に面した橋立漁港として知られる地は、江戸期を通じて千石船の寄港地として栄え、富裕な商人事業家が輩出した。すなわち、進取の気性や積極性は、この地域全体の気風であり、深田家にもこの気風は代々受け継がれてきたに違いないというのが私の見方である。なお、深田家と福井の「鏡屋」とは何度となく縁組を繰り返していることに私は注目した。「鏡屋」は京都北野天満宮とも縁が深いので、どこか雅みやびで文化的なものがこの一族に伝わっているように私は感じる。

私はいく度となく、深田家（大聖寺）で日常的な昼食や夕食を何人かの人びとと共にしたが、そのときに出てくる、煮魚や焼き魚、野菜の煮つけ、香の物などなかなか滋味が深く、どこか京風の味わいを感じた。食卓で使われていた小皿、中皿の類は古九谷らしいことは私にもわかった。その印象は東京・松原の深田久弥宅での夕食にも共通している。なんとなく洗練されているなあと感じたものである。

私の婚礼の折の深田のはなむけの言葉は、ユニークな生

き方をせよ、自分らしく生きよということだったが、そのことは深田久弥自身が生涯「自分らしさ」を貫いたことと通底しているように思われる。

「日本百名山」の楽しみ方

『日本百名山』という本の楽しみ方は、人さまざまである。最も基本的なものは、この本に描かれた百座の名山に自己の足跡を残すことであろう。これはぜひいぶん多くの人びとが実践しているように思う。

なかには、スポーツ的に登山するというよりは、生きていく間にすべての百名山を登ることが、人生最大の目標だという人も多い。そうなると、百名山は「深田教」という山岳宗教の信徒による山岳巡礼の場のような感さもある。

しばらく前からの現象だが、『日本百名山』を百の名山へのガイドブックのように扱い、原作者のことなど考えもしないという風潮が顕著になってきた。「百名山」という山のレットルだけが一人歩きして、肝心の著者像はどこかへ置き去られてしまったのである。

『日本百名山』（昭和39年刊）が上梓されてから半世紀、原作者の深田久弥の実際の顔や声を知る人も少なくなってきた。しかし、この本ほど著者と描かれた対象が不可分の関

係にある例は珍しい。

幾千となく存在する山の中から、なぜ、深田はその山を採り上げたのか、それぞれの山座の叙述のどういふところに文学としての永遠性が存在するのか。そうした点を考えながら読めば、自ら真の醍醐味が味わえるのではないだろうか。

ここで私なりの「百名山」の味わい方を記してみよう。この本はいわば日本の山の総決算として書かれているので、普通の紀行文やエッセイでは記されていたエピソードなどは削除され、エクスだけが抽出されたような感じもある。もちろん、文章全体の格調を保つ配慮も働いていたと思われる。

実は、この本からカットされてしまったエピソードを掘り起こし、より豊かな世界を自らのものにするということも、深田ファンの特権であった楽しみなのである。そんなことが実際にあるのか、それが実際にあるのである。「雨飾山」（1963m）がその典型である。実はこの頸城の名峰が世に広く知られるようになるのも「百名山」あったからこそ、の話なのだ。

『名もなき山』（平成26年、幻冬舎刊）という近年できた深

田本のなかに「混まない名山」という一項があり、そのなかに雨飾山が出てくる。この山について深田は、〈その気品のある山の形と響きのよい変った名前と共に、長い間私の憧れの山であった〉と記す。

この山へは戦前、彼は二度にわたって登頂を試み、二度とも失敗。道のない山だったことと、悪天が災いしたのである。

特に二度目の登山（昭和16年）は一生を通じて最も印象に残る山行になった。このときに同行したのが、後の深田夫人志げ子さんだったのである。二人はこの年の5月に志げ子さんの実弟、中村光夫（深田の友人）の結婚披露宴で再会し、深田はこの新しい恋に夢中になった。

この山行で二人が再会して、わずか1ヶ月後の6月に行なわれることを知れば、その熱愛ぶりが偲ばれる。この文章で彼は次のように回想する。

〈……この時は雨続きで、小谷温泉に四日も待機したが、天は私に幸いしなかった。五日目に雨飾山の脇の峠を越えて越後へ抜けた。振り返ると、向って左の方が心持高い二つの耳が、睦まじげに寄り添って相変らず美しかった。

左の耳は

僕の耳

右は はしけやし

君の耳

そんな出鱈目を口ずさみつつ山から遠ざかりながら、雨飾山に対する私の思慕は増すばかりであった。〉

ほかの山では絶対に見せることのないロマンティックな心情が吐露された文章である。これが『日本百名山』の方ではどうなるか。そこでは、来る日も来る日も雨で空しく引き上げねばならなかったと、わずか3行の記述があるだけで、自分と志げ子さんを雨飾山の2つ耳になぞらえた詩句の欠片さえ出て来ないのである。

深田久弥の読者たる者は『日本百名山』の記述のみで満足してはならない。それぞれの山座には必ず別の紀行文が記されている場合が多い。そこには意外な真実やナマの告白にも似た文章に遭遇するチャンスが隠されているかも知れないのだ。

ともかく、雨飾山は実生活上においても、深田久弥の後半生を規定する山なのであった。

次に本邦最高峰の「富士山」について触れてみよう。深田に厳冬の富士登山を記した文章がある。その文章「氷雪の富士山頂」と題した文章が実によい。普段は「偉大な



『ヒマラヤの高峰』より

る通俗」としてこの山の厳冬では、まったく別のきびしくも美しい富士の表情を私たちに伝えてくれる。そのさわりを紹介したい。

（昭和十四年二月）次の日は噴火口の底に降りた。夏の登山期には神聖な個所として下降を許されぬ地だ。火口の底から見上げた空は一つの蒼い円で、その青さが神秘的に濃かった。まわりが断がいの火口壁で、氷雪にちりばめられたその壁が、日に輝いている美しさはこの世のものではなかった。

その夕方この頂上だけを残してあとの世界は全部雪に埋められた。見渡す限り雲海につづく雲海であった。その雲の上に大きな富士の影が映った。荘厳そのものであった。新奇をてらった語句や表現はないが、落ちついた言葉で、富士の純粹な自然美を伝えたよい文章だ。これが『日本百名山』ではまったく出てこない。このすぐ後に山頂からのスキー大滑降のおまけまで付くのであるから、よけいこの「氷雪の富士山頂」を描いた文章は、光彩を放って見えるのである。

『日本百名山』は昭和42年2月1日、第16回読売文学賞（評論の部）を受賞した。選考委員の一人で戦前からの友人、



深田久弥の書斎

小林秀雄の後押しも大きかったが、同じく戦前から深田の文章を推奨していた小説家の林房雄が、前年の昭和39年の1年間担当した朝日新聞の文芸時評欄で絶賛したことも、大きく働いたと私は考えている。

深田に「ペンよりも足の功」(読売文学賞受賞者の言葉)と「わが登山史の決算『日本百名山』」という短章があるが、貴重な文章だ。

その中で深田は前記の小林秀雄と林房雄の二人と版元、新潮社の編集者であった佐野英夫への感謝の言葉を述べている。そこには、戦中戦後の長い雌伏の時代を耐えてきた者の喜びの聲がほとばしっている。

すべての力を注いだ『ヒマラヤの高峰』

前にも少し記したように、日本の山を書くことと、ヒマラヤの山々を書くことは、著述家としての深田久弥を大ならしめた二つの大きな車輪であり、どちらが欠けてもその世界は存在し得ない。長い執筆活動の途上で結晶したのが、『日本百名山』(昭和39年刊)であり、『ヒマラヤの高峰』(昭和47年、決定版)であった。

私は半世紀前の1966年の秋のある日、初めて丸山山

とうに入つて、ボートとしない者は
 幸いである。
 一九六〇、三、二五 諏訪多栄蔵
 なんとかの長屋といながら
 ううやましまは九山山亭
 六一・三・二五 薬師義美



昭和43年3月19日付

昭和44年6月23日付

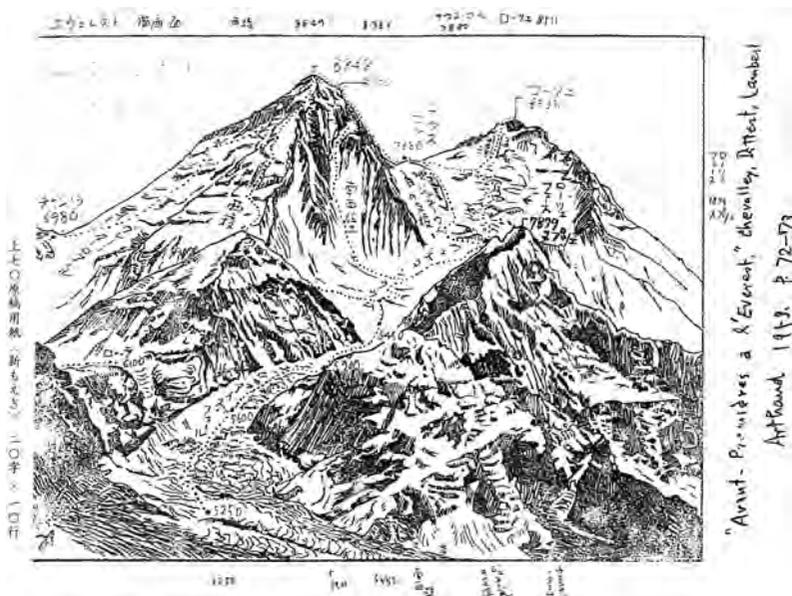
深田を喜ばせた九山山房訪客簿への諏訪
 多栄蔵の署名(右)と、同日の薬師義美の
 署名(左)

房(深田の書齋の名)を訪れた日のことをよく覚えている。
 その年の夏、パキスタン側からヒンドウ・クシユの主稜
 へ日本人として初めて試登した際のスライド写真を多数私
 は持参していた。

そこには、ヒンドウ・クシユの主峰テイリチ・ミール(7
 708m)やサラグラール(7349m)、イストル・オ
 ナール(7403m)ほかの7000mを超える高峰が多
 く含まれ、『ヒマラヤの高峰』で採り上げる山々をヒン
 ドウ・クシユの山座へシフトし直そうとしていた深田をい
 たく喜ばせた。

深田はその月に執筆中の「シャハーン・ドク」の後半を
 空けて、私の話とスライド映写で日本人が初めて目にした
 この山脈の高峰群の詳細な感想をそこに書き込んだ。そし
 て、私と小田川兵吉ペアの行動を新しい登山の領域を拓く
 ものとして称揚してくれたのである。

その日が深田との初対面であったが、スライドの上映が
 終わり、酒肴が出る頃には、私もすっかり寛いだ気分になっ
 ていた。その部屋の床の間に、加藤楸邨の隠岐の海の旺ん
 な怒涛の景を吟じた句が掲げてあった。楸邨の大ぶりの字
 の雄渾な筆致が実に印象的であった。その句は、楸邨の戦
 前の句集『雪後の天』(昭和18年刊)の冒頭の秀吟「さへぞ



エヴェレスト山姿図(諏訪多栄蔵画)

えと雪後の天の怒濤かな」である。

帰りしな、終電に近い東松原の駅で電車を待っていると、私の名を呼んで深田が現われ、「これ忘れ物」と言って、コニヤックを入れるスキットルの蓋を渡してくれた。

着流しの着物の裾をひるがえし、下駄の音を響かせながら帰っていく深田の後姿を見送り、これからは、この人のために働かねばならぬと思った。

ネパールの登山が禁止となり、未踏峰の多いヒンドゥークシユでは、毎シーズン多くの初登頂が伝えられ、私の入ったパキスタン北西辺境のチトラール地方へは、その年を境に、毎年のように数十チームの登山隊（多くは3、4人の小登山隊）が練り出す状況となり、深田は新しい正確な情報を必要としていた。

しかし、そのこととは別に、その夜、私は深田という懐の広い、大きなゆったりした人物に出会えたという、何とも言えぬ幸福感の中にいた。そして、この人はまるで父親のような存在だな、と思ったものだ。

名伯楽、諏訪多栄蔵との出会い

『ヒマラヤの高峰』はその後も多くのヒマラヤ志願者のバイブル的な拠りどころとなり、知的な背景を与えつづけた。

細かいことは省略するが、もう一つ記すべきことは、戦後の深田のヒマラヤ研究や著述に欠かすことの出来ない協力者となった諏訪多栄蔵の存在である。

戦前から諏訪多は、博覧強記のヒマラヤ研究者として知られ、深田がヒマラヤの著述に専念するに当たっては、読むべき文献、地図の所在、外国隊の最新の登山のニュースを飽くことなく、深田へ注入した。黒子役に徹した諏訪多の支援なくして、深田のヒマラヤの著作はあり得なかつたと断言したい。

特に雑誌連載に際して、深田の文中に添えられたヒマラヤの山座の山姿図と地図は、工業技術者としての専門を生かした厳密、正確なもので、深田の文章に一層の信頼感と具体性をもたらせた。克明なペン画による山姿図は手書きのまま、直接、印刷に供せられた。

諏訪多へ書き送った深田の書簡は、約150通に及び、そのうち100通ほどは、諏訪多の晩年に私の手許に託された。そのうちの約40通は、朝日新聞社が刊行した『深田久弥・山の文学全集』の最終巻に収録された諏訪多宛の深田書簡（101通）以外の当時の未発表書簡であった。このうちの大半はその後しばらくして『岳人』誌に連載したが、今なお、20通ほどが未公開のまま残されている。

これらの書簡には、戦後の数十年に及ぶ二人のヒマラヤニストの友情と信頼が綴られ、年々変貌するヒマラヤ登山界の貴重な情報で満たされている。

避衆登山のこと

昭和30年代の半ば頃から、深田は「避衆登山」と呼ばれる山歩きに精を出すようになる。この言葉の意味は読んで字の如し。皆の行く混み合うような山を避けて、自分たちだけの山を楽しむというほどの意味である。

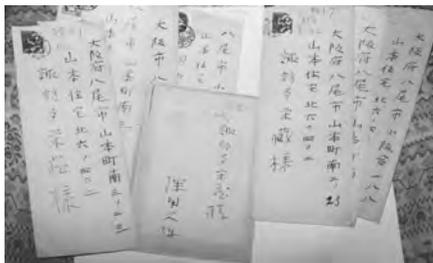
深田の場合、日本山岳会の先輩、同僚たちの中で、特に気の合った友を見出し、四季の山行を思う存分に楽しんだ。藤島敏男、望月達夫、加藤泰安、川崎精雄などといった人びとがその仲間である。

『静かな山旅』の中の「へそまがり大人ととも」に、その山行の様子が詳しく、ユーモラスに描かれている。藤島の息子の泰輔（小説家、当時の皇太子をモデルにした小説『孤独の人』で知られる）が、このへそまがりで毒舌家の親父さんを面白おかしく描いたユーモア小説「へそまがり太平記」はテレビ化されたりして好評だった。

深田の文章では、たっぷりこの大人の毒舌（薬舌ともいっている）ぶりを記していて思わず吹き出したくなる。そし



諷訪多の著書『ヒマラヤ山河誌』



深田から送られた諷訪多宛書簡

て、文章は次のようにして終わる。そここのところを引用する。

「少し私が山に遠ざかっていると、旅先の山の宿から、貴公どうした？ しつかりして貰いたい、などとハガキが来る。エスプリが鈍ると私は大人に会いに行く。ヘソまがり精神を砥石にして、私のエスプリを磨くためである」云々。

さて、私はこうした山岳会の老童たちが、山の写真や入手したばかりの山書を見せ合ったり、山行のプランを話し合ったりする「土曜会」の席に居合わせることも多かった。20代の若手は私一人だったが、日本の近代登山史上の人物が多く登場するこの会は、今思うと貴重であり壮観でもあった。前述の人々のほかにも、松方三郎、足立源一郎、山崎安治らの諸氏が一杯50円（のちに100円）のウイスキーのグラスを手に談笑する場面は、実になつかしく思い出の彼方にある。

場所は当時は神田錦町にあった日本山岳会の談話室。当時の私は27、8歳、ベテラン諸氏は60から70歳くらい。ある者は近くの古書街で掘り出した山岳書を語り、ある者はパイプ・スモーキングで無言の行。

私なども手入れの悪いパイプを藤島老に見つけられ、「折

角のタン・シエルがこれでは泣いているよ。ちよつと貸したまえ」と言われ、パイプのカーボンを削ってもらったり、仕上げは鼻の脂でピカピカに磨いてもらったりした。皆大いにクラブ・ライフを謳歌したものである。

深田を含め、右に名前を記した老童諸氏はすべて今は黄泉の人となった。この文章を記して久しぶりにその人びとの面影を思い起こしたことだ。

そして、それらの人々が山岳会ルームの一室に集まって談笑を交わしている図は、近代登山史の生きた歴史を伝える一代の偉観でもあったのだと思う。

最後の一章

深田久弥に「韃靼」と題する文章がある。この難しい漢字は「ダツタン」と読み、英語ではタータリイ(Tartary)と呼ぶ。西欧の16、17世紀頃の古い地図には、今の西域からロシアの沿海州あたり一帯を「Tartary」と記している。

深田の文章は、有名な安西冬衛の短詩の引用から始まる。〈……韃靼海峡を一匹のてふてふがわたっていった……という詩の一行が早くから上田哲農さんを中央アジアに惹きつけたという。一匹の可憐な蝶が荒海の上を飛び出して行くイメージも鮮烈だが、更に海峡の名前がそのイメージにふ

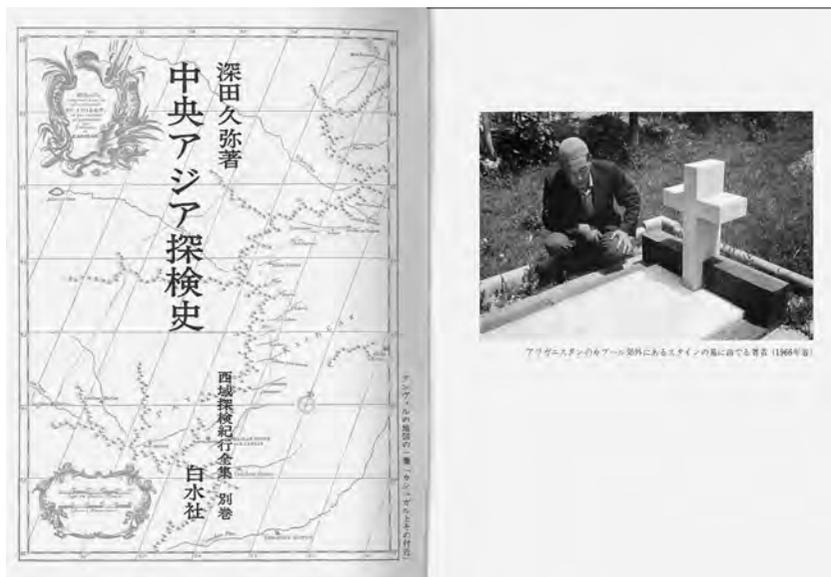
さわしい。…(中略)…韃靼という重つ苦しい字割の中に、あの融通の利かない、しかし精悍な民族のおもかげが籠っているようである。〉

そして、話は上田哲農のカフカズで想を得た「韃靼人」を描いた油絵に及ぶ。さらに学生時代の仲間になぞ呼ばれていた男がいた思い出を記す。

深田の最も古い記憶として、築地小劇場で観たゴリーキーの「どん底」やボロージンの歌劇「イゴール大公」が引き合いに出される。すべてが深田のなかの中央アジア、ダツタンに結びつけられるのである。そして、そののち、中央アジア探検史上の名著に話が及び、次のように結論づけられる。

〈日本人にとってはそれが韃靼である。そしてどんな言葉にもまして、韃靼という言葉には中央アジアらしい気分が溢れている。私はそう感じて、この漢字を深く愛している。〉

これもまた、深田久弥という人物のこだわり方、人生態度のよくうかがわれる文章だ。そう言えば、深田は故郷が加賀市という新しい名となっても、これを認めず、最後まで「大聖寺」で押し通した人であった。



著書『中央アジア探検史』の口絵写真。スタイン墓碑と深田

最後の最後になったが、深田の晩年のある年のシルク・ロード踏査行の終着地に近いアフガンのカブールで彼は、「スタインの墓」という短いが心のこもった一種の名文を記している。

1966年に深田は数人の仲間と共に、ヨーロッパから中近東を経て、インドに至る大旅行を敢行した。

大部分は車による走行で移動し、途中の数ヶ所で登山もした。アフガンのカブールへ入ったのは、ジャスミンの花咲く5月。この街で第2次大戦末期に客死した大探検家、M・A・スタインの墓に詣でるのが、大きな目的であった。

スタインにまつわるいくつかのエピソードを記したのちにシャレ・ナウ（新市街）の一角にある外人墓地でスタインの墓を見つけて、深田はその墓碑銘を書き取った。その銘は次の一行で終わっていた。即ち、
「心より愛されし人なり」。

この1行について深田は（この最後の「心より愛されし人なり」という言葉が、いかにもスタインの温厚な人柄を表わしている。終身彼は独身を通した」と記している。

深田自身もまた、男女を問わず誰からも「愛されし人」だったのだ。

今私の眼前には深田の温雅で濁りのない笑顔が浮んでく

る。そしてまた、大聖寺の菩提寺（本光寺）にある墓碑の銘文、「読み、歩き、書いた」がオーバー・ラップするのである。

追記(1)

本文は元々、深田久弥の著書からもれていた文章を集成した『名もなき山』（平成26年、幻冬舎刊）の解説を骨子としたが、近年の「深田百名山」の扱い方に問題を感じていることもあり、右の文章に大幅に加筆訂正を加えたものがある。

追記(2)

『日本百名山』の原形はすでに第2次大戦以前に書かれていた。実際には20座の山について、山岳雑誌『山小屋』（昭和15年）に連載されていたが、1座につき約500字くらいの短章で、深田の文章のよさは発揮されぬまま、戦争などの影響もあり中絶した。しかし、百名山執筆の構想は古くから持っていたことがわかる。

（2021年6月24日記す）

世界の山岳信仰

——私が眺めて選んだ「世界百名山」より

黒田洋一郎

はじめに

日本では最近、中高年を中心にトレッキングなど山登りがますます盛んになっている。そのタイミングに合わせ、本会などの山岳団体や関係者の努力もあり、「山の日」も国の祝日に正式に決まった。

あまり言わないが、日本の「山の日」の国民の祝日制定は、「国際山の日」はあるものの世界では最初で、非常に珍しい。次に詳しく述べるが、日本は「山岳信仰大国」とも言え、「山の日」は世界でも日本だけの現象なのである。その理由は、日本各地では元々古く自然信仰（アニミズム）に端を発した、特に「山を崇う」山岳信仰に関わる風俗や習慣が、一般の人にも現代にまで続いているからだ。

「やおよろず八百万の神」という、昔の神道（古神道）における多神教の考えや表現が、現在までも使われ続けているからだ。この日本人の心の広さは、日本にもいる少数派である一神教のキリスト教徒でさえ、容易に理解する。ところが、欧米などのキリスト教やイスラムの一神教、ただ一人の絶対神を信じる教会、モスク神学の社会で育っただけの人々には、日本のこれら多神教の自然信仰は、普通の人には理解できない。もっとも、フランス人でも明治初期の廃仏棄釈のときに日本を訪れ、600体もの仏像、仏書を買集めて東洋美術館を創った有名なエミール・ギメが、キリスト教徒では「仏教のパイオニア的理学者」の一人であろう。広く言うと、これは日本全体の宗教に対する独特の寛容

さ、いい加減さであり、仏陀を平気でヒンドウの神として祀るインドさえも凌駕しているような日本は、世界一の多神教社会とも言えよう。

これには、日本では山での修験道修行など、平安時代から始まる山岳密教の長い歴史があり、山を敬う神仏混交の伝統が中世以降も、ずっと強かったこともある。一例を挙げれば、最澄の開いた京都の比叡山など仏教総本山の僧は、その後一部武装するようになったが、戦国時代当時の比叡山の政治・軍事力の強さは、天下統一を目指す織田信長が目の敵にし、部下に命じて焼き討ちにしたほどである。

山などを信仰の対象とする「神道」という言葉から連想される神社は、実は輸入された仏教の影響も受けて成立したものである。「神道」という言葉自体、明治政府が始めたおかしな神仏分離政策以来、仏教信仰と対照・分離されてから初めて、広く使われるようになった。また、昔は主に総本山として山に建てられた神社仏閣が、その独特の雰囲気もあり、熊野古道のような神社参詣道とともに、現在の日本でも老若男女を問わず好まれている。

現在の観光ブームの影響もあるが、日本人の初詣など神社仏閣参りは、もう日常的と言ってもよい。そのためか、仏教伝来のときも相争わず、神仏混交となった。現在でも

自然信仰、山岳信仰に源を持つ神道などの多神教が、多数の一般日本人の心にも、まだ色濃く残っている。つまり、現代の日本の若者たちも初詣や墓参りや法要を無意識にやり、自然信仰に繋がる神社仏閣にも大勢で行くのである。

しかも巨木や巨岩、洞窟など、日本各地に昔からあった霊的で素朴な信仰対象は、最近もパワー・スポットという形で、若者までが一生懸命拜みに行く。いわば自然信仰は形を少し変えたが、次の世代へ繋がっているのだ。大げさに言えば、日本の国民的な宗教的下地が、超近代化した日本社会とはいえ、若者たちの新ファッションが、やがて全体的な習俗になりやすいことも考えれば、山岳信仰などの自然信仰は、未来の日本社会にも継続するのである。

本稿での私の主張を短く纏めると、「日本だけでなく、世界各地の人々にも、太古の昔には様々な山岳信仰（自然信仰）があった」である。山を神聖なものとする信仰の歴史も、おそらく脳を共通に持っているヒト (*Homo sapiens*)、人類共通で、世界各地でグローバルに、非常に古くからあったと思われる。しかし、私の読んだ文献群では、あまりはつきり言われていない。理由は、西欧や一神教文化の強過ぎる影響もあり、世界的に詳しく調べ、纏めよう

とする人もいなかったらしい。

「自然信仰の例では、秩父の三峰神社などに残っている」オオカミ信仰」に関して、ローマの建国神話を見ると、ローマを創った双子の兄弟もオオカミに育てられたと伝わる。ローマ時代以前の人にとつてのオオカミは、いわゆるアニミズム（ゲルマン民族のヴォータン信仰や北欧神話のオーディン神など）の対象であった。しかし、昔は世界中にあった山岳信仰を含む自然信仰（アニミズム）は、その後、排他的な一神教キリスト教が強くなった欧州などの各地では弾圧・排除され、現在では一般に等しく、辛うじて古い神話や伝説として残るだけなので、目立たない。日本のように、山岳信仰がすっかり生き残ることはなかった。

日本では、「廃仏棄釈」という明治からのおかしな国家政策にもかかわらず、寺社は表面的には神道を装い、仏教的要素も一部保持された。昭和前半の暗黒時代には、国家神道の奨励と軍国主義に染まってしまった日本だが、敗戦を経て、それとほぼ無縁だった山岳信仰は、一般への広がりが続いていた。

日本の山岳信仰については、その世界的な特殊性もあって古来注目され、研究も多い。江戸時代には富士山や白山、御嶽山などへの大衆的山岳信仰や興味が高まり、それらの

聖山に登るため互助する民衆組織に「富士講」など各種の「講」がある。また、富士山に実際には行けない人のために、その簡易版として江戸周辺の多数の「富士塚」も残っている。このように日本の山岳信仰については、いろいろな話題が多彩で良書も多い。しかし、世界の山岳信仰は、米国のシエラ・クラブから出版された大型グラビア本、山岳家エドウィン・バーンバウム著『Sacred Mountains of the World』（1960）しか知らない。

第1部 なぜ山岳信仰が始まったのか―ヒト脳の抽象的イメージ、信仰の発生と脳の進化

太古の昔から、人類が抽象的な神の存在を考え、それを信じ敬ったかについては、宗教の起源とも重なり、昔から社会学、心理学など多方面の研究者の興味を引いている。

私も小さいころからダーウィンに憧れた昆虫好きで、大学時代には学術調査探検部を創ったほど、生物の進化には大変興味があった。さらに現役時代も、記憶を中心とするヒト脳の高次機能を研究してきた脳研究者で、そのため脳の進化にも関心が高かった。高次機能の一部とも言える信仰（宗教）の起源は、若いころも考えてはきたが、実は脳神経科学としても、この話題についての実際の証拠は非常

に少なく、究極の難題であった。そのような状態だった現役時代と異なり、私もリタイア後には資料を調べ、ゆつくり考える余裕ができ、一応概念は纏まったので、脳の進化と信仰との関係の大筋を以下に述べる。

(1) 岩絵などの一様性・類似性とヒト脳の進化

最も自然信仰（アニミズム）の起源に関係があり、実物を研究できるのは、世界中に分布する、古い時代に岩や洞窟に描かれた岩絵（ペトログラフ）であろう。岩絵の遺物としての重要さは50年ほど前、大学に学術調査探検部を創った際、部長をお願いしていた文化人類学者・泉靖一さん（先生も学生時代、京大の白頭山遠征に刺激され、京城帝大で山岳部を創設した）から教えてもらった。大学が派遣した探検部の遠征として、中南米を一緒に縦断調査する旅行を計画実行し、中米のホテルで同室させていただき、飲むことも多かったのが、「なぜ岩絵が重要か」について先生の議論も聞いたことがあった。その後、英国留学や日仏学術交流の仕事など、機会を見て旅行し、各地の岩絵を訪れた。欧州の洞窟の岩絵ばかりでなく、岩絵の多いアルジェリア砂漠の山地、タッシリ・ナジェルにも行った。

岩絵にもいろいろあるが、脳レベルの進化としては単純

に纏められると思う。石器時代から続く岩絵のモチーフも、円や四角から動物、手形、想像上の靈魂などへと、時代とともに多様に変化していった。一方、ヒトの脳も進化したが、ヒトの祖先が移動を開始せずまだアフリカにいたころ、脳が建って増したように巨大化し、ほかの霊長類にはない、言語など抽象概念に関わる脳の高次機能が、余分に持てるようになくなった。特徴として石器時代のある人類の危機以後、同じような遺伝子DNAのパターンによる、同じような脳を持ったヒトが多くなったようだ。

実はこの脳が大きく進化した後の一時期（7万5000年前ごろ）、寒冷化によりヒトの集団は絶滅しかけ、非常に少人数になった時期があった。したがって、元の集団では全体が多様だったヒトDNA配列のたくさんのパターンのうち、一部のヒト集団のDNA配列だけが残った（ボトルネック効果と言う）ので、その後のヒト集団のDNA配列の変異は、その前に比べて少なくなり、より一様になった。そのため当然、DNA配列で作られるヒト脳の構造や機能の進化・発達も、よりばらつきが少なくなった。そして、岩絵から始まる抽象的イメージ、それが発展した信仰、宗教など、空想的なものも、今は全て脳内の神経回路網の活動とされ、脳神経科学でも扱えるような分野になってきた。

「唯脳論」である。哲学的になりがちな議論は、養老孟司さんの名著『唯脳論』（青土社、1989）に譲るが、現在の脳神経科学の発展により、私を含め脳研究者の多くは、「あらゆる人間の行為は、全て脳で説明できる」と考えている。

西欧などで有名な『金枝篇』は、世界の未開社会の神話・呪術・信仰に関する研究報告を丹念に纏めた大著であるが、英国の「現地には決して行かない」安楽椅子民族学者ジエームズ・フレイザーによって書かれた。しかし、教会の教えに忠実に育った彼は、神道や仏教に大きな影響を与えた「東洋的自然観」を野蛮と評価するほどで、山岳信仰については、『金枝篇』では触れられていない。一方、山岳信仰が日本の民俗学者の興味を大いに引いていたことは、下記の柳田国男から、あの南方熊楠への手紙でも分かる。

「春の二月八日（または十二日）に山の神 里に下り田の神となり、十月の八日（十二日）に田の神 山に入りて山の神となるという風習全国にひろがり、江戸の初午などまたこれに出つるものなること、小生はよほど詳しく材料をあつめおり候。フレエザの「スピリット・オブ・コーン」(corn)は、聖書での神のシンボル。筆者注)の説を補うに足るべしと思ひおり候」

また1990年ごろ、大江健三郎氏は、原始美術と集団的創造力の関係性を指摘した。しかし、「サハラ砂漠のタツシリ山地の大きな岩絵のなかに、宇宙人に見えるものがある」から連想したフォン・デニケンの「原始美術は、神々」異星からの知性体の痕跡」である」という妄想を、集団的創造力の結果の例として挙げてしまった。

脳神経科学者アンドリュー・ニューバークとユージン・ダギリは、宗教体験を脳神経科学的に解明するに当たり、以下の仮説を立てた。すなわち「神秘体験は幻覚ではなく、神経学的に測定可能な現象であり、宗教的体験は進化したある時期に、ヒト脳だけに組み込まれた先天的機能である」。彼らは神話や儀式、神秘体験、原始宗教、絶対者などが、脳が自己と他者の区別を認識しなくなる「絶対的合一状態」に由来するものだ、とする。その鍵になるのが、身体の空間的な位置把握をする脳の皮質にある「方向定位連合野」だ。ヒトが瞑想するときの極度の集中、あるいは禪などの「無」の状態が、この領域への感覚入力遮断し、特別なモードに入ることが宗教体験を引き起こす、と言うのだ。

例えば、神のお告げを聴くようなヒトの幻想体験が、世界の全ての神や宗教に共通なもの、神や宗教の抽象性を扱える複雑な神経回路網の働き、すなわち現生人類に共通な

脳の機能と構造の進化のお陰で、繰り返すが、遺伝学的に言えばヒトDNAの変化のなせる業であろう。

人類進化上ある時期に起こったこの脳の変化は、岩絵の誕生でも分かる。世界最古の岩絵として4万年前のものが、インドネシア・スラウェシ島南部の洞窟で発見された。全長5mにわたり、アノアと呼ばれるこの島固有の水牛や、イノシシの一種が描かれている。ある場面では、アノアが槍を持った複数の人物に囲まれている。実は最近、7万年前ごろ（地質年代では最終氷期への気候悪化期）の岩に描いた絵のようなものも、人類が誕生したと言われるアフリカ南部から発見されたが、これを岩絵の初期のものと考えれば、人類の脳に7万年前ごろの気候が急に寒冷化し、生活が厳しくなって死者が増え、淘汰が激しく起こったとき、ポトルネットワーク現象とともにこの重要な進化が起こった、と私は考える。すなわち、岩絵を描けるようになった脳（進化した脳遺伝子群）を持った人々だけが、辛うじて生き残った。7万年前から、ヒトは抽象的なことを他人に伝え、共通概念を持つことができるようになり、具体的には原始宗教的なことも始まり、岩絵が出現したと言える。

山との関係は、日本と同じ照葉樹林文化である中国・雲南地方の岩絵でも見られる。雲南の古い岩絵は、2000

0m級の山の頂上付近にあるものが多い。描かれているものはヤギ、シカなど野生動物で、実物の模写ではなく、呪術的、原始宗教的なものである。よく知られているように、雲南の少数民族の風習の日本との共通性は高いが、彼らも山に行つて山の神にブタやニワトリを供え崇め、世界共通のアニミズム（自然崇拜）を持つていたようだ。例えば、ブーラン族は「雅（ヤ）」という山の神を崇拜し、畑を作るために森を焼く前に、供物や水を用意する。

(2) 脳の発達と機能は「遺伝と環境の相互作用」で決まる

ヒトの前頭前野は、霊長類の中でも極めて発達が遅いことが知られ、現在のヒトでは20代半ばから30歳くらいまで発達し続ける。アンドレイ・ヴィシエドスキーは、前頭前野におけるダウン症などの様々な脳障害や、子どもの脳が成長するなかで直面する言語的理解の発達を研究し、前頭前野は知覚世界と内なる思考の統合や、宗教など文化形成のための想像力獲得に必須であり、進化の過程で当時のヒト脳に、前頭前野の発達を遅らすDNAの突然変異が起こった、と主張した。どの染色体の遺伝子かの問いに示唆的な例が、重度の知的障害にある。

昔から有名な知的障害には、クレチン症（白痴）がある。

マッターホルン初登頂で知られるウインパーは名著『Scrambles amongst the Alps』（和訳は『アルプス登攀記』）で出ているが、内容全体の意訳は『アルプスを巡る旅』の中で、熱心にクレチン症の原因について述べ「遺伝性である」とし、患者同士の結婚を容認しているキリスト教会を非難している。しかし、クレチン症原因の遺伝説は、新しがり屋で科学好きでもあったウインパーの、当時の間違った医学知識の単なる受け売りで、今は環境中のヨード不足によると判明している。一般に脳の機能は遺伝と環境の相互作用で決まり、環境が原因だと、治療だけでなく予防ができる。患者の早期発見とヨード剤の投与で、幸い日本ではクレチン症は予防され、クレチン症の子を見ることは珍しくなった。その代わり、日本では自閉症などの発達障害は増えて、社会問題になっている。

自然信仰に始まる原始宗教の実態である幻想・抽象は、機能的共鳴法（fMRI）によれば、主にヒト脳の新皮質（前頭前野）や基底核の働きであり、また、視覚野など広範囲な多くの感覚野の関与も示唆されている。より細かく神経細胞のレベルでは、抽象概念に該当するネットワーク（神経回路網）の、神経細胞と神経細胞を繋ぐシナプス接続パターンは多様、複雑である。神経回路網の自発活動による、

全体の同期した発火が関係すると考えられるが、まだ詳細はよく分かっていない。脳高次機能の一段上への発達がアニミズムなどの抽象概念を生じたが、それを「意識されずに抽象概念と認識し始めたヒト脳の実体は、脳内神経回路網の活動パターンである」と大まかに説明できる。問題の岩絵やストーン・サークルなど、ヒト脳が造った遺物が、世界各地でほぼ一様で、似ていることが多いのは、脳神経科学的にも当然と言える。

それらの自然信仰（アニミズム）に発する潮流は、現存する宗教形態の基層となっており、土着の神・伝説・信仰と結び付き、入れ替わりながら世界各地に広まった。

(3) アルプスの凍結ミイラ「アイスマン」は、なぜ高い山に登ったかー日本人が考える山岳信仰説

もう一つの科学的証拠として挙げられるのが、1991年に発見された、5300年前に南チロルの尾根近くのエッツタールの高地（3210m）で死んだ「凍結ミイラ・アイスマン（エッツィイと呼ばれた）」からの情報である。

発見から長年経ち研究が進んだが、ごく最近、種々の新しい技術による腸の内容物の花粉の観察から、エッツィイの死の前の事情が詳しく分かってきた（近年のNational

Geographic 誌を参照)。「穀物や肉など良い食事を食べていて、狩猟用の2本の矢は未使用だった」などから、昔一部で信じられた「羊飼い、また狩人でもあつたエッツィが、争いにより山に逃げ込んで長い間高地にとどまり、その後殺された」という通説は、新しいデータから誤っていることが分かった。食物の精査から、彼が死の数時間前に食べたのは、「念入りに時間をかけて用意された、携帯用食料の詰め合わせ」(現在の我々が登山の際、用意するような携帯食)だったし、食べた環境は、花粉研究から針葉樹林中だったらしい。

「エッツィがなんのために、放牧地しかない高地に登つたのか」という問いに対して、「羊を放牧するため」が当然、いちばん無難な説である。しかし、自然信仰はともかく山岳信仰のことなどよく知らず、思いつきもしない現代の欧米研究者には、エッツィの信仰など「彼の脳が何を考えていたか」は、考古学的な物的痕跡が残りにくいので、どうもあまり見当が付かないようだ。

さすがにエッツィ研究者で、当時の関係する知識を広く詳しく纏めた、考古学教授コンラート・シュピンドラーは、名著『5000年前の男』の終わりに「彼自身はシャーマンでも僧侶でもなかったろうが、宗教心は持ち合せていた

だろう。家畜の移動を始める前には『仕事があまくいきますように』と、聖なる模様石に祈ったり、供物を捧げたりしたろうし、帰郷後は無事を感じたりしただろう」と書き、エッツィはすでに、宗教の始まりである、抽象的なイメージ(神)を信じる脳を持っていた、と予測している。

そこで「山岳信仰大国」日本の私が考えると、「エッツィは日ごろから山を敬い、その儀式をやるためにも山の奥、頂上や尾根近くの聖地に登つたのだ。下から持つて来た大量の苔は、儀式用ではないか」という説が容易に出せる。

少なくとも、岩絵の世界各地への古くからの広がり、岩絵を書いたヒトのDNAレベルの解析から、エッツィの持つDNAもそれと似ていたらしい。すなわち、山岳信仰など自然信仰(アニミズム≡宗教の起源)が生じる段階にまで進化した複雑で大きな脳は、エッツィも持つており、彼の脳は彼のDNAが作り、発達させたのである。

(4) 現代の山登りと科学の負の面

現在の欧米人は、山に関して言えば、遭難や死を伴いがちなアルピニズムの流行もほぼ終わり、より安全なトレッキングなど登山を含む旅行が、大多数を占めている。しかし、欧米でも昔はあつた山岳信仰など自然信仰は、現代で

はその痕跡や遺物は極くわずかしか残っていない。「山の頂上を悪霊の棲む所として恐れられた」中世からの麓の人々のキリスト教的態度には、さすがに変化が見られ、現在は山小屋やガイド業など登山客のお金と、観光客を相手にしたお土産屋の収入などで生活していることが多い。欧米での山岳信仰を含む自然信仰は、現在はイタリアの小さな山村から興った「地産地消、有機農業のスローフード運動」など、より広い「自然を愛するエコロジー運動」に変わり、世界的、社会的に続いていくのであろう。

一方、人類が元々持っていたアニミズムが、のちのキリスト教で排除されなかったため、日本では古くからの山岳信仰が、そのまま自然信仰として残った。将来にわたって人類が生き残るために必要なのは、「自然信仰の復活、すなわち、自然によって人類は生かされているというエコロジーの考え方」であるようだ。

しかし、別の面で日本ではキリスト教が弱かった分、都合なことも生じた。欧州にはキリスト教などとの闘い、すなわち唯一神と切磋琢磨するなかで生まれ育った近代科学の歴史がある。一方日本では、欧米にはあることの多い「絶対的な神の倫理による科学の監視」すなわち、アンチ科学の歯止めがない。したがって、科学は役に立つ技術とし

てのみ無比判に取り入れた傾向がある。

あの人並み外れた知性と感性を持ち、ヘミングウェイとも並び称される開高健氏は、探検的大物釣りを趣味にし、世界各地の辺境にもたびたび行って『オーパー!』などを書いた。彼が死の直前、遺言のように言ったように「日本ではキリスト教の良い面、【科学が必然的にもつ、胡散臭い悪い面を、神の言としてハッキリ教える】教会での経験が一般になく、日本では全体的にナイーブに、科学は善」と信じている」面がある。この開高氏の指摘は、英国留学後50年近く、日本で科学研究を飯の種にしてきた私にも、西欧のように科学と宗教の「同根なゆえの近親憎悪的対立」の歴史のない日本では、現在だけでなく未来を左右する重要な要点と思う。

第2部 世界各地の名山と山岳信仰

世界各地の山岳信仰を地域別、主として山別に述べる。私が世界百名山として選び、科学文芸季刊誌『ミクロスコピア』に連載した山が当然多いので、標高や国名、掲載順とともに示したが、そうでない山でも、山岳信仰の視点から必要な山については、分かっていることを書き加えた。

なお、「私の世界百名山」の本文(約8ページ、安富沙織

さんが描く絵地図付き」と山名一覧表は、私が学術調査探検部を創る前に卒部した東大ワンダーフォーゲル部OB・OG会の藤野浩一さんが、親切に還暦祝に作ってくださいったホームページ (<http://www.age.jp/~yusanjin/>) を参照されたい。

2-1-1 ヒマラヤ周辺、チベット系民族の山岳信仰

①チヨモ・ランマ (8848m、中国・チベット自治区／ネパール) 「私の世界百名山」掲載順50

世界最高峰チヨモ・ランマの名が、シエルパの人々が崇拜する、頂上に座すボン教の女神 Miyorangangma (チヨモ・ミヨランサンマ) の名に由来し、長い固有名詞は短縮し「チヨモ・ランマ」とするチベット語の習慣でそうなったことは、日本でもほとんど知られていない。インド測量局も山名は現地名採用が原則で、安易な献名に対する英官僚への反発も多く、ジョージ・エヴェレスト (元インド測量局長官) 本人も嫌っていたさうである。大英帝国の誇りが決定者を狂わせ、あるいは付度したのである。

シエルパ族だけでなく、ヒマラヤの麓に住む人たちは、ヒマラヤは神々の鎮座する「聖山」として信仰している。登山シエルパは収入の良い職業なので、生命の危険も多い

が、貧しいので仕方なくガイドやポーターとして山に登る。しかし、彼らが聖山信仰のため、神々の座所に入るときにベースキャンプではプジャ (祈祷) を行なうことは、あまり知られていない。山に入ると、要所では数珠を手繰り「オム・マニ・ペメ・フム」とマントラ (真言) を唱える。

エヴェレスト初登頂のときも、キリスト教徒のヒラリーは頂上に十字架を捧げたが、シエルパ族のテンジンは、頂上に鎮座する、彼らが信仰する女神ミヨランサンマへの供物を捧げた。この事実は英国などの登頂報道では、ほとんど無視された。したがって、日本でもこのテンジンのボン



女神ミヨランサンマのタンカ (仏画)
超能力があり、虎に乗っている

教行的行動は、登山関係の人々を含む一般には、全くと言っていいほど知らされていない。この初登頂の知らせがロンドンに届いたのは、エリザベス女王の戴冠式の前夜で、戴冠を祝する吉報としてエヴェレストの英名とともに、全世界に広まってしまった。

別の証拠として、野口健氏が公開している、シエルパ族の重鎮からの手紙がある。ヒラリー卿が麓の人々のために創った「ヒマラヤ基金」の理事であるツクテン・シエルパからの、「日本シエルパ基金」を創った野口健氏宛の手紙では「ヒラリー卿が頂上に立てたのは、あたかも（最高峰に座す）女神ミヨランサンマが、ヒラリー卿の中に善意と他人を助ける努力を見たために、彼の登頂成功を（女神やシエルパ族としては、登頂は信仰上困るのだが……。筆者注）許したように見える。彼は1960年にヒマラヤ基金を創設して、その資金のほとんどを自分で負担し、学校や病院や道路や空港を建てネパール・ヒマラヤのシエルパ達の生活を改善し、その結果、後にシエルパ達はチョモランマ麓の地域に訪れた、全てのすばやい経済的変化に対応することが出来たのです」とある。元々シエルパ族の聖山の女神ミヨランサンマへの敬虔な山岳信仰と、ヒラリーらによる聖山初登頂の間の矛盾を、暗に表現している。

歴史的にはチベット系のシエルパ族が、山案内人の職業として「シエルパ」と呼ばれるようになり、各国の遠征登山隊を強力に支えた。過去の英国隊など外国人登山者に一般に見られるが、シエルパを一段下の人種、植民地の下僕ととらえがちで、あえて個人的には仲良くはならないのである。シエルパ族自身も、植民地民だったときから今にまで続くサーバンドとしての習性、外国人への控えめ過ぎる態度が、残念ながら多くのシエルパたちに今でも残っている。それゆえ、山の頂上に座す女神ミヨランサンマのことを、世界に積極的に宣伝しなかつたためもあるだろう。

そんなことを直接聞いたのは、忙しい研究所生活が定年で終わった2003年、世界最高峰初登頂50年記念に合わせ、「私の世界百名山」で念願のチョモランマを眺めにカラパタールへ行った旅で、ガイドしてくれたシエルパから聞いた。ブータン以来の山友の根深誠さんは、幸いシエルパたちとも親しく、英語が堪能なベテランのシエルパを選んで紹介してくれた。私の高所順応のためエヴェレスト街道では会話できる速度で歩く、ゆっくりした行程だったので、会話に花が咲いた。シエルパのヒマラヤ登山歴はガウリサンカール（7146m）初登頂など豊富で、彼が参加した多くの欧米隊での出来事や、ネパール社会の最近の事

「私の世界百名山」アルバムから



カラクリ湖とムスターグ・アタ（中国）。スウェン・ヘディンが最初に見たシルクロードの聖山



夜明けのチョモ・ラーリ（ブータン）。ブータン側では、初めて中尾佐助氏が途中まで登った



朝日を浴びるスメル山（インドネシア）。私が行ったときも小噴火を起こした聖山



夜明けのスネーヘッタ（ノルウェー）。付近は全くの荒野で宿がない。6月でも寒いなか車中泊した



ロシア側から眺めた双耳峰のエルブルース（ロシア／グルジア）。ヨーロッパ大陸最高峰は左のピーク



エーゲ海からの朝日に紅く染まるオリンポス（ギリシャ）。ゼウスなど神々が山上に住むというギリシャ神話がある



麓から眺めた、非常に珍しいルウェ・ンズルルの全景（ウガンダ／コンゴ）。ナイル河源流の「月の山」とされた



アレナルから眺めたチンボラソン（エクアドル）。マッターホルンに続いて、この山もウインバーが初登頂



バクチャンタから眺めたアウサンガテ（ペルー）。温泉に入りながら、その北面を眺められる



ジャンキウエ湖畔から見た“チリ富士”オソルノ（チリ）。左で噴煙をたなびかせているのはブンティアグド

情など、いろいろ興味深かった。

50年記念ということでエヴェレスト街道の人の多さ、混雑ぶりが話題になったとき、彼は「チョモ・ランマはシエルパ族が崇拜する女神の座で、聖山を信仰する私たちシエルパ族は、実は登山者にはあまり頂上に登ってほしくないのだ」と、遠慮がちに言った。私は「私の世界百名山」の参考資料として、米国から出版された『Sacred Mountains of the World』を読んでいて、女神の名ミヨランサンマを知っていたので、そのことを話した。すると、「過去に多数の外国人登山家やトレッカーと付き合ってきたが、生まれて初めて、山名がチョモ・ランマの女神ミヨランサンマに由来しており、麓の人々には、この聖山への信仰があることを日本人の私からはっきり聞いた」とのことであった。

② チョモ・ラーリ (7315m、ブータン) 34

チョモ・ラーリは、元々ボン教の聖山だった。「チョモ」は「女神」の意味で、ヒマラヤの麓に仏教以前からあったボン教では、山の守護神は「Five Tsheringma Sisters」長寿の五姉妹」グループに属する女神たちであった。チョモ・ランマは女神ミヨランサンマ、ガウリサンカールは女神タシ・ツェリンが座し、チョモ・ラーリの「ラーリ」は

カンチェンジュンガの花嫁と言われることもあるが、チベットには同名の町もあり、はつきり分らない。一方、シエルパ族などチベット系の人々がやっている宗教的な行為の中で、インド伝来の仏教では説明のつかない以下ののールンタ(タルチョーとも言い、峠などに掲げる祈りの旗)や山に住む郷土神「ユルラ・シダー」、多くの精霊たちは、起源はボン教と説明されている。学術調査探検部の顧問で、素人の学生にも親切に「探検講座」をしてくださった故川喜田二郎先生も、ネパールの秘境ブムタンでボン教を「発見」したが、私もブータン西部で、ボン教のシャーマンによる、踊りを伴った儀式を観察した。

このブータンの名山を眺めに行ったとき、途中から運搬用に馬を使ったが、麓のベースキャンプから帰るとき、馬方さんが先に家に帰ってしまった。彼の家の前まで来ると、何か儀式をやっているらしく、許可をもらって居間に入る。体格の良いボン教のシャーマンの女が、金属製の塔の模型を頭に載せ、ゆっくりと踊っていた。馬方さんに子どもが誕生したので、遠くから巫女を呼んで運命を占ってもらっているところだった。占いは「吉」と出て、彼は喜んだ。馬方さんは英語も流暢に話す、ブータンでは教養のある人だったが、まだ要所では、彼の脳に古いボン教が生

き残っているのである。

戦中にチヨモ・ラーリを眺めた日本人がいる。軍命でチベットに潜入した故西川一三氏は、チベットからインドに抜けるとき、チヨモ・ラーリのチベット側山麓を通った。「通りがかった三人の巡礼者が、ウールグ(背負い籠)を下ろし念仏を唱えながら巨峰に向かって町頭をし始めた。汚れた毛皮の衣服をまとい、鳥の巣の様にモジャモジャした頭髪は、一見してチャンタンあたりの遊牧民であって、その敬虔な彼らの顔、姿は、どれほど美しいものに見えたことだろう。これが本当の人間の姿であろう」(西川一三『秘境西域八年の潜行』(芙蓉書房、1975))

③カン・リンポチエ(6656m、中国・チベット自治区)「私の世界百名山」に選んであるが、眺めていない。世界一とも言える信仰を集めている聖山が、チベット高原西部のカン・リンポチエで、一般にはカイラス山として有名である。「リンポチエ」はチベット語で、「如意宝珠」の意味であり、優れた仏教修行者に与えられる尊称である。サンスクリット語では「カイラーサ」。これが英語で「カイラス」として伝わり、世界的な通称となった。4つの宗教―仏教徒(特にチベット仏教)、ボン教徒、インドのヒン

ドゥー教徒、ジャイナ教徒にとつて聖地とされる。例えば、ヒンドゥー教ではカイラス山をリンガ(男根)として崇拜し、ボン教では開祖のシェーンラップ・ミヨが降臨した地としてゐる。山の周囲の52kmある巡礼(コルラ)路を、チベット仏教徒は右回りに、ボン教徒は左回りに行なう。

巡礼路沿いにチベット僧院(ゴンパ)や鳥葬場、仏足跡がある。最高点ドルマ・ラは5630mの峠。最もきつい所で、日本人チベット巡礼僧の元祖である河口慧海は、「三途の逃れ坂」と呼んだ。インドやチベット、ネパール、ブータンなどからの巡礼者は5億人に上るといふ。このように古くから多数の巡礼者を集めた聖山で、信仰の山であるため、登頂はされていない。世界で最初に8000m峰全14座を無酸素で登り、名アルピニストと言われる超人、ライオンホルト・メスナーは、80年代半ばに中国政府から登頂許可は貰ったが、現地で巡礼者の祈りを見て「この山を征服することは、彼らの魂を制圧することだ」と語り、登頂を断念したという。彼には、チヨモランマを眺めに行つたとき、たまたまロブチエのロッジで、彼の本の翻訳を頼まれた。短い会話だったが、自分に正直な性格に見えた。

カン・リンポチエは、チベット仏教では須弥山に例えられる。須弥山は、古代インドでは世界の中心にそびえる山

のことで、インド神話のメール山、スメル山(「スー」は「善」を意味する接頭辞)に当たる。世界の中心にあるとされる、この聖山を巡る世界観は、ボン教、ヒンドゥー教、ジャイナ教にも共有されている。ヒンズー教徒はカイラス山を、シヴァ神が配偶者パールヴァティとともに永久に瞑想し、鎮座する場所と信じている。麓のマナサロワール湖のサファイア色の冷たい水で沐浴すると、一生の無数の罪を洗い流すことができると言われている。インドで形成された宗教のうち、とりわけ仏教が中国や日本に、ヒンドゥー教がインドネシアなどに伝播するに伴い、この世界観も各地に伝播した。

④ **チヨゴリ** (8611m、パキスタン／中国・チベット自治区) 「私の世界百名山」には選んであるが、できれば麓からも眺めたいので、まだ書いていない。

この世界第2位の高峰(通称K2)については、私はずっと昔、まだ古き良き時代に頂上や山容を見た幸運を持つ。欧州に行くとき、安いのでパキスタン航空機を乗継いだのが良かった。北京を夕方離陸し、天山やタクラマカン砂漠を横切り終わったころ、「K2が見えるので、希望者は来い」との機長からの親切なアナウンスがあった。入れてもらっ

たコックピットからは、晴れた夜空の月光の下、目の前のナンガ・パルバットより高いK2の雄大なピラミッドを、遙かにだがはつきりと眺められた。

中国名もチヨゴリで、これは山麓一帯に住む、今ではイラム化したチベット系の民族の言葉―バルティ語で「大きい山」を意味する。「大きい山」は太山(泰山の古名)や伯耆大山、相模大山の例など、山を尊敬するときに世界各地でよく使う表現で、チヨゴリには、バルティ族の山への信仰があったと思われる。

パキスタン側のバルトロ氷河を遡った麓、コンコルディアは、ガツシャブルムI峰(8068m)などカラコルムの高峰群に囲まれ、高山植物の花も咲き乱れているそうので、ぜひ行ってみたい。

⑤ **アムネ・マチン** (6282m、中国・青海省) 「私の世界百名山」には入れてあるが、まだ書いていない。

アムネ・マチンは、チベット・アムド地方の崑崙山脈東部にあり、最高峰は単にアムネ・マチン、またはマチェンガンリとも言う。チベット語で「アムネ」は「老人」、「マチン」は「活仏の従者」を意味すると言われるが、「アムネ・マチン」は現地ゴロク族の方言による発音であり、現地

は「神の山」の意だとしている。山塊は太古の昔から神聖な山であり、チベットの人々にとっては巡礼の場所、山岳信仰は当然であった。アムネ・マチンは、最大の地元の神であるマチン・パムラの座す山と見なされている。

次に触れる雲南のカワクボの周りを回る巡礼と同様、アムネ・マチン一周の巡礼路は、中国中央政府によるこの地域の統治以前は、毎年1万人近くの人々が巡礼で回っていた。現代でもチベット仏教の四大聖地の一つで、黄河の源流、星宿海も近い。1920年代より、飛行機から測った謎の高峰として登山家の注目を集め、一時は「世界最高峰チヨモ・ランマよりも高い山」である可能性が論じられた。なお、この地域へ適期に行くと、高山植物の青いケシなど各種のケシ類の花が多く、楽しめた。

⑥カワクボ（6740m、中国・雲南省）「私の世界百名山」には選んであるが、書いてはいない。

今では中国の一部であるが、雲南省北部には横断山脈の高嶺が連なり、麓一帯は完全にチベット文化圏である。一番高いカワクボ（一連の山は梅里雪山）はチベット系民族が、やはりボン教の昔から崇めている聖山である。のちにチベット仏教に変わったことにより、頂上に鎮座するのは仏

教の守護神「カワクボ」となり、カン・リンポチュエと同様、高い峠を上下し、聖山を一周する巡礼が盛んに行なわれた。1991年の京大など日中合同・梅里雪山登山隊の大遭難も、日本から見れば不慮の大雪崩によるものだが、麓の住民である敬虔なチベット仏教徒にとっては、因果応報とされてしまう。「聖山の頂上に登ろうとする行為は、彼らの山岳信仰に反し、山の神を犯すものであり、征服しようとした登山隊の雪崩全滅事件は、山の神を拜まない者への神からの当然の報い」なのだ。その後、地元では「聖山信仰と文化を尊重するため、カワクボへの登山活動は禁止」が正式に立法されたという。

⑦ミニヤ・コンカ（7556m、中国・四川省）「私の世界百名山」には選んであるが、まだ書いていない。

四川省のガンゼ・チベット自治区にある、チベット系の人々の信仰を集める聖山である。タルチョーも随所にはたわめてきた。1982年、市川山岳会隊の松田宏也氏は、このミニヤ・コンカ頂上に挑んだが、悪天候のため撤退した。しかしなんと、ほかの隊員たちは遭難死したものと思ひ込み、すでにキャンプを撤収して下山してしまっていた。

ここから彼の凄絶な帰還が始まったが、幸運なことに12日後、地元民に発見され一命を取り止めた。

2-2 インド亜大陸の山岳信仰

パキスタンやインドの北部、ネパールには、ヒマラヤ山脈が東西に横たわっている。白い山々の連なりを麓のインドの人々などは、古くから「神々の座」として敬っていた。私も、ヒマラヤ山脈の偉大な姿を実際に眺めたとき、古代からのインド人がヒマラヤを崇拜すること、すなわち、山岳信仰があることは当然であったと実感する。ヒマラヤの山の神は「ヒマバット」と言い、サンスクリット語で「雪」とか「氷」という意味だった。ヒンドゥー神話では、ヒマバットの娘が女神「ガンガ」で、ガンジス川（ガンガ）の語源である。私も行ったが、ガンガ源流近くのガンゴトリは聖地になっており、インド各地から黄服をまとった多くの巡礼者が、厳しく遠い山道に挑んでいた。

①カンチェンジュンガ（8586m、インド・シッキム州／ネパール） 21

インドの山岳としてはネパール北東部の国境にあり、チベットとの国境の近くにそびえる。カンチェンジュンガは

インド最高峰でもある。この聖山は古くから有名で、昔は世界最高峰と言われた時代もあった。その理由は、チベットのラサとインド各地を結ぶ交易路にも近く、この山が多くの人々に眺められたからである。チベット仏教徒は、釈迦の聖地への巡礼のため必ずこの道を通り、山を見上げる人々に聖山として信仰されていた。山名はカン（雪）チュン（大きい）ジュ（宝）ンガ（5つ）。すなわち「五大宝蔵」で、チベット仏教では、「五大宝蔵」は大切にされていた。チベット人ばかりでなく、麓のシッキムに住むレプチャ族の人々も、この山を神として崇めていた。1955年、カンチェンジュンガ頂上に向かった英国隊は、山岳信仰を持つレプチャ族の人々との約束を守り、最高地点の数歩前で足を止め、登山報告書の名も『踏まずの頂上』とした。

深田久弥さんも1964年、報知新聞のコラムに、遺言めいた「独創的な登山」を書いたとき、その一例として、必ず頂上近くで引き返す変わった登山者を「おそらく征服という言葉が嫌いなのであろう。それでも山登りのだいご味は味わっている」と褒めている（全文は「私の世界百名山」HPの目次の下から読める。「深田久弥さんと私の世界百名山」〔深田久弥の思い出〕78〜95ページ、深田久弥・山の文化館発行、2003）。

② ナンダ・デヴィ (7817m、インド・ウッタラーカ
ンド州) 64

インド北部、ガルワール・ヒマラヤの盟主ナンダ・デヴィは、シッキム王国がインドに併合された結果、カンチエンジュンガに抜かれるまでは、インド最高峰であった。この目立つ双耳峰は、古くから聖なる山として、土地の人たちの信仰の対象として崇められていた。ナンダ・デヴィとは頂上に坐す「無上の喜びを与える女神」を意味し、麓の各地には彼女を祀る廟があり、祭礼が行なわれる。

③ ナンガ・バルバット／ディア・ミール (8126m、
パキスタン) 29

ナンガ・バルバットはウルドゥー語で「裸の山」で、孤立峰であることに由来する。麓に生活するグルド族は、氷雪の山の頂上には、雪の神のような精霊たちが住んでいると信じ、「ディア・ミール＝精霊の住む山」と呼んだ。

嵐や疫病は精霊の仕業と信じられ、山を登ろうとする人など全くいなかった。ところが、英国で急に流行り始めたアルピニズムは、アルプスの主だった山々が登頂されると、目標をヒマラヤに向けた。先陣を切った英国のアルパー・ママリーはナンガ・バルバットを征服しようとしたが、

1895年、ディア・ミール氷河で行方不明となった。現在まで延々と続くヒマラヤ遭難史の始まりであった。

④ アルナチャール (814m、インド・タミルナードウ
州) 「私の世界百名山」に選んだ事情は左記に。

「私の世界百名山」のうち、いまだ書いていない南インドからの百名山は、なかなか決まらなかった。インド西海岸の西ガーツ山脈の各地にも行ったが、英国人植民者の、いわば避暑用の遊びの山ばかりで、ろくな山しかなかった。

そこで視点を変え、東側のアルナチャール(「赤い山」の意)という、日本ではほとんど知られていない、小さな聖山を選ぶ予定である。ヒンドゥー教四大聖地の一つとしてインドでは有名で、チェンライの南にある。丘のようにも見える聖山の麓のアナマイライヤール寺院は、シヴァ神を祀っている。実は、アルナチャール山全体がシヴァ神のご神体そのものと言われ、登ろうとする者は本来、裸足で登るべき山なのだ。

山自体がご神体なのは奈良の三輪山にそっくりで、約40年前に三輪山に行ったとき、昔からの参拝路には、供物らしいトグロを巻いたヘビやキツネなどの白い小さな陶器が、大木の根元に置かれていた。最近私が登ったときは、



南麓の原生林から見上げたスリ・パーダ

道は新しくなったようで、供物はなくなっていた。ただ、意外にも若い女の人が、派手なベディキュアが目立つ裸足姿で、麓の大神神社おみくじからの狭い山道をたどっていた。

⑤スリ・パーダ（2244m、スリランカ）44

スリランカにも聖山はいくつかあるが、最も有名なのが南部にあるスリ・パーダ。一時、英国植民地だったためか、キリスト教の呼び名「アダムス・ピーク」が通称になっている。

スリ・パーダは「聖なる足跡」の意味で、各宗教徒が山頂にある、足跡と言われる凹みがある大きな石を崇拜の対象としている。仏教徒は仏陀によって印された足跡と主張し、ヒンドゥー教徒はシヴァ神の足跡とし、山の名も「シヴァノリパーダム（シヴァ神の光の道）」と呼ぶ。イスラム教徒は、アダムが初めて地上に足を下ろした所と言い、「パワ・マライ」と呼ぶ。このように世界の主要宗教の信者が、この地をともに聖地と見る根底には、この山に対する畏怖観、山岳信仰があることは間違いない（小西正捷篇『インド、道の文化誌』・鈴木正崇「スリランカの山岳信仰と聖地」参照）。なお、小西さんは大学院生時代、東大芸術調査探検部の初回海外遠征隊長。報告本は、『アフガニスタンの水

と社会』(東大出版、1969)。

登った道は良く整備されており、もっぱら夜に登り頂上で日の出を拝む。しかし、私が降りた南側の巡礼路はもう寂れ、茶店もつぶれていたが、自然は良く保たれていた。

2-3 東南アジアの山岳信仰

①カカボ・ラジ(5881m、ミャンマー)

ミャンマー最北部、中国とインドとの国境付近にはヒマラヤの続きの高山が連なり、最高峰はカカボ・ラジ。ミャンマーばかりでなく、東南アジアの最高峰でもある。カカボ・ラジは、麓の狩猟民タノイ族の言葉で「鳥の羽で包まれている(高い)山」の意で、彼らには死者が山の頂上に集まるといふ伝承もあり、ボルネオのキナバル山のような山岳信仰があったと思われる。タノイ族は身長が150cmほどで小さく、雲南地方から移住して来たと言われるが、純粋な人はもう3人で、絶滅状態である。

カカボ・ラジは麓のB・Cにたどり着くまでが遠く、熱帯の谷を遡る長期にわたる困難なキャラバンを要し、ミャンマー側から眺めに行くのは、高齢になった私には無理だった。諦めずに詳しい地図を見ると、この山の中国・チベット側の麓には近くに集落が点在し、そこからも眺められそ

うであった。しかし、中村純二さんが紹介してくださった、東チベット通の中村保氏からのハガキによると、中国政府はチベット自治区の国境沿いには、ビザは出さないようだ。山頂は1996年、尾崎隆氏がミャンマー人のアウン・ツエとともに初登頂し、第1回の植村直己冒険賞を受賞した。尾崎氏の連れ合いはフランス人女性で大使館勤めだったので、ミャンマー政府から国境付近の初登山許可が出やすかったようだ。尾崎氏は、ヒマラヤの8000m峰を7つも登った名アルピニストだったが、惜しくもチヨモ・ランマ南東稜で命を落とした。

②タウン・カラツ(737m、ミャンマー)「私の世界百名山」にはもう選んであるが、まだ書いていない。

ミャンマー中部、マンダレー地方にあるポツパ山(1518m)という火山が、ミャンマーの土着信仰で、付近の人々が信仰している「ナツ信仰」の聖山である。その山が良く眺められる寄生火山の岩塔には、「ナツ信仰」の総本山があり、多くの参拝客を集めている。ナツ神は典型的な多神教で、バガン王朝が国民支配のツールとして仏教を取り入れるまで、ミャンマーで広く信仰されていた。ナツ神には「神が37いる」と言われるが、実際はもっと数が多いら

しく、木や石などに宿る神もいる。王朝関係者で非業の死を遂げた人が神になった場合が多く、日本で平将門や菅原道真を庶民が祀るのと似ている。

③ドイ・インタノン（2565m、タイ）46

タイは北や西の国境に近い辺縁部には、山地が連なっている。西部のタイ最高峰ドイ・インタノンの周りは国立公園になっているが、頂上近くにレーダー基地もあり、道路が登っている。頂上付近は、石段の先に「神社」そっくりの建物のようなものがあり、周りには森が良く保存されている。また、タイの一般の村にもよくある、供物を捧げるための塔もある。「神社」の参拝客、観光客も多いらしい。この山は昔からの山岳信仰の聖地で、ドイ・ルアン（「大きな山」の意）と呼ばれていた。中国の名山、五岳第一の泰山も、昔は「太山」と呼ばれ、麓から見て非常に大きい山で、信仰の対象になった。

その「大きな山」ドイ・ルアンに、かつて付近の森の保護に努めたチェンマイ王朝最後の国王の遺体が祀られ、山は改名されてドイ・インタノンとなった。私が行ったときも、タイ人の若い夫婦が石段に額突いて、何事か祈っていた。付近の山地には少数民族・カレン族の村があり、機織

りなど独特の文化を守っている。

④スメル山（3676m、インドネシア・ジャワ島）37

インドネシアでは、ジャワなどの島には活火山が多く、古くから噴火を繰り返してきた。スメル山は、私が行ったときもちょうど噴火を始めていた。富士山よりちよつと低いが同じような成層火山で、インドネシアへの仏教、ヒンドゥー教の伝播以前から、火山信仰の対象になっていたと思われる。山の名は、古代インドの世界観からきており、別名はマハ・メル山（偉大なるメル山）と言う。インド世界の中心にそびえる山は須弥山、すなわちサンスクリット語ではスメル山である。この世界レベルでの聖山は、メル山やスメル山として、バラモン教、ヒンドゥー教、仏教、ジャイナ教にも共有されており、遠くインドネシアにも移入された。仏教は、ジャワ島には上座部仏教ではなく、密教がかった大乘仏教が伝わった。

⑤アグン山（3014m、インドネシア・バリ島）

インドネシアのバリ島にあるアグン山は、富士山に似た成層火山である。「アグン」も「最高」を意味し、富士山のように昔より聖なる山として崇拜の対象で、そのためか周

圃にはバリ・ヒンドゥー教の寺院が多い。最大のブサキ寺院の裏からアグン山への参拝路があり、敬虔な信徒は、富士信仰のように頂上に登る習慣がある。私が行ったときは年に一度の大祭の日で、ブザキ寺院周辺は人で一杯だった。美しい晴れ着の民族衣装を纏った女性が、供物を頭に載せてぞろぞろと歩くのだが、この服装も祀る神々も、氏子の社会階層によって複雑に違うようだ。しかし、異なった広場に分かれ、たくさん集まって同じ動作で祈っている人々の表情は、一様に幸せそうだった。

⑥アポ山 (2954 m、フィリピン・ミンダナオ島) 10

アポ山は大きな火山のため、富士山のように周辺のルマド (Lumad) 系民族から聖山として崇められた。「アポ」とは「崇拜されている年長者」という尊称で、麓に住むマノボやカラガンの人々による、山の精霊の名である。マノボやカラガンの人々を含むオボ、クラタ、タバガワ、マティンサルク、アタ、アルマネンなどの原住民が信仰を持っていた。彼らはアポ・サンダワ (Apo Sandawa) に対して様々な儀式を、デイワタ (diwata) という最高位のシャーマンにより行なったと言う。アポ山周辺は山岳信仰もあつたためか、熱帯雨林の自然が良く保存され、国からアポ山自然

公園に指定されている。公園には、200羽しかないサルクイワシという大型の鷲や、デリアス属の珍蝶をはじめ、ほかでは見られない動植物が多い。

2-4 東アジアの山岳信仰

中華人民共和国 (中国) の現在の版図は広く、中国文明の発祥地で、漢民族の住む「中原」だけではない。チヨモ・ランマヤカン・リンポチュを含むチベット自治区、カワクボ (梅里雪山) を擁する雲南省、ミニヤ・コンカなどがある四川省などを含む。

①泰山 (1524 m、中国・山東省) 15

広い中国で文明の始まりの中心だった「中原」にも山はあり、そこに昔から住む漢民族は、元々山に対する関心が強かったようだ。「名山」は「名高い山、優れた山」という中国語の普通の言葉で、例えば、『莊子』の天下編には「名山三百」と使われている (『大漢和辞典』、大修館書店)。日本文化の源流としての中国から、古く遣隋使、遣唐使などにより仏教とともに日本に輸入された。深田さんは漢籍の教養が当たり前の世代であるためか、『日本百名山』の後記には、「名山」が中国起源であることには触れていない。



泰山の南天門を目指して1600段の石段が続く十八盤の急坂

また、中国人が発明した表意文字には、山を表す非常に多くの漢字（嶽、峰など）があり、状態の違いで別の漢字を当てる。この関係はイヌイット族でも共通の現象で、彼らは雪に関心が深く、様々な状態の雪に対してそれぞれ全く違う呼び名がある。

山一般に関心が強かったばかりでなく、長江沿いには天と地を結ぶという山は大事にする文化があり、山の象徴は「玉琮」と呼ばれた「美しい玉」で、大麥崇拜された。

泰山に戻ると、古く春秋時代の書物にあるように、漢民族は泰山には神がいると崇めてきた。のちに明代の五岳真形図にある道教の聖地を「五岳」と称し、尊んだ。五岳とは、東の泰山（山東省）、南の衡山（湖南省）、中央の嵩山（河南省）、西の華山（陝西省）、北の恒山（山西省）である。道教には、元々深い山や森の幽谷などに住む「仙人」のイメージがあり、長生長寿を理想とするので、概念としても山岳信仰に関係している。

中国が元祖の名山に、まず五岳の一つを入れようと思ひ、故竹内実さんや竹田晃さんなど、親戚の中国研究者に相談すると「天下第一の山、東の泰山しかない」と口を揃えて言う。麻雀の東南西北の順で分かるように、中国ではなんでも東が第一なのだ。泰山は、春秋時代には麓の人々から

「太山」と呼ばれており、この山が非常に大きいものの代表という崇拜概念があった。このことから、泰山には山岳信仰があったと思われる。

歴史的には、秦の始皇帝が泰山で「封禪の儀」を行なったことが有名だ。「封禪」とは皇帝が即位を天帝に報告するもので、泰山の高い山頂が天の神、すなわち天帝に一番近い所と信じられていたのである。支配層ばかりでなく、庶民の間でも泰山にまつわる信仰にはいろいろあり、信仰の歴史は古く、現在は信仰がより深くなっているようだ。

実際に「十八盤」と呼ばれる数千の石の階段を登り、頂上台地の始まりの「南天門」から家が多い所を抜けると、泰山府君や碧霞元君を祀る大きな廟がある。泰山府君は病氣や寿命、死後など、生死に関わること全般。娘の碧霞元君の方は、出産など女性に関する願い事全般にご利益があると信じられ、廟まで多くの一般民衆が参拝に登って来ており、現状はほぼ完全に、これら民間信仰の山である。山頂に向かうと仏教寺院群もあり、道端には赤い漢字を書いた各種石碑が多い。山頂は玉皇頂と呼ばれ建物に囲われているが、下の廟のようには多くの人が来ていなかった。

中国全体の名山に戻ると、紀元前から「名山に遊んだ」文人の後世への影響は、山水画や漢詩を作る文化伝統を持

つようになつた。やがて、それらの文化は「名山」という漢字とともに日本にも輸入された。アルピニズムを日本に輸入した横有恒が、著書の一つに『山行』と題したように、昔から登山家は山に登ることを、好んで「山行」と言った。現在でも、「山に行く」という表現を使う山好きは多い。漢詩『山行』は、元々は晩唐に活躍した杜牧が名山に遊んだとき詠んだもの。【遠く寒山に上れば石径斜なり／白雲生ずる処人家有り……】。この「寒山」は決して岩と雪ばかりの高山ではなく、【白雲生ずる処人家有り】なのだから、杜牧が詩を作ったのは人里の外れで、日本で今風に言えば、山奥の「ポツンと一軒家」のような所であろう。

泰山に登った帰り、夜汽車のコンパートメントで同室したインテリ風の中国婦人と会話した。私の中国語は、教養学部の第3外国語で取った2年間だけなので、ボキャブラリーが足りず、複雑なことは話せず筆談となつた。良い機会なので「チョモ・ランマは名山か？」と聞いたところ、彼女は迷わず「あれは私たちの遊ぶ山ではないので、名山とは言わない」とはっきり答えた。人々が遊ぶ山が、古代ばかりでなく現在の中国でも名山なのである。

② 峨眉山（3099 m、中国・四川省）

日本の山岳信仰に影響した仏教（密教）と山の密接な関係は、現在の中国でもまだ残っている。著名な仏教の霊山——中国四大仏教山は、山西省の五台山、四川省の峨眉山、安徽省の九華山、浙江省の鳥、普陀山を言う。

その一つ、成都近くの峨眉山は、芥川龍之介の『杜子春』でも仙人のいる山として日本に知られ、山容も大きく、寺院の数も多い。山一帯は聖地となつていたために自然が守られ、約3000種の植物と、約2000種の動物の宝庫でもある。一番高い峰が万仏頂で、大きな寺院があり、頂まで32の名利が続いている。

峨眉山は、かつて道教（山岳信仰の要素を持つ）の「第七洞天」であり、道教が信仰された山であつた。しかし、峨眉山金頂に普賢菩薩が姿を現わしたという言い伝えが広まると仏教の勢いが盛んになり、道教より優勢となつた。

③ 玉龍雪山（5596 m、中国・雲南省）26

雲南地方の少数民族に古くから山岳信仰があつたことは、岩絵の所でも触れた。雲南北部にある玉龍雪山周辺は、独特の象形文字を持つナシ（納西）族が自治区をなして住んでいる。ナシの人々は目の前に気高くそびえ、鋭い頂上を持つこの雪山を、彼らの主神、サンド神の鎮座する霊山

として崇めてきた。今では観光政策としてやっているが、頂上の良く見える高原、雲杉坪では、若い娘が輪をなして踊る祭があり、古代から行なわれていた歌垣と思われる。

④富士山（3776m、日本）60

富士山は歴史的に噴火を繰り返す大きな火山で、山岳信仰も昔からある。山麓には縄文中期の牛石遺跡や千居遺跡があり、激しく噴火を繰り返す富士を鎮める祭祀が行なわれた。これらは、大きな石が山に向かつて一直線に並んだ「配石遺構」として残っている。奈良時代には、三輪山のよう^{よう}に富士山自体がご神体とされ、『万葉集』にも「不尽神」として詠われた。

⑤パトUNKオヌ（3952m、台湾）「私の世界百名山」 に選び、麓から良く眺めたが、まだ書いていない。

台湾の最高峰はパトUNKオヌ patungkuonu（通称・玉山）と呼ばれ、麓の先住民ツォウ族発祥の地と伝え、洪水が引いた後、父系集団ごと^{ごと}に山麓部を移動定住した。その伝承の詳細は、1930年代の馬淵東一により記録された。

この山は、ブヌン語では Saviah Savih、カナカナブ語では Tamungincu とも呼ぶ。これら先住諸族はアワや根菜

類の焼畑栽培、狩猟活動を昔から生業としていた。したがって、人間の靈魂や様々な精霊を崇めるアニミズム的自^自然信仰、武勇と規律を尊ぶ社会の気風や、かつて行なわれていた首狩りの行為などに、プロト・マレー文化の特徴がある。この山が「新高山」と呼ばれた日本統治時代、あの知人ぞ知る名博物学者・鹿野忠雄も先住民たちを調査し、『山と雲と蕃人と―台湾高山紀行』を書き残している。その豊富な内容からも、彼らが山岳信仰を持っていたことは確かである。なお、彼は終戦直前、ボルネオ島北部で行方不明になり、38歳で消息を絶った。

⑥白頭山／長白山（2744m、朝鮮民主主義人民共和 国／中国・吉林省）54

白頭山（ベクトウサン）は朝鮮半島の最高峰で、朝鮮民族の祖と言われる「檀君」の建国神話があり、古くから付近の人々の信仰を集めた聖山である。中国側の呼び名は長白山（チャンバイシャン）で、清朝発祥の地と言われ、女真・満州族にとつても聖山だ。朝鮮、中国とも元々あった古い山岳信仰に政治的な意味も追加され、建国神話が多^多きたと思われる。山頂からは、この山を世界的に特徴付ける大きな火口湖「天池」を囲む、外輪山の峰々が望める。



初雪が降った長白山・天文峰(中国側)から見た白頭山・將軍峰(北朝鮮側、中央)と天池

なお、この山は10世紀に巨大噴火し、その火山灰は遠く日本の各地まで達している。

⑦ オトゴン・テングエル山 (4021m、モンゴル) 58

2000m級のモンゴル高原にある山のうち、首都ウランバートルから西に700kmの地点にあるのが、オトゴン・テングエル山。日本の富士山のような聖山として、昔からモンゴル人に崇められてきた。一般にも愛されてきたこの聖山は、日本の富士山と並んだ図柄で、モンゴル切手のデザインにもなった。オトゴン・テングエル山への崇拜は、モンゴルへのチベット仏教伝来以前からあり、昔のアニミズム的な山への信仰が基盤である。これに「オトゴン・テングエルには仁王が関係している」とするチベット仏教が重なり、両者は融合している。

私が遥かにオトゴン・テングエル山を望むダヤン山頂上の大きな岩峰の前の広場に登ったところ、オトゴン・テングエル山礼拝用だろう、五体投地のための板が置いてあった。昔からあったオトゴン・テングエルの山岳信仰が、のちに入ったモンゴル仏教に、礼拝儀式を乗っ取られたようだ。

ダヤン山頂上に馬で登って来た地元の人たちは、私たちを食事に誘ってくれた。会話を通訳してくれたモンゴル人

ガイドによると、オトゴン・テンゲル山の東麓には、チベット仏教臭も強く感じられる派手な礼拝所があると言い、モンゴル人仏教巡礼者の集合写真を見せてくれた。

モンゴルには、3つの有名な聖山がある。最も高いのはオトゴン・テンゲルで、ほかはチンギスカンの生まれ故郷に近いブルカン・ハルドウン（「神の弧嶺」の意、2450m）やボグド・カン（2261m）である。

2-5 西アジアの山岳信仰

①アララト（5165m、トルコ）41

旧約聖書でノアの方船（はせぶね）が漂着した山として有名なアララトは、かつてはアルメニア領だった。アルメニアでは、アララトは崇拜すべき名山「アザトン・マシス」または単に「マシス」と呼ばれ、昔から山岳信仰の対象であった。アルメニア人は、今でもこの山のことを「国の象徴である聖山」として、日本人にとつての富士山のようにアララトを愛している。アルメニア人の歴史は悲しく、第1次世界大戦中にオスマン帝国と戦争し、アララトを含む領土を奪われ、大量虐殺されたと言われる。

アルメニア教会派のキリスト教徒であるアルメニア人は、有名人ではハチャトゥリアン、ミコヤンなど、父称で

ある「ヤン」が付くものが多い。少数民族化したアルメニア人は、仕方なく難民として世界に散らばり、各地において商業などで才能を発揮し、集団を作った。これら移民のアルメニア人たちも、自宅の居間に必ず故郷の聖山、アララトの絵を飾っているという。

歴史の初めから、アララトはアルメニアの創始にまつわる神話、伝説の中心にあった。キリスト教以前のアルメニアの信仰では、火の神ヴァハーゲンは、1001の太陽でできた彼の重い職杖をアララトに突き差し、山や谷の美しさで威厳に感銘を受けた。それで、神々は最初の人間であるアルメニア始祖王ハイク・ナハペトの誕生地をアララトとした。メソポタミアの古代の学者たちも、雪に覆われた聖なるアララトの山々が、人々に生命を与えるチグリス川とユーフラテス川の源と考えた。のちのウラルトゥ王国は「山の中の国」の意で、平野部のメソポタミア人からそう呼ばれた。ウラルトゥ王国が平野部にも進出したこともあり、アルメニア王国誕生に繋がりに、アララトの語源とも言う。

②ハラ山

イラン高原にあると信じられたのが、想像上のハラ山。イランにアーリア人が入って来たとき、元の遊牧生活より

定住を選んだ。彼らの信じていた世界観は、まず天と地があり、大地は水に浮かび、大地の中心にはハラ山という、隆起し続ける高い山があった。世界の中心でもあったハラ山は、インドのヒンドゥー教ではスメル山に当たり、仏教では須弥山として知られる。元々これはインド・ヨーロッパ語族に共通の自然観であったが、彼らは山や川、火などが持つ、人力の及ばない自然現象を神格化して畏敬した。この「原イラン多神教」には、山岳信仰も含んでいたと言える。特に光の源である「火」への崇拜は、のちにゾロアスターにより拝火教を生み、現在もイラン、インドなどに細々ながら続いている。

2-6 中央アジアの山岳信仰

①ムスターグ・アタ（7546m、中国・新疆ウイグル自治区）32

楼蘭遺跡の発見で名高いスウェン・ヘディングが、パミール高原からタクラマカン砂漠に入ろうとしたとき、まず対面したのはムスターグ・アタの勇姿であった。ムスターグ・アタは、ウイグル語やタジク語で「ムス（水）」「ターグ（山）」「アタ（父）」、「氷の山の父」の意味である。昔の旅人は、この山が初めて見えると、その地でひざまずいて

祈りを捧げたという。仏教が盛んなころは、カン・リンポチェ（カイルス）と並ぶ仏教の聖山とされた。この山の形は丸い仏塔に似ており、この山で悟りを開いた仏教の高僧を祀っている、と信じられた。

1894年春、麓のカラクリ（黒い）湖にたどり着いたヘディングは、ムスターグ・アタの、すでに明らかにイスラム化した伝説を『アジアの砂漠を越えて』で紹介している。「キルギス人たちは、ムスターグ・アタの頂上には、シャナイダルという楽園が有り、イランのダマバンド山のような神秘的な光に包まれている。なかば未開なキルギス人さえ、この神聖な山を尊敬して仰ぎ見るのだ。欧州人の私が、この山の魅力の虜になるのも、不思議ではない」。ヘディングは若いころペルシャ旅行をしていて、テヘランからダマバンド山を眺め、知っていたのである

②ハン・テングリ（6995m、キルギス／中国・チベット自治区）「私の世界百名山」には入れてあるが、麓に行くツアーの前半で、私の事故が発生したこともあり、まだ麓からは眺めておらず、書いていない。

シルクロードが北麓や南麓を通る中国・天山山脈は、ハン・テングリ、最高峰ポベータ（7439m）など、40

00mを超える高峰が連なっている。ハン・テングリはカザフ語で「ハン」は「王」、「テングリ」は「天または空」で、「天空の王」の意味。また、ハン・テングリの別名「カン・タウ」は「血の山」という意味である。古く前漢の司馬遷の書いた『史記』には、「天山は、夏、冬ともに雪をいだし、故に白山という。匈奴は馬を降り、皆天山に向かつて頭をたれ、遊牧民にとつての聖山である」とあり、山岳信仰があつたことが分かる。司馬遷は中原の漢族としては珍しく、『史記』の中で匈奴など辺境の人々の習俗に偏見は持たなかつたという。

テングリは元々古い神の名でもあり、テングリズムとしても知られる。この信仰は、古代と中世ではユーラシア草原の「空の神・テングリ」信仰で、現代でもトルコとモンゴル、フン族などで広く信じられる。テングリズムとシャーマニズムの関係は、テングリズムはモンゴル帝国時代における、古代シャーマニズムの発展の一形態であつたと言える。すなわち、テングリ神は絶対神ではなく、シャーマニズム（多神教）における上界の神の一つである、空の神として信仰されたい、

2-7 南アメリカの山岳信仰

① アウサンガテ（6384m、ペルー）57

インカの古都クスコからは、近くにアウサンガテなどアンデスの雪山が多く望める。厳しいアンデス山地に生きるインカ帝国の諸族の人々も、昔からの自然信仰が強く、特に山岳信仰は明白だった。これら高峰の山頂には「アプー」「ルアル」などと呼ばれる山の精霊・神がいて、麓の住民を守っていると信じられた。アプーは、「アプー・アウサンガテ」などクスコ周辺の12の高山に、それぞれ座すとされた。村人は、アプーなど家ごとに違う山の神々の名を次々に唱え、祈る。山の神の儀礼としては、家畜儀礼、農耕儀礼、治療儀礼などがあり、なかでも家畜儀礼が周期的、恒常的に行なわれ、複雑である（詳細は細谷広美『アンデスの宗教世界』（明石書店、1997）を参照）。

高野潤『インカを歩く』（岩波書店、2001）によれば、スペインの征服者、特に聖職者は、アンデス住民の強固な山岳信仰に悩んだ。彼らには、「アウサンガテ周辺には昔、アウサンカタという尊崇された神殿があり、祖先たちは彼らと同じ姿をした偶像を見た」という伝承が強かつた。スペインの征服者は、キリスト教化を強行しようと試み、宣教師らは「アウサンガテの頂上には、登山家が登る以前から十字架があつた」という、誤った情報を流したそくだ。

一般にもインカの民には、土地の母なる神パチャママへの信仰も古くからあり、今も強固に残存しているようだ。神秘的な力を持った物や場所、神像を指す「ワカ」という自然信仰の概念もあった。また、ボリビアには、カータという聖山を崇拜する麓の部族がいるなど、インカの人々は現在も、山や丘、大地、泉などの自然物を崇拜し続けており、アンデスの山岳信仰は今も健在である。

その証拠として、私も行ったことがあるが、インカ時代から続くアンデス氷河上での祭「コリユール・リティ」がある。この「コリユール（星）」「リティ（白い凍結した雪）」の祭は、古来の山岳信仰による祭が、のちに侵入したキリスト教によって変形されてしまったものだ。私も祭の日に合わせて氷河近くの会場まで登ったので、十分に見学できた。近隣各地の村から来た、楽隊を含む集団をなした人々は、教会の前で集団ごとに順に踊り、彼らは年一度のこの祭を楽しみにしていたようだ。山道の要所には布を広げただけの各種の出店も多く、宿営地には人々を集め、コカの葉をはじめ祈りのための特殊な供物を配り、シャーマンのような行為をする人も活躍していた。

インカ文化では、アンデスに多い火山の噴火を鎮めるため、人身御供のような儀式が山で行なわれた。ペルー南

部にあるアンパト（6310m）の火口近くで、少女（フワニータ）のミイラがリヤマの骨などの副葬品とともに見付かった。その後、アルゼンチン北部のジュジャイジャコ火山（ユーヤイヤコ、6723m）の山頂でも、同じような子どもミイラが3体発見された。日本をはじめ世界各地でも、火山信仰にまつわる人身御供があったという話が多い。柳田国男によれば、日本では三峰神社のように、オカミは山の神として考えられていた。日本各地には、狼が子どもをさらったという話が多く伝わっている。インドでも、狼が小児を食うという実例が毎年あり、これが山で小児が失踪する話、いわゆる「神隠し」の一つの所以であるとも考えられる。

②アコンカグア（6960m、アルゼンチン）「私の世界百名山」では、まだ書いていない。

アルゼンチンの南米大陸最高峰アコンカグアは、アンデス主脈のチリ国境から少し離れている。麓の人々の共通語でもあったアイマラ語で、「アコン（白い）」と「カグア（渓谷）」、すなわち「白い渓谷」という意味だという説がある。キリスト教の布教以前は、麓の人々に聖山として捧げられた。私も学生時代の中南米縦断遠征のときには、すぐ近くを



西方グラン・サバンナ上空の機窓から遠望したロライマ・テプイ

通ったが眺められず、2回目に南米のこの付近を訪れたときに、谷を少し入った展望地からアコンカグアの全容が良く眺められた。もっと簡単には、チリの首都サンチャゴとアルゼンチンの首都ブエノスアイレス間を飛行機で飛ばば、天気が良ければ頂上が眼下に眺められる。

③ロライマ・テプイ（2810 m、ベネズエラ、ブラジル、ガイアナ） 49

南米北部のギアナ高地には、ロライマ・テプイやアウヤン・テプイ（2450 m）など、頂上がテーブル状の山（卓状山地）を指す「テプイ」が多い。麓の先住民のベモンという言葉で「神々の住む所」の意で、精霊として敬っており山岳信仰がある。テプイの台地には固有の動植物が進化しており、珍種も多い。

④ネブリナ（3014 m、ブラジル） 63

1950年代に空から発見された、アマゾン奥地にそびえるブラジルの最高峰。したがって、海岸寄りのバンデイラ（2890 m）は2番目になった。イメリ山脈にありベネズエラ国境に近いが、ピラミッド型の頂上岩峰は国境から600 mほど離れており、ブラジル側から登ることに

なっている。テプイ構造が風化、地殻変化し、きれいなテプイ状にはなっておらず、硬い岩峰が突き出ているのもギアナ高地としては変っている。山の中腹は雲霧林に覆われ、台地上はギアナ高地の生態系が続き、ブロッキアなどの植物も見られる。特にネブリナ周辺は、アマゾン本流に近いためか食虫植物の宝庫で、珍種も多い。日本人で登頂したグループは、柴田千晶先生率いる食虫植物調査隊（日本山岳会の二火会で知った女性登山家・故内田敏子さんも参加登頂）しか知らない。

麓の先住民ヤマノミの人々には残念ながら会えず、直接取材できなかった。マナウス到着の翌朝には、すぐにタクシー並みのセスナ機がネブリナへ飛んでくれることになり、残念ながら麓のヤマノミのエアー・ストリップへの着陸許可を、先住民局から得る暇がなかった。ヤマノミの人々は、アマゾンでも近代文明から遠い生活をしており、当然アニミズムで各種精霊を信じており、遙かに見えるネブリナ頂上にも死者の霊が住むとして、信仰しているらしい。

⑤ **パイネ** (3050 m、チリ) 45

チリ・パタゴニアのトールレス・デル・パイネ岩峰群は、麓のアラウカニア族にとっては元々山岳信仰の対象であつ

たらしく、パイネは彼らの言葉で「青い(空)」を意味する。アルゼンチンの作家セバージェヨスには、先住民についての多くの小説の中に、パイネの山の女王に関するものもある。

2-8 **中央アメリカの山岳信仰**

麓の先住民である、中米の古代文明—オルメカやマヤ、アステカを担った人々は、自然信仰(アニミズム)でジャガーを神として崇めていた。オルメカ人、マヤ人が住んでいた所は平地の密林が多く、最強の動物ジャガーを神とする、日本のオオカミ信仰のような自然信仰だった。

① **ポポカテペトル** (5452 m、メキシコ) 2

中米のメキシコ、グアテマラなどには、環太平洋火山帯の一部として火山が多い。メキシコの海岸部には東西2つの大きな火山がある。首都メキシコ市の東にそびえるポポカテペトルの麓には、アステカ時代以前から大噴火をするこの火山を、富士山のように信仰している人たちがいる。彼らの祈祷師は山と対話ができ、メキシコ古代文明と火山の関わりを感じさせてくれる。「ポポカテペトルとは、アステカの言葉で『煙を吐く山』の意味」と、メキシコの火山学者アトル博士の本にある。ポポカテペトルより少し高



パソ・デ・コルテス(峠)から見た夜明けのポポカテペトル

い東部の成層火山、シトラルテペトル(5636m)はナワトル語で Cihaltēpetl、cītlal は「星」、tepetl は「山」の意で、メキシコでも山は天と同一視されたのであろう。

② アグア山(3752m、グアテマラ)

グアテマラも火山国で、アグア山が南に見えるアンティグア市は標高1500m。四方を火山に囲まれており、アグア山の山容も標高も富士山によく似た独立峰である。西にあるフエゴ山(3763m)は活火山で、常に噴煙を上げているのが市内からも眺められる。この地域の大きな特徴の一つは古代マヤの伝統で、BC1000年ごろから中米各地で栄えたマヤ文明は、独特の数々の文字や高度な天文学の知識を持ち、自然の神々や精霊を信仰していた。現在のアンティグア市の住民の多くは先住民マヤの末裔で、今も民族衣装を身に着け、古代から伝わる様々な山岳信仰などの信仰・習慣を受け継いでいる。

2-9 北アメリカの山岳信仰

北アメリカの先住民アパッチ族は「ガン」と呼ばれる山の精霊を信仰し、覆面をした「ガン・ダンサー」による祈禱の踊りを山に捧げる。また、ナバホ族は4つの聖山を持

ち、彼らの神話に基づき「イエイビチエイ」という精霊たちの行進行事を数日かけて行なう。ホビ族とズニ族は、「カチーナ」という精霊群を信仰する自然信仰で、いずれも仮面行事であり、各々の氏族を中心として行なわれる。

① デナリ (6194 m、アメリカ・アラスカ州) 35

北米大陸最高峰のデナリ(通称・マッキンリー)は、北麓の先住民「アサバスカン系のコユコン族の言葉で「太陽の家」または「最も高いもの」の意で、彼らの伝説では「デナリは神の起源」とされ、山岳信仰のあった聖山である。しかし、通称で世界中に広がってしまったマッキンリーは、金鉱探しの山師が、山に全く関係のない当時の大統領候補に勝手に献名したもので、北米大陸最高峰には似つかわしくない。さすがに早くから州政府は、山の周辺の原野をデナリ国立公園とし、オバマ大統領の連邦政府も、2015年から山も正式に「デナリ」と呼ぶことになった。

② タコマ (4392 m、アメリカ・ワシントン州) 24

米国ワシントン州のシアトルやタコマなどの都市から良く眺められるタコマ(通称・レーニア)は、麓の先住民から拝まれた聖山であった。Taco-betまたは Tahomaとも

呼ばれ、「天空の近くを雷のように走るもの」「大地に雪をもたらすもの」「ミルク色の水を出す胸」などと神聖視していたが、勇敢な先住民が、富士信仰のように頂上に達した形跡もあるらしい。米国西海岸に移民した日系人は、この山を「タコマ富士」と呼んで、何かにつけ祖国を思い出すよすがとしたという。白人の画家による作品で、タコマを海から遠望した「先住民はこの山をタコマと名付けている」という題の絵もある。西海岸近くのタコマやシヤスタ、セント・ヘレンズの3つの火山には、富士山と八ヶ岳のように「昔、男女に分かれ喧嘩をした山々は、その結果頂上部分が吹っ飛び、ギザギザになった」という伝説がある。

③ トウーマン・イ・グー・ヤー (4418 m、アメリカ・カリフォルニア州) 7

通称・ホイットニー山の現地名は、先住民のバイウート語で Too-man-i-goo-yah「大変年取った男」の意で、彼らは頂上に精霊が住むと信じた。シエラネバダ山脈にあり、米合衆国本土48州の中では最も高い山で、通称は地理学者ホイットニー教授に因んだ。なお、この山の東麓近くには第2次世界大戦中、日系移民が強制収容されたマンザナー収容所の跡が、国家史跡として残っている。

2-9 ヨーロッパの山岳信仰

英国やロシアを含めヨーロッパ大陸の国々は、古くからの民族であるケルト人やアングロ・サクソンをはじめ北欧のヴァイキング、ギリシヤ人などが、キリスト教以前の古代から「何を信じていたか、山岳信仰があったか」については、前述したアルプス高地で発見された、5300年前の凍結ミイラ・アイスマンの話を除いて具体的情報はかなり少ない。北欧やアイルランドなどでは、ヴォータン神への信仰など、人々が信じていた自然信仰（アニミズムの多神教）が、伝説伝承で辛うじて残っている。

アルプスではローマ人が侵入する前はケルト系部族が居住し、ポエニヌスという天の神を崇拜していた。「ベン」はケルト語で山の頂を指し、ポエニヌスの神殿は、スイスのグラン・サン・ベルナール峠（救助犬セント・バーナードを飼っていた僧院がある峠）付近で発掘されている。その結果、のちにアルピニズムの舞台として世界的に有名になったアルプスの高山だが、中世では関心がないか、あっても「イボのような嫌われもの」で、信仰の対象ではなかった。日本人はあまり知らなかったが、実は中世ではイスラムの医学・科学の方が西欧より遙かに進んでおり、当時の西欧の医学書は、イスラムの医書の直訳でしかなかった。大

英帝国のヴィクトリア女王も、実は、隠れイスラム教徒で、イスラム諸学を勉強したと言われている。しかし、近代になると西欧は、コンキスタドーレスなどの影響で、その学問上の手本であったはずのイスラム文化を敵視し、遅れていると言いはじめた。近代化により、キリスト教国である現在のヨーロッパ大陸の人々も、それを明治から直輸入した日本の人々も、今でも漠然と「多神教やイスラム教徒は遅れている」と思っていることが多い。梅棹忠夫さんは、この事実を基に「以前は野蛮だったという意味で未知だった西欧も、日本から見れば探検の対象だ」と喝破していた。元々「未開な風習は、野蛮でない人が探検調査する」ことになっていたはずで、東西お互いさまである。

① オリンポス（2917m、ギリシヤ）36

古くからギリシヤ神話では、オリンポスに住んでいるという神々（オリンポス12神）が信仰された。「オリンポス」とは、古い時代にギリシヤに移住してきたドーリア人の言葉で「山」の意味だという。ギリシヤ神話の主神ゼウス、その妻ヘラ、ポセイドン（海と大地の神）、アポロン（太陽の神）、アテナ（知恵の神）、アフロディテ（美の女神）などが、山の頂上付近の宮殿を住居とした。ギリシヤ神話の

鍛冶の神へパイストスは、元々はヴォータン神だと言われている。この神話から見ると、神話以前から素朴な山への信仰を含む、ヴォータン神などへの信仰はあった。神話中の山オリンポスは、初めは空想上の山であったが、のちにギリシヤ北部からアテネを結ぶ主要道を歩いて目立って立派な山である、現在のオリンポスに落ち着いた。

繰り返すが、ギリシヤを欧州文明の始まりの土地と捉えることの多い西欧では、キリスト教と反する古い自然信仰は嫌われ、あまり触れられない傾向がある。ギリシヤ神話を創ったギリシヤ人自身もほかの土地から侵入しており、元々この地の人ではない。ギリシヤ各地で自然信仰の考古学的証拠は、岩絵以外に見付かっていない。ギリシヤ神話によると、パルナツソス(2452m)はアポロンなどのニンフたちを祭っていて、音楽の語源の女神ミューズたちが住むという。また、北部山岳地帯から侵入して来たドーリア人もヴォータン神などを信じ、元々山岳信仰があつたためか、オリンポスばかりでなく、スパルタに近いこのパルナツソスも敬愛していた。

② エトナ (3323m、イタリア・シチリア島) 59

イタリア半島の爪先にあるシチリア島は古くから地中海

の中心で、多くの民族(アラブやノルマンなど)が移り住んだ歴史を持つ。エトナはシチリア最高峰の、大きなのっぺりとした火山で、シチリア島東部の各地から眺められ、たびたび大噴火し溶岩流で被害が出た。昔の富士山の噴火と同様、この山を鎮めるために古くから山岳信仰があつたと思われるが、現地に行ってもその証拠は残っていない。

③ 北欧の山々

スカンジナビア半島は、昔からサーメ(ラップ人)がトナカイを飼う世界だった。のちにノルド語を話すゲルマン人が入り、ヴァイキング(海賊)となった。自然信仰が元の北欧伝説に登場する「トロル」は、「巨大な図体」「山に住んでいる」「人と敵対している」という共通点はあるが、トロルが人を高地のねぐらに連れ去る「誘拐」の伝説は、実体験に由来しているらしい。世界を体現する巨樹であるユグドラシル(世界樹)も、北欧では信じられた。巨樹崇拜は日本だけでなく、中米マヤでは60mにもなるセイバが「世界樹」と考えられ、崇められている。

北欧神話には、古ノルド語で「ベルグリシ」という「山の巨人」の神々がいて、アイスランドを救ったとの伝説もあり、アイスランドの国章にも入っている。この「山の巨

人」の信仰も山岳信仰が源と思われる、その一人「フルングニル」の頭部と心臓は、石でできていたという

北欧神話には「オーディン」などの神もいて、ヴォータン神と同様、自然信仰である。オーディンの名は、語源的には「狂気、激怒した者の主」を意味し、これがシヤーマンのトランス状態を指しているとすれば、「シヤーマンの神」とも言える。また、ドイツ語ではヴォータンという神は、各地を転々としたという話があり、本来は風神、嵐の神（天候神）としての神格を持っていたと言われる。

スウェーデン南部の民間信仰では、死人の霊が登ると信じられている「死者の山」がいくつもあった。それらの一つ「ヴァルホール」は、古くは病人が飛び込む断崖を兼ねていたので、「絶壁の山」とも呼ばれていた。山の崖は40mも切れ落ちており、身を投げるには勇気が必要だったが、「老人は床で死ぬよりも、山で死ぬ方が良い」と考えられていた。楢山節考である。同様の死生観はボルネオ島にもあり、北部の最高峰キナバル山の麓のカダサンの人々も、人が死ぬと霊はキナバル山頂に集まる、と信じていた。

④プロツケン（1114 m、ドイツ）

北欧と共通点が多いドイツ北部では、ハルツ山地が古く

からの神秘的な山で、特に中世では魔女の住む山と思われてきた。最も高いのはプロツケンで、春先に魔女が集まり、お祭騒ぎをする場と言われ、ゲーテの『ファウスト』にも描かれた。今でも麓の村に、魔女の火祭が残っている。プロツケンは霧が懸かりやすく、背後からの日光により人物の影が巨大化する「プロツケン現象」が起こる。欧州、特にドイツでは不吉とされるが、中国では峨眉山の僧は、周りに浮かぶ光輪を聖なるものとし、吉としている。いずれにしても、「プロツケン現象」の捉え方に、山岳信仰を感じ

⑤アイルランドの山

アイルランドは元々ケルト文化が強く残り、アイルランド島にはあまり目立った高い山はないが、山に巡礼する伝統は現在もあるらしい。元々アイルランドでは、基本的にキリスト教の影響は受けたが、布教に当たった聖パトリックの独特の手法もあるのか、キリスト教一色ではなく、古くからのケルト文化が色濃く残った。最も重要な宗教的象徴の十字架からして、ケルト人が信じる太陽神のシンボルである円が中心にあり、アイルランドの十字架はほかの地域とは大きく異なる。

このケルト人の八百万の神にも似た多神教は、山を含む自然物を神とする。詳しく言うと、渦巻き模様や組み紐模様が特徴で、この裏には「天に上る」発想があり、巨石文化として残ったと言われる。一般に「天に上る」は、山の頂上との類似性もあり、ロシア教会のネギ坊主状の塔、ゴシック教会の天を目指す様式にも繋がる。縄文土器に見られる渦巻き模様や、二重螺旋の縄目（縄文）も、この種の自然信仰からくる。欧米のキリスト教の国々の中では、アイルランドは現在、山岳を含む自然信仰が一番強い国かも知れない。

2-10 アフリカの山岳信仰

アフリカの古くからの先住民、バンツー系の諸民族にも山岳信仰はあった。アフリカに限らないが、現在もその山岳信仰の多くは、麓の人々の持つ素朴なもので、辺鄙な山では、現地に行かないと詳細は分からないことが多い。

① キリマンジャロ（5895m、タンザニア）47

キリマンジャロは東アフリカの共通語、スワヒリ語では「キリマ」は「山」、「ンジャロ」は「白く輝く」の意だと一般に言われる。しかし、麓のチャガ族の人々は、モリマ（山）

チャ（に属する）ニャロ（18世紀の族長の名）に由来し、キリマンジャロは、そのモリマ・チャ・ニャロの訛だという。名族長ニャロはこの聖山を崇拜し、毎年、若者を山に登らせ、祭祀を行なった山岳信仰者と言われる。チャガの神話では、水源の山・キリマンジャロにいる「ルワ」という神が、機嫌が悪いと雨を降らせず、麓に飢餓をもたらすこともあったらしい。神話では、キリマンジャロの主峰キボと、隣のマウエンジには喧嘩の逸話があり、キボが怒ってマウエンジを殴り、その結果、「傷が多い峰」という意味のマウエンジが、山の名前になったと言われる。

② ケニア山（5199m、ケニア）3

ケニア山も麓のキクユ族の人々にとっては聖山で、「ンガイ(Ngai)」という神が頂上に鎮座する。ケニア山の麓に移住したキクユにとって山は神聖な場所であり、彼らの創造神話の中心的部分だった。部族の伝説によると、彼らの神「ンガイ」はキクユを創造し、住む所としてキリニャガ（ケニア山）を創った。神はキクユに、ケニア山の下の豊かな土地を与えた。近代には英国に統治されたが、山麓でのキクユを中心とする反英ゲリラの活躍もあり、ケニアは独立した。独立後の初代大統領ジョモ・ケニヤッタは当

然、キクユ族出身だった。彼は、地元にとつてのケニア山の重要性をキクユらしく説明し、「ケニア山の麓は農業などに必須で、しかも山の静けさの中で、初めて伝統的な儀式を行なえる」と、山を素朴に讃えた。

③ルウエ・ンズルル(5109m、ウガンダ/コンゴ) 64
アフリカ第3の高峰ルウエ・ンズルルは、ローマ時代の地理学者プトレマイオスにより、ナイル源流の「月の山」として紹介され、昔から西欧社会でも知られていた。確かにルウエ・ンズルルに降った水は、いくつかの湖を経て最終的にはナイル河に流れるので、プトレマイオスはそれほど誤ってはいない。

通称のルウエンゾリは1889年、ウェールズ出身のヘンリー・スタンリーの、幸運な晴天による頂上付近の望見(「発見」と称された)に同行したトロ族の呼び名だった。実際、山中に住み狩猟・採集をしていたコンジヨ族は、この山を「ルウエン・ズルル(光る場所)」と呼んでいた(カンパラに長く住む、グリーンリーフ社の和田篤志さんからの私信)。この山は麓の人々が、水源である氷河に宿る山の神ーキタサンバを今でも崇拜するなど、明白に山岳信仰があった。近年、ウガンダ政府がこの山域周辺を国立公園

にして狩猟・採集を禁止したので、代償の登山ガイドやポーター業などでコンジヨ族は生き延びている。

④オルドイニヨ・レンガイ(2960m、タンザニア)
タンザニア観光で野生動物が観察できるンゴロンゴロからセレンゲッティ原野に向かうと、遠くに特異な溶岩を噴出し、白く輝くオルドイニヨ・レンガイが眺められる。アフリカ大地溝帯の火山群の一部をなし、この火山は現在も活動することがある。オルドイニヨ・レンガイも古くから火山信仰の対象で、麓のマサイ族の言葉で「オルドイニヨ」は「山」、「レンガイ」は「神」であり、「神の山」を意味する。マサイの聖地で、病人が出たり家畜がいなくなったりするとこの山に登り、生け贄とともに祈りを捧げるといふ。

⑤タツシリ・ナジエール(2158m、アルジェリア)
サハラ砂漠の北、アルジェリア東部の小さな山脈中に、タツシリ・ナジエールがある。最高点はアダール・アフアオ(Adrar Afao)で、新石器時代の岩絵群があること有名だ。地名はトゥアレグ語で「水流の多い大地」を意味しており、昔はもっと湿潤な気候だった。BC5000年ごろから、カモシカやワニなどの大型動物と狩猟民の岩絵が

始まり、皮膚に傷を入れた装飾のある黒人女性の舞踏が印象的だ。宇宙人らしいと話題になる3mの「白い巨人」はこの時期だ。なお、宇宙人風と言われる岩絵は米国など世界中にあり、各地の先住民の脳が共通に創造した「精霊＝空想の神」の様々な姿であろう。岩絵は、BC3000年には牛の群れを追う「牧畜民の時代」が続き、「馬の時代」から乾燥化が進み、独特のサハラ文字を伴う「駱駝らくだの時代」で終わる。

⑥ファコ（4070m、カメルーン山）51

アフリカ西海岸にも大きな高い火山があることは、あまり知られていない。このファコ（通称・カメルーン山）は、西欧では古くから知られていた。紀元前450年ごろ、カルタゴのハンノ率いる艦隊がアフリカ西海岸を南下したとき、噴火による「3本の火柱」を観察している。「ファコ」とは現地語で「山」の意味で、麓の人々に食物を与える半神半石の「エバナ・モト」という火山の神への山岳信仰を、麓の住民は持っている。今でも「エバナ・モト神の許可なく山のもの盗るなど掟を少しでも破ると、火山の神は警告し、ファコは火山性微動を起こす。もっと悪質な行動で彼が怒ると、大噴火する」と現地では信じられている。



黒い溶岩地帯の Hut 3（第3の山小屋）付近から望むファコ（カメルーン山）の頂上火口

⑦テンプル・マウンテン（1086m、南アフリカ）25
南アフリカ共和国北部のカラハリ乾燥地は、今までサン人（昔はブッシュマンと蔑称）が多くの岩絵の遺跡を各所に残した。古代サン人の壁画が4500以上残る、ボツワナ西北部のツォディロ・ヒルズ（ファン・デル・ポストの「すべり山」）の精霊にまつわる出来事からも、彼らが強く自然信仰（アニミズム）を持っていたことが分かる。

南アフリカの最高地点、タバナントレニヤナ山（3482m）は「特徴のないピークの一つ」（地元ガイドの言）だそうなので、私は行かず、世界百名山にも選ばなかった。代わりにケープタウン港の東西交流の歴史上の重要さ、スエズ運河開通以前の欧州に行く日本人などとの関わり、テンプル・クロス状の巨大な雲など特徴のある山、テンプル・マウンテンを選んだ。ケープタウンは早くから植民地化され、初代アフリカ人大統領・マンデラを生んだ先住民コサ族の地名は「イカパ」と言った。私はケープルカーでテプイ状の頂上台地に登り、豊富な花や植物相を楽しみ、小さな丘にある頂上にも行った。

テンプル・マウンテンの山岳信仰については、コサの人々の古い民族資料が私の手には入らず、残念ながら不明である。ただ1856年、コサの少女ノンガウセは、友人のお

じの呪術師に「先祖の精霊と出会った」という話をした。精霊は彼女に「全てのコサ人は自らの作物を焼き払い、畜牛を殺さなければならぬ。精霊は見返りとして英国人の入植者を海に掃き捨てることを約束した」という。少なくとも、古代社会一般に見られる先祖や精霊への信仰は、コサ族にもあったものと思われる。

2-11 オセアニアの山岳信仰

①ウルル（867m、オーストラリア）17

ウルル（Uluru）は、平原に赤く異様にそびえる大きな砂岩の一枚岩の山で、砂岩層は褶曲で縦縞になり、4〜3万年前に隆起したと言われる。1870年代からオーストラリア大陸に白人が入り始め、政治権力を持ったため、一時、英国風に提督に献名され、エアーズ・ロックは通称となった。ウルルは、元々麓の先住民アボリジニーの聖山だった。しかし、私が行ったところは、観光客が危険な急斜面に張った鎖を頼りに頂上に登ることができ、転落事故による怪我も少なくなかった。近年、ウルル周辺がオーストラリア政府からアボリジニーに正式に返還され、2019年には登山禁止となり、鎖も撤去された。

ウルルは広大な平地の良い目印になるので、アボリジ

ニーの人々の交通の拠点となり、6本の道が交差していた。神話では、この山は二人の子どもの泥遊びからできたと言われる。ウルルの麓の各所に、アボリジニーの一部族、アナングの人々の遺跡がある。洞窟などの壁には岩絵が描かれ、別の場所には、X線を使ったような、透視画法によるカンガルーの岩絵もある。

アナングの人々などに伝わる伝統の一つに、虹色の蛇の卵の神話がある。虹色の蛇の卵は、アボリジニーの人たちの世界観（信仰）の中核で、この卵が世界を創り出したとされている。この地球（世界）を創り出したのが蛇だという伝説は、アボリジニーだけでなく世界中の先住民族で見られ、偶然とは思えず、ヒト脳を持つようになった高次機能、アニミズム（自然信仰）の共通性を感じる。

②アオランギ（3764m、ニュージーランド）5

昔、無人だったニュージーランドの北島、南島を発見し、定住したのは、タヒチ諸島から来たマオリ族の人々であった。そのうち最高峰アオランギ（通称・マウント・クック）のある南島に住んだガイタフ（集団名）の人々は、伝唱歌の中で「アオランギ、素晴らしい山よ……」と最高峰を賞賛して、聖山として信仰していた。「アオラキ」とも書

かれるが、「アオランギ」がマオリ語の正式な綴りで、マオリ語では「アオ」は「白い」、「ランギ」は「空、高いもの」の意味がある。

マオリの人々に悲運なことは、のちに西欧人の探検航海によって、ニュージーランド島が見付かってしまったことだ。特に天体観測と称し南方大陸を探していた、クック船長の英国船によって勝手に島の領有儀式をされてしまった。い、英国側から一方的に英国植民地にされてしまった。しかも、実際の領有のため大英帝国がマオリ部族連合と結んだワイタング条約では、正式な英文と正式なマオリ文の間に重大な食い違いがあった。大英帝国はここでも先住民を騙し、英文と違っていたマオリ文の方を故意に無視し、マオリの土地を英植民地化したのである。

とはいうものの、私のロンドン留学は、往復の渡航費や滞在費は全部英国政府持ちの、British Council Scholar だった。独身で若かったので、2年間で英会話も上達し、英語の論文も楽に速く読めるようになり、後々の研究生生活などに大変役立つ。この留学がDNAから脳の研究への転向など、大げさに言えば人生の転機を作ってくれたので、私としては恩のある英国政府の悪口は余り言いたくない。しかし、昔お世話になり私淑した深田久弥さんに習い、何事

も細かく文献・資料を調べ、なるべく真実を伝えたいと思
い記した次第である。

おわりに

『異談』などで日本文化の特異性を世界に紹介してくれ
た、ギリシャ生まれアイルランド(ケルト文化)育ちの、
ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、「私が日本の幽霊(耳
無し芳一や雪女など。筆者注)を信じるのは、現代の(西
欧などの)世界に幽霊がいなくなってしまうからです」
と友人に宛てた手紙で述べたという。自然に対する素朴な
信仰が、長年のキリスト教布教に飲み込まれて消えてし
まった文化で育った一般西洋人の物の考え方に対して、山
や岩などの自然の向こうに神や霊を信じ、拝む心が日本人
にはまだ残っている。この違いは、日本で育った日本人の
私より、西洋文化の下で育ったが、放浪歴のある西洋人
であるハーンには、より強く分かったのであろう。特に彼は
英国籍を捨て、わざわざ日本に帰化したほどだ。

最後に、日本人自身が国民の祝日「山の日」を、山岳信
仰など山や花鳥風月を拝み大切にして、人との交流や文化
をも楽しむ、山登り、山遊びの普及の日として捉え、それ
を实践することを切に願う。

なお、外国語原語のカナ表記は日本語にない発音も多く、
正確には表記できず通例に従った。それぞれの山の標高
も、適当に選んだことをお断りしておく。

〈筆者紹介〉

(くろだ・よういちろう 会員番号12409) 194
3年、東京都生まれ。環境脳神経科学情報センター代表、
医学博士(東大)。東大農学部農芸化学科卒、ワンダー
フォーゲル部に所属し、1964年には学術調査探検部を
創部。留学したロンドン大学・精神医学研究所でDNAか
ら脳研究に転向。帰国後、東京都神経科学総合研究所研究
員に。海外の学会に参加することが多く、休暇を加えて約
200以上の世界の山々を眺めた。

定年退職をまたいで科技厅のCREST「環境ホルモン
の脳発達への影響」の研究代表者。現在は、発達障害の原
因としての農薬やアルツハイマー病の原因としてのアルミ
など環境化学物質の「ヒト脳への広範な環境の影響」につ
いて研究。著書に『ボケの原因を探る』(岩波新書、199
2)『アルツハイマー病』(岩波新書、1998)『発達障害
の原因と発症メカニズム』(河出書房新社、2014)など。

—
調査・研究
—

団体の設立に見る登山の大衆化

城島紀夫

はじめに

社会人の登山団体が設立された時期を調査して、10年ごとの年代別に変遷の諸相とその背景との関連を考察した。全国で設立された登山団体の実数はこの数倍にも上るであろうと考えられるが、得られたデータによって趨勢や動向などをわが国の登山の大衆化現象として捉えて紹介したい。

調査の対象期間は、1900年から1999年までの100年間である。2000年以降については、設立時期が判明した団体が非常に少ないために後日の調査対象とした。

調査方法

日本山岳会が発行した『山日記』に掲載された「全国登山団体名簿」、ならびに、山と溪谷社が発行した雑誌『山と溪谷』に掲載された「社会人山岳会一覧表」を中心とした。これを補うために、日本山岳・スポーツクライミング協会のウェブサイト「加盟団体」、および日本勤労者山岳連盟のウェブサイト「クラブ紹介」を閲覧した。併せて、多くの登山団体が発行した「周年記念誌」を検索して補足資料とした。

『山日記』は、日記帳として毎年販売されたものであり、一般の書籍ではないため公共図書館には収蔵されていないが、日本山岳会図書室に保管されている貴重な資料である。

この「登山団体名簿」は1932年以来、当時の日本山岳会の調査部が問い合わせ書を発送して得た回答書に基づくものである。この調査は54年までで終わっている。

55年以降の設立団体については、雑誌『山と溪谷』の「社団法人山岳会一覽表」によった。「山と溪谷」編集部が日本山岳協会（現・日本山岳・スポーツクライミング協会）と日本勤労者山岳連盟の2つの団体に所属する山岳会、ならびに同雑誌に会員募集を掲載した登山団体に対してアンケートを発送して行なったものである。

以上の参考文献に加えて筆者が行なった補足調査から、設立時期が判明した2683の団体を集計した。設立時期が不明の団体が約550団体あった。集計に際しては、日本山岳会の支部と奨健会の支部については対象外とした。

設立数の推移と団体名の変遷

設立団体数の推移【表1】および図1

登山団体の設立は、明治時代の1910年前後が始動期となり、大正期の20年代から興隆が始まった。

20年代に発足した団体の名称は、山岳会が主流であり、次いで登山会、山岳部、スキー山岳会、旅行会、探検会の順であった。設立が急増・大発展した20年代から30年代に

は、職域団体の設立が多いことに注目したい。

40年代の設立数は、太平洋戦争があったにもかかわらず終戦直後の盛大な登山活動の復活により多数の設立を見せた。山の国・日本の民衆文化を思わせる。

50年代以降も新規団体の設立がほぼ同数で続いていたが、設立団体の名称や活動内容には次第に変化が見られた。

団体名称の変遷

登山団体の種類は、一般的な地域団体、種目別の同志の団体、職域職場（職場内）、地域青年団など多様である。

団体名からその活動内容の変化を知ることが困難なので、名称区分ごとの設立数の推移をもって当時の人気度もしくは流行現象と捉えて、年代ごとの背景との関連について考察した。

【表2】および図2は、名称を次の通り大まかに区分して、区分ごとの団体数および構成比率の推移を見たものである。

「Ⅰ 山岳会・山岳部」には、登山部、登山会、登山研究会などを含めた。「Ⅱ 山の会・ハイキング」には、スキー、歩行、徒歩、探勝、旅行などを、「Ⅲ ALP・CC」には、登高会、登攀会などを含め、「Ⅳ その他」の4区分とした。

「IVその他」の中で多く見られた名称は、同人会、同志会、ワンドーフォーゲル、岳友会、山友会、山想会などである。

時代の背景が大きく反映されたと思われる特徴的な現象は、30年代と40年代において「山岳会・山岳部」の構成割合が50%を超えていることである。この要因は、図1に見られる職域団体の設立の増加であり、この職域団体の大多数が山岳会または山岳部を名乗ったためであった。

この「山岳会・山岳部」という名称の設立人気は50年代から60年代へと続いたが、70年代に急減した。その原因は60年代から勤労者山岳会の下部組織の新設が続き、70年代になってから設立名称を「勤労者山岳会」から「山の会」へと統一的に変更したためであった。

時代が下って80年代と90年代に見える「山の会・ハイキング」の構成割合の増加は、ハイキングクラブの増加によるものであった。また、この2つの年代に「その他」の割合が増加した原因は、実に多種多様で活動内容とは無関係な団体名による団体新設が増加したためである。世人の価値観の変化が続いているようだ。

70年代に入ると、「山岳会」という名称の団体設立は15%となった。ただし、現在も活動を継続している団体の数を概観すると「その他」名称の団体は、他の名称区分の団体

よりも消長が激しいのではないかと見られる。

最初に現れた登山団体の名称

初期に設立された登山団体名で、主な同類名称の中で最初に現れたと見られる団体名は次のとおりである。

京都探勝会（1881年）、北海道旅行倶楽部（02年）、蝦夷富士登山会（05）、日本博物同志会山岳会（06）、大探勝わらじ会（06）、信濃山岳研究会（11）、神戸徒歩会（11）、日本アルカウ会（14）、神戸野歩路会（15）、蔵王高原スキークラブ（17）、神戸岳友会（20）、東京YMC Aハイキングクラブ（20）、東京登高会（22）、ロック・クライミングクラブ（24）、日本アルペンクラブ（25）、山想会（27）、鳥取山の会（29）、京都山友会（30）、東京登攀会（36）などである。

設立年代別に見る諸相とその背景

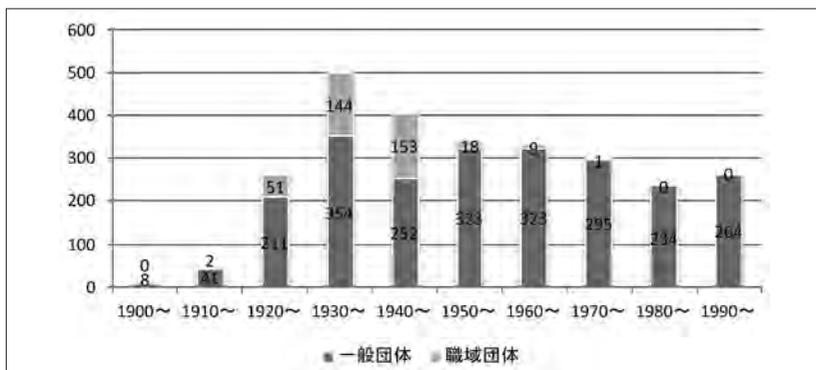
以下に、〔表3〕に現れた約100年間にわたるわが国における登山の大衆化の状況と特徴を、年代を追って考察したので記してみたい。

各年代の末尾に、当年代に創刊された登山関係の雑誌を併記した。これによっても登山の大衆化の変遷状況が推察

【表1】 発足した団体数の推移

年代区分	1900～	1910～	1920～	1930～	1940～	1950～	1960～	1970～	1980～	1990～	合計
	明治 33～	明治 43～	大正 9～	昭和 5～	昭和 15～	昭和 25～	昭和 35～	昭和 45～	昭和 55～	平成 2～	
職域団体	0	2	51	144	153	18	9	1	0	0	378
一般団体	8	41	211	354	252	323	323	295	234	264	2305
合計	8	43	262	498	405	341	332	296	234	264	2683

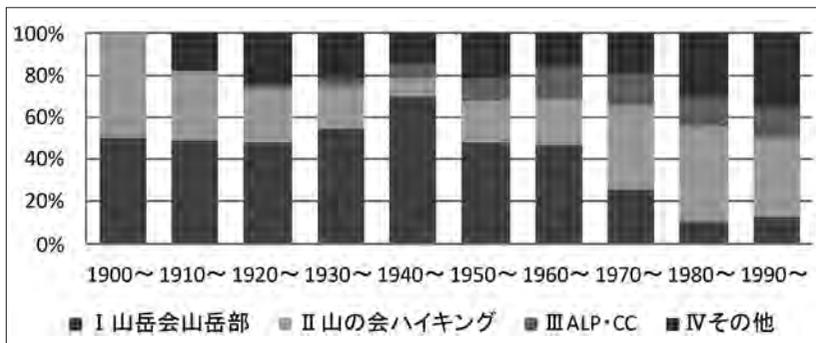
図1 発足団体数の推移



【表2】 団体名区分ごとの発足数の推移

年代区分	明治 33～	明治 43～	大正 9～	昭和 5～	昭和 15～	昭和 25～	昭和 35～	昭和 45～	昭和 55～	平成 2～	
	1900～	1910～	1920～	1930～	1940～	1950～	1960～	1970～	1980～	1990～	
I 山岳会山岳部		4	21	124	272	281	163	156	78	24	34
II 山の会ハイキング		4	14	67	96	39	67	72	117	107	97
III ALP・CC				7	21	27	37	50	44	33	38
IV その他			8	64	109	58	74	54	57	70	95
合計	8	43	262	498	405	341	332	296	234	264	

図2 名称区分の構成割合



できる。

1800年代から広まった山への興味

近代登山の夜明け

登山団体が誕生したのは今から120年ほど前のことである。すでに1880年代には参拝講が多数発生しており、この時代から旅の経路の中で登山を楽しむ愛好者や団体が次第に増加していたものと思われる。

1871年に文部省が設置され、74年に外国人の調査研究国内旅行を許可、78年に体操伝習所を開設した。79年には東京地学協会が誕生し、東京植物学会など各種の学会の設立が続いた。保勝会の結成が日光保晃会(79年)、京都保勝会(81年)と始まっていた。

91年に全国の中学校(194校)において校友会の設立が始まった。92年に文部省が学生の修学旅行を奨励する訓令を発して、学生登山のはじまりと見られる修学旅行が普及した。

94年には志賀重昂の『日本風景論』が発行されて風景に対する人気が広まったようだ。97年の古社寺保存法制定に続いて全国各地に京都探勝会(98年)などの設立が進み、探勝旅行が普及し増加した。

1900年代・明治時代(明治33〜42年)

国を挙げての近代化や西洋化が進められた。

スポーツの発展期であり、登山趣味の世界は「旅の時代」であったと言えるだろう。また、この時代はのちに探検の時代とも呼ばれた。教師などが植物学や地理学などの調査や観測の目的で行なう登山が次第に広まった時代である。博物学会が各地に設立された。

05年に青年団体育成に関する訓令が出されて、青年団活動が活発化して、地域青年団の山岳部も各地に見られるようになった。06年に日本山岳会の前身である日本博物学同志会山岳会が結成された。

新聞の発行部数が急増したのもこの時代である。

「山日記」に掲載された団体のうちで設立が最も早い団体は、日本旅行会(05年設立・京都)であった。

* 創刊された山の雑誌は、『旅行案内』(03年創刊)、『探検世界』(06年)。

1910年代(明治43〜大正8年)・明治から大正時代へ
大学や中学校の大半に山岳部が設立された。

14年に始まった第1次世界大戦と前後して、大日本体育会の創設(11年)や、文部省が「列強の少年義勇団」を発

行（16年）するなど、国の近代化施策や体育の奨励が行なわれた。

【表1】に記されている団体のほかに、神戸などにおいては六甲山への登山会などの地域団体が多発している。

13年に一高山岳会、三高山岳会など多数の学校山岳部も発足した。社会人の登山団体も学生団体と同様に会報を発行していた。

スキーマの普及が始まり、17年に関温泉スキー場が開業した。

登山案内人組合の設立が、大町登山案内人組合（17年）、常念口案内人組合（18年）、有明登山案内人組合（18年）、白馬山案内人組合（19年）などと続き、槍沢小屋（17年）などをはじめとする山小屋の開業が続いた。

* 創刊された山の雑誌 『キャムピング』（17年）。

1920年代・大正から昭和へ（大正9～昭和4年）

登山団体設立の興隆期である。地域タイプの団体設立が増加し始め、登山の大衆化が進み始めた。【表1】のように急速に団体の設立が増加し始めた年代である。

北アルプスにおける山小屋の開業は12軒に達した。

26年に、登山団体の結合体として東京旅行登山聯盟が結

成された。

私立大学の設立認可が始まり、その大半が山岳部を設立する時代となった。西洋スポーツが輸入されて普及し、この年代に15種目の競技スポーツ協会が設立された。

横有恒がアイガー東山稜を初登攀して帰国し、本格的な岩と氷の技術を日本に広く伝えた。ザイルを使用する岩登りが波及し始めた。初登攀などのパイオニアワークを至上とする先鋭的な登山スタイルの流行が進んだ。モダンアルピニズムという言葉が生まれた。

この年代から職域団体（職場団体）の設立が増加した。国の政策として全国体育デーの新設などを背景として国民体力増強のための歩行運動が広められた影響である。設立された職域団体のうちの80%以上の団体が「山岳部」と名乗っていた。体育奨励のための歩行運動が多く見られたが、当時の社会人は若年の勤労者が多かったため、これらの体育活動の中で登山の愛好者が増加していたことも、登山の大衆化の側面であったと考えられる。

文部省が全国体育デーを新設し（24年）、明治神宮体育大会（国民体育大会の前身）やNHKラジオ体操（28年）が始まった。

設立された団体数を府県別・年代別に集計した結果、設

【表3】 初期に設立された団体名一覧（1939年まで）

< >内は名称変更を、*印は職域団体を示す 団体名は新漢字に変更した

設立年	団体名
1900～ 1909 (明治42)	1905 蝦夷富士登山会、1905 日本旅行会、1906 大阪探勝わらぢ会、1906 大阪津浦講、1906 日本博物学同志会山岳会（日本山岳会の前身）、1908 飛騨山岳会、1909 日本山岳会（日本博物学同志会より独立）、1909 名古屋愛山会
1910	神戸草鞋会<→神戸徒歩会→関西徒歩会>
1911	信濃山岳研究会<→信濃山岳会→日本山岳会信濃支部>
1912	六甲阪神倶楽部
1913	山梨山岳会、信濃白田山岳会
1914	京都ワカバ会、日本アルカウ会
1915 (大正4)	九州アルプス研究会<→九州山岳会>、神戸ボテグツ徒歩会、神戸我楽多会、神戸野歩路会、聖峰山岳会、探勝団ユコウ会、六華山岳会
1916	やまゆき会、赤穂山岳会、北の峰山岳会、*山下汽船暁天会
1917	蔵王高湯スキークラブ、浪花山岳会、*新三菱重工神戸造船所登山部
1918 (大正7)	懐親会、山形山岳研究会<→山形山岳会>、神戸鷄鳴徒歩会<→鷄鳴徒歩会>、仙台スキー山岳部、大阪仙探会、日弘山岳会、日本婦人アルカウ会、平穏山岳会
1919 (大正8)	神戸タドラウ会、神戸山岳会、神戸天狗登山倶楽部、太平山岳会、大阪共行会、探勝遊覧会、長狭青年会登山部、福山山岳会、霧の旅会、名古屋スキー倶楽部林と野乃会、浪速探歩会、和楽路会<→二豊山岳会>、林田実業青年団山岳部
1920 (大正9)	横浜アルカウ会、神戸岳友会、増富山岳会、大阪探勝登運歩会、東京 YMCA ハイキングクラブ、東京旅行会、日本検行会<→京都山岳会>、柳橋山岳会<→東京野歩路会>、*水路部山岳会
1921 (大正10)	越中山岳会、丸亀スキー山岳クラブ、熊谷山岳会、芝浦スキー倶楽部、芝浦山岳会、城南山岳会、神戸海榮登山会、扇港若葉会、大阪銀嶺山岳会、探勝団婦人、ユコウ会、秩父山岳会、東京アルカウ会<→東京アルコウ会>、日本サグロ会、北日本アルプス山岳会、和歌山和楽路会、ジャパンキャンプクラブ、テクリ会、*伊藤忠山岳部、*三越体育会山岳部、*住友倶楽部徒歩部、*神戸市電気局運輸共和会修養部、*神戸製鋼所鋼倶楽部登山部
1922 (大正11)	京都 SM 会、薫臺山岳会、黒部保勝会、山戀倶楽部旅行部、神戸アノヤマ会、神戸ヒヨコ登山会、神戸探勝会、神戸突破嶺会<→神戸つくばね登山会>、神戸明輝徒歩会、石佛会、浅草テクロー会<→浅草テクロー山岳会>、大阪アルコー会、大阪探勝ミュキ会、大沼保勝会、大和山岳会、東京登高会、東京登山会、伏見山岳会、* KE 登山会、*鐘紡京都支店山岳部、*鐘紡兵庫山岳会、*泉友会登山部、*東芝鶴見工場山岳部、*日本銀行山岳会
1923 (大正12)	会津山岳会、関西山岳会、高取早起登山会、阪神山岳会、小樽スキー倶楽部、常陸山岳会、神戸ダイヤモンド登山会、神戸愛山協会、神戸旭山岳会、神戸元五青年会登山部、神戸山岳コエロー会、摂津山岳会、大阪探勝倶楽部、大阪探勝好加労会、大阪探勝遊行会、日本廻遊会、日本旅行協会、北海道山岳会、旅の会、ジン平会、トライメート旅の会、*岡谷鋼機山岳部、*秋田県体育協会山岳部、*大阪税関山岳会
1924 (大正13)	阿蘇スキー倶楽部、医王山岳会、関西山岳縦走会、関東山岳會会、甲斐山岳会、山高鳳凰山会、神戸扶桑山岳会、其瀬山岳会、大阪探勝蹴登走会、谷村山岳スキー倶楽部、栃尾山岳会、白鳳会、姫路山岳研究会、抱石山岳会<→抱石会>、鳳凰山会跋渉班、アルペストリアンクラブ、ロックサック倶楽部、ロック・クライミング・クラブ
1925 (大正14)	旭山登喜和会、岳友倶楽部、関東岳愛会、菊水毎日登山会、京都山旅倶楽部山岳跋渉会、奨健歩行会、神戸アユモ会、神戸スキー倶楽部、神戸貿易青年会蔵前山岳部、大阪タカツ倶楽部、大阪ミテコー登山スキー部、大阪探勝参

団体の設立に見る登山の大衆化

	晴会土樽山岳会、東京暁山岳会、日本旅友会、忍町山岳会、白樺旅行会、米沢山岳会北隈青年会登山部、嗜山会、圓野山嶺会、*三菱足の会、*若松駅山岳部、*水産スタノボイクラブ、*東京市協山岳会、*霧藻会
1926 (昭和1)	旭山岳会、雲峰会、嶮嶺会、見附山岳会、山形スキークラブ、春日山岳会、昭和マウントクラブ、新日本山岳研究会、神戸KCO倶楽部、神戸白馬登山会、大阪登山会、東京雲峰会、東京山嶺会、東京青峯会、東京旅行クラブ、東北旅行会、武蔵野山岳会、コーボルト会、ホワイトベヤー、*K.C.O.倶楽部、*古河電工日光山岳部、*仙鉄スキー山岳部、*大阪管見社登山部、*東京駅山岳部、*日光製銅所体育会山岳部
1927 (昭和2)	あざらし会、下野山岳会、護友会登山部、山交社、山想会、上毛山岳会、城南山岳スキー会、親友会旅行部、赤毛布山岳会、雪線社<→アルパインクラブ雪線社>、多摩山岳会、大一マイロー会、大牟田ありあけ山岳会、筑紫山岳会、帝国山岳会、東京アマチュアスキー倶楽部、東京スキー山岳会、東京みなかみ会、東京山の旅会、東京山路会、東京深川区青年団山岳会、日本登山会、日本登山旅行協会、富良野山岳会雄鳳会、アマチュア山の旅会イムベリアルマウントクラブ、サンシャイン旅行会、ラテルネ倶楽部、ベルグクレツテルフェライン、*川崎重工登山部、*京都第一銀行山岳会、*札幌鉄道局苗穂山岳部、*三井三池染料山岳部、*静水会山岳部、*大阪市電春日出健脚会、*東京ILY山岳部、*日本交通公社スキー部
1928 (昭和3)	のぼらん会<→札幌山岳倶楽部>、越後山岳会、塩山山岳会、黒石山岳会、黒百合山岳会、若桜山岳会、上野青年団登山部、神戸ツキワ登山会、針葉樹会、蔵王スキークラブ、大阪山岳倶楽部、大菩薩峠山彦会、大蓮華保勝会、中津山岳会、津峠の会、登仙会、東京山彦山岳会、東京蝸牛会二葉山岳会、白樺会、八王子山岳会、名古屋アマチュア・スキー倶楽部旅の趣味会、アイスクラスクラブ、*三井鉱山山牛会、*神戸市平野郷友会、*台糖神戸修養会、*大阪大丸山岳部、*直方車掌区山岳会
1929 (昭和4)	あげび会、愛山同友会、旭旅好会、横浜徒歩徒歩会、岡山スキー山岳倶楽部、溪谷会、戸畑山岳会、江東山岳会、高嶺社、札幌山岳倶楽部、山嶺会、小千谷山岳会、湘南山岳スキー会、城南旅行登山会、神戸市平野青年団山岳部、神戸登山会、泉神会登山部、大町山岳会、竹馬旅行会、鳥取山の会、吐芳会、徒歩徒歩会、東京テクロウ山岳会、東京めばえ山岳会、奈良みなかみ会、日本探検会、尾ゼの会、武蔵山岳会、豊崎山岳倶楽部、明峰山岳会、淀川山岳会コマクサ倶楽部、ベルグカメラード、ユカウ会、*アシナミ会、*住友山岳会北九州、*松坂屋体育会山岳部、*神戸中央電信局登山部、*神戸鉄道倶楽部山岳部、*大日本麦酒山岳部、*通信山岳会、*富士製鉄室蘭山岳スキー部
1930 (昭和5)	アノ山会、おぎ駒倶楽部、雲之旅会、横浜山岳会、下関山岳会、岳樺山岳会、関東アルペンスキー倶楽部、京都YMCA山岳部、京都山友会、禁酒あかつき登山会、広島山岳会、高崎山岳会、桜門山岳会、山と溪の会、山と雪の会山行会、山形龍岳会山人会、山之旅会山想倶楽部、上越国境山岳会、上田スキークラブ、神戸アマチュアスキー倶楽部、生岳倶楽部、盛岡山岳会、村岡山岳スキー会、長崎アルカウ会、東京岳愛会、東京浅草山岳会、東京登山倶楽部、東京登歩溪流会<→登歩溪流会>、南嶺会、日本登高会、日野春山岳会、熱田スキー倶楽部、馬鬣くらぶ、白樺山岳会<→白樺会>、八幡山岳会、福山山岳スキークラブ、峰友会、木曾山岳会、雷鳥クラブ、鈴鹿の会、煌峯山岳会、ファガスクラブ、S.P.C. Schi Jobler、*簡易保険局山岳部、*丸善山岳部、*国鉄鷹取工場山岳部、*三崎二青年団山岳部、*住友山岳会、*住友山岳会京浜支部、*上伊那町聯合山岳会、*大阪鉄道局鷹取工場徒歩部、*第一銀行スキー部、*鉄道局スキー山岳部、*東京中央電信局岳樺山岳会、*日本ゴム福岡工場山岳部、*日本放送協会山岳部、*梅ヶ香青年団山岳部
1931 (昭和6)	雲表社、岡山山岳会、久留米山岳会、軽井沢山岳会、荒後山岳会、行人社山岳部、在溪流会、三国町スキー倶楽部、山人倶楽部、山頂クラブ、山旅クラブ(兵庫)、四国中央山岳会、糸魚川顕勝会山岳部、鹿児島山岳会、初狩山岳

	<p>保勝会、小樽アルペン倶楽部、小名木川山岳会、神戸山幸会、神戸山旅倶楽部、須原山岳会瀬戸山岳スキー倶楽部、川崎山岳会、蘇友会、村松山岳会、大阪リュックサック倶楽部、大阪旅行クラブ、大森山岳会、大分山岳会、田川山岳会、東京YMCA山岳会、東京YWCA体育会山岳会、東京マウントスキー倶楽部、東京山人倶楽部、東京山旅倶楽部、東京登山旅行会、栃尾アパル会、南鳳会、日本女子山岳会、苗場山岳スキークラブ、福岡荒稜山岳会、福岡山岳倶楽部、福岡山想会、羅臼山岳会、杣倶楽部、やまち会、ベルグ・バルファルト・クラブ、JCC山岳会、*京都大丸山岳部、*山形県庁山岳会、*若松車掌区山岳部、*鉄道省山岳部、*仙台市役所山岳部、*東京市電気局旅行登山部、*東京都庁体育会山岳部、*東京市峯友会、*東鉄スキー山岳部、*日本ゴム山岳部、*日本漁網船具(株)山岳部、*日本興業銀行山岳ハイキング部、*門司鉄道局小倉工場山岳部</p>
1932 (昭和7)	<p>井川山岳会、宇都宮山岳スキークラブ、宇都宮山岳会、朽綱山岳会、桐生曙山岳会、慶応ベルグリヒト倶楽部、吾妻山岳会、甲府スキー倶楽部、高崎山岳倶楽部、桜友山岳会、山人会(東京)山友会、小倉山岳会、小樽山友会、庄内山岳会<→鶴岡山岳会>、神田旅行クラブ、秩父スキー倶楽部、盛岡魚市場山岳会<→盛岡山想会>、都鳥山の会、東京朝霧山岳会、東京百足会、破岳会日本山嶺倶楽部、白樺スキークラブ、富士見山岳会(東京)、福岡山の会、麻布山岳会、門司キャンプクラブ、門司山岳会、龍野山岳会、鈴鹿山岳会、マウントスキー倶楽部、Cross Country Club M.P.C山岳会、SRC山岳会、*安川電機山岳部、*沖電気体育会山岳部、*魚市場山岳会、*行雲会、*阪神ゴム山岳会、*三井田川三交倶楽部山岳会、*上沢六青年会登山部、*神戸堂金属商工組合登山部、*水産アルパインクラブ、*第一銀行山岳会、*島上町青年会登山部、*東京鉄道局スキー山岳部、*東洋火災山岳部、*福知山体育協会山岳部</p>
1933 (昭和8)	<p>下越山岳会、加茂山岳会、熊本アルカウ会、高嶺朝紅会、佐渡山岳会、阪神山旅クラブ、三峰会<→三峰山岳会>、山小屋倶楽部(埼玉)、山小屋倶楽部(東京)、秋田湯沢山岳会、女子山岳会、奨健会ワンダーフォーゲル部、小鹿野山岳会小出町山の会、小田原山岳会、信濃川スキー山岳部、秦野山岳会、仙台山岳会待陵山岳会、大中山ノ友会、登歩趣味会、東京アマチュア山岳会、東京山岳会峠の会、奈良山岳会、日本ハイキング倶楽部、柏崎山岳会、白銀スキークラブ不知火山岳会、福知山山友会、豊前山岳会、北九州スキークラブ、名古屋白樺スキー倶楽部山岳部、柳河山岳会、ESスキー倶楽部、ジャパンビバークスキークラブ、*こまくさ山岳会、*戸畑岳友会、*戸畑鋳物山岳部、*千代田山岳会、*小樽貯金局共済会山岳部、*千代田生命体育会山岳部、*大阪三品山岳倶楽部、*東亜スキー山岳部、*東京市電スキークラブ、*東京高圧山岳会、*東洋高圧大牟田工業所山岳部、*藤永田ハイキング倶楽部、*日本ダンロップゴム登山会、*日本通運体育会山岳部</p>
1934 (昭和9)	<p>アユミ会、かがりび山岳会、鳥丘山人倶楽部<→鳥丘スキークラブ>、関西スキークラブ、阪急レクリエーションクラブ山の会<→阪神山の会>、金港アマチュア山岳会、溪岳会、甲府ワンドラー、香川ワンダーフォーゲルの会、山と高原の会、山形溪岳会、山嶺アルピニスト倶楽部、志高会、紫峯会、酒田山岳会、渋川岳想会、待陵山岳会、大阪中部山岳会、大乘登山会、東京山叫倶楽部、東京山溪会、藤原町山岳スキー会、日比谷山岳会、白壁山岳会、肥前山岳会、美濃山岳会、姫路山岳会、武蔵野稜友倶楽部、別府山の会、問屋街山岳会<→東京迺路山岳会>、やまびこ会、やまゆき会嶺同人、和田山岳会、エーデルワイズ山岳会、チバ・シーハイルクラブ、ムサシノ・ランプリング・クラブ、K.M山行会、*横浜ゴム山岳部、*横浜市役所山岳部、*横浜税関山岳部、*阪神急行電鉄山岳部、*琴緒町青年団登山部、*国産工業山岳部、*三井山岳会、*城北青年団山岳部、*小田急協和会山岳部、*神発登山部、*杉並市役所山岳部、*川崎航空機登山部、*第百銀行山岳部、*東林山岳部、*印刷局山岳会、*南星山岳部、*日本ゴムアルパインクラブ、*日本鋼管川崎工場山岳部、*日立製作所戸畑工場山岳部、*武田薬品工業大阪山岳部</p>

団体の設立に見る登山の大衆化

<p>1935 (昭和10)</p>	<p>旭川山岳会、奥高尾山岳会、岡崎山岳会、岳踏会、関西駒草山岳会、関東ハイキングクラブ、銀嶺スキークラブ、呉山岳会、高取登山會、高嶺会、山徒倶楽部、山岳巡礼倶楽部、山口県ワンダーフォーゲル会、鹿児島アルカウ会、小樽山岳スキー倶楽部、新鹿沢スキークラブ、水上山岳会、清流会、草津温泉山岳会、足立アルパイン倶楽部、たちばな登山会、長崎山の会、東京高嶺会、東京雪嶺会、東京美登里山岳会、東北山の会、日本山岳画協会、八王子親歩会、片貝山岳会、北飛山岳会、またゝび会、名古屋山岳会、明朗漫步会、やまの会、野村山岳会、アルペンローゼタンネ山岳会、モルゲンロートコール部、*横浜生絲検査所山岳部、*王子区役所吏員会山岳部、*九軌体育会山岳部、*国鉄信濃川工事事務所スキー山岳部、*三省堂スキー山岳部、*七十七銀行山の会、*昭和電工鹿瀬工場スキー山岳部、*雪煙倶楽部、*仙台地方簡易保険局山岳会、*川崎第百銀行スキー山岳部、*第一銀行熊本支店山岳部、*鉄道教習所専門部山岳部、*東京瓦斯山岳会、*東京電力名古屋支店山岳部、*日本光学山岳部、*日本郵船高嶺会、*明治火災山岳部、*奮山岳部</p>
<p>1936 (昭和11)</p>	<p>井田山岳会、岳人社山岳会、九州登高会、古川山岳会、山声会、神戸キヤムピングクラブ、双峰山岳会、大館山想会、探勝艶心会山岳部、竹田山岳会、東京YACAスキー部、東京岳歩会、東京荒川山岳会、東京青幻山岳会、東京登攀会、日本山岳写真研究会、白樺クラブ山岳部、飯塚山岳会、漫彩クラブ、麗杉荘の会、六合村山岳会、岑嶺会、アカデミーマウンテン倶楽部、カメラハイキングクラブコロンビア山岳会、サンソク会、ハイキングクラブあすなろ、*横河電機山岳部、*新潟鉄工山岳部、*西日本鉄道登山部、*石川島造船所山岳部、*東京質屋山岳部、*日本製鉄八幡製鉄所山岳部、*日本赤十字病院山岳部</p>
<p>1937 (昭和12)</p>	<p>関西山小屋倶楽部、暁山岳会(東京)、桑名山歩会、こまくさくらぶ、山渓会、山紫会、山徒クラブ、神戸山小屋倶楽部、相模野会、大阪山小屋倶楽部、東京晴嶺山岳会、東京峰友会、東京嶺山岳会、南海徒歩の会、日本登攀会、白根山岳会、肥瘦山岳倶楽部、美濃山小屋倶楽部、福岡スベロー会、福地山岳会、嶺山岳会、偃松山岳会、*安田銀行運動部山岳部、*岩田屋山岳部、*三池染料山岳部、*若松駅山岳部、*新潟鉄道局山岳部、*浅野セメントスキー山岳部、*中島飛行機山岳部、*貯金局山岳会、*東鉄やまをとこの会、*東武歩行会、*日本鋼管富山工場山岳部、*日電白樺会、*日本車輻山岳会、*日立製作所安来工場山岳部、*名古屋市役所体育会登山部</p>
<p>1938 (昭和13)</p>	<p>安田山岳会、横須賀暁星山岳会、国民山岳会、札幌エゾヌプリ会、三武山岳会山村民族の会、山沢朗好讚岳会、山踏会、昭和山岳会、静岡踏岳会、新居浜スキー山岳倶楽部、東京登歩会、峠路ハイキンググループ、徳島雪稜会、日本スキー山岳会、日本雪稜山岳会、日本沢歩研究会、名古屋ベルグロイテ倶楽部、名古屋愛好山岳会、嶺溪会、アールベルグスキー研究会関西支部、ハイキングベンクラブ、ミヤマ倶楽部、*王子製紙山岳部、*沖電気歩友会、*勧銀熊本支店山岳部、*三重芝浦山岳会、*秋木山岳部、*仙台弁護士会山岳部、*専売局風光会、*大蔵省山の会、*大阪市職員クラブ登山部、*朝日新聞社山とスキー山岳部、*東京貯金銀行山岳部、*日本鑄造山岳部</p>
<p>1939 (昭和14)</p>	<p>厩城歩行会、横須賀溪稜山岳会、横浜溪稜山岳会、横浜蝸牛山岳会、下関山岳会徒歩部、雁ハイキンググループ、江東明朗山岳会、山の仲間、山踏倶楽部小石川山岳会、聖山岳会、太平わらじ会、大阪山の会、中山山岳会、東雲山岳会、東京雁山岳会、東京山の会、東京山行会、東京築地山岳会、東京白樺山岳会、東京緑山岳会、米沢山の会、鷗翔山岳会、みのる山岳会、名古屋山小屋倶楽部、緑山岳会、テク朗会、マウントロバーターグループ、G.M.C山岳会、*オリエンタル山岳会、*マツダ親和会山岳部、*愛知時計電機山岳部、*荏原製作所山の会、*下関地方貯金局山岳部、*海軍艦政本部・航空本部体育会山岳部、*呉羽紡績大町工場山岳部、*札幌鉄道局工事部山岳部、*松下ラジオ工場山岳部、*大隈興業上飯田工場山岳部、*大阪市交通局登山部、*日本鋼管扇町工場山岳部、*日本鋼管東京本社山岳部、*日本製鉄輪西製鉄所山岳スキー部</p>

立数の多い府県は、10年代は兵庫、大阪、東京の順であったが、20年代には東京、兵庫、大阪、山梨、神奈川の順となっている。わが国の登山の文化が西から東へと波及した一面を示すものと見てよいだろう。

キャンプが流行し、21年にジャパンキャンピングクラブが発足した。23年にわが国初のロック・クライミング・クラブが神戸徒歩会の会員を中心に結成された。

* 創刊された山の雑誌 『旅』(24年)、『山と旅』(29)。

1930年代・戦前期(昭和5〜14年)

登山が広く普及して、設立団体が前の年代に続いて急増し、最高の設立数が記録された(図1)。ハイキングと徒歩旅行が盛んに行なわれていた。

設立された団体のうち、職域団体が約30%を占めていた。38年に国民歩行運動が開始され、国民総動員法が発令された。

39年に太平洋戦争が始まる直前の時代であり、鉄道省がハイキング運動を起こすなど、国を挙げての体力強化運動が進められた時代であった。この年代の設立数増加の趨勢は、このような時代背景に強い影響を受けた大衆化現象であったと見ることが出来る。

積雪期の冒険的な登山や、谷川岳などの登攀者も増加した。スキー場の開設が続き、スキー山岳会の設立数が急増した。

* 創刊された山の雑誌 『山と溪谷』(30年)、『アルピニズム』、『登山とスキー』、『山小屋』、『山と雪』(以上31)、『ハイキング』(32)、『山』(34)、『ケルン』、『登山とはいきんぐ』(以上35)、『関西山小屋』(36)、『徒歩旅行』(39)、『山と高原』(39)。創刊が最も多い年代であった。

1940年代前半・戦中期(昭和15〜20年)

41年からの太平洋戦争により、登山団体の新規設立はほとんどなかった。文部省がまず歩こう運動を展開した(41年)。

* 創刊された山の雑誌 『探検』(42年)、『錬成旅行』(43)、『山とスキー』(44)。

1940年代後半・戦後期(昭和21〜24年)

現代登山の始まり

終戦後間もなくの46年あたりから戦前設立の団体が活動を復活し、これと並行して、新規に設立する団体の数が増加した。

【表4】 60周年以上の記念誌を発行した団体

記念誌の 周年区分	団体名	所在地	設立年	収蔵図書館			その他の 周年誌	会報・会誌名
				国立	府県	JAC		
100周年 記念誌	飛騨山岳会	岐阜	1908	明治 41	◎	○	☆	山刀 山岳 会報
	日本山岳会	東京	1909	明治 42	◎	○	☆	
	やまゆき会	大阪	1916	大正 5	◎	—	—	
90周年 記念誌	福山山岳会	広島	1919	大正 8	◎	○	—	はいまつ 京都山岳 山脈 ヒヨコ 白鳳
	京都山岳会	京都	1920	大正 9	◎	○	—	
	東京アルコウ会	東京	1921	大正 10	—	—	—	
	神戸ヒヨコ登山会	兵庫	1922	大正 11	—	○	—	
	白鳳会	山梨	1924	大正 13	—	—	—	
85周年記念誌	川崎山岳会	神奈川	1931	昭和 6	—	—	—	らんたん
80周年 記念誌	大蓮華山保勝会	富山	1928	昭和 3	◎	○	—	会誌 明峯 稜線 雪やけ 山 南嶺 山懐 三角点 岩つばめ 山上 にひばり 会報 会報 かたつむり
	明峰山岳会	東京	1929	昭和 4	◎	—	—	
	下関山岳会	山口	1930	昭和 5	◎	○	☆	
	盛岡山岳会	岩手	1930	昭和 5	◎	○	—	
	横浜山岳会	神奈川	1930	昭和 5	◎	○	☆	
	南嶺会	山梨	1930	昭和 5	—	—	—	
	盛岡山想会	岩手	1932	昭和 7	—	—	—	
	鶴岡山岳会	山形	1932	昭和 7	—	○	—	
	三峰山岳会	東京	1933	昭和 8	—	—	☆	
	奈良山岳会	奈良	1933	昭和 8	◎	—	—	
	甲府ワンドラー	山梨	1934	昭和 9	—	○	☆	
	旭川山岳会	北海道	1935	昭和 10	◎	—	—	
	名古屋山岳会	愛知	1935	昭和 10	—	—	☆	
	横浜蝸牛山岳会	神奈川	1939	昭和 14	—	—	—	
75周年 記念誌	北の峰山岳会	北海道	1916	大正 5	—	○	—	罷路 せふり ベルグロイテ
	富良野山岳会	北海道	1927	昭和 2	◎	○	—	
	福岡山の会	福岡	1932	昭和 7	—	○	☆	
	中京山岳会	愛知	1939	昭和 14	—	—	☆	
70周年 記念誌	山形山岳会	山形	1918	大正 7	◎	○	☆	山形山岳 鶴見 山嶺 わらじ 岩つりがね草 会報 足跡 黒百合 稜線 BERNINA 会報 haken
	二豊山岳会	大分	1919	大正 8	—	○	—	
	東京野歩路会	東京	1920	大正 9	—	—	—	
	医王山岳会	石川	1924	大正 13	◎	○	—	
	秦野山岳会	神奈川	1933	昭和 8	◎	○	—	
	昭和山岳会	東京	1938	昭和 13	◎	○	☆	
	長崎山岳会	長崎	1940	昭和 15	◎	○	—	
	福井山岳会	福井	1940	昭和 15	—	○	—	
	秋田山岳会	秋田	1946	昭和 21	—	—	—	
	ベルニナ山岳会	神奈川	1948	昭和 23	—	—	☆	
	金沢山岳会	石川	1948	昭和 23	◎	○	—	
	横須賀山岳会	神奈川	1949	昭和 24	—	—	—	
	60周年 記念誌	関西山岳会	大阪	1923	大正 12	—	○	
鹿児島山岳会		鹿児島	1931	昭和 6	—	—	—	
東京緑山岳会		東京	1939	昭和 14	—	—	—	
秀峰山岳会		新潟	1941	昭和 16	◎	○	—	
雲表倶楽部		東京	1943	昭和 18	—	—	—	
清水山岳会		静岡	1947	昭和 22	—	—	☆	
松坂山岳会		三重	1947	昭和 22	—	○	—	
アトラス山岳会		岩手	1948	昭和 23	—	○	—	
宮崎山岳会		宮崎	1948	昭和 23	—	○	—	
御坂山岳会		山梨	1949	昭和 24	—	—	☆	
東京雲稜会		東京	1950	昭和 25	—	—	—	
長岡ハイキングクラブ		新潟	1952	昭和 27	◎	○	—	
釜石岳友会		岩手	1953	昭和 28	◎	○	—	
佐世保山岳会		長崎	1953	昭和 28	—	○	—	
新潟峡彩山岳会		新潟	1953	昭和 28	—	○	—	
杉並ワンダーフォーゲル倶楽部		東京	1953	昭和 28	—	—	—	
本荘山の会		秋田	1953	昭和 28	—	—	—	
玲峰グループ		東京	1953	昭和 28	—	—	☆	
大宮山岳会		埼玉	1954	昭和 29	—	—	—	

エーデルワイス・クラブ	東京	1955	昭和 30	—	—	—	35,	Edelweiss
どんぐり山の会	東京	1955	昭和 30	—	—	—	50,	DONGURI
BUSH 山の会	東京	1956	昭和 31	—	—	☆	35,30	Bush
富士宮山岳会	静岡	1957	昭和 32	—	—	—	50,	剣ヶ峰
わらじの仲間	東京	1957	昭和 32	◎	○	☆	50,40,25	わらじ
黒部山岳会	富山	1958	昭和 33	◎	—	—	—	—
大阪白樺山岳会	大阪	1958	昭和 33	◎	—	—	50,	白樺
南会津山の会	福島	1958	昭和 33	—	○	☆	50,30,20	いろりばた

(注) 1. 周年区分ごとの団体名は、設立年順に記した。

2. 収蔵図書館の「国会」は国立国会図書館、「府県」は各団の体所在地の府県立図書館、「JAC」は日本山岳会図書館、を示す。

わが国の登山文化の復活であり、登山に関する人気が現代に引き継がれた。山地が多いわが国の固有のスポーツ文化が復活したと言うことが出来る。

国の主導による職場レクレーションの啓発活動によって、職域団体としての「山岳会」と「山岳部」の設立が増加した。

新制大学制度が始まった。全都道府県に国立大学が設置され、私立大学が増設されるなどの教育制度の大改革であり、正式科目で体育実技が初めて必修化された(48年)。大学山岳部の活動の復活が始まった。

* 創刊された山の雑誌 『岳人』(47年)。

1950年代・戦後の経済復興期(昭和25〜34年)

戦後の復興に向かうこの年代は、登山団体が目覚ましい増加を見せた。経済の高度成長が始まり、青少年育成運動によるサイクリングやキャンプも盛んになった。

旅行とハイキングがブームとなった。設立数のうちで、「山の会・ハイキング」の割合が増加した。企業内のレクレーション活動が流行していた。

東海道新幹線の開通、レジャーブーム、マイカーブームなどがあり、59年にはスキの大流行が始まった。

大学の部活動の中でワンダーフォーゲル部の創設が全国に波及し、学生の登山者が増加した。山岳部に入らなくても登山ができるようになったと言われた。登山の大衆化の一面であった。

上越線に清水トンネルが開通し、上越登山がブームとなっていた。58年に群馬県警谷川岳警備隊が、59年に富山県警と東京警視庁に山岳警備隊が設置された。

* 創刊された山の雑誌 『新ハイキング』(50年)、『HIKER』(56)、『アルプ』(58)、『岩と雪』(58)。

1960年代(昭和35〜44年)

社会人の登山団体は、前年代とほぼ同数が設立された。63年に日本勤労者山岳連盟が結成され、その地方組織と

しての勤労者山岳会（地域団体）の設立が65年から73年にかけて急速に増加した。広まっていた企業内レクレーションと並行する労働組合活動の一端であった。

64年に海外旅行が自由化され、登山家たちのヒマラヤ登山が85年頃まで流行した。

若者の登山離れ、大学生の体育会離れ、の現象が現れて登山活動の行方が見えにくくなった。

* 創刊された山の雑誌 『スキージャーナル』（66年）。

1970年代（昭和45～54年）

73年には高度経済成長が終息した。団塊の世代が大学を卒業して社会人となった年代である。

設立された団体数は幾分減少に転じているが、この年代の特徴としての「山の会・ハイキング」団体の設立割合の急増は、社会の価値観の変化を思わせる。71年にアルパインガイド協会が設立され、ツアー登山が始まった。

大学の部活動（課外活動）においても、公認団体ではないアウトドアサークルが増加し始めた。在来の公認団体のように一定の種目と活動内容を伝統的に継承することを嫌い、活動内容や目的も未定のまま、希望があれば何でもその都度やりますというスタイルの任意団体の出現である。

登山の部活動もワンデイハイクが増加した。

* 創刊された山の雑誌 『夏山JOY』（75年）、『アウトドア』（76）。

1980年代（昭和55～平成1年）昭和から平成へ

アウトドア・レジャーが人気化した。

この年代からは団体名称「その他」の設立増加が著しい。東北・上越新幹線が開通した。募集タイプの百名山ツアーが流行した。中高年の登山者が増加したと言われた。

ツアー登山が全国的に流行し、多数の山岳ガイド団体の設立が見られた。89年にわが国で初めてのクライミングジムが開業し、日本スポーツクライミング協会が結成された。スキー人口が89年から減少に向かった。

* 創刊された山の雑誌 『BE・PAL』（81年）、『クライミングジャーナル』（82）。

1990年代（平成2～11年）

この年代に設立された団体名称は次のような順位を示していた。山の会がトップであり、次いでハイキング、山岳会、アルパイン、クライミング、登山、歩行・徒歩、の順であった。

「ALP・CC」のうちで同人や山友会などと同人タイプの設立数が増加している。

94年に「日本百名山」がテレビ放送され人気を呼んだ。ツアー登山の人氣が続いている。新たに現地集合・現地解散というタイプのツアー登山が出現し始めた。

クライミングクラブやフリークライミングクラブと名乗る団体の設立が見られるようになった。クライミングが登山から分化して競技スポーツとなり、こののちに2021年のオリンピックの新規種目とされた。

大学で必須科目であった体育実習が選択科目となった。

*創刊された山の雑誌 『山の本』(92年)、『ROCK&SNOW』(98復刊)。

2020年以降

65歳以上の高齢者人口の割合が約29%に達した。反面で若年者が組織への加入を敬遠する風潮が強まっており、組織の維持継続に苦慮する団体が多くのウェブサイトで見られる。

登山の大衆化と呼ばれ、団体数や加入者数が増加を続けた。日本の登山文化は一段落の時期を迎えて、多様化、細分化など新しい局面に向かっていようだ。

2017年に、日本山岳協会が「日本山岳・スポーツクライミング協会」と改称して、国内のクライミング競技会を統括している。

周年記念誌に刻まれた日本登山史

60周年以上の周年記念誌を発行した団体を【表4】として紹介する。

すでに100周年記念誌が3つの団体から、90周年記念誌が5つの団体から発行されており、登山の歴史が確実に蓄積されつつある記録を確認することが出来る資料となっている。

併せて、周年記念誌が国立国会図書館や地方自治体の公共図書館などに収蔵されていることにも注目したい。

周年記念誌を発行した大半の団体は、設立時から会報や会誌を発行する伝統を継続してきた。このような営みが消えることなく続いてゆくことを切望する。

参考文献

日本山岳会「全国登山団体一覧表」『山日記』

1932年号～1936年号 梓書房、1937年号～193

9年号 岩波書店、1940年号～1941年号および19

43年号～1955年号 三省堂

山と溪谷社「社会人山岳会一覧表」「山と溪谷」

1998年3月号(東日本編) 同年4月号(西日本編) 同年5月号(中部日本編)

松丸秀夫・五十嶋一晃「山日記」五十三巻の足跡「日本山岳会

百年史」〔本編〕 日本山岳会 2007年

土井祥子「わが国における風景づくりの実践の歴史的展開に関する研究」 東京大学都市デザイン研究室 2003年

高澤光雄「明治二十八年に創立した蝦夷富士登山会『山岳文化』

第6号 日本山岳文化学会 2006年

小川功「京都探勝会等に見る旅行愛好団体の生成と限界」『彦根

論叢』 滋賀大学 2013年

信州の「教育文化財」、学校登山の行方

菊地俊朗

全国でただ1県、120年余の伝統と、ほぼ全中学校での実施を誇ってきた学校登山が、存続の瀬戸際に立たされている。10年ほど前からじわじわと中断や、定番の1泊2日行程を、日帰りの軽登山に切り換える学校が目立ち始めたところへ、新型コロナウイルスの流行で、昨年は実施校が約10%と急落した。今年も、計画を予定している学校は40%程度あるが、コロナ禍が過ぎ去っても旧前に戻れるかどうか。

学校登山の来歴、目的や教育価値は後述するが、信州教育が生んだ「文化財」と評してよいだろう、と思っっている。近時の教育現場への事情や保護者の姿勢にも関わる現象を、概略紹介する。

信州教育の模索

明治政府が国民哲学の重要性を認め、学制令を公布したのは1872（明治5）年である。当初の小学校は7歳以上の男子にしほり、4年制度。翌73年からスタートしたが、就学率は全国平均で38%にすぎなかった。

その中で長野県（信州）の就学率は63%。全国で突出して1位。明治後期にかけて、女子の受け入れ、6年制、さらに尋常小に2年間の高等科の新設、中学校や高等女学校（中学）の普及が進んだが、少なくとも明治期は、長野の就学率は各分野で上位を占めていた。その背景には以下のようないふ事情がある。

寺小屋が普及していた信州

「信州教育」という言葉は、今や、死語である。学制令を公布したからといって、教える先生がそろっていたわけではない。教える内容も不明だ。校舎もにわかには建築できない。各県で教員養成所、師範学校の設置が進められたが、数年程度で整う話ではない。国定の教科書の使用が始まったのは1901（明治34）年からである。

開学した当初の小学校校舎は、廃仏毀釈で不要とされた寺院や、版籍奉還で廃城となった施設などが利用されたが、信州では758校にのぼった。しかも、人口はほぼ均等なのに中南信地方が537校、東北信が221校で、大きな開きがあった。

信州では江戸中期以降、寺小屋の普及が広まり、寛政年間（1789～1801）で師匠が6000人を超えていた、といわれる。ただ、教える内容は、実業向きの読み、書き、ソロバンが主で、学制が求める西洋教育の方向と合致していたわけではない。が、当座のぎに寺小屋とその師匠を代用できたのである。

中南信のなかでも、後述するが高遠藩領だった上伊那地方は教育熱が高く、寺小屋は80ヶ所を超えていたという。その一人、旧殿島村（現・伊那市）の那須竜州は、187

6（明治9）年、門弟18人を引き連れ、西駒ヶ岳、つまり木曾駒ヶ岳（2956m）に登っている。

私は中南信地方の寺小屋の密度が高かったのは、京都と江戸を結んだ中山道と、それ以前の東山道が同地方を縦断していた経過が、かなり影響しているのではないかと考えている。

明治と昭和初中期の著名作家・島崎藤村は、中山道木曾11宿の西端、馬籠宿本陣に生まれた。父親らの生き方を綴った大作『夜明け前』で、旅人の往来を通じて知りえる情報が、村人の行動に敏感に反映している様子を伝えている。つまり、生産力の低かった山国信州では、知識の活用を生計の道を頼る機運を芽生えさせていた。明治末以降、東京では信州出身の教員が目立った。2019年、小学校校舎として国宝に初指定された松本市の開智小の模倣洋式校舎は1876（明治9）年、早々と建築された。施設面でも住民の協調があつたことだ。

博物見分と体育の合体授業

こうした信州社会の教育重視の風潮が根付いていたとはいえ、にわかには教員に仕立て上げられた若者たちは、授業の進め方についての指針が定まっていなかっただけに苦心

した。なかでも体育と博物（現在の理科、地理、歴史などの総合）には、各校とも試行錯誤を強いられたようだ。

例えば体育授業には、明治10年代から「隊列行進」が取り入れられた。モデルは歩兵訓練の兵式体操。隊列を組んで学校近くの神社仏閣、河原などへ行進、休憩後に帰校する。これがのちに距離を延ばして「遠行運動」になり、同20年代には「遠足」として定着した。山国信州では、その目的地を守屋山（諏訪市、1651m）、烏帽子岳（上田市、2066m）など里山にする学校も出てきた。

ここに至るまでは、「兎狩り」の勢子、「露営」、「雪中行軍」など、地域によってさまざまな試行が報告されている。一方、博物は対象が広過ぎて、年少の学童に何を体系的に教えるのか判断がむずかしい。のちに生物や地理など分野ごとに細分化して、試験の合格者に教員免許を出すように改革されたが、長野師範の教師たちの間では、遠足に理科、地理教育に共通する分野があるとみて、両者を合体して取り組む方策を検討する動きが出てきた。

登山は心身の鍛錬に向いている。苦しい登高の過程で、困難の克服、忍耐力を養い、持久力の向上をうながす——との見方は定着していよう。また、団体行動を通じての助け合い、思いやりの心の養成にもなる。登りながら植物観

察、地質、地形、気象の変化なども体験できる。

長野師範では、こうしたフィールド重視の教育を「直観教授」と呼び、明治10年代から師範生に指導を始めていた。

先駆の教師たち

渡辺敏^{はや}（1847～1930）は福島県の二本松藩士の家系の生まれ。20歳の明治元年、藩士として戊辰戦争に従軍した経歴もある。

が、同5年の学制令により発足した東京師範学校に入学し、同8年の卒業とともに長野県の仁科小学校（現・大町市西小学校）に雇われて訓導として赴任した。当時、仁科小は大町、北安曇地方の中核的存在。赴任の際、バイオリンを持参し、音楽に合わせて学童に体操をさせたり、野外教育を重視し、動植物などの自然観察に力を入れ、たちまち注目の教師になり30歳前後に校長に就任した。

渡辺の仁科小在任は10年間だったが、その間の明治16年、北安曇郡長だった窪田畔夫（1838～1921）と明治16年、白馬岳に登山、翌年には「裏銀座コース」烏帽子、鷲羽岳一帯を縦走している。英人牧師ウエストーンが北アルプスに姿を見せる10年近く前のことである。

一時、家の都合で福島へ戻ったが、信州と合いが良かったのか、1年後には長野小学校長として呼び戻された。

女生徒登山の奨励

長野県の中学校は明治9年、松本深志高校の前身、松本中学校を核として広まっていったが、いずれも男子校で、同29年に長野女子高女（現・長野西高）が開校されるまでは、松本女子師範が長野師範の女子部として併設されていたものの、存在しなかった。渡辺は長野小学校長の職籍で、女子中学校の必要を訴え続け、実現した後は長野高女の校長も兼務し、定年退職するまでの20年間、その任にあった。

長野西高の玄関正面には、渡辺敏の等身大の立像がある。開学者としての顕彰でもあるが、女生徒が健全な子どもを育てるには健全な心身養成が必要との信念に基づき、女生徒にも登山教育の実践を図った経緯も勘案されている。渡辺は明治35年から毎年、長野高女生徒に筒袖の着物に細工した袴を着用させ、ワラジ、白鉢巻の出で立ちで戸隠山や飯縄山登山を実行させた。

さらに同39年からは、夏休みに有志の女生徒を1週間ほどの日程で、東京周辺の見学を兼ねて富士山登山を実施し、全国的に話題を集めた。2校目に開校した松本高女も、同

40年から富士登山を始めた。

学校登山の定着は長野師範の功績

渡辺の実績とは別に、信州の学校登山を定着させたのは長野師範関係者の尽力が大きい。その原点になったのは明治15年から4年間、初代専任校長として欧米の新教育を持ち込んだ能勢栄（1852～1892）だった。

能勢は江戸の幕臣だったが、明治維新後、渡米してパシフィック大学を卒業、帰国後は教育者として学習院教授だった31歳時、長野師範にスカウトされた。校長の能勢が重視したのは理科教育指導者の育成だった。呼応して師範生の間では博物学研究の機運も高まり、まずは上伊那中箕輪小の校長として、同32年、高等科2年生の学校登山を始めた唐沢貞次郎を送り出した。次いで昭和前期まで信州の登山界のリーダーであり続けた矢沢米三郎（1868～1942）、河野齡蔵（1865～1939）の名コンビの誕生につながった。

卒業後、矢沢は昆虫、河野は植物生態の分野を選び、調査研究を続け、いち早く明治26年、渡辺らを交えて「長野博物学会」を立ち上げた。この会は矢沢が東京高等師範に進学したこともあって、一時、休会状態になったが、矢沢

の帰郷後、会長矢沢、副会長河野の体制で活発に動き出す。

なかでも白馬岳を中心にした河野の高山植物調査は、幾つかの新種発見や見事な花畑の紹介で、一躍注目される山になった。東京からは日本山岳会創設メンバーの植物学者・武田久吉らが、長期間調査に従事するきっかけになった。河野は試験で師範の博物学教師資格を認定されるなど、写真撮影、模写、製図などの技術を独学で習得し、信州の史跡、名勝、記念物調査員にも指名され、皇室関係者のガイドも晩年に至るまで用命された。各地の学校に教材として造られたロックガーデンは、河野の設計によるものが多い。矢沢には長野師範の女子部を明治38年、松本女子師範として分離、独立させた功績がある。校長は矢沢、そして教頭には上伊那農校長だった河野を呼び寄せた。むろん、女子教員養成の過程で登山を実施、河野の女師範生の白馬岳登山などの写真は、今でも使われる。

矢沢、河野コンビは、明治期、信濃山岳研究会の設立を経て大正8年、信濃山岳会へと発展させていったが、いずれも正、副会長はこの2人だった。

「聖職の碑」、西駒ヶ岳の遭難

西駒ヶ岳（2956m）で大正2（1913）年8月2日、地元の中箕輪小（現・上伊那郡箕輪町）高等科2年生（現中学2年）9人と、引率の校長、OBの2人が死亡した学校登山での大遭難は、作家・新田次郎の『聖職の碑』^{いしよみ}で広く知られるようになった。

新田の著作は大筋はたどっているもののあくまで小説で、直後の長野県当局の調査などと相違点がある。ともあれ、この遭難が教育界に巻き起こした反応は大きく、以後、学校登山にはさまざまな対応が取られるようになった（注：上伊那地方では甲斐駒ヶ岳を東駒、木曾駒ヶ岳を西駒と呼んでいる）。

遭難の概要

中箕輪高小から、将棊頭山（2736m）経由で西駒ヶ岳へ至る北側からの登山口、内ノ萱までは10km以上ある。一行は午前9時ごろから登り出しているのので、バスなどのない時代、午前5時ごろ学校を出発したのだろう。

参加者は生徒25人、41歳の赤羽長重校長ら教師3人、OB9人の計42人。午後3時ごろ将棊頭山まで登り、休憩後、

宿泊予定の頂上まで1時間ほど手前にある伊那小屋へ同6時ごろ着いた。

小屋といっても当時は、四囲を石積みで囲ってあるだけで屋根はない。標高2500m前後から上部は屋根板に使える大木は自生していないからだ。利用者は、周辺のハイマツや持参した着ゴザで天井部を覆うのが通例だった(注:『聖職の碑』では屋根は前の利用者が燃やしてしまっていた、と解説)。

一行が夕食を取り終わった頃から風雨が強まり、にわか屋根はたちまち破れ、雨もりで全員がずぶぬれになった。台風の襲来だった。

赤羽校長は上部の木曾小屋へ避難を考え、教師を偵察に出したが、闇と風雨でルートがわからず、対処に窮しているうちに生徒1人が凍死。やむなく教師1人を地元へ救助依頼に向かわせる一方、翌早朝から下山を始めた。しかし、荒天と生徒の体力差で隊列はすぐに散り散りになった。赤羽校長は最後尾で、弱った生徒を抱え、背負いながら下ったが、途中で力尽きた。

27日午後から救助依頼を受けた入山口の内ノ萱、天狗の集落は、住民を緊急動員して3日間ほど救助活動にあたったが、最終的に赤羽校長、生徒9人、OB1人の犠牲者を

出す結果になった(ほかに負傷者、後日発見者もあり)。

遭難結果への受け止め

直後の信濃毎日新聞に目を通すと、以下のような記事に見当たる。

▼県学務課長 登山は教育上の価値がある。父兄には気の毒だが、今回は全くの天災でいたし方ない。天気予報も確知できなかった。赤羽校長にはとがめるべき点はない。

▼某同課僚 富士山のように(山小屋)設備のあるところはともかく、8000尺(約2600m)の高山で露営登山は危険だ。高小生を対象にしたことが、そもそも誤り。

県の担当課のなかでさえ見方が割れていたことがうかがえるが、新聞論調も「登山の気風を減じてはならぬ」「冒険思想に打撃を与える懸念が心配」とする擁護派と、「身体の十分発達していない高小生らに、程度を超えた登山は暴挙」とする批判派に二分した。

ただし、民間の著名岳人の間では「露営の予定なのに人夫(兼案内人)を1人も付けなかったと聞く。山での炊事、焚き火などに少年は耐えられないこと位、わかまえていなかったのか」(百瀬慎太郎)、「(食料、寒気対策など細かく注意事項を並べたうえで)さほど恐れることはない。ただ



今も現役使用されている将基頭山の西駒山荘石室



西駒遭難の遭難記念碑前で、左が筆者、右が白鳥伊那市長

露営はできるだけ避け、小屋利用をすすめる」(河野齡蔵)と、擁護に軸足。いずれも学校登山自体を否定する見解はうかがえない。

県から調査に派遣された視学は、関係者から4日間の聴取を行なって文部省に報告する復命書を作成した。私はそれを読んだわけではないが、この遭難の研究者らの論文から判断すると、①予想外の猛烈な台風だった ②露営の学校登山は、当時、一般的風潮 ③赤羽校長は事前に詳細な計画を練り上げ、準備、注意を怠ったわけではない ④校長は死を賭して生徒の救命に当たった、などが骨子とみられる。

県の最終判定は、赤羽校長の責任は問わず殉職扱い。中箕輪村は村葬を行なった。

しっかりとした山小屋を

河野らの主張もあったが、教育界、地元、世論の結論は、「しっかりとした山小屋さえあれば、防げた遭難ではないか」ということだった。

遭難1ヶ月後、登山口の内ノ萱、天狗両集落の住民14人は連名で「登山道の改修と山小屋建設は自分たちの責任」とする建設趣意書を周辺町村や教育関係者に提出し、募金

を求めて立ち上がった。

これに伊那谷の人々や「遭難記念碑」の建設を発表した上伊那教育会、信州一円の教育関係者が呼応した。建設資金は短期間に予定額を超え、3万余人から800円以上集まった。住民は総出で労力奉仕をして、翌大正3年夏には将基頭山の上部500mにある巨大な自然石を利用して、「遭難記念碑」と彫り込んだ。あえて「記念碑」としたのは、深く記憶に留め、将来への戒めとする考えからだった。

山小屋造りは、水場が近くにある将基頭山直下が選ばれ、翌々年の夏に完成した。平屋で間口2・5間(7・5m)、奥行5間(15m)の石室。1m余の中央の通路をはさみ、両側は休み場。屋根は運び上げた厚い板を重ね、その後トタンをかぶせた。

信州の山では、登山者の増加にともない、大正8年から、県が白馬、大天井、赤岳など10ヶ所に、河野らが設計した石室を造り始めたが、現在、なんとか形を留めているのは志賀の岩菅山のみだろう。しかし、将基頭山の「西駒山荘」は現役のまま。2016年には、国から登録有形文化財の指定を受けた。割り石名人が、近くで切り出した花崗岩を厚さ20cm×横50cm×縦30cmほどに約200個そろえ、安定了した石積みにしたからである。

信州の学校登山は、西駒遭難後、一時的に「夜間登山」が流行した。出発を夜半の2時、3時にして、山中で天気が崩れた場合引き返す余裕を生み出す試みだった。しかし、「夜間では観察できない」「強行軍になる」などの批判から、程なく取りやめになった。

西駒登山に集中する上伊那の高小の間では、各校教師の下見実施と、その情報を上伊那教育会に報告し、総合判断のうえ各校に通知する方式が定着した。これは現中学校にも伝承され、市町村ごとに学校登山用を想定して建てた山小屋の整備もあって、大きな遭難は発生していない。

学校登山の隆盛と変質

信州の学校登山は、先述したような経過と試行錯誤を重ねて発展してきたが、全県下の小・中学校で全面的に定着するに至ったのは、以下に紹介する教科書や戦中、戦後の時局との関わりも大きく影響したと思われる。

国語読本と初等科国語の白馬岳と燕岳

私は、日本が第2次世界大戦の無条件降伏を受け入れたとき、国民学校5年生だった。夏休みが明けて登校し、授

業で真っ先に命じられたのは、国語の教科書の先生が指示する箇所を墨で塗ることだった。塗っても活字は浮き上がった、読めないことはなかったのを記憶している。

その教科書には「十三 燕岳に登る」があった。〈「出発」。山田先生の声が中房温泉の庭に勇ましく響き渡った。午前七時である〉に始まる一文は17ページに及ぶが、今でもこの一文を覚えてるのは、黒塗りの対象外だったからと見える。一文は戦争礼賛とは関係ない。戦後の教科書にも採用されていたはずだ。

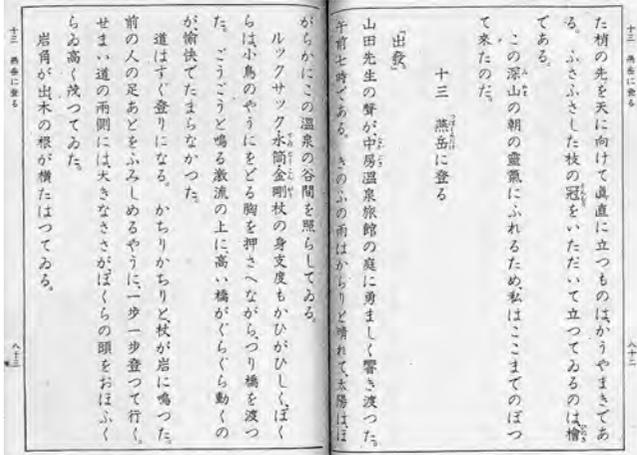
登山の奨励文はもう一点、大正7年から発刊された『国語読本』の6年生用に「白馬岳」がある。

〈雪渓は谷を埋めた雪の坂で、ふもとの村から三里ばかり登った所から始まって、頂上近くまで続いゐます。幅は二、三町で、長さは一里近く……〉、〈お花畑は雪渓を登りつめた所にあります。珍しい高山植物が紅、黄、紫と咲き乱れて……〉

この作文は明治31年、河野齡蔵の白馬岳植物調査に同行した岡田邦松という大町小の若い訓導（当時24歳）から聞き取った形式で、7ページにわたり紹介されているが、昭和13年に『国語読本』が改訂で「燕岳に登る」を採用するまで使用されていた。全国の小学生に登山の醍醐味を教え



文部省の「國語讀本」



『初等科國語』の中の「燕岳に登る」

たわけだが、地元信州の教育界には学校登山の、必修化をうながす潮流になった。

沢柳政太郎の林間学校

今では余り知られていないが、沢柳政太郎（1865）も大きい。彼は文部官僚で次官、東北大、京大総長などを歴任し、退任後、民間の成城中学校長を引き受けた。その

目的は自然教育の実践。懇意にしていた中房温泉の協力で大正6年、温泉地内に林間学校宿舍を建て、夏休み期間中の3週間ほど、生徒たちを学習させるかたわら、燕岳日帰り登山2回、1泊2日で燕ヶ岳縦走など、積極的に学校登山をすすめた。

成城学園中学のこの伝統は、現在も継続されているが、都会の中学生が槍ヶ岳まで1日で縦走する強行軍は、地元組を刺激した（注：現在は1泊2日に変更）。今でこそ、登山者には山小屋の早出、早着を求めているが、往時は日没まで、時には夜間の歩行もさほど異常視されていなかった。沢柳は信州各地で講演を依頼され、心身鍛錬に登山の効用を説いている。

シンボルになった燕岳登山

信州は山国である。長野市と松本市の平地部にある小中学校を除き、大半の学校は近くに2000m前後の山を背負っている。学校登山の普及は、まず地元への挑戦から広まった。

といっても、教科書に掲載された白馬岳と燕岳は別格だった。特に沢柳が力を入れた燕岳は、水力発電所建設に伴い年々、中房川奥地への車道の開発が進み、中房温泉ま

で入りやすくなった。燕岳が学校登山のシンボルの山になった背景にある。

燕岳の稜線には百瀬慎太郎の親友、赤沼千尋が大正10年、「燕ノ小屋」を開業した。が、規模は50人収容が限度で、集団登山の受け入れは難しかった。そこへ帝国ホテルなどを経営していた大倉財閥の2代目大倉喜七郎が登ってきて、千尋の手柄を気に入り、千尋の夢だった本格的な本場アルプス並みの山小屋建設にあつまり同調し、当時としては破格の7万円の資金を提供してくれた。

昭和11年に完成し、今も現役として機能している本館は約600㎡。これ以来、名称も燕山荘としたのは、こうした経緯がある。造りが上高地帝国ホテルと似ているのは、設計スタッフが同じだからである。

収容力がアップすると、学校登山も1泊2日にする傾向が高まった。特に山では神秘的な日の出、日の入りの光景は登山者の心をつかみ、戦後の登山ブーム期からは増築につぐ増築。昭和40年前後の最盛期は、燕岳だけで約60校8000人がやって来た（小学校を含む）。

燕岳の8合目、合戦小屋までは中房温泉下部から荷上げ用リフトが架設されている。戦時中から小屋への食料などの荷上げは、燕山荘と親密な韓国グループを中心に行

なっていたが、ボッカだけでは食料などの荷上げをまかないきれず、特別に国立公園内に架設を認められたのだった。

昭和30（1955）年前後から平成20（2008）年ころにかけて、信州の学校登山はほぼ100%に近い中学校で2年生を中心に実施していたとみられる。学校登山は信州教育が生んだ「教育文化財」と訴えるのは、こうした一連の経緯から理解いただけると思う。

それが、平成期後半から徐々に実施校が減り始め、対象の山もロープウェイやバス利用で、安易に登れる山への変更傾向が顕著になってきた。増えた山は、北アルプスでは乗鞍岳、唐松岳など。逆に白馬岳、常念岳、槍ヶ岳などはめっきり減った。定番だった1泊2日の日程も、日帰りが目立ってきた。燕岳に至っては、コロナ禍以前の2019年はたった2校のみ。この大激変の背景については、次項で詳述する。

学校登山急減の背景と対応策

長野県山岳総合センターは、登山や自然教育の指導にあたる小・中学校教師を主な対象として昭和44（1969）年、大町山岳博物館の下段に建設された。当然、主管は県

教育委員会だった。ところが、15年ほど前から主管は県観光部に移った。

観光的に変質した登山者動向

60余年前、私が松本警察署担当の駆け出しの新聞記者になった当初は、雪が積もり出す11月から3、4月にかけては、大学山岳部の遭難が頻発した。槍・穂高を中心に、疲労凍死や雪崩でパーティごと遭難し、3、4人から10人近い大学生が次々と犠牲になった。ひと冬に東大から始まり、早、慶の遭難合戦も。北鎌尾根の天上沢では、専修大の雪崩による大遭難があった。

長野県警が遭難統計を記録し始めたのは、昭和29年からだ。だが、同30年代半ばまでは、20、40件前後だったと思う。が件数に比して死者の数は多かった。雪崩が原因の遭難が多く、次いで、大雪に閉じ込められたパーティの救出が目立った。夏場は岩登りが全盛。屏風岩や滝谷では登攀の順番待ち。岩壁での転・滑落。宙釣り遭難も珍しくなかった。〈娘さんよく聞けよ 山男には惚れるなよ 山で吹かれりゃ 若後家さんだよ〉のざれ歌が流行したのもうなずきよう。へりも利用できなかつた時代、遭難救助は手間もカネもかかった。同僚の山岳部、社会人山岳会では表沙汰に



爺ヶ岳から種池方面へ下山する学校登山者



西駒ヶ岳へ登る伊那地方の中学生たち

しない救助もあり、軽度のケガが統計に扱われない傾向もあった。

こうした登山動向が昭和末期ごろから、にわかに変わり出した。登山者年齢が年々高まり、中高年が中心になった。敗戦時から昭和50年前後までの若者のスポーツは、せいぜい陸上、水泳、野球、バレーなどに集中し、安上がりで手軽に楽しめる登山が人気だった。しかし、経済が安定し、多様なスポーツの普及とともに、中・高校の部活は細分化した。

その中で苦難を伴う山岳部離れは、いち早く進んだ。伝統を誇る大学山岳部でさえ、存続の危機に見舞われた時期があった。社会人の登山も難ルートへの挑戦は下火になり、高齢化とともに登頂を必ずしも目指さず、自然観察や、山小屋、キャンプ生活を楽しむ人たちが増えてきた。いわば登山行為が観光化してきたのである。

入山者の呼称も、登山家から登山者、そして近時は登山客に。山岳総合センターの所管換えも、時局の変化がベースにある。

体格と体力のアンバランス

この半世紀、日本の若者の身長は平均10 cm以上高くなっ

たのではないか。スポーツの各分野のトップは大幅に記録を更新しつつある。敗戦直後、世界記録を次々に更新した水泳の古橋廣之進が注目されたが、近時は女子選手でさえ古橋の記録を上回る。

その反面、全員ではないが中・高生の体力の弱さが表面化した。往時は小・中学生らが登ったコースを中・高生らがあえぐ。基礎体力が鍛えられていないのだ。室内でスマホなどに日常、興じている時間が多いからだろう。

教職員の履歴も変わった。30年ほど前までは、県教員は圧倒的に長野師範を継いだ信州大教育学部出身者が占めた。が、昨今は半数以上が他県の大学出身者とみられる。つまり、小・中時代、学校登山を経験していない。安易な日本百名山の美ヶ原すら登ったことのない教員もいる。加えて日常の事務的業務も増えた。学校登山に経験のある教員の高齢化も進んだ。

一方で、保護者の遭難への警戒心は、昭和42年の松本深志高の落雷遭難（11人死亡）などから、危険度が高いとみる認識が定着している。近時の遭難件数が長野県下だけで300件を超える年もあるので、その懸念も理解できる。

しかし、往時と昨今では遭難の質が違う。近時は7割方が50〜60代。しかも原因が格段と整備された登山道での

転・滑落、道迷い、病気が大半だ。携帯スマホで安易にへの救助要請をするので、件数が増える。

山小屋や一般登山道は、昭和中期と比べものにならないほど整備が進んだ。発電施設の普及で電灯、食事は里と変わらず、トイレの改善は目覚ましく、浄化施設併用の便座式が広まっている。人気コースの登山道は危険箇所のおお半分にハシゴ、ロープが設置された。にもかかわらず遭難が多発するのは、体力や反射神経が衰えた高齢者の登山が圧倒的だからである。学校登山でもケガ程度の遭難がゼロというわけにはいかない。が、落雷遭難はさておき、この半世紀、死者を出したケースはほんの数件に過ぎない。

「学校登山をすすめる会」の呼びかけ

長野県山岳総合センターの委託運営を始めた県山岳協会は、この10年来、各種講習会を開くかたわら、200校近い中学校と一部の小学校を対象にほぼ毎年、学校登山の実態をアンケート調査をしている。その資料や県教委の見方だと、平成22年度までは90%を超えていた中学の実施率は、1昨年の令和1年、60%を割り込んだ。新型コロナウイルス禍が本格化した昨年は、予定通り実施したのは2校のみで、16校が日帰りや対象の山を変え、大半は中止していた。今年度



最近、人気上昇の唐松岳への学校登山を見守る中川恵市・唐松岳頂上山荘管理人

の実施予定校は35%前後で、未定校は13%だった。

学校行事は一度中断すると、年次計画との関連で再開には手間がかかることされる。信州の「教育文化財」ともいえる学校登山が、存続の瀬戸際にあるとみて、私は信濃毎日新聞の紙面で実情と貴重さを訴えた。

これに登山界や教育、行政関係者らから呼応する声が届き、今年2月、各界、各地区の山岳通10人が呼びかけ人となって「信州の学校登山をすすめる会」が発足した。年配なので私が会長に推されたが、現役の伊那市長（会長代理）やJAC役員や県山協会長、山小屋経営者、医師、現役中学校長ら多様な顔ぶれになった。

会ではまず、教育関係者、保護者を中心に、登山の教育価値、学校登山の安全性の確認と、体力差が見られる生徒をより参加しやすいコースや支援体制づくりを目指して具体的提案をすることにした。

その最初の行動として県教育長ら幹部と面談、①教職員
の登山研修会参加の支援 ②6～7月に偏っている登山の
実施時期を初秋も含める ③コースも全校同一ではなく、
体力に応じて柔軟に設定 ④ガイド、医療関係者の同行を
広める ⑤これらの関連資金や、地域、保護者負担の軽減
に自治体の協力を、などを訴えた。県側は共に協力して実

行案の検討を示したが、呼びかけ人はその後、自己の専門分野での活動を広めている。

日本の最近の若者は、欧米などに比べ冒険心、挑戦意欲が低く、縮み志向とみる声がある。既知の習得より、個人的に新分野に挑む姿勢が時代を拓く、との認識が定着している。欧米とは真逆だとする。克己心の養成と仲間へのいたわり、自然や社会の理解も得られる学校登山は、経験者が時を経て自覚するところである。

小島烏水が遺した飛驒に関する著作

木下喜代男

はじめに

明治期、小島烏水は飛驒に並々ならぬ関心を寄せているが、そのきっかけは志賀重昂の『日本風景論』第6版である（「山の書籍国を行く」）。

志賀は明治29（1896）年5月、富山から飛驒に入り、高山の町に遊んで紀行文「飛驒に入る記」を書き、「飛驒の山水に秀絶せる此の如し、我れ詞人書客の此処に遊ぶ者特に少なきを憾とす、請う飛驒に遊ばん哉」と結んでいる。

小島はこれを読んで以来飛驒が憧憬の地になり、その後登山の往復に何回か飛驒に入って、実に多くの飛驒に関する著作を遺している。20篇以上になるその内容は、紀行文に織り込まれた地理、地質、気候など専門家まがいの自然

科学的なことだけでなく、歴史、民俗など多岐にわたり、傍証の博引には驚くばかりである。

以前『山岳』第112年で、小島と親交があった飛驒の岳人のことを紹介したが、小島は文芸雑誌『文庫』の記者時代に飛驒の文学青年たちとも交流があり、著作のための情報はすべてそれらの岳人、文人から得ていた。

飛驒の文学青年たちとの交流

周知のように、小島は若い時から文芸批評家としても知られていた。横浜商業学校時代に文学仲間と雑誌『学燈』を刊行するなど、早くから文筆活動に興味を持ち、青年文学雑誌『文庫』に評論を投稿していた。そのうちの「一葉



『日本風景論』第6版

『女史』が高い評価を受けて『文庫』の記者として採用され、銀行勤務のかたわら活躍していたこともよく知られていることだ。23歳の時であった。

『文庫』は、山県悌三郎主宰の投書雑誌『少年文庫』を前身とし、明治28(1895)年8月に創刊された青年文学雑誌。明治43(1910)年に廃刊されるまで、河井醉茗・伊良子清白・横瀬夜雨ら文庫派と呼ばれる多くの詩人を育成した。

当時『文庫』は、一高生徒の愛読雑誌調査によると、『太陽』『帝国文学』に次いで第3位に位置を占めるほど人気があった。

あった。

小島の仕事は、週2回発刊の『文庫』に投稿があった論文、紀行文、小説、詩歌のほか雑文にいたるまで閲読して、詳細な評論を書くのが主なものであった。そして当時、全国各地にあった『文庫』の誌友会に属する文学青年の指導も受け持ち、文章作成の手引書まで作っていて、いわば兄的な存在になっていた。

当時、飛騨高山にも「斐太禿筆会」という誌友会が結成されており、飛騨一円の文学青年が集まって創作活動の情報交換を行ない、『文庫』へ投稿して小島などの評を受けていた。

この頃の小島は、与謝野鉄幹の『明星』に創刊号から寄稿を続け、大阪や名古屋の文壇ともつながりを持つなど、青年文壇の一翼を担う知名人になっていた。

小島は、明治32(1899)年12月の浅間山登山、木曾周遊の旅の途中、稲倉峠で槍ヶ岳や乗鞍岳など飛騨山脈を遠望してから、さらに登山に傾斜してゆく。

小島は明治33(1900)年10月に乗鞍岳へ登るため、岡野金次郎と名古屋から高山入りをしている。

10月7日、名古屋では誌友の余語琴雨に迎えられ、市内見物のあと岐阜へ向かう。岐阜では誌友・神戸春醉宅に泊

まる。近傍の誌友が集まって歓迎の宴が催された。

翌日から歩いて2日ばかりで高山へ到着。高山では、「斐太禿筆会」の盛大な歓迎会が宮川べりの料亭「月波楼」で開かれた。

酒席で田島杉溪（*1）という青年画家に栗々坊主に毛が5〜6本の似顔絵を描かれ、「元山に薄（すすき）多からぬ恨みかな」などという句を返したり、芸者の歌を聞いて和歌を12首詠むなど、この夜の文学青年たちとの懇親会はずいぶん楽しいものだったようだ。

翌日、誌友である平田山栗（*2）の書店に寄って地質図などを買ひ、一位細工や植物の標本をもらった。そして、曾我耐軒の『幽討余録』上下2巻を借りている。町外れまで平田の見送りを受けて、8里の道を歩いて平湯へ。

平湯では彦助宿に2泊したあと、宿の主人を伴って乗鞍岳に登頂。平湯温泉滞在中に、平田に借りた曾我の飛驒紀行『幽討余録』を読む。新しい紀行文家を目指していた小島にとって『幽討余録』は、荻生徂徠の『風流使者記』と並んで重要な書であり、のちに「曾我耐軒伝」を書いたほどであった。

この後2人は高原川沿いに船津から富山へと下り、船で直江津へ渡った。この時の紀行文は「飛驒縦断記」として

『文庫』に掲載された。

明治35（1902）年8月には、3年前、稲倉峠で遠望して以来念願になっていた槍ヶ岳に登頂することができた。そのあと高山へ寄り、さらに白川村方面へ周って白山に登る予定だったが、日程的に果たせなかった。

高山の誌友のなかでも特に親しく、いつも飛驒の資料を提供してくれていた前出の平田山栗へ、「10日に横浜をたち、槍ヶ岳へ登頂した後14〜15日には高山へ寄る」との連絡をしていたため、「斐太禿筆会」会員一同が、16日に松泰寺に集まり、終日小島を待っていた。

しかし、登頂に日にちを喰ひ、蒲田温泉へ下山したのが17日となってしまった。電話もない時代のことなので連絡も取れず、小島たちはそのまま高原川沿いに富山へ抜けてしまったのである。

このため待ちぼうけを食った会員から、後日、小島へ抗議文が送られた。この違約に対して小島は、前人未踏の地への探検であったので、日程が狂うのは当然などと苦しい言い訳の手紙を書くなど、ひと悶着があった。

なお、この時の小島の文は、「第3回斐太誌友會禿筆會への手紙」として『文庫』第21巻の第2号（明治35年9月）に収録されている。

その前年、乗鞍登山をもとに文献資料を交えて書かれた飛驒の概説「飛驒山水談」についても、誌友会員から内容が大風呂敷だとの指摘が出されている（内容は後述）。

もともと『文庫』は、記者と文学青年のはばかりでない自由な筆戦を受けて活況を呈していたので、これらのやりとりはごく普通のことであつたとも思われる。

この槍ヶ岳登山は近代登山の先駆的な記録となり、その紀行「鎗ヶ岳探検記」は高い評価を得て、小島は『文庫』の関係者から「山博士」の異名をたてまつられ、ますます登山にのめり込んでゆく。

そして日本山岳会発足以降、年3回発刊されていた機関誌『山岳』の編集にも携わることになる。

時を同じくして『文庫』の方は、新旧編集者の対立などで内紛があり、改革ができないまま明治43（1910）年8月15日付の通巻244号で廃刊になった。

この頃の小島は、文芸批評家から「自然を描く文学者、山の紀行文家」として認められ、『文章世界』における文壇十傑選では、小説家の島崎藤村、戯曲家の坪内逍遙、詩人の北原白秋、歌人の与謝野晶子などと並んで、紀行文家の筆頭にあげられているくらいであった。

（*1） 本名稲三。山本芳翠に日本画を学ぶ。斐太中学の教

師。校章をデザインする。

（*2） 本名篤松。飛驒電灯社長。高山商工会初代会長。高山銀行重役。郵便局長。県議、市議を歴任。

飛驒叢書などへの投稿

日本山岳会が設立された3年後の明治41（1908）年に飛驒山岳会が設立された。

その翌年から飛驒山岳会員の住廣造、古瀬鶴之助、上木甚四郎など10名近くが次々と日本山岳会に入会し、飛驒山岳会自体も団体入会している。この時期、登山活動の方に比重を移してはじめていた小島は、飛驒在住の日本山岳会員とも交友関係を結んでいる。

『山岳』第112年にも書いたが、そのうちいちばん親しかったのは住廣造（会員番号193）だった。住は、日本山岳会入会当時高山の二三之町で書店、両替店を営んでおり、飛驒山脈を広く歩いて写真を撮り、絵はがきを作成して販売もしていた。

住は、飛驒に遺る江戸期からの多くの書籍、地図を東京まで送って印刷製本をしたが、その数は30点以上にのぼる。主なものは、『飛州志』、延享3年に代官所の地役人・上

村木曾右衛門が書いた『飛驒国中案内』、地役人・富田礼彦

著の『斐太後風土記』、『運材図會』、『飛驒山川』、『飛驒遺乗合府』で、飛驒の歴史を知るうえでたいへん貴重なものばかりだ。そして、これらのほとんどは、住と親交があった小島に贈与されている。

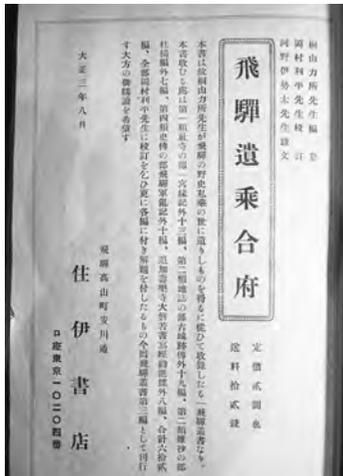
このうち小島が序文を寄せたり、書評を書いたりしている書籍は以下のとおりである。

住は飛驒叢書第一編として、明治42（1909）年に『飛州志』を出版した。これは徳川八代將軍吉宗の命で天領飛驒の代官・長谷川忠宗が、治政の資料として飛驒の諸事、諸物を調べ、纏めたものだ。

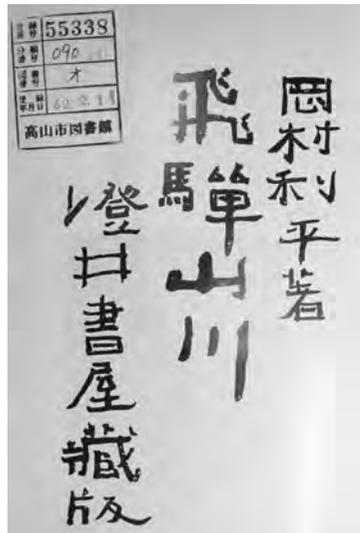
この『飛州志』は、小島が『山岳』第3年第3号（明治41年10月25日発行）の「雑録」の項で、「飛驒叢書の出版」として内容を紹介している。この頃から小島と住の交友が始まったと思われる。

住は、明治44（1911）年11月には飛驒の郷土史家・岡村利平編纂の地誌『飛驒山川』を出版した。

『山岳』第112年でも紹介したが、『飛驒山川』の巻頭には、日本山岳会創設メンバーの高野鷹蔵が撮影した笠ヶ岳の写真が載せてあり、題辞として志賀重昂が自筆の漢詩を寄せている。それは志賀がスイスで詠んだというもので、「鴻爪雪泥幾往還 安南之海瑞西山 半生著述何邊獲 多



『飛驒遺乗合府』



『飛驒山川』

在風袵雨笠間」そして「飛驒本邦之瑞西也 偶録舊製代飛驒山川題詞」としたためである。

次に小島が序文(『山岳』第112年に掲載)を寄せ、本文「山嶽」の項には、23ページにわたって「飛驒山脈風景論」を書いている。

この時期、主著『日本風景論』がベストセラーとなつて全国的に有名になつていた志賀重昂の題辞があつたためか、初版本はたちまち売り切れた。志賀が一地方の出版本に自筆の題辞を寄せた経緯は、住が直接依頼したのか、小島を通じたものなのか、よくわからない。

明治27(1894)年発刊され14版まで版を重ねた『日本風景論』は、第4章に「登山の氣風を興作すべし」と題した長文があつたため、当時の青年の登山熱に火を付け、木暮理太郎や小島烏水なども大きい影響を受けたことはよく知られている。

小島は初版が出た時には書生の身分で手が出ず、第6版になつてようやく購入でき、貪るように読んだという。その3年後、志賀に署名を依頼したら、『飛驒山川』にも寄せた七絶中の転結「半生著述何邊獲 多在風袵雨笠間」を墨書してもらつた。なお、大切にしてきたこの署名本は、米国からの帰途盗難で失くしている。

その後、大正15(1926)年に『改訂飛驒山川』という小型版が出た時は、志賀の題辞、小島の序文とも削られていて小島はたいへん残念がつている。

なお旧版、改訂版ともに、高頭仁兵衛の乗鞍岳登山記(『山岳』第1年1号・「飛信界の乗鞍岳」から抜粋)と、小島烏水の「溪谷の四季」「鳥々谷」が載せてある。

高頭は、その後も小島とたびたび高山を訪れて住と交流しているので、この転載は住の依頼に応じたものであろう。

飛驒叢書の第3編は、大正3(1914)年9月に出版された桐山力所著、岡村利平編の希少本『飛驒遺乗合府』であつた。これは安政5(1858)年に高山の桐山が、野史、私乗の世に遺つたものを書き記したものだ。

この本は、日本山岳会員に送料12銭の負担のみで贈与するとの広告が『山岳』第10年第2号(大正4年12月27日発行)の会報欄に掲載され、小島ほか多くの会員が恩恵に与つた。

住の依頼で、小島はこの『飛驒遺乗合府』の書評を飛驒の郷土史研究会「史談会」の紀要『飛驒史壇』第1巻第7号(大正4年4月)に載せている(『山岳』第112年に掲載)。そして地方にいて浩瀚な大冊を次々と発行する住に対し、都会人でもなかなかできないことだと賛辞を送っている。



【飛驒史壇】

この書評は、『山の風流使者』（昭和24年7月1日・岡書院発行）にも収録されている。

なお、この『飛驒史壇』は住が編集、印刷を受け持っていた。小島はその後飛驒のことをいろいろ書いているが、この『飛驒遺乗合府』はじめ、住の発刊した一連の飛驒叢書に依ることが多かった。

住はそれまで印刷を東京の会社に依頼していたが、自ら印刷所を持つことにし、大正8（1919）年「斐太中央印刷所」（のちに斐太中央印刷株）を設立した。

小島の双六谷探検

小島は大正3（1914）年の夏、双六谷探検のため飛驒入りする。のちに日本アルプス登山黄金時代の掉尾を飾ったといわれた山行である。

この探検行のため、住は登山口・上宝村の有力者などへ事前に協力依頼をしていたため、村あげての協力体制が敷かれ、まことに大がかりなものになった。

入溪前の8月1日、高山で開催された講演会も住がセツトした。来場者は約300名。演題は、「飛驒山脈の自然としての高貴性について」であった。

8月2日高山から上宝村本郷へ入り宿泊。

8月3日入溪。同行は飛驒山岳会員で教員の中野善太郎はじめ6名と、ガイドは猟師・高田勘太郎、大倉弁次はじめ6名であった。

一行は、8月6日に双六谷源流の双六池に達し、その足で双六岳に登ったあと笠ヶ岳への稜線で露宮。翌日、笠ヶ岳へ登ってから穴毛谷を下山し、蒲田温泉に泊まって登山の成功を祝った。

この双六谷廻行は、『山岳』第9年第3号（大正4年3月10日発行）の附録に「飛驒雙六谷」と題した詳細な記録を載せている。

これは全行程の日誌のほか、飛驒山脈の地理、地質から説明し、笠ヶ岳のこと、双六谷の位置、伝説、この地方の山に関する方言など多岐にわたって詳しい。今でも双六谷についてこれだけ調べてあるものは見当たらない。

これはその後『書斎の岳人』（昭和9年8月・書物展望社刊）に、「飛驒雙六谷日記」として載せてある。

なお、同行の中野善太郎も『山岳』同号に「雙六谷探検記」を寄稿している。

『文庫』掲載や地方紙などへの投稿

冒頭に書いたように、小島は志賀重昂の『日本風景論』を読んで以来飛驒に関心を持ち、書物で研究を重ねて、明治33（1900）年ころから『文庫』に飛驒に関する記事を載せはじめた。

「飛驒客信」（『文庫』第16巻第1号・明治33年）、旅先から『文庫』の記者五十嵐白蓮にあてた手紙で、飛驒の誌友との交流や平湯温泉の様子、乗鞍登山のことなどが詳細に書いてある。翌年『銀河』（内外出版協会刊）に収録された。

「飛驒山水談」（『文庫』第16巻第4号5号・明治33年）（『文庫』第17巻第1号2号・明治34年）

これは前年果たした乗鞍登山をもとに、文献資料を交えた飛驒の概説であった。

当時あまり知られていなかった飛驒の地形、水系、気候などが詳しく述べてあったため、珍しがられたという。小島は、11月3日に上野公園・韻松亭で開催された東京周辺の誌友の集まり「松風会」で、この内容をテーマに講演し大好評を博した。

後でこの報告を読んだ飛驒の誌友からは、小島のもとへ感想、批評が寄せられている。

前年、歓迎会を欠席した前越千類は、「飛驒を語るのなら、小白川、大白川谷を見てからにしてほしかった。再度おいでいただきたい。」といった趣旨の手紙を書き送っているし、地理、地名などの誤記を指摘している匿名の文も見られる（いずれも『文庫』第12巻に掲載）。

また、誌友会「斐太禿筆会」の新年宴会では、余興の福引で「烏水さんの飛驒みやげ」とかけて景品の大風呂敷が広げられると、それをもたらった今井天邑が、「しらま弓斐太の美哉景を一つ、み大風呂敷をうすゐひろげて」という戯れ歌を詠んだ。

このからかいの理由は、「飛驒山水談」に白川村などのことをあたかも行って見たように書き、末尾に「これから飛

驛山水が飛騨の人文に及ぼした影響に就いて、卑見を述べようとおもひます。次号完結」と書きながら、未完になつてしまつたことにあるようだ。

読書の人小島の博引傍証は驚くべきものであつたが、その考証癖が、粗忽、早飲み込みという性格と相まって、筆が走つてしまうこともまゝあつた。

「乗鞍嶽に登る記」(『文庫』第17巻第4号・第18巻第6号・明治34年)

「奥飛騨」「平湯温泉」「奥飛騨乗鞍嶽の絶頂」に分かれてゐるが、高山からの平湯街道、そして、平湯温泉の様子が詳しく書かれていて面白い。

丹生川村ではじめて乗鞍岳を近くに望み、

「あはれ乗鞍岳よ、威厳ある乗鞍岳よ、昂々然として大丈夫の風貌ある乗鞍岳よ、草枕うたた寝の夢に夢みたるを、今初めて見参に入りたる乗鞍岳よ、快し、明日かの頂に跨りて東山東海を睥睨せむか。」

と、その喜びを表現しているが、この時期、情景描写に誇張が多く見られるのは、少年期から頼山陽や滝沢馬琴の文

に親しんで、身に付いていた漢文脈の影響だ。

また平湯温泉では、当時14軒だったこと、夏期、ここへは300名から500名の湯治客が来ること、混浴のこと、婚姻制度のことなど克明な人文地理的観察を書き綴つてゐる。

この「乗鞍嶽に登る記」は、のちに『山水無儘蔵』(明治39年7月3日・隆文社刊)に収録されているが、その巻頭には、島崎藤村が「紐育に在る我が弟に」として、序文を寄せてゐる。

なお、当時府立三中に在学していた芥川龍之介が、この『山水無儘蔵』や『日本山水論』を読んで槍ヶ岳へ登つたといふ。

「梅村騒動」(『文庫』第17巻第6号・明治34年)

明治2年、飛騨で起きた大規模な騒動について書いている。これは、『飛騨史略』、『一位のしおり』、『相友会誌』、『斐太雑誌』、『斐州』などを読み、知友・奥田喬山から借りた『梅村速水』に依つた。

傑材ながら急進的過ぎて飛騨人の反感を買ひ、失脚した若き梅村知事の悲劇を、飛騨人でもなく歴史家でない小島がよく調べて書いており、この歴史を叙述する力強い文体

も、当時高く評価された。

「葛天氏の民―飛驒國白川村の家族制度」(『文庫』第27巻第1号・明治37年)など。

今では世界遺産に登録され、合掌造りで有名な白川村のことを実によく調べてあるが、小島は實際足を運んでいない。参考にした文献は、雑誌『社会』にあった高木正義「飛驒國白川村の風俗」以外は不明である。

明治36(1903)年には「飛驒縦断記」を『青年界』に連載している。

これは明治33(1900)年10月、乗鞍岳へ登るために岐阜から飛驒の金山に入ってから高山、平湯、そして高原川沿いを富山に出るまでの紀行文である。

「益田川の遡る記」「中山七里の記」「飛驒高山の記」「高原川の記」「越中に入る記」に分かれているが、当時の飛驒の様子がよくわかって面白い。これものに『山水無儘蔵』に収録された。

明治38(1905)年7月には、「飛驒山水談」などを含んだ過去5年間の集大成といえる『日本山水論』を隆文社

から上梓。志賀の『日本風景論』同様日本の国土と自然を称えたものだったが、体験した登山について多く語ってあったため、当時の青年たちに大きな影響を与え、辻村太郎や加納一郎も感化されたという。

明治41(1908)年、地元紙「高山新報」109号(8月25日付)110号(9月5日付)に「飛驒國印象記」を載せている。

この年の夏、高頭式、高野鷹蔵と共に越中から飛驒へ入り、船津で1泊、高山で3泊して、住廣造など飛驒山岳会員に歓待された。

この時通過した飛驒のことを書いたものだが、「産業が見当たらない飛驒は、将来的に飛驒山脈を観光資源として利用すべきだ。船津高山間には人力車しか通っておらず、道路整備が必要。」などと、現代にも通じる多くの提言をしている。そして、古い高山の町並みの保存を訴えており、その先見の明には驚く。

明治43(1910)年から大正4年(1915)にかけて『日本アルプス』4巻が前川文栄閣から発刊された。これは日本近代の出版文化史のなかで画期的名品と言われて

いる。

このうち第2巻には、「日本アルプス風景論―日本北アルプスの境域及び飛驒山脈なる名称」と題し、飛驒は一国の名を冠せられた飛驒山脈を誇るべきだとして、次のように書かれている。

「前略」飛驒山脈なる語は、明治二十一年に世に公にせられた、理學博士故原田豊吉氏の有名なる「日本群島地質構造論」で、初めて新稱として命ぜられたのである。本邦には四國山系、関東山脈、蝦夷山系等、汎稱的山脈の名はあるが、一國の名を冠されたのは、唯一の飛驒山脈があるのみである。

今日では飛驒國は、その春慶塗と二位細工を有するが故に、傳はつてゐるのではなくて、日本最大最高の飛驒山脈を有するに依つて、我々の耳に痛切に響くのである。

私は飛驒の新聞に寄書して、飛驒の國都なる高山町、古川町、船津町が假に亡失したとしても、日本國全體には格別の影響も及ぼすまいが、もし飛驒山脈が消滅しとしたら、日本國土の上には測る可らざるほどに重大な結果を来すであらうと言つたが、日本北アルプス

の全部に、その國名を冠せられたのは、飛驒の大なる名譽と言はねばならぬ。もし日本北アルプスを措いて飛驒を不朽に博へるものが、現今在るといふ人があつたなら、私は先づ其人の眼臉を検査してもらひたいのである。(後略)

『飛驒史壇』第1巻第1号(大正3年8月)には、「山の町」と題して、小島が好み、親しみを感じていた高山の町の美しさを次のように書いている。

「前略」私の考へでは、飛驒高山といふところは、山國の都市に通有する、粗野な、もしくは野蛮なる不快感がない。さうして都市としての色彩も、空氣も、不思議なほど典雅である。落ちついてゐて、一千年の古都にでもあるやうな感じがする。何故といふと、高山町の市街は、盆地の東に偏して市街を作つてゐるが、その市街を宮川が東西に割つて南北に貫流してゐる。その外に、江名子川が町の東部を流れ、屈折して宮川に合してゐるが、要するに、宮川が市の大動脈になつてゐて、繁華なる市は、宮川の畔に建設されてゐる。宮川は京都に於ける鴨河の位置を占めてゐる、河畔に

は楊柳も茂つてゐる、その陰に人家がある、水の都である點に於て、高山は京都に似てゐる、『飛驒之高山』といふ本には、高山町の山川の位置と、風光と、井然たる街衛が、京都の悌を存するため、昔から小京華の稱があると云つてゐる。小京都―高山町の特徴はこの三字で言ひ盡くされてゐる。(中略) ここには他の山岳都市のやうな生硬粗野の悌がない。

古典的な批目春慶塗や、一位細工や、一刀彫や、澁草焼の出来る國、殆んど風が吹いたことがなく、雨の日も横降りがないから、傘一本で衣物の濡れた例がないといふ國、晝間大通りに車の昔の滅多に聞えない國、繪のやうな女のやうな、夢のやうに美しい國、どうして歐洲アルプスに、こんな町があるものか、日本アルプスでさへ外に無いのだもの！

なお、この「山の町」は、同じ時期に『日本アルプス』第4卷(大正4年7月・前川文栄閣刊)にも収録されている。

浮世絵や西洋版画の収集家、研究家としても知られていた小島は、大正4(1915)年2月発刊の『飛驒史壇』第1卷第5号に、「江戸錦絵に描かれる飛驒の山水」を書い

ている。

葛飾北斎の「諸國名橋奇観」に出てくる「飛越の境つりはし」、京伝作の『大磯俄之練物』後編に初代歌川豊國が描いた「飛驒神通川籠渡し」、廣重の「六十餘州名所図会」にある「飛驒籠わたし」など5つの作品を紹介し、それぞれの情景や作品が生まれた経緯などを詳しく解説している。

そして、飛驒の籠渡しや吊り橋をはじめ描いて世に出したのは、飛驒の国学者・津野滄洲と二木長嘯であるとし、北斎は滄洲の絵を参考にしていても書いていて、その博識には驚く。

この「江戸錦絵……」は、『日本アルプス』第4卷(大正4年7月・前川文栄閣刊)にも載っているが、『飛驒史壇』が初出である。

小島の伝記『小島烏水―山の風流使者伝』の著者・近藤信行氏は、「小島の前半生は、大正3年の双六谷探検、大正4年の『日本アルプス』全4巻完成で区切るのがよいかもしれない。」と書いているが、飛驒人との交わりもちょうどこの時期までであった。

小島は大正4年(1915)、社命で日本を離れ、アメリカで11年間を勤することになるからである。



廣重「飛驒籠わたし」

小島の不在で、飛驒在住の日本山岳会員は次第に中央との関係が疎遠になってゆき、住、二木以外は退会する会員が続出している。そして、飛驒山岳会自体も、『山岳』第11年第一号（大正5年10月20日発行）で名簿からの削除が報じられている。

その後アメリカ勤務から帰った小島は、飛驒地方へ出かけることはなかったが、住や旧禿筆会員との手紙のやりとりは続けていた。それらの友人からの情報をもとに、昭和になってから以下の文を書き、変らない健筆ぶりを示している。

小島は西茂住の旧越中西街道上にある凡兆の句碑について関心を示し、『アルビニストの手記』（昭和11年8月・書物展望社刊）に「飛驒山中にある凡兆の句碑」という10ページにわたる研究文を書いている。

小島は何回も飛驒へ訪れているにもかかわらず、この句碑を見損なったことを残念がっているが、「飛驒山中に於ける凡兆の鷹の巢の句碑くらい、四圍の自然と、情景が融合していると思われるものは恐らくない」などと、あたかも実際に見たような書き方をしている。

凡兆は元禄年間、越中から籠の渡しで飛驒へ入ったが、山道があまりにも険阻で日が暮れかかり、その時の情景を「鷲の巢の樟の枯枝に日は入りぬ」と詠んだという。

小島は文学者らしくこの句の詳しい解説を行ない、江戸期にこの句を越中街道上の自然石に刻ませた高山の俳句結社・雲橋社の宗匠・蘭亭歩簫のことまでよく調べている。

そして、歩簫が「蕉門十哲」からもれている不遇の俳人凡兆を、自著に「蕉門十指」の一人として書き、崇めているのは見識が凡でないといたく褒めているが、小島の眼識も凡でない。

『偃松の匂ひ』（昭和12年9月・書物展望社刊）には「飛驒



凡兆岩

笠ヶ岳の早期登山者円空・南裔、播隆」と題した研究文を載せ、「播隆のことはよく知られているが、それより前に登った南裔和尚のことを知るべきだ」とし、次のように書いている。

「私が特筆したいのは、笠ヶ岳の第一登山者は飛驒國高山宗猷寺の南裔和尚が、今より一五三年前の天明三年（丁度浅間山が噴火した年）六月一八日に第一登

山していることだ」

「然るに笠ヶ岳は、日本北アルプス中の高嶺としては、唯一飛驒全領の山である。そして開山の南裔和尚は、飛驒に生まれ、飛驒で入寂し、飛驒に葬られている。飛驒山脈の名に負える北アルプスに、笠ヶ岳なかつたら、そしてその笠ヶ岳に南裔和尚が第一登山者の名を刻まなつたらそれは飛驒岳人の伝統の上に、寂しいことであろう。」

そして、南裔和尚のことを詳しく書いているが、これは前述したように、住廣造からもらった『飛驒遺乗合府』のなかの「高原舊事」、そして、昭和5年9月に「飛驒毎日新聞」に連載された高山の郷土史家・笠原烏丸の「笠ヶ岳とその開祖」という連載記事に拠るところが多かった。

一般の飛驒人は近年になってようやく南裔のことを知ったが、小島は早くもこの時期に、他国生まれの播隆上人より、飛驒の南裔和尚を顕彰すべきだと言っている。

飛驒の山水と人をこよなく愛し、「一国の名を冠せられた飛驒山脈の名を誇るべき」と言い、高山の町を京都のようにに典雅だといちはやく褒めてくれた小島烏水のことを、

飛驒人は今後とも忘れることがないであろう。

〈主な参考文献〉

- 『飛驒史壇』 飛驒史談会
『飛驒山川』 住廣造
『佐久良組の人々』 住 斉
『ふるさとのあしあと』 上宝郷土研究会会報・第五号
『山刀・創立百周年記念特別号』 飛驒山岳会
『飛驒人物事典』 高山市民時報社
『山水無儘蔵』 小島烏水 隆文社
『日本アルプス』 復刻全4巻 小島烏水 大修館書店
『アルピニストの手記』 復刻 小島烏水 大修館書店
『偃松の匂ひ』 小島烏水 書物展望社
『日本登山史』 山崎安治 白水社
『小島烏水全集』 全14巻 大修館書店
『小島烏水―山の風流使者伝』 上・下 近藤信行 平凡社
『山岳』 日本山岳会
『日本山岳会百周年史』 日本山岳会
『志賀重昂全集』 全8巻 志賀重昂刊行会 昭和3年
『日本風景論』 復刻版 日本山岳会

図 書 紹 介

鹿野勝彦 著

『ヒマラヤ縦走——「鉄の時代」のヒマラヤ登山』



本の泉社 2020年6月

A5判上製 425ページ

3500円＋税

1970年代から1980年代、著者が参加した6つのヒマラヤ登山についての興味ある記録である。すでに半世紀を経た物語だが、とりわけ「会心の山」といまでも呼ぶナンダ・デヴィ登山を中心としており、読んでいてこのような内容は今後書かれることがない貴重な記録ではないか、との感慨を抱いた。

鹿野の初めてのヒマラヤとの接点は、小学5年生の時だったという。映画『エヴェレスト征服』を見て、登山の世界に強く惹かれた。都立日比谷高校山岳部に入って5月の連休の3日間、谷川岳の一ノ倉沢でひたすら雪渓訓練をやった。

焚き火を囲んでの最後の夜、コーチで来ていたOBの杉山康之助のひと言が鹿野のその後を決めた。

「お前達、何でもこんなことをやったかわかるか。お前達は将来必ずヒマラヤに行く。この合宿はその第一歩なんだ」鹿野にとって杉山はほんとうに厳しい先輩だった。

「自分に限っていえば、杉山さんを知ることになって以降、彼以外の誰かを怖いと思ったことは、ほとんどない。早世した杉山さんに、面と向かって感謝の気持ちを伝えるなどという機会はなかった」

1965年、鹿野は23歳の時に東大スキー山岳部(TUSAC)のキンヤン・キッシュ隊に参加した。「ヒマラヤに行けさえすれば」という気持ちでの参加だったが、7000m付近で崩落が発生、1人が犠牲になるという遭難が起きた。「私たちはキンヤン・キッシュに挑むにはあまりに未熟だった。換言すれば事故が起きるのは必然であった」と鹿野は書いている。

鹿野は、専攻を文化人類学と決め、フィールドワークを目指しながら「ヒマラヤのプロ」を目指していた。

1970年エベレスト(日本山岳会隊)、1971年チュレーン・ヒマール(TUSAC)、1973年再度のエベレスト(RCC II隊にマネージャーとして参加)。しかし、毎年のように大きな組織の隊員となって自分の役割を見出していくうち、ナ

ンダ・デヴィ縦走に強く惹かれた。

鹿野にナンダ・デヴィ計画を誘ったのは、上智大学山岳部OBの梶正彦だった。梶は69年のインド山行に参加しており、その縁でインド登山財団（IMF）の総裁、サリン氏と親しくなっていた。インドがナンダ・デヴィを開放するとの情報を得て、一緒にやりませんか、と言ってきた。

もちろん、ナンダ・デヴィという山の魅力は大きかった。それ以前に参加していた「チョモランマ（1970年日本山岳会）、チューレン・ヒマール（1971年、東大）、チョモランマ（1973年、第2次RCC）」という、その前5年間に鹿野が参加したネパール・ヒマラヤでの3回の登山隊にかなりのいらだちを感じていた。（2006年6月の日本山岳会会報「山」に鹿野は「ナンダデヴィ・プロジェクトと日本山岳会」という一文を寄せている。）

鹿野は、何にいらだっていたのか。

「まず登山隊ないし隊員の、目的意識のあいまいさ、である」と、鹿野の主張は明快である。

1970年も1973年も「南西壁からの登頂を主目的としてかかっていたが、本当に全力を投入したといえるのか。むしろ、いつの間にか『世界最高峰の頂上に日本人として、だっただいし秋季にはじめて』登頂するといったより安易な目標にすりかえられ、その『成功』に満足してしまっただけではないか。」

ナンダ・デヴィは、インド北部のガルワール・ヒマラヤの東に位置する双耳峰だ。主峰（西峰）は7816m、東峰は7434mで2つの峰の距離は3km。名だたるヨーロッパの探検家がアプローチを試みたが、リシ・ガンガのゴルジュを踏査し、初めて内院へのルートを開いたのは1934年、シプトンとテイルマンによってだった。1936年8月にはテイルマン率いるイギリス、アメリカ合同隊が内院にBCを設け、南稜から主峰に初登頂した。

そして、ナンダ・デヴィ縦走のアイデアをひっさげて「いつかある日」の詩で知られるあのデュブラが登場する。「リシ・ガングの突破に時間を費やしたため、ようやく内院のBCに入ってからほとんど休養を取らぬまま、縦走をめざして主峰南稜を登ってゆき、そのまま帰らなかったデュブラは、いつたいなにを考えていたのか」と鹿野は書き、次のように続ける。

「ヒマラヤの縦走。それも複数のピークを結ぶ縦走を目的に掲げた登山隊は、デュブラの隊以降、ほとんどない。（中略）なぜヒマラヤでは縦走が目標になりにくいのか」

そして、縦走を成功させるには、どちらかといえば地味な存在であるサポート隊が実は縦走隊の動きに合わせて行動しなればならないから「より困難な役割を担うことになる」と。

ここまで読んで、私は鹿野の言わんとしていることがわかる気がした。

「縦走登山には、ラグビーなどでいうオール・フォー・ワン、ワン・フォー・オールのスピリットが求められる」サポーター隊も、主役になる。そんな山登りを鹿野は考え、ナンダ・デヴィでそれを実現したのだ。73年の第2次RCC隊で知り合った最高の登攀メンバーが鹿野のもとに集まったことも大きかった。そして、この企画をもちこんだ隊のマネージャー役、隊長の鹿野と参謀格の梶の相性も良かった。

鹿野が何よりも心がけたのは、仲間達との綿密な話し合いだった。毎週のように鹿野の狭いアパートに集まり、タクティクスについて話し合った。

1976年6月15日。鹿野の交信記録は感動的である。(以下、本書から一部引用)

加藤保男から連絡が入った。

「けっこう風が強いです。どこで待つか、場所を探してます」と加藤。

その声我突然うわすった。

「むこうから縦走隊が来ます。あと20メートルぐらいです。聞こえますか」

すぐに4人の悲鳴のような声と激しい息づかい流れて来た。

風とノイズでなにを言っているのかほとんど聞こえなかったが、しかしそれは確かにナンダ・デヴィ縦走の成功を意味して

いた。

一方が長い時間待つことになれば、高所での待機は辛いものになる。ナンダ・デヴィではそれが奇跡的にうまくいった。

「私がやってきたなかで、快心の山登りがあるとすれば、このナンダ・デヴィ縦走である」そう、鹿野は書いている。

「ヒマラヤ 夢から目標へ」の中で鹿野は、小学校5年生の時、英国隊のエベレスト登頂を知り、自分もいつかヒマラヤというところへ行ってみたい、と夢想するようになった。英国隊の記録映画を見てその思いは強まり、日比谷高校に入ってすぐ山岳部に入る。そして、冒頭に記したように、杉山康之助との出会いがあったのだった。

少し小さな記憶をたどることを許してほしい。

1959年12月、私たち東京外国語大学山岳部は厳冬の滝谷を目指して北穂南稜から頂上にテントを張った。私を含む新人は全員テント泊だったが、滝谷をねらう上級部員は北穂小屋に入り、吹雪で動けない日、小屋で時間を過ごした。そこに日比谷高校OBの杉山康之助がいた。当時私とは4歳しか違わないのに、この高校山岳部のOB(早大生だった)は、すでに風格があった。そして、ウクレレ片手に歌ってくれた声がとても良かった。

この時、杉山パーティは第2尾根P2フランケ積雪期初登を

やってのけた。杉山はのち毎日新聞記者として活躍、人気コラム「憂楽帳」などで健筆を揮ったが、1979年3月、船橋駅近くのバーの急な階段から転落、意識をなくし、43歳の生涯を終えた。彼の文章と友人たちの寄稿をまとめた遺稿集『御意見無用』が仲間達の手で出版された。

本書はなぜ、ナンダ・デヴィが良かったのか。どんな点で「2つのエベレスト」は魅力的でなかったのか、を語りつつ、同時に、1970年代、「ヒマラヤ鉄の時代」といわれた時代の貴重な記録ともなっている。

(江本嘉伸)

小松由佳 著

『人間の土地へ』

小松由佳



集英社インターナショナル

2020年9月刊

四六判 256ページ

2000円＋税

小松由佳さんという名前は、多くの会員にとって、日本人女

性初のK2登頂者として記憶にとどめている方が多いのではないだろうか。私もその1人であるが、K2登頂以降の彼女の半生には、驚くほかない。

本書は、24歳で「世界で最も困難な山」と称されるK2を登頂した著者が、その過酷な経験を原点に、自然とともに生きる人間の姿を求め、高所登山から離れ、「今世紀最大の人道危機」と言われるシリア内戦の目撃者となる激動の半生と、内戦に生きる人々の姿を希望と祈りを込めて描かれたノンフィクションである。

著者は1982年、秋田県生まれ。高校時代から山登りを始め、ヒマラヤに憧れを抱く。女性部員のいなかった東海大学山岳部に入り、大学4年生のときに主将として、ドルタン・ムスタグ(6355m)で初のヒマラヤ。2006年、世界第2位の高峰K2(8611m)に日本人女性として初めて登頂。同年、植村直己冒険賞を受賞している。

物語は著者の原点である、K2登頂とその直後の危険な下山の描写から始まる。登頂の時間の遅れからその夜8200m地点で苛酷なビバークとなった。死と隣合わせのビバークのうち、翌日深夜ベースキャンプで仲間を迎えられたとき、「人は何かを成し遂げたり、何かを残さなくとも、ただそこに生きていくことがすでに特別で、尊いのだ」という深い感慨を抱く。

遠征におけるポーターたちとの出会いによって、自然の厳し

さと豊かさのなかで祈りと感謝を持って生きる姿に強く惹かれるようになり、K2登頂後は、山の頂から山麓の風土に生きる人々へと関心が移っていったという。

2007年、パキスタンのシスパーレ（7611m）遠征を機に山を離れ、2008年、中国からユーラシア大陸を西へと半年にわたる旅に出て、フォトグラファーを志す。旅の途中のシリア砂漠で半遊牧民生活を送る大家族アブドゥルラティーフ一家とその十二男ラドワンと出会う。シリアへの取材を続けていく中で、2人は次第に惹かれ合うが、2011年、ラドワンが徴兵された直後、内戦が勃発。2012年、内戦下の首都ダマスカスでの滞在を機に、シリア内戦と難民をテーマに撮影をするようになる。一方、著者はラドワンとの将来に不安を感じつつも、政府軍を脱走し、難民となったラドワンとともに生きることを決意する――。

本書の特徴は、シリア内戦を前線からではなく、人々の暮らしの変化から伝えようとしている点と、シリア内戦やイスラムの信仰に生きる人々の生活を、著者自身がイスラム教徒に改宗してシリア人と結婚し、当事者になることによって、内側から丹念に描き出している点にある。日本人には理解しづらいシリアの歴史的背景を踏まえた複雑な社会状況や、イスラム社会の価値観について、自らの体験を通じたさまざまな気づきを平易な文章で伝えており、読みやすい。

全体は8章で構成されている。第1章「2006年 非情の頂、K2からの帰還」から始まり、第2章「砂漠のオアシス パルミラ」、第3章「混沌のシリア」、第4章「難民の多様を生きる」、第5章「日本、目に見えぬ壁」、第6章「平和を待つ人々」、第7章「難民の土地」、終章「夜の光」となっている。K2登頂の様子が緊張感あふれる筆致で描かれる第1章を除くと、著者と夫ラドワンの私的なエピソードを織り交ぜながら、大部分はシリアとシリア内戦による難民について伝えている。口絵ではK2登頂時の写真とともに、著者自身が撮影したシリアや難民取材の写真を解説付きで見ることができるとある。

この本の最大の魅力は、著者の強い意志と破天荒な行動力であり、自らの直感を信じ人生を切り拓く生き方そのものである。著者はインタビューの中で、「壁を自ら作らない」ことを一つの信条としていることを語っている。壁が立ちちはだかったとき、これは本当の壁なのか、あるいは自分で作った壁なのか考える。こうして、著者はのびやかに力強く人生を切り拓いてきた。最大の決断であろうラドワンとの結婚を決意するときにも、こう語る。「ラドワンと生きるなら、一生苦労が絶えないだろう。だが、それでも良かった。むしろ、予測不可能な苦労がつきまとうことに痺れるような喜びを感じた。それは、未知の山へ、新しい一本の道を拓くような純然たる思いだった。ラドワンはまさに、私にとってヒマラヤの峰のような存在だったのだ。」

著者の目を通じて、シリアの自然の美しさと、ユーモアにあふれ豊かな表情を見せるシリアの人々が色鮮やかに生き生きと描き出されていることも、魅力の一つだ。「赤い大きな太陽が全てを橙色に染めていく。絵の具を混ぜて伸ばすように、空は橙色から赤へ、ピンクへ、青から紺色へと色を変え、やがて夜の黒に覆われた。空と大地が夜の帳に溶け合う間、私たちを乗せたバイクは砂漠を走り抜ける。いつの間にか、星が瞬いていく。ひとつ、ふたつ。銀色の星が詰まった宝石箱をゆっくり開くように、砂漠の夜が更けていった。」お茶に招かれ、コーヒーが出てくるまで3時間。飲み物を飲むこと自体よりも、その過程を人と共有することがこの土地では大切なのだという。アラビア語でゆとり、休息を意味する「ラーハ」という言葉も印象的だ。家族や友人と過ごす穏やかな団欒の時間をいい、良い人生とは「ラーハをたくさん持つ人生だ」という。日本とはまったく異なる生活様式や価値観がさまざまな気づきを与えてくれる。

また、全編にわたり感じられるのは、難民の取材にあたりフォトグラファーとして、人との関係性を大切にす真摯な取材姿勢と、温かな眼差しだ。撮影をするときは、まず「話を聞くこと」から始まるという。難民の中には必ずしも取材されることを望まない人もいる。なぜここへ来て写真を撮るのか、自分自身、覚悟が求められるという。まず人として向き合い、長期にわたり関係性を築きながら撮影される写真や、伝えられるエピソード

ソードは著者にしかできないものだ。このような取材を通じて、数字や政治的構図では表わすことのできない、シリアスな人々の苦悩や悲しみの一端が描き出されている。

現地の取材を続けながら、日本でのラドワンとの結婚生活や子育てに奔走する日々もまた、著者に多くの気づきを与えてくれているようだ。共働きではあるが、ラドワンは家事や育児もノータッチで、夫婦で協力するという発想すらない。だが、女性には家において、家事と育児を全面的に担い、「女性の役割は家族を幸せにすること」とするアラブ文化から考えると自分は完全にダメな妻だ、という。価値観の相違に向き合う日々から、人間に深く根付いた文化を変えることは容易ではないということ、民族的背景の違いを相手の尊厳として認めることで夫婦「共生」しようとしているという。そこから分断されたシリアの未来に思いをはせていく。

ほかの著作として、『オリーブの丘へ続くシリアの小道でふるさとを失った難民たちの日々』(2006年)がある。写真が多く、併せて読まれることをお勧めする。また本書は、著者と同時期にシリアで活動し、銃弾に倒れたジャーナリストの山本美香氏を偲び、優れたジャーナリズム作品に贈られる山本美香記念国際ジャーナリスト賞を今年5月に受賞している。

著者はあとがきで、「この本は、シリアというある土地をめぐる物語。そして、私と夫の物語でもある。私はこの本を、今は



『山の旅人 冬季アラスカ単独行』

栗秋正寿 著

閃人堂 2020年10月刊
 四六判 256ページ
 2400円+税

「本物のアルピニストの凄さを知っているからこそ、自分の位置付けとしては『山の旅人』くらいでちょうどいいと思ってい

まだ小さな二人の子供たち、サーメルとサラームに残したい。父と母がどこからやってきたのか、どのように出会い、どのよう

な道の手を離れて二人が生まれたのか。この世には、光ることのない多くの星があり、語られることのない多くの物語があること。その思いの全てを、この一冊に込めた。」と語る。著者は

これからも、家族とともに人間の土地を求め、歩き続ける。本書を通じて、シリアの魅力あふれる人々と、今なお続くシリア内戦、力強く自らの人生を歩む一人の女性の姿を、一人でも多くの方に知ってもらいたいと願っている。 (井上優美)

る。」こんなことを新版のあとがきに書いているのを読んで、少々の違和感と大変謙虚な人だという印象を持った。

栗秋正寿は1998年に北米の最高峰デナリ(6190m)の冬季単独登頂を果たし、その後も毎年のように冬のアラスカの高峰と取り組み、2007年にはフォレイカー(5304m)の単独冬季初登頂にも成功している。厳しい冬のアラスカ山脈に愚直なまでに挑み続けてきた人である。アルピニストといわれる人がこの世にいるとしたら、まさにその鑑のような立派なアルピニストである。フォレイカーでは単独登山を3度試み、やっと登頂が達成できた。しかし、猛烈な悪天候で停滞が長引き、登頂日が春にずれ込んだ(規定では冬至から春分の日の前日までが冬季である)。

すると2年後に再び挑戦し、苦闘の末に気温マイナス45度の頂上に立つ。なんとも凄まじい、一途な恐ろしいほどの執念である。極寒のアラスカの高峰に、危険を冒して何度挫折しても挑み続ける。この地球上にこんな男がいたのかと私は驚き、感動しながら、この『山の旅人』を興味深く読み進めた。

この本は2000年に『アラスカ 垂直と水平の旅』として山と溪谷社から刊行され、20年たつてその後の登攀記録を加筆して復刊された。

復刊したのは著者の高校の同級生の首藤閑人氏で、私も『アサヒカメラ』や岩波書店で大変お世話になった人である。その

上『アラスカ 垂直と水平の旅』にもかかわった神長氏も仕事の上で長い付き合いのある編集者である。そんな不思議な因縁の繋がりがあるが、著者とは一度も面識がない。しかし、著者の存在が私が見つけたのは、1998年でずいぶん昔のことだ。

当時アラスカを行き来していて、私の撮影のサポートもしてくれた八木清君が、フェアバンクスで栗秋氏と会う機会があった。冬のデナリを独りで登り、帰国せずにリヤカーを引いてアラスカを徒歩縦断している、凄い人がいると私に話した。その話を聞いたのはアマゾン川流域の熱帯雨林を歩いている時で、にわかには信じがたい変わった行動をする人がいるものだと、いつまでも忘れることがなかった。

著者の初めての海外登山は、1995年に大学の後輩と2人でデナリに登頂したものだ。ヒマラヤを希望していたが、夏休みの時期にはモンスーンの影響でネパールが雨季となることもあってアラスカに転進した。これがアラスカとの運命的な出会いとなって、その後夢を追いかける舞台となった。

初めての海外の山や旅は、強い印象を刻み込むものだ。実は私も初めての海外登山が半世紀前の1969年4月から5月にかけてのデナリで、ウエストバットレスからの登攀であつた。

「垂直の旅」のデナリ登攀の文章を読んでいると、体の奥深くに眠っていた感覚が浮上してくる。氷河の深いクレバスの底の

暗闇や、青みを帯びた透き通った月光が氷に反射する微かな輝きなどが蘇ってくる。半世紀も時間が経過してしまつと、繊細な感覚などは回想することが難しくなるものだ。それが文章や映像の助けによって追体験できることは、登山記などを読む楽しみであり大きな喜びだと言えよう。

何と言つても一番驚くことは、筆者が極寒の条件での厳しい山行を20年以上にもわたつて続けながら、凍傷を一度も経験していないことだ。マイナス40度の寒気のなか、それも風速50mを越すような世界で、時には傾斜80度の氷や雪の壁を独りで何時間も登攀する。それでいて凍傷とは無縁だった人間は奇跡と言えよう。私も可能なかぎり気をつけていたが、足の指一本は変形しているし、冬の穂高では顔面凍傷で痛い目を味わっている。登攀を長期にわたつて続けてきた山の友人知人で五体満足の人は少数派である。

著者は几帳面でどんなこともおろそかにすることはなく、未知の領域に踏み込んでいく時の準備も徹底している。トレーニングにも創意工夫をこらす。例えば初めてデナリに行く時に、防寒装備のチェックや耐寒訓練は誰でも考える。しかし、氷河の上では輻射熱の影響で1日の気温差が40度にもなると知ると、その対策まで考え実行に移す人はなかなかいないのではなにか。夏に水産用冷凍庫に入り、1日に55度の気温差を週に2回ほど体験してトレーニングに励んだという。何をするにも研

究熱心で、何事にも慎重なのは著者の性格からきているに違いない。

日本の冬山でもそれなりに大変であるが、悪天候で氷点下30度、40度のなかでの排泄の問題は深刻である。それも突風でも吹いていけば、テントから外に這い出て簡単に済まず訳にはいかない。工夫が必要となるが、その試行錯誤の過程が3ページにわたって書き連ねられている。

今まで私は多くの探検記や登攀記を読んできたが、排泄の問題がこのように事細かく取り上げられたものは記憶にない。これは一例であるが、さまざまな面でユニークで異色な著書と言えよう。著者作曲の譜面まで所々に入っている。飾りのない読みやすい筆致ながら、理系の大学で学んだだけに論理的である面とても理屈っぽいが、それが逆に興味深くおもしろい。

この著書を語る上で欠かせないのは、デナリの史上最年少での冬季単独登頂と、フォレイカーの冬季単独登頂に何度も挑み成功した貴重な記録としての価値である。

「単独行の魅力は、壮大な自然と渾然一体となる心境、そして一瞬一瞬に『生きる』ことへの感謝と悦びを感じることにある。(中略)そして私自身との対話を繰り返していく。だからひとりぼっちの山は、まさに『心を耕す旅』だ」と

これは独りでの山の旅を何年も続けてきた末に辿り着いた境地であろう。地吹雪やブリザードが襲いかかってきて、1週間

から2週間も行動できず閉じ込められる。そんな時、雪洞やテントのなかで著者は心を耕していたのかと、読み終えた後でいつまでも私の心に残った言葉である。

「水平の旅」の方は「垂直の旅」とは違ってほとんど波乱のない旅であるが、なかなか楽しい紀行文となっている。

旅先でコーヒー1杯のはずが夕食までご馳走になったり、苦しんだ虫歯の治療を2時間半も受け、診療時間を過ぎてまで治療してもらっても治療費を請求されることがない。人の厚意を素直に受け取りお礼を言う。緑の美しい季節に道草を食い、気ままに3ヶ月余りをリヤカーを引きながらの独り旅は個性的である。一つ一つのエピソードもおもしろく、さまざまな人たちと出会い、太平洋から北極海までてくてく歩いて、たくさん好意に「ありがとう」と感謝しながら自分の夢を達成する。

人情や親切に巡り合うのは運ではなく、これは才能であるとつくづく実感した。

栗秋正寿は命を懸けて苛酷な冬のデナリやフォレイカーに繰り返し挑み続け、完結してもなお冬のハンター(4442m)の初登にこだわる。年齢による体力の減退を自覚しながらも、自己の極限を超えようと9回も試みる。アラスカには、ほかにもブルックス山脈とかセントエライアスといった性格の異なる良い山がいくらかもあるのに、なぜ三山にこれほどまでにこだわり続けるのか、その理由を知りたく再読したが、文章のなか

から答えを探り当てることができなかつた。

優しい目を持ち、自然体で生きているように見える著者が、登山界だけに発信する記録に執着してのことだとは考えがたい。

著者にとって登山とは、人生をも左右する強い美意識からくる自画像を、こつこつと彫っていくアートに近い行為ではないから私には思われた。

(水越武)

竹内洋岳 著

『下山の哲学——登るために下る』



太郎次郎社 エディタス

2020年11月刊

四六判 256ページ

1800円＋税

著者は日本人として初めて、そして、ただ1人8000m峰14

座を完登した登山家、竹内洋岳氏である。タイトルは『下山の哲学』だが、もちろん哲学書でも論文でもない。著者の完登に至るまでの、それぞれの登山を振り返る形で書かれてはいるが、こと細かな登山記録でもない。その登山ときどきの思いや強烈

な印象、あるいは事故の状況などについて、1995年のマカルーから2012年のダウラギリまで、敗退の4回を含めた18回の山行について記されたものである。各山行につき、構成を手掛けた川口稜氏が、その登山に向かう時の状況を、著者の言葉を引用しながら前書き風に書いているので、本文にスーッと入っていくことが出来る。冒頭に14座の紹介があり、また、文中の下端には登山用語や地名などについての解説もあって、ヒマラヤや8000m峰をよく知らない読者でも理解が深められるとともに、著者の18年間の歩みが手に取るようにわかる。

ヒマラヤの山など登ったことのない者にとって、デスゾーンと言われる8000m峰の登山がどんなものなのか、映像などで目にはするものの、その苛酷さは実感できず、想像でしかないが、文中には死に至る恐怖も感じられる場面が何度も出てくる。高所登山は技術的なことや高所順応の在り方など、特別なことが多いし、リスクも伴う。しかし、それを克服して生きて帰らなくては意味がない。いくつもの修羅場をくぐり抜け、次の山へと向かう気持ちを持ち続けてこられた著者だからこそ、次に山に向かうための「下山の哲学」なのだ。

死ぬのではないかと思っただ体験の一つは、2005年のエベレスト登山中に起こった体の異変である。すでにエベレストは登頂済みであったが、この時はシシャパンマ登頂後、ベースキャンプも近くであり、エベレスト北西壁のスーパークローワー

ル・ルートを目指した。パートナーはシシャパンマを登頂したラルフとガリンダ。なお、ガリンダは女性。2人ともの中に竹内氏より先に14座サミッターとなっている。天候に阻まれつつも7700mのC5に間もなく着くという時に「ノイズのような痛み」に襲われる。2人にテントに引き上げられてからは脈拍が50を割り込むような異常事態となり、意識も時々薄らいだという。ガリンダが知り合いのドクターに衛星電話をかけ、その指示に基づいて手当てを受けたことで、なんとか下山できるまでになる。自分のことで2人に登頂を諦めさせた思いは辛かったことだろう。しかし、2人がいなかったら死んでいたと言いつけるその気持ちは、さらに次の山へ向かう強い気持ちへと繋がっていくのだ。

もう1つの体験は、2007年のガツシャブルムII峰での雪崩遭遇である。この時は背骨の破裂骨折、肋骨を5本骨折、肺も片方が潰れていたというほどの重傷であった。助け出され、C2に下ろしてもらおうと、別の登山隊にドイツ人ドクターがいて手当てしてもらおうが、肺のことで呼吸困難に陥り、「今のうちに家族にメッセージを遺しておけ」とまで通告された。それでも周りの努力で酸素ボンベも手当てされ、ほかの登山隊ガイドの手によってヘリで収容可能なC1まで下ろされ、スカルドという町の病院、イスラマバードの病院、そして、帰国し手術を受けることとなっていく。幸運が重なったとも言えるが、著者

の生きて帰るという強い気持ちが幸運を呼んだのではないかと思う。

評者は、14座完登の翌年2013年4月の日経新聞夕刊「こころの玉手箱」に、竹内洋岳氏が5日間わたって書かれていたことを思い出す。腰を骨折しシャツトを入れる手術を受け、その後それを取り出す手術を行なっているので、大切なものの1つとして、そのシャツトが写真入りで紹介されていた。まさにこの時の事故だったのだ。

こうした体験を経るなかで、著者が常々心掛けるようになってのは、リスクを避けるために1cmでも2cmでも高度を下げる、ということである。高所に長く滞在することは高山病や事故のリスクを高めるばかりである。そのためかなり長時間行動で下山することが多く、その行動は超人的である。

この辺の記述は、ハラハラドキドキして、まるで映画でも観ているようだ。しかも8000mの世界のことである。しかし、それでも、あるピークから眺めて次はあの山にと思つ気持ちは、国内の山に登つて思つ気持ちと同じである。そして、それを実現するためには、無事に下山しなければならぬことも同様だ。そこから始まると言ってもよい。1つのピークに至ることがその登山の最終目的ではなく、次の山に向けてのスタートであり、下つてその登山は完結しても、輪のように次の山とは繋がっているのだ。下山とはどのような意味を持つのか

か、本書には14座を登り終えた後も思索し続けてきた著者の思いが散りばめられている。

山の紹介番組では、山頂で「お疲れさまでした」と言っていて終わることが多い。評者は常々、下りこそ事故が起きやすく危険なのだから、そのルートや状況も紹介し、下山してからその言葉で締めてもらいたいものだと思っている。それが一般の人を対象とした番組のあるべき啓蒙的姿勢ではないかと感じている。それはともかく、本書の舞台はヒマラヤの高所である。登ることさえ難しいのに、薄い酸素の中で行動を強いられ、食事も睡眠も十分でない。天候もひとたび荒ればすぐに死に至る可能性があり、雪崩やアイスフォールの崩壊、落石、クレバスと、周りへの注意を怠るわけにはいかないという点で、精神的な重圧も国内の山歩きとは比べ物にならない。そういうなかで、著者がどんなことに注意して行動しているかなど、ヒマラヤに縁のない者でも参考になることがたくさんある。絶対に生きて帰らなくてはいけないという強いメッセージを感じた次第である。

そして何よりも、著者の言う下山は次へのスタートであり、14座を登り終えたからと言って「目標がなくなつた」という喪失感はなかつたということに感銘を受けた。自分がやってきたことは「新しい登山の扉を開けるものではなく、開いたままになつていた古い扉を閉めるものでした」「次の人が新しい扉を

開けられるようにするのが私の役割だと思っていた」とも。今、著者は登山に限らず新しいことにいろいろチャレンジしている。「それらは自分にとって未踏峰で、それを見つけ挑戦し、さらにその先の未踏峰を探して行く、そういう連鎖に身を置きたい」との締めくくりの言葉は、誰にも当てはまることではないだろうか。

本書にはパートナーのラルフや中島健郎、気象予報士の猪熊隆之など、著者を囲む方々による、他人から見た竹内洋岳像がコラム的に書かれており、本文と併せ読むことで著者の人物像がよくわかって興味深い。

(荒井正人)

早稲田大学山岳部 著

『リュックサック

XV

——100周年記念号



早稲田大学山岳部／稲門山岳会

2020年11月

A4変型判 344ページ

非売品

2020(令和2)年、創部100周年を迎えた大学山岳部

の名門、早稲田大学山岳部の部報『リュックサック』の記念号である。100年とひと口に言うが、100年は長い。その間、文字どおり山あり谷ありの歴史を紡ぎながら、登山界に多くのタレント（本来の「才能」という意味での）を輩出してきたクラブの軌跡が凝縮された一書と言えよう。元々部報は現役学生の活動記録を中心に編集されてきており、2001年からの10年間の記録は、『リュックサック XV』として2010年に発刊されている。今回、100周年という大きな節目の年に鑑み、その後の10年間の山岳部の足跡も盛り込み、部報を兼ねた記念誌としたものである。

全体は4部構成となっており、「Ⅰ 早稲田の山 100年」「Ⅱ 山岳部のいま」と「これから」「Ⅲ 山と人 その時代」「Ⅳ 資料」などの項目が目次に並ぶ。

第Ⅰ部は1920（大正9）年9月、第1回の奥秩父登山から始まった山岳部の「通史」で、豊富な写真とともに100年の歩みがコンパクトにまとめられている。《大正創部期とアルピニズム、滝谷登攀／ヒマラヤ志向と極地法、戦争期の活動と休部、戦後復興期からヒマラヤ登山時代へ、明神、富士の遭難／8000m峰への挑戦、海外合宿の実現とラカポシ北稜、K2西稜初登攀、多様化する登山と部員減／凍死遭難と部の混迷、活動の変化と再建への道筋、時流に沿った再生への歩み》と、見出しを見るだけでも、日本の近代登山史と並行して刻まれて

きた歴史の流れが実感できる。

第Ⅱ部の前半は「この10年の歩み」と題して、2010年（20年の間の山岳部の活動記録が綴られており、南米・アコンカグア合宿やネパールのアイランド・ピーク合宿、ヨセミテのエルキャピタン・ノーズ登攀、キルギス・西コクシヤール山域試登、そして、ネパールの未踏峰、ラジヨダグダ峰登頂などの記録が目を引く。

第Ⅱ部の後半は「2020年以後を見据えて―未来フォーラム―」というタイトルで、早稲田大学山岳部の現在と未来を検証・議論している。100年もの伝統は多くの実績を残し、日本の登山界を動かしてきたが、伝統に寄り掛かっているだけでは、未来はない。本書の巻頭で「100周年記念号に寄せて」と題して植松克夫氏（稲門山岳会幹事長）が「（山岳部の）これからについては、5回にわたる未来フォーラムの最終回『学生へのサポート態勢』の議論を受けて、学生に近い若いOBを中心に101年目からの山岳部の形を模索する動きに繋がっている。」と記しているが、新しい時代の山岳部の姿を全員で模索し、実体化するために企画されたのが「未来フォーラム」である。数多の栄光の陰には悲劇―遭難もあった。しかし、遭難によるモチベーションの低下や部員の減少など逆境を乗り越え、「早稲田の山」を楽しみたい、そこから何かを学びたいという熱い想いで山岳部を復活させ、継続させてきた力の源は、この「未

来フォーラム」を企画し、実行に移した姿勢にあるのではなからうか。すなわち、学生とOBが一体となって問題意識を共有できていたからであろう。本書のハイライトと言える。

地球上に未踏の地域や山岳がほとんどなくなり、確たる目標や目的が見付けにくい時代になっている。また、登山そのものも多様化し、学生たちに対して魅力的な山岳部像を描き出しにくい状況である。そのような難しい状況をなんとか打破しようと、伝統校の北海道大学や慶應大学も交えてデイスカッションした「未来フォーラムの全記録（議事録）」が収録されている。同じような悩みを抱えているであろう各大学山岳部にとつて、大変参考になる記事である。

第Ⅲ部は「往時茫茫夢の如し―創部のころの記憶―」（井上寿三）から始まって、「スケッチハイキングの会」（浜崎一成）まで40編、部員や会員たちによるときどきのエッセイや追想、論考などの再録である。「通史」とともに見事にその時代を反映しており、テーマも多岐にわたっていて、飽きさせることがない。そして、第Ⅳ部の「資料」編へと続く。「山岳部活動年報」などデータ類が要領良くまとめられているが、なかでも便利なのは「リュックサック」が記録した山岳部の歩みのページで、創刊号から14号まで、各号の概説と目次が掲載されており、登山研究などでは大いに役立つものと思われる。

編集メンバーのひとり、山賀純一氏（元・本会理事）が「昔

話には100年の節目で区切りが付ききました。今の若手OB・現役と、まだ見ぬ後輩が、次号への糧をつないでくれるでしょう。何でも詰め込み、人生を共に歩く『リュックサック』。立派な記録はなくても、かけがえのない記憶で満たされることを願います。」と、「編集後記」で結んでいる。

実は、筆者が所属してきた明治大学山岳部も来年、2022年に創部100周年を迎える。現在、『リュックサック』同様、部報『炉辺』第11号を「100周年記念号」としてまとめるべく、進行中である。「先蹤者」の成果を、大いに参考にさせていただきます。と考えている。

（節田重節）

河野 啓 著

『デス・ゾーン——栗城史多のエベレスト劇場』



集英社 2020年11月刊
四六判 344ページ
1600円＋税

19世紀の後半、アルバート・フレデリック・ママリーという

登山家がいた。アルピニズムの「銀の時代」を代表するスターだったが、機知に富んだ辛口の文章を書く作家でもあった。彼の書いたこんな一節がある。

へしばしば指摘されてきたことだが、すべての山は次の三つの段階をたどるべく運命づけられているように思われる。「人を寄せつけぬ絶頂」「アルプスで最も困難な登攀」「ご婦人がた向きのやさしい山行」

表現がセクシスト的なのはお許し願いたいだが、登るにつれて困難度が下がっていく必然を指摘していて、山は一度登られてしまうと、そのあとはずっと楽に登れるようになる。ちなみに、ママリー自身はその登山に妻をいく度も伴い、しかも当時としては一級の難しい登攀も一緒にやっていた。

アルプスの未踏峰に対する挑戦として始まった近代の登山は一般にアルピニズムと呼ばれているが、初登頂を競い合った「黄金時代」から「銀の時代」を経て、さらに困難な登山の可能性を求めて、ヒマラヤの8000m峰へとそのシーンを移していく。しかし、ママリーの予言通り、結果的にエベレストは、それこそお金さえ出せば誰でも登れる山の段階になってしまったと言つて過言ではない。登山の現在という観点から見れば、栗城史多の掲げた「単独無酸素」での登山とは、地球上のほとんどの山がこうした最終段階に達した状況に対応していて、たどることも自体ではなく、どのように登るかが問題にされること

を表わしているものなのだ。現在、登山に新たな冒険を見つけていることはますます難しくなっている。

栗城の登山劇場の背景には、このような状況セットイングがあったわけだが、その舞台で、彼はエンターテイメントとしての登山を演じようとした。そうしたパフォーマンスがメディア化されたことで、多くの観客を獲得していった。その顛末を、著者の河野啓氏は克明に跡づけている。そこには、TVディレクターとして栗城のパフォーマンズに同行して追いつづけ、取材姿勢を「応援する」から「観察する」へとシフトさせていった著者ならではの「反省」と「自戒」も込められている。

ここで改めて言うまでもないが、栗城に対しては毀誉褒貶の落差の激しい反応が寄せられている。それは、メディアが栗城の真実とは別の、もっぱら映像の面白みをねらつて「タレントのように」その姿を描いたことと関係している。栗城の人気の高まりぶりは、一時は凄まじいものがあり、そのパフォーマンスは大衆の喝采を呼び起こした。ただ、それはメディアが演出したからだった。そうしたことに自分も加担した一人だと著者は自覚している。それによって、栗城という人間を死にまで追いやってしまった。

著者による取材は徹底したものだったと思える。このことは、メディアにかかわる者としての矜持だろうし、評価もしたい。それによって、本書は、いわば栗城をめぐるドキュメント

の集大成とも呼べるものになっている。もちろんだが、そこには、プラスのことだけでなく、耳の痛いこと、隠しておきたいことも含まれているが、決して露悪趣味的、暴露記事的になつてはいない。著者なりに、栗城の真実を伝えようとする意図に支えられている。遺書も遺言も残さなかつた栗城が（本当は自分の口で伝えたかつた「ありがとう」や「ごめんなさい」も含まれている）と著者は信じようとしている。

それにしても、栗城があれほど多くの人の心をつかんだのはなぜだったのか。それは、登山を劇場化したことにあると著者は見ている。インターネットやSNSといった現代のメディアを駆使して、自撮りのカメラが映し出す登山映像を発信し続けた。そこに、人々は、命の懸かつた冒険のパフォーマンスが、エンターテイメントとなつて演じられているのを目の当たりにしたのだ。それは、一般の多くの人にとっては初めて接する光景だつたはずだ。さらに、そこには、新たなメッセージがともなつていた——「夢の共有」。その迫真性が、閉塞感から抜け出せずにいる、とりわけ若者たちの心を揺さぶつたのだろう。観客とプレーヤーが一体となつて熱狂するライブパフォーマンスに似たものを感じたのかもしれない。

このように登山をエンターテイメントにして上演するというアイデアは、実は栗城が初めて思いついたものではなかつた。登山史を見ると、19世紀半ば、ロンドンの劇場で『モン・ブラ

ン』と題する興行が行なわれている。モン・ブラン登山を題材にした見世物で、当時の観客の大人気を博した。舞台では、アルプスのたたずまいを再現するモック・アップをセットし、本物の高山植物なども並べて、この時代ならではのリアルな劇場性を演出した。その上で、語りや歌で登山の様子を面白おかしく演じてみせた。当時はまだアルプスの山は大衆にとつて馴染みがなかつたが、この見世物は、それこそ未知との遭遇のような驚き、衝撃をもつて迎えられるのだった。

興行師スミス自身は、実際にモン・ブランに登つていた。それは、いわば初期投資で、この興行の大ヒットにより、『世界の山岳大百科』（山と溪谷社）によると「最初の2シーズンだけでも観客数が20万人を超え、スミスは1万7000ポンド、現在の貨幣価値にして120万ポンド（180万米ドル）以上の収入を得た」という。スミスが実際に演じてみせた内容には、事実もあつたが、人の関心を惹くための脚色や、誇張、虚言も多かつたと言われ、社会の批判を招いてもいる。スミスは、この後も興行師としてエンターテイメント・ビジネスで成功し巨万の富を稼いだ。彼の成功のもと、まさしく登山をエンターテイメントにしたことであつた。

また、モン・ブランの麓シャモニ観光ではメール・ド・グラス氷河見物が目玉だつた。中世以来、アルプスの山は悪魔と魔物が跋扈する呪われた世界だと信じられていた。とりわけセ

ラックとクレバスが錯綜する氷河は、文字通りのデス・ゾーン、死の領域の光景そのもので、婦人たちの中には恐怖のあまり失神する者さえいたそうだ。まさにデス・ゾーンを体験するホラーツアーだったわけで、怖いもの見たさはエンターテイメントの魅力の一つだ。

そもそもスポーツにはエンターテイメント性という要素がそなわっている。現代のオリンピックはエンターテイメント化されたスポーツの最高の例だろうが、そこで人は何を楽しんでいいのか。エンターテイメントが、時代によって変容する娯楽・享楽の享受形態である限り、すぐれた仕方だ、その時代にかかわる感受性のパラダイム指標となっている。いかに楽しませるか、という点で栗城は目のつけどころが良くて、それを現代のメディアの枠組みにうまくはめ込むことができた。ただし、登山のエンターテイメント化という発想自体は、栗城の独創ではあり得ない。

さらに、栗城がセールスポイントにした「7大陸最高峰・単独無酸素」という企図も、登山の観点からはとくに評価に値するものではないことは、著者自身がわかっているとおりで。ただ『山と溪谷』誌も指摘しているように、その単独無酸素についてさえ「単独・無酸素」を強調するけれど、「実際の登山はその言葉に値しない」といったありさまだった。

にもかかわらず、あれほどの評判をとったのは「ごく普通の

青年が、弱さも含めて自分をさらけ出し、高峰に挑む姿は人々を引きつけたのだろう」という同誌の指摘が当を得ていると思われる。つまり、弱いもの、ないし未熟さへの共感なのだ。それをメディアが巧みに演出してみせた。その事象を、著者はメディア人の一人として説明してみせてくれている。

ただし、記述に登山用語をことさらにはめ込んだことで、文の趣旨が曖昧になっていることには触れておきたい。例えば、〈本当の「デス・ゾーン」は栗城さんの中にあつた〉と言う。ここで、著者は、栗城が陥った絶望的な状況のことを記し、そこから、最後にはみずから死を望むことになったと結論づけている。

外部の閉塞状況に対して呈示される内なるデス・ゾーンとは、感情の次元を超えた、それ以上の何かの表象なのだろうか。そのデス・ゾーンを、栗城は「単独」で目指した。そうしてデス・ゾーンで演じられた死は、栗城なりに死に挑むことに新たな地平を模索したがゆえの冒険者としての死だったのか。それとも、本格的な登山の知識もテクニクもないまま、いたずらに登山を弄んだ末に追い込まれた挫折者としての自死だったのか。「自身は死を望んでいた」と言うからには、著者には、その死をどう評価するかが問われてくるだろう。

しかも、そのあとに続く記述にはこうある。

〈私はこの原稿に取りかかるまでは、こう考えていた——。／

彼の登山はギリギリ無酸素と表現できたとしても、単独と呼べるものでは断じてない、と。／今は、逆だ。／栗城さんの登山は無酸素ではなかった。／だが、彼の人生は、天を突くエペレストの真つ白な頂のように「単独」だった。」

おそらく、ここで著者は、登山というスポーツ的行為によせて栗城の人生を語り出そうとしているのだと推測する。なんらか特定の事象や事物に情緒的に仮託してある種の想いといったものを語るのには、日本の小説などではよく使われる手法だ。しかし、この場合、取り扱われている「単独・無酸素」とは一般的にはあまり馴染みのない登山独特の用語だ。そのため、これと人生を語る言葉とを並列的に使っていると、登山用語としての用法と一般的な語法との違いに混乱が生じやすい。本書のように一般読者を対象にしている場合、それを区別することを読者側に求めるのは無理があるだろう。結果的に、そもそもの暗喩のねらいを読み取ることが難しくなる。

ここで言う「単独」とはどのような事態を表現しているのか。もともと単独とは、登山用語では自分以外、ほかの一切のサポートなしで登るスタイルのことだが、栗城は、その登山においても人生の生き方においても、それに相当するものは持ち合わせていなかった。しかも、単に孤独というなら、究極を目指す登山家のすべては孤独だと言ってもよい。孤独と闘いながら未踏の世界に挑むのが冒険者だが、このような孤独とも栗城は、こ

れまた無縁だったことを著者は明らかにしたのだった。

ならば、登山家の「単独」に仮託して、通常の孤独感とは区別されたいかなる境位を、著者は伝えようと意図したのだろうか。文意の明確さよりも、感情移入的な気分の共感とでもいおうべき情緒面での効果を先行させたことで、死の消息が曖昧化されたままに残されてしまった。

(飯田年穂)

尾上 昇 著

『追憶のヒマラヤ——マカルー裏方繁忙録一九七〇』



中部経済新聞社 2020年12月
四六判 336ページ
1600円＋税

記録というものは、記録する対象が同じでも、誰が記録するかによって、語られる内容や印象が大きく変わることがある。その意味で、『追憶のヒマラヤ マカルー裏方繁忙録一九七〇』は、1970年の日本山岳会東海支部によるマカルー東南稜登山隊の、これまで知られていなかった別の側面を教えてくれる

一冊だといえる。

著者の尾上昇氏は日本大学山岳部OBで、これまでに東海支部支部長や日本山岳会会長を歴任してきた。東海支部の一員となったのは半世紀以上前の60年代半ばで、マカルー登山隊に渉外担当の隊員として参加したのは26歳のときだった。

マカルー東南稜の初登攀は、当時の世界の登山界においてエポックメイキングな登攀として高い評価を受けた。エベレスト初登頂者のエドモンド・ヒラリーは、70年のヒマラヤ登山のベストスリーとして、クリス・ボニントン率いるイギリス隊のアナプルナー峰南壁と、オーストリア隊のローツェ・シャールとともに、この東海支部のマカルー東南稜を挙げている。ヒマラヤにおけるバリエーション時代の幕開けを告げる画期的な登山の一つだったのだ。

本書は、サブタイトルに「裏方繁忙録」とあるように、登山活動そのものだけではなく、登山許可取得や資金集めに奔走した尾上氏の裏方としての仕事に多くのページが割かれている。隊の公式報告書として『遙かなる未踏の尾根 マカルー1970年』（72年刊行）という重厚な本が出ているが、本書と報告書を読み比べてみると興味深い発見がいろいろとあった。

たとえば、登山許可を取得するにあたって、報告書には「強力な政治家の口添えを得て」とあるが、この「強力な政治家」とは誰であり、どのような経緯でその政治家とのつながりを

持ったのが本書では詳しく述べられている。尾上氏がほかの隊員とともに政治家のもとを訪れ、その後に登山許可取得の交渉をまとめていく過程を読むと、この時代のヒマラヤ登山には政治的な力が不可欠であったことがよくわかる。

また、同じ年に日本山岳会本部がエベレスト登山を計画しており、準備の過程で「東海支部と本部の接触が再燃した」という記述が報告書にある。渉外担当であった尾上氏は、その「接触の再燃」の矢面に立っていたためだろう、当時の本部の対応への苦い思いが包み隠さずに語られている。

登山隊の企画や組織作りにおいては、支部のヒマラヤ委員会の事務局長を務めていた原真氏が強烈なリーダーシップを発揮したことがよく知られているが、一方で「切られる者やノイローゼになる者や行方不明になる人間さえ発生した」と報告書には書かれている。その切られた者の一人が、のちに第二次RCC隊を率いてポストモンスーンのエベレスト初登頂を成功に導いた湯浅道男氏であったことを、私は本書で初めて知った。原氏からの指示を受けて、尾上氏が湯浅氏に話をしにいくくだりからは、公式報告書には決して記録されることがないだろう人間ドラマを感じた。

本書ではほかに、渉外担当として資金集めに苦慮したことなども語られている。国内でのすべての準備を終えて、カル Катタへと向かう飛行機の中、尾上氏はシートに身を委ねて「こ

れで私の仕事は、終わった」と一人感慨に浸っていたという。普通に考えれば、出発してからが本番であり、国内の雑事を離れて気持ちにはそれまで以上に目的の山に集中していくはずだ。しかし、尾上氏にとっては、「私の中でのマカルーは、日本を出発した時点で、完了した」「日本出発に漕ぎつけた満足感と達成感で、これから先のことなどに考えが及ばなかった」そうだ。こうした言葉からも、裏方としてどれだけ苦心惨憺したかが伝わってくる。

実際の登山活動では、尾上氏はC3上部でドクターストップがかかり、早期に前線からの離脱を余儀なくされる。そのため、登頂の最終ステージでの隊員2名の一時的な行方不明や、彼らの捜索と発見、そして田中元・尾崎祐一両隊員による25時間におよぶ壮絶な頂上往復行動など、マカルー登山のハイライトといえる一連の行動には加われず、BCで状況を見守るのみであった。

隊員の話がつかめず、重々しい空気に包まれるBCで、尾上氏は原氏から「すぐに日本に帰国し、家族に報告するように」との指示を受け、何か家族に渡せるものはないかと行方不明の隊員のテントに入る。そのテント内できっと涙を流したことも、公式の記録には残らないが、尾上氏が語り残しておきたかった記憶なのだろう。

なお、本書は二部構成となっており、第一部はここまで述べ

てきた1970年のマカルー登山隊の話で、第二部は「私と山、若き冒険の日々と山岳会」と題し、山との出会いや日大山岳部時代のこと、大学卒業直後に参加したグリーンランド遠征、東海支部支部長や日本山岳会会長時代の出来事が語られている。

マカルーでは体調不良のために思うような登山ができず、尾上氏自身のエピソードとしては裏方話がメインとなっているが、日大OB隊の一員として臨んだグリーンランド遠征では25日間にわたる糧旅行から始まり、目的の山であったマウンテン・フォーレルなど極地の山々の登攀の様子が生き生きとした筆致で語られていく。

「同じ釜の飯を食ってきた屈託のない仲間同士の山登りは、実に愉快だ」

この言葉に、世代は大きく違えども、同じく大学山岳部出身であり、卒業直後に若手OBで構成された隊でヒマラヤ登山を経験した筆者としては、大いに共感する。

マカルー登山での不調がきっかけとなり、その後は学生時代やグリーンランド遠征のような激しい登山ができない体になってしまったという尾上氏。しかし、山への情熱が衰えることなく、これまで東海支部が派遣してきた40にも及ぶ海外登山隊には総隊長や実行委員長などの立場で主体的に関わってきた。その心境を「高校球児と共に甲子園で闘う野球部の監督」と同じだと表現する。たとえ自分自身は登れなくとも、「気持ちには

真正面から海外の山と向き合っている」のだ。その中には、93年のクラウン峰の初登頂、96年のウルタルII峰の初登頂、97年の新ルートからのK2登頂、01年から3度にわたる冬期ローツェ南壁への挑戦などがある。また、09年に日本山岳会の会長となつてからは、若年会員の入会促進のために「YOUTH CLUB」の設置などを行なっている。

尾上氏が実現してきた支部の活発な活動や新しい取り組みの根底にあるのが、マカルー以来、「裏方」「黒子」として実践してきた組織運営と、東海支部において脈々と受け継がれてきた「創始の志」だという。マカルーの「あまりにも鮮烈で強烈であった」体験は、尾上氏のその後の人生にも影響を与え続けたのだ。

尾上氏は本書について、「回想録であり、独白」「あるいは備忘録」だとし、あとがきでは「個人の著す回想録などというものは、つまらないものだ」と相場が決まっている。「本書もその類なので『つまらない』というのであれば、ゴミ箱直行でも構わない」と語っている。しかし、筆者のようにその時代に生まれてさえいなかった者からすれば、マカルー・東南稜初登攀という新たな時代を切り拓いた登山隊のある一面と、その登山が東海支部や隊員であった尾上氏に残したものを知るための、貴重な記録であると言える。

(谷山宏典)

宇根 寛 著

『地図づくりの現在形——地図を測り、図を描く』



講談社 2021年1月刊
四六判 255ページ
1700円＋税

いろいろなところで読図講習の講師を頼まれることが多く、ご多分に漏れず日本山岳会でも年に1〜2回ほど、地図読みの講習を受け持っている。その中で特に感じるのは日本山岳会外部の若い登山者の「地図が読めるようになりたい」という欲求である。どこにも所属せずに山を登っている若い登山愛好者は山に行く回数を重ねていくと、自分で計画を立て、自分で山に登りたいと思うようになる。その時にいやおうなく地図を読むことの必要性を痛感するようになるのである。

新型コロナウイルスの影響で昨年、今年と開催できずにいるが、それ以前は、どこでも読図講習の告知をするとすぐに定員がいっぱいになり、学科の会場や実技の現場も講習受講者の熱気であふれていた。

今でこそじっくりと実技の講習を行なうため、ほかの登山者がほとんど歩かないような山で実技の講習を行なっているが、以前は実技講習の現場として高水三山をよく利用していた。高水三山は沢、尾根、ピークがはっきりとしていて、最後の惣岳山付近からは、それまで歩いてきた山々が一望できるので、読図のポイントをわかりやすく説明できるからである。同じようなことは誰もが考えるようで、集合場所から、途中までとあるツアー会社が主催している読図講習と抜きつ抜かれつなどということもあった。

そんな高水三山だが、最近、国土地理院の地理院地図を眺めていて驚いたことがあった。読図講習の中で「地図上は道がちらに向かっていますが、実際はこちらに道があります。地形図にも登山道の位置に関しては間違いがあるので、気を付けてください。」と説明せざるを得なかったところが、すべて修正されている、寸分たがわず実際の道の通りに修正されていたのである。これを使えば余計な説明はいらなかつたなと思うと同時に、国土地理院の正確な地図作りへのためまい努力に感心した。

地形図上の登山道の位置が正確でなかったために、道迷い遭難が起きたことがあり、数年前から国土地理院では登山道の位置の修正を手掛けるようになった。初めのころは日本山岳会にGPSデータの提供などの協力要請もあったが、最近是非常に

よく使われている山行記録サイト、ヤマレコやヤママップと協定を結び、そちらのサイトに大量に記録されているGPSの記録の提供を受ける。それをビッグデータにして、ログの平均値を登山道の位置として取り上げ、登山道の位置の修正を行なっている。そのため、高水三山をはじめとする国内の一部の山（特に有名な山）では、登山道の位置が非常に正確である。ちなみに本書では地図作りのイノベーションを解説した「イノベーションが地図を変える」の「地図を描いているのはあなたかも？」の項にビッグデータによる登山道の位置の修正の説明がある。

このように国土地理院の地図作りは日進月歩で、三角測量や三辺測量はすでに過去のものになってしまい、今は精度の高い緯度経度の測量はGNSS（GPSをはじめとする人工衛星による位置の測定）と電子基準点で行なっている。2万5000図を基本の地図としていた時代はすでに終わり、2009年からすべての地図の基本となるのは、「電子国土基本図」という全国がシームレスにつながったデジタル地図データベースに置き換わっていることも、現役で山を登っている方はすでにご存じかと思う。紙の地図（2万5000分の1地形図など）はすべてデジタルデータの地図に置き換わるため、2009年以降は紙の地図の情報を一切更新しないとの話もあったが、結局「電子国土基本図」を基に更新は続けられているようである。ただ、

紙の地図作成には製図や印刷の時間がどうしてもかかってしまったためタイムラグがある。そのため、読図講習などに紙の2万5000分の1の地形図を持って来られると、実際の現場と道の位置や建造物、植生などが違うことが多く、説明に苦慮することもしばしばである。

しかし、そういったところより、今一番イノベーションを感じるのには、地図に盛り込む情報と地図情報の利用方法の多様化である。地図が紙という2次元のくびきから解放されたたんと、地図の可能性は無限大となり現在では生活や趣味、仕事にかかわるすべての局面で「電子国土基本図」をベースにした地図や位置、経路の情報を利用していることに気づくことが多い。

本書は、そういったデジタル技術の圧倒的な進歩による、国土地理院の地図の革命的な進歩と、その結果として何が起きているかを、地図作りの歴史や、地図投影法など、地図の基本から掘り起こしてやさしく解説している。著者は「あとがきにかえて」で「もともと四方山話から始まった上に、たびたび思考が中断し、まとまりのない内容になってしまったが」と謙遜しているが、なかなかどうして。日進月歩で少し立ち止ままっているとたちまち時代から取り残されてしまうような、地図(情報)の世界を、これだけ順を追ってわかりやすく解説してもらうと、老境に入って固くなった私のような者の頭にも、地図(情報)の現在の姿が自然に入ってくるから不思議である。

著者は国土地理院一筋に地図作りや海外における地図作りの指導に携わってきた地図のエキスパートである。しかし、著者自身が自認しているように本質はマップラバー(地図大好き人間)。地図を愛しているからこそ、これだけ進歩の激しい地図の世界をわかりやすく解説できたのだろうと思う。

読図講習をしていてよく感じるのには、地図は考えたり理解しようとするものだと勘違いしている人がいかに多いかということである。そういう人たちにとっては、地図は面白くないただの記号の羅列でしかないだろう。しかし、著者もそうだが、地図が好きの人にとって、地図は見ているだけで、そこに描いてある情報が想像力を掻き立て、地図の場所に連れて行ってくれる魔法のじゅうたんのようなものである。地図を開けばそこに景色が広がり、田んぼの上を流れる風のそよぎや、山頂から見下ろすふもととの眺め、列車の走る音や町の喧噪までが聞こえてくるような気がする。そこには理屈も何もない。

それが地図好きでなくても技術の進歩によって目に見えるようになってしまったのは、寂しいような気持ちもするが、うれしくもある。

本書にも詳しく解説してあるが、2013年から国土地理院から提供されている「地理院地図」。今や、国土地理院地図のフラッグシップともいえる、すべてに利用できる基本的な地図である。使い勝手が非常に良く、私も常日頃利用させてもらって

いる電子地図である。

いろいろ触ってみると驚くほど多様なことができ、さらに加工して自分なりの地図にすることもできる。地図を見ることは当然だが、磁北線を付けたり、ルートとの距離を測ったり、地図を3Dで表現したりはもちろん、三角点の情報や、年代別の講習写真のオーバーラップ、標高・土地の凹凸など、さらには土地の成り立ちや、災害に関する情報までわかってしまうから、興味は尽きない。これも紙の地図から電子データの地図への転換のなせる業だが、紙の地図ではその面白さがわからなかったような人にも地図の面白さを知ってもらうための契機づけになるのではないかと、少しは期待している。

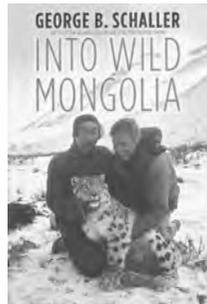
いまや、あらゆることが「電子国土基本図」をベースとしたスマホの地図アプリで可能になってしまった。駐車場の様子をあらかじめ確認してから登山口に行き、山を登ればどこに花の群落があるかわかる。さらに山頂ではベテランやガイドがああ山は○○、あの山は○○などと解説する前に山の名前がわかってしまう。ふもとに下りれば温泉やグルメがどこにあつて、その日が営業日かどうか、メニューの内容がどうかまで手に取るようにわかってしまう。

地図の進歩によって、かえって登山者が地図を読まなくなってしまうというパラドックスである。ただ、それはそれとして、地図の面白さを伝えていくことが私たち山を登る地図愛好者の

務めだと信じて、私は今後も読図講習の講師を続けていくことになるに違いない。
(近藤雅幸)

G.B. Schaller 著

『Into Wild Mongolia』



Yale University Press, 2020

210 p

220 × 150

ジョージ・シャラーはいま何歳だろうか。著者紹介によれば1933年生まれというから88歳だろうか。評者は22年前の『山岳』第94年の図書紹介欄に、「Wildlife of the Tibetan Steppe (1998年)」という本を紹介していて、その冒頭に、「今から十八年前の『山岳』のこの欄にG.B. シャラーのStones of Silence (1980年)」という本を紹介したことがある」と記した。その時からすでに40年も経っているというのに、シャラーは新たに表記のInto Wild Mongolia (2020年) という本を書いている。

シャラーはマウンテンゴリラにしても、セレンゲティーライオンにしても、アジアの野生ヤギ、ヒツジにしても、またジャイアントパンダの時も、学術書のほかに一般向けの興味深い調査旅行記を書き残しており、達者な著述家でもある。本書は1998年の上記の学術書 *Wildlife of the Tibetan Steppe* に対応する調査旅行記に当たるものだが、主にチベット、チャンタンについて書いた調査旅行記 *Tibet Wild (Island Press, 2012)* が上梓されているし、写真を主体とした *Tibet's Hidden Wilderness (Abrams, 1997)* も出している。しかし、モンゴルの部分については宿題として残り、今ようやく果たし終えたというところかもしれない。

1980年から85年の間は四川省でジャイアントパンダのフィールド調査を行なっていたのだが、その途中の1984年からは入域解禁後間もない青海にも入っている。そして新疆、チベットに対象地域を広げて、中央アジアの荒漠地という新たなフィールドに移行し、そこに生息する有蹄動物、チルー、アルガリ、バーラル、チベット・ガゼル、ヤク、クチジロジカ、ノロバ(キャン)などを中心に調査を行なった。11年に及んだこの調査は、各地域を季節も変えてめぐりつつ同時並行的に行なわれたが、この広大な荒漠地域の東端の部分、そして、時間的に後半に当たる時期にはモンゴルにまでその範囲を広げている。

シャラーが最初にモンゴルを訪れたのは1989年で、まだ「モンゴル人民共和国」の時代であり、交渉事や行動には不自由さがあつたようだ。その年はソ連のペレストロイカが進み、その影響がモンゴルにも及び、翌年には自由選挙が行なわれ、そして、91年には社会主義体制も放棄した。国家としてのモンゴルの国境は、1912年当時の隣国(中華民国とロシア)との関係の中でほぼ決められてしまったが、清代の『蒙古游牧記』にもあるように、国境の外側に広く「モンゴル世界」は広がっている。今まで抑えられていたチンギス・ハーンの英雄譚が国民の誇りとして復権し、縦書きのモンゴル表記も復活、弾圧されていたラマ教が息を吹き返してきた。1990年からは西側諸国への旅行制限も解かれて、調査活動の範囲も広がった。

内陸に位置するモンゴルの生態環境は、冷涼なシベリアと乾燥した中央アジアの両要素があり、東西方向に紡錘形に広がった領域の分水界を挟んだ北側はシベリア、南側は中央アジアへとそれぞれ繋がっている。そして、西側には氷河が点在するアルタイなど高い山岳地帯がある。起伏の緩やかなステップ地帯はモンゴル中央部に東西方向に広がっており、山岳地帯の北西方に広がるカザフ・ステップに連なる。このステップの南側は荒漠地(ゴビ)と沙漠が取り巻いており、これも南西方の青海、チベット、チャンタンの荒漠地へと続いている。

シャラーは1989年の予備調査を経て、ゴビとステップ地

帯、そして、アルタイ山地を調査フィールドに選んだ。90年の春、冬、91年の冬、92年の秋、93年の夏、94年の夏にそれぞれ2ヶ月ほど留まって調査を行ない、その後も2007年までたびたび訪問を繰り返しており、最後に訪れたのが2018年である。調査対象は、沙漠とゴビに最後の野生種として残っているフタコブラクダ、ノロバ（クौरラン）、ゴビ・ヒゲマ、山岳地帯に生息するアルガリ、ユキヒヨウ、そして、大きな群れでステップ地帯を季節的に移動するモウコ・ガゼルである。

牧畜経済中心のモンゴルは人口密度が非常に低く、鉱山や石油開発、過放牧地を除けば自然環境への大きな改変は少ない故に野生動物の数が多い。とは言っても、日常的にガゼルの肉やタルバガンの毛皮などが資源として交易対象になり、オオカミは見つけ次第射殺され、また、外国人ハンターに高額のライセンス料を課してアルガリやユキヒヨウなど希少な動物の狩猟を認めてきた。牧民による密猟も少なくない。この状態を改善しなければ、残されたかけがえのない生態系が失われてしまうことになる。モンゴル政府は「環境保護省」を設け、プルジュエワルスキー・ウマや野生フタコブラクダなどの保護に関心を払っているとはいえ、経済的な事情からも野生動物の管理に十分な予算をかけることができない。

シャラーの目指すものは、なるべく自然状態のまま動物たちを護ることであるから、モンゴルの特に大型動物たちの分布や

行動を調べて現状を知り、保護活動を含めた次の活動に繋げていくということである。調査の結果に基づいて、モンゴル政府に対しても中国の場合と同様に自然保護区の設定を提案し、継続的な調査協力をモンゴル人研究者に対して行なっている。調査当初はモンゴルの研究者と牧民たちに案内を頼み、アメリカの2人の若手研究者も加え、そして、毎度のことだが、*ボバ* 夫人をアシスタントとして伴っていた。さらに研究者に育った息子の *ボバ* も幾度か同行している。

シャラー自身が1970年代にヒンズー・クシユにおいてユキヒヨウの野外調査を最初に行なっているが、その後もテンシャンで、パミールで、クンルンでユキヒヨウを追っている。モンゴルのアルタイでは、ゲルを根拠地にしてじっくり時間をかけた。食いかけのアイベックスに罟を仕掛けて捕獲に成功し、麻酔で眠らせ首に送信機をつけて長期間にわたる行動追跡を行なっている（本書のカバーはこの捕獲時の写真）。

大型の野生羊アルガリは、中央アジアの山岳地帯に分布し、歴史的にも多くのトロファイハンターを魅了してきた。パミールのマルコポーロ・シープ (*Ovis ammon poli*) と双壁をなすのが巨大な角を持つモンゴル・アルガリ (*O. ammon ammon*) だが、今やアルタイやゴビの岩山で孤立した群れとなって数を減らしている。この現状に対しても、毎年欧米の金満ハンターたちがアルガリの角を求めてやってくる。モンゴル政府は201

7年にライセンス料を7万〜8万ドルに引き上げ、半分を保護活動に充てるという法律に変えたそうである（AFP電では、2019年にもアルタイで許可を取らずにアルガリを撃った問題があったが、そのアメリカ人とはトランプ大統領の長男だったそうだ）。

中央アジアの荒漠とステップには4種類のガゼルが地域を分けて生息している。東端に当たるモンゴル東部のステップにはモウコ・ガゼルがいて、季節的な大移動を繰り返す。アジアでは希な、アフリカのサバンナのレイヨウ類に匹敵する数万頭もの大群が見られる。シャラーは毎年豊かな草原が広がるチヨイバルサンの周辺で、モウコ・ガゼルの出産行動を調べた。この時期（6月、7月）、オスたちは離れた位置にいる。やがて合流し大きな群れとなつて移動を続けてゆく。群れはこの後どこを目指し、どのように行動をするのか。それを解明するため、シャラーの意志を継ぐ若手の研究者たちが、人工衛星を使った追跡システム（Argos System）を用いて解明しようとしている。

（児玉 茂）

追悼

大橋 晋さん



おおはし すずむ
(1935～2020)
会員番号 4824

日本山岳会の図書委員会では、このところ元理事・元委員長
の三好まさ子さん、平井吉夫君が相次いで亡くなられ、このた
びはコロナ禍の去る昨年7月、現役委員で最古参の大橋晋さん
が亡くなられた。昭和50年代前半、私が図書委員会に仲間入り
させていただいたころからのお付き合いは、かれこれ50年に及
ぶ。山行でも会議でも、実に几帳面にメモを取られ、委員会の

生き字引のような存在だった。大橋さんの図書委員会への参加
は、昭和40年代だったようで、小林義正さんや深田久弥さんら、
錚々たる図書委員会第一世代の方々が活躍されていた時代のこ
となどを、決して昔話を得意げに話される方ではなかったが、
何かの折にお聞きしておけば良かったと惜しまれる。

日本山岳会創立百周年記念事業の一環として行なわれた「所
蔵山岳図書・絵画展」の開催（2005年）では、準備委員会
のメンバーとして尽力された。開催前夜、会場の丸善丸の内本
店で、準備作業が始まったのがすでに午後8時過ぎ。不手際
のあった丸善の担当社員を、大橋さんが血相を変えて叱り飛ばし、
居合わせた一同が凍り付いた場面があった。先方の上司の平謝
りでその場は収まったのだが、平素もの静かな大橋さんの、こ
のときの気迫には驚いた。その後別の場面で、図書委員会のこ
とをあらぬ理由で批判した人がいて、烈火のごとく反論された
こともあり、実は寡黙にして熱血漢だった。

この図書展では、約200冊に及ぶ出版図書の解題付き目録
を発刊したのだが、その解題の執筆に当たっても大橋さんは積
極的に分担を買って出られた。その一部、次の10点は大橋さん
の執筆だったことを開示しておきたい。野中至『富士案内』、小
島鳥水『山水無尺蔵』、同『日本アルプス』全4巻、丸山注連三
郎・高島伝・二良・野本又次『槍が獄乃美観』、石田吟松『山の画
帳』、幸田露伴『枕頭山水』、大町桂月『二簔一笠』、遅塚金太郎

『山水供養』、一戸直藏・河東碧梧桐・長谷川如是閑『日本アルプス縦断記』、河東碧梧桐『日本の山水』、徳富猪一郎『名山遊記』。いずれも明治から大正にかけての山書の古典であり、その解題となると私などはちよっとひるんでしまうのだが、快く引き受けて的確な解題を書かれた。

大橋さんはそれよりずっと以前に、大修館書店から出された『山・やま辞典・日本の名山』（昭和63年）の執筆にも参加され、富士山、槍ヶ岳、劔岳、早池峰山、妙義山、蔵王山、鳥甲山、浅間山、御嶽、谷川岳、笠ヶ岳、甲斐駒ヶ岳を担当されている。よく調べ上げられたうえでの簡素な筆致が好ましく、つい登って見たいなと思ってしまう。

大橋さんが山歩きを始めたのは昭和20年代、中学生のころ。やがて國學院大學に進み、在学中は山岳部に。あまり先鋭的な登攀は好まなかったようだが、谷川岳や八ヶ岳、南・北アルプスで岩登りや、積雪期登山で基礎はきっちり習得されたようだ。少し先輩に当たる松永敏郎さん（故人・本会元常務理事、評議員）と親しく、卒業後もしばしば現役の山岳部の合宿に参加されていた。後輩山岳部員の5名が死亡した北アルプスの硫黄岳・小次郎沢での雪崩事故（昭和44年3月）、富士山頂での低体温症による2名の死亡事故（昭和51年3月）に際しても、救援に駆け付けておられる。

のちに松永さんの勧めもあって、ご自身の山行記録をまとめ

た『いわかがみ』（平成21年、私家版）を出版された。巻末の「登山譜」についてご本人は「内容は記録の羅列であって、目を通された方は興味を引かないだろうが、私には過去60年になる『私の山歩き』が凝縮されたものといえる。この本の中でいちばん大事なものである」と書いておられるが、私には、四季を通じて丹念に、広く内外の山歩きを楽しまれた様子が読み取れた。確かに年月、山名、地名のみの羅列だが、これに同行者名が加われば、どんなに興味深いものとなったものかと惜しまれる。

収録された紀行文「タトラの山旅」は、中欧スロバキアの高タトラ山脈南麓のタトラ街道周辺を、数日かけてトレッキングしたときのもの（平成18年9月）。図書委員で発案者の平井吉夫君をリーダーに、大橋さんはご夫妻で参加、私も家内と参加させてもらった。お互いまだ60代の元氣だったころの行動記録は、大橋さんらしく正確緻密で、私の母校の山岳会の会報（甲南山岳会『山嶽寮』62号、平成19年）にも掲載させてもらったのを今、懐かしく再読したところ。旧ハンガリー・カルパチア山岳会により創建維持されていた頑丈な山小屋の管理人や、居合わせた隣国ポーランドからのグループ登山の高校生らから、日本人に会うのは初めてだ、と珍しがられたことなど思い出される。

パミール中央アジア研究会（会長・田村俊介氏）でも随分お世話になり、月例会や読書会、それに続く飲み会でいつも愉快

に過ごさせていただいた。また、会の遠征で新疆ウイグルを訪ね（平成24（2011）年）、史跡見学に加えて、タクラマカン砂漠の縦断自動車旅や、カシユガルからトルファンに至る南疆鉄道の旅にご一緒させてもらい、予備知識たつぷりの大橋さんには教えられることが多かった。ちなみに、大橋さんはすでに中央アジア諸国を訪れ（平成9（1997）年）、レーニン峰のBC付近での山歩きなどの経験をお持ちだった。研究会では、副会長を務められたこともあったが、会の創立20周年の記念会報の刊行（平成30（2018）年）に際しては、すでに体調思わしくなく、一筆いただけなかったのは残念だった。

教頭まで務めた中高一貫の名門、豊島岡女子学園では、長年登山部の部長で、生徒たちとの山行も頻繁に参加されていた。山の動植物にも詳しく、大いに頼りにされていたのではないかと、もう40年余りの昔、丹沢でのことだが、私は岳友とふたりで、今にも雨の降り出しそうな鬱陶しい空模様の中、しょぼく歩いていていたところ、急になんだか華やいだ女学生一行とすれ違ってハツとしたら、そのシンガリに颯爽と大橋先生。決定的な差を付けられて、こちらはさらにしょんぼり。リタイア後も登山部のOGたちが、大橋先生を囲む会を催してくれると嬉しそうだったが、コロナ禍での静かな家族葬では、教え子たちのお見送りの叶わなかったのではないかと。

前述の「登山譜」の記載は平成20（2008）年で終わって

いるが、その後もたびたび奥様とも一緒で、関西育ちの我々夫婦を、秩父郊りに1泊2日でご案内いただいた。お伺いした話の中、若いころから山行の際には、入山前と下山後に山麓の宿で一泊するのを理想とされていたとのこと。適切な宿選び、山里の文化に通じた会話で、山行の値打ちが倍增したような気分になったことである。荷造りが周到で、欲しいなと思ったものが、サプライズ的に重たいリュックから出てきた。寒空でのホットウイスキー、山桜を愛でながらの野点など、思い出は尽きない。

こちらは寂しさ一入^{ひしお}ですが、図書委員の先発隊、三好さんや平井君が首を長くしてお待ちしています。ともどもお安らかに。

（略歴）

（越田和男）

昭和10（1935）年…東京都品川区旗ノ台生まれ

昭和29（1954）年…國學院大學文学部入学。在学中は山岳部^部に在籍

昭和33（1958）年…同大学卒業。同年、日本山岳会に入会。

昭和48（1973）年…所沢市に転居
長年、図書委員会に在籍

昭和60（1985）年…常務理事

昭和62（1987）年…理事、図書委員長など歴任

平成20（2008）年…永年会員に

平成21（2009）年…私家版『いわかがみ』を出版

令和2（2020）年7月23日…急性心筋梗塞により逝去、享年85

年85

勤務先…出版社等を経て豊島岡女子学園中学・高校にて国語の教鞭を執り、教頭を経て2005年70歳まで奉職。その間、登山部部长を務める

役職…パミール中央アジア研究会で副会長、監事、理事など務める

神尾 重則さん



かみお しげのり
(1953~2020)
会員番号 10580

神尾ドクターと旅をして

智習充満、博覧強記、愛情満々、勇氣凛々のあの人がなぜ？私の親しい友人が神尾ドクターの逝去を知ったとき、こう書いてよこし、ともにその悲報にうろたえた。

長年にわたり神尾ドクターには、仲間として私たちの様々な相談事を聞いてもらい、的確なアドバイスをいただいていた、心のよりどころと言ってもよい人だった。当然、医師としても、贅沢なことにも私たちのホームドクター的な存在であり、歳とともに病いが増えてきた私たちに、幅広い知識と経験に基づく確な判断と今後の取り組みについて心強い助言をいただいた。そして、誰もが弱気になっていたとき、晴れやかになったような気持ちになるものだった。博覧強記からなる科学、医学の世界を超えた幅広い観点からの助言だったから、そう言えるのだろう。

そのドクターが突然、この世から姿を消したなど、全く信じられないような大きな出来事で、昨年の8月以降、なぜ神尾ドクターが…、というあきらめきれぬ思いを、いまだに引きずっている。

私がドクターと初めて会ったのは、30年以上前のことになる。東京都板橋区にあった都立豊島病院を訪れ、私を中心に নিয়ে進めていたカラコラムのガッシュヤブルム登山隊に医師としての

参加をお願いに行ったときだ。診療の忙しい合間を縫って白衣姿で現われたドクターは、その後も変わることのなかった終始にこやかな表情で、休みがうまく取れたら参加しましょう、と言ってくれた。のちに分かったことだが、彼も私もネパールのダウラギリの隣の山、ツクチェ・ピーク（6920m）に登頂していた。私は1970年に、ドクターは80年に母校の宮崎大雪山岳会の登山隊でそれぞれ登っていた。それを知ってから親近感を覚え、ヒマラヤに心を向ける同志的な気持ちを抱くようになり、その後のネパール、ドルポへの思いとつながっていく。

日本人側はドクターを入れて5人、パキスタン側からはK2のときに一緒だったナジール・サビールとハイ・ポーターたち4人が参加した。登山の前半は計画どおり順調に進んだものの、意外と氷河の状態が悪く、天候の悪化にも悩まされた。また、ルートに選んだガツシャブルム主峰の南稜は、下部から見えない所がとて長く、結局、登頂を試みたのは1回だけになった。

私とナジール、ハイ・ポーター3人は、7500mの最終キャンプを夜が明けぬ暗いうちに出た。足取りは重かったが、ナジールと私とでロープを張りながら高度を稼いだ。それほど急ではない岩場の上に十分でない雪が積もり歩きにくかったが、時間をかければ登れると確信していた。

それまでずっとベースキャンプに陣取ってくれていた神尾ド

クターは、実質的な隊長の役割をしていてくれた。各キャンプとの定時無練を楽しみにして、穏やかながらも力強い叱咤激励の声がカラコラムの山々を行き交った。ときにはとても文学的な表現で、歴史上の人物や戦いの話を例にしたり、今になっては思い出すすべもないが、ためになるような話題が多かった。高所において思考能力も落ち、歴史に詳しくない私であったが理解もそこそこでき、高尚な話をされる、ただならぬ人だと感じていた。

予定より遅れていたが、標高8000mの頂上へと続く急斜面に到達したときは2時を回っていた。あと距離にして3ピッチくらいだったろうか、ちぎれ飛ぶ雲間から頂上が見える気がした。しかし、西の空から黒い雲が徐々に近付いていて、風が強まってきた。おまけにハイ・ポーターの何名かが、足先が凍傷になりそうだと訴える。このまま登り続けても、帰路がとても不安だった。ナジールと1ピッチ登って気持ちを切り替え、登頂を潔く諦めた。

それまで何度か神尾ドクターとやり取りをしていたが、そのときは武蔵と小次郎の巖流島の決闘を話題にした、しゃれた話だった。といっても、高所で聞いても難解に思えたが、今日は必ず登れると信じていてくれたに違いないし、私たち以上に無念な気持ち伝わってきた。しかし、冷静な心からのねぎらいの言葉を聞き、素直に登頂への諦めの気持ちを改めて持つこと

ができた。

最初から登れると思っていが、失意のうちに終わった登山だった。久しぶりに大きな山に向かった満足感があったものの、やはり大きなむなしさが残った。足取り重くBCに戻り、「手ごわい山でした、申し訳ありません」と言う私に、ドクターは変わらぬスマイルと元気の良い声で、「イヤー残念だけれど、いいんです、これで。私なりに山を楽しめましたし……」。その大らかな態度に救われた気持ちになり、何か大切なものを教えてくれた気がした。

皮肉なことに、登山終了と決めてから天候が回復した。めつたにない機会だから大きなカラコラムの山々を眺めたいものだと、ゴンドコロ・パス越えてスカルドへ戻った。峠から眺める白く輝く峰々はすばらしく、誰もがその絶景に見入っていた。

77日間を異国の地でも過ごした日々は、今となれば貴重な時間だった。結果は失敗だったけれど、多くのことを話し合い、お互いを知り、将来へ向けての同志のような気持ちが生まれたのかもしれない。結局、登山期間延長で帰国が遅れ、期限付きの休みを取って来てくれたドクターには、その後大きな迷惑をかけることになってしまった。

都立病院を辞めた後、詳しくは知らないが、宮崎でのスポーツ選手向けの医療センター設立計画があり、それに医師として

参加を誘われたという。楽しみにしていたようだ。しかし、プロジェクトは白紙になってしまったが、その後間もなくして東京あきる野市にある落合クリニックの院長に決まったとのこと、安心されたようだった。

私たちとしては、東京にいくことができることが心強いと勝手に喜び、仲間たちとの交流を長く続けることができた。仕事を終えてから、わざわざ都心の居酒屋に何度も来てくれた。こちらもケガや体の心配事があれば、クリニックを気安く訪れることができた。ドクターの人柄によるものだろう、看護師さんたちやスタッフはいつも元気な笑顔で優しく、明るく仕事をしていた。木材を基調にして建てられたクリニックの中には、山の写真や、当時エベレストへ60歳での登頂を計画していた三浦雄一郎氏の医療アドバイザーだったこともあり、三浦氏のスキー板なども飾られていた。そのような雰囲気の中、患者さんたちもゆつたりと順番を待っていて、心が落ち着く場所だったことが懐かしい。それからは、地元根付いた医療を提供する医師として広く信頼と尊敬を得て、長くあきる野市に勤務することになる。

そのころ私は、ネパールのドルポ地方を撮影でたびたび訪れていた。チベット文化圏にあるドルポのことをドクターに話すと、とても興味を持ってくれた。2回目の夏に訪れたとき、麻疹が流行して多くの子どもたちが感染し、十数人の幼児が亡

くなくなった。町から戻った若者がウイルスを持ち込んだため、たまたま私たちが持っていた抗生剤を配布したところ、あつという間に麻疹の流行は収まった。

現地には古くから「アムチー」と呼ばれるチベット伝統医がいるが、治療は主に薬草を用いるため効果が表われるまで時間がかかる。そのときの旅の様子をドクターに話すと、ドルポに伝わる伝統医学を尊重しつつ西洋医学の薬を取り入れてもらうことも必要ではないか、ということになった。西洋と東洋の両医学の良いところを補いながらの治療、私たちの次の目的がそのときに生まれたのかもしれない。

すでにドルポの子どもたちへの奨学支援を行なうため、ドクターも参加してもらいドルポ基金を設立していた。一部の子どもに、カトマンズの学校で学んでもらうというものだったが、次のテーマとしてドルポ医療センター設立を計画した。国際ボランティア貯金の助成を得ることができ、具体化することになった。そして、1997年の医療センター完成式にドクターにも同行してもらって完成を祝い、診療活動を行なうことになった。神尾ドクターにとって初めての、念願のドルポの旅だった。

ドルポは1900年、河口慧海師が大蔵経の原典を求めチベットへのルートに選んだ地であり、現代ではチベット文化や生活が色濃く残る地として知られる。ドクターもその旅でドル

ポにますます強く惹き付けられたようで、チベット仏教をはじめ伝統医療にも深く傾倒することになった。各村のアムチーとの交流、村人の診療など精力的な活動を行なった。当時としてはまだ珍しい携帯型のエコーで、患者さんには申し訳ないが、得意げな、嬉しそうな様子で診察する姿が思い出される。それは無邪気な子どもが、無心に物事に熱中するようだった。

ところで、神尾ドクターは1982年から東京医科大大学院で博士課程に進み、83年にはエベレスト街道のペリチエ診療所（東京医科大学高山医学研究所）に長期間滞在し、高山病の研究や登山者の診療活動を行なった。専門は呼吸器外科だったが高山医学の専門家でもあり、多くの登山関係者がお世話になったことと思う。

それ以前から、神尾ドクターは多くのエッセイを書かれていた。主には医学関係の出版物だったが、地元の西多摩新聞にも連載するようになった。ときおり私のもとにもコピーが挨拶代わりに送られてきた。医学、人体、山の話など多様な話題が、日本の古典や文学の世界にまで展開し、リズム感のある心地よい、しかも、とても格調高い文章とともにドクターの世界へと誘われるようだった。3年間ほど書き溜めたものが、当然のことだが一冊の本となった。題して『Dr.重さん山のカルテ——西多摩からヒマラヤまで』。山がテーマだが、科学の世界に話が

及び、文学の香り高い言葉で、読む人を惹き付けた。親しい仲間たちがたくさん集まって、六本木で出版記念パーティを開いたのが懐かしい（2002年）。

その後も、院長としての忙しい身でありながらも、登山医学や高所登山の観点から山岳雑誌など様々な場に寄稿していたが、的確で分かりやすい話は多くの読者の心をつかんだ。ドクターの医師としての才能はもちろん、温かな心と自然と醸し出される人徳によるものだろう。学校医や産業医として地域に貢献し、日の出町医師会長や西多摩医師会理事、日本体育協会医科学常任委員、東京都山岳連盟顧問ドクターなどを歴任された。奥多摩で毎年開かれる日本山岳耐久マラソン（長谷川恒男CPU）には担当医として常駐され、山での仕事が楽しみだったように、毎日起こった出来事を楽しく話していた。

2回目のドルボ行の機会は、04年に訪れた。医療センター設立に続き、村人たちの要望でドルボ・パブリック・ホール（集会場）を建設することとなった。村人たちが集まり話し合える所、婦女子のための相談事や、様々な行事が屋内で行なわれることが、主な目的だった。ドクターは建設のための資金集めに尽力してくれて、国際ソロプチミストあきる野から大きな支援をいただいた。

忙しいドクターの時間に合わせ6月にドルボへ向かったが、

その年は雪が遅くまで残っていて、峠越えは難しいとのこと。贅沢なことだったが、ヘリコプターをチャーターしてポカラから一気に奥ドルボへ入った。

普段だったら10日間はかかるカリ・ガンダキからのルート。残雪に山々はまぶしく輝き、懐かしいツク Cheney・ピークは小さいながらも変わらぬ姿で美しくそびえ、ドクターと顔を合わせて喜び合った。間もなくダウラギリ方面から目立つ谷が現われた。ヒドウン・バレーだ！ 満面に笑みを浮かべて叫んだドクターの顔は、忘れられない。いつかこの豊かな谷を登ってみたいですね、と話したこともあった。

このときの旅には、もう一つ大きな目的があった。当時、河口慧海師が越えたチベットへの峠についていろいろな議論があったが、クン・ラという説が確定していた。すでに私は一度訪れたことがあるが、ぜひそこまで行ってみたいということだった。

深い雪に足を取られながらも、念願の峠に立つことができた。ヒマラヤの風に吹かれレンタⅡ風の馬がはためき、チベット高原は果てしなく、穏やかに広がっていた。ドクターは感慨深そうだった。ドルボを2回旅したことにより、ドルボへの想いをよりいっそう強くしたに違いなかった。

落合クリニクスの院長を20年近く務めていた神尾ドクターとはその間、忙しい合間を縫って何回か海外の旅をとにした。

ドルボへ行くには少なくとも1ヶ月の人数が必要で、そう何度も出かけるれない。2週間ほどでの旅ということで、09年には中央アジア探索旅行を計画した。たまたま私が歴史家の金子民雄先生と付き合いがあり、先生に案内をお願いして、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタンを巡った。金子先生の名の解説付きの旅という、すばらしいものだった。私にとってもあこがれの地、中央アジア初めての旅だった。ドクターはぜひぶん勉強して参加されたようで、思いついたように話が展開する先生には、私もドクターも学ぶところが多かった。

中央アジア探検史、グレート・ゲーム、ルバイヤートの謎、チューリップとワインと美女、汗血馬、ワインの試飲、和紙工場など金子先生の独壇場である世界の旅は西へと続き、カスピ海に到達した。湖水の水に手を浸しながら、想いをさらにまだ見ぬ西へと馳せた。今回はここからカスピ海を横断してアゼルバイジャンへ上陸、ヨーグルトを食べてアララット山に登りましょう！と半分本気の冗談を言い合った。ドクターが、中央アジアの文化、イスラムの世界への興味を深めていることが分かった。

この旅では、私はドクターと同室だった。眠りにつくまで、ぼそぼそと会話を楽しんだ。初めて一緒だったバキスタンの旅、将来のドルボのこと、共通の知人たちのこと、懐かしい出来事を懐かしく思い出し、将来の希望などを語り合った。時間

的な余裕のあるときには、まだ日が昇らないうちの早朝ジョギングも楽しんだ。静かにたたずむ壮麗なモスクが、本来の美しい色に輝くまで、ともに見とれていたことを思い出す。

そして、翌年にはアララット山登山を実行した。頂上からの下山時、発達した雷雲につかまり、ドクターと顔を見合わせて幸運を祈りつつ雪面に伏し、肝を冷やしたことが懐かしい。登山終了後はノアの箱舟歴史館や遺跡巡りを楽しみ、イラン人たちに交じって国境を越えようとしたが失敗。いつも勝手なことを言っていて、ガイド泣かせの私たちだったろう。旅の最後はアナトリア人が多く、ロシアの影響も強かったカルスの町を訪ねた。見事な姿で残るアニ遺跡を見た。観光客は私たちしかおらず、はるか遠く数千年前の歴史の舞台にいるような、西アジアにしていることを実感した。ドクターも同じ想いだっただろう。

そして、なんと2年後の12年の夏には、カスピ海南岸、エルブルース山脈のダマバンド山登山を企てた。山を楽しんだ後は、観光コースとなっているがペルシヤ世界を旅しようというものだった。ドクターの強い要望で、ヤズドの拝火教寺院と「沈黙の塔」と呼ばれている鳥舞台跡、ペルセポリスの遺跡などを見学した。このころ、拝火教にかなりの興味を持っていたように、ペルセポリスの遺跡で壁に彫られたゾロアスターの主神アフラ・マズダを見付けたときは、とても感慨深そうだった。沈黙の塔に登ったときは、チベットに伝わる鳥葬はこの地から伝

わったのでは、と深く想いを巡らせていた。10日間という短い旅だったが、ドクターの並々ならぬ知的好奇心とそれに懸ける強い情熱を身近に感じ、どのような発見があったのか、ドクターの次のレポートが楽しみだった。

常日頃「雪と温泉と酒」を唱えていたドクターは、忙しい勤務の合間を縫ってスキー場へずいぶん通った。特にテレマーク・スキーはお気に入り、いつの間にかかなり上達し、滑りは見事だった。私が最後にスキーをともにしたのは、秋田県の森吉山の頂上からの滑降だった。転んではかりいる私をしり目に、樹氷の間を縫って華麗に滑るドクターの姿は、まぶしかった。函館の高校時代はオリンピックを目指し、スピード・スケートに打ち込んでいたということを思い出し、滑る感覚は相当なものだと感心させられた。

ところで、落合クリニックは医療法人の傘下であり、組織変更に伴い閉じることとなった。それと同時に、ドクターは総合病院である日の出ヶ丘病院の院長に就任することになった。15年のことで、経験や実績を買われてのことだが病院運営にも携わるわけで、ずいぶん悩んでいる様子だった。会社員であれば60歳の定年を過ぎたところで、そろそろゆつくりと好きな山やスキーの世界に戻り、文筆活動などにも時間を使いたかったら

う。しかし、病院側の強い要望で、短い期間であれば、ということでは院長を引き受けたが、何事にも真摯に取り込む神尾ドクターは、多忙を極める毎日となった。

そのような状況の中でも、17年と19年の2回、ドルポへの旅を実施した。かねてからドルポ基金とNPO法人アースワークスソサエティで、「ドルポ地区B型肝炎根絶支援活動」のプロジェクトがあり、現地でのB型肝炎の感染状況の予備調査が目的だった。辺境の地であるドルポには、政府の医療支援はほとんど届かず、いまだに感染率は高いと言われていた。私たちが奨学支援を続けた優秀な女の子が、将来、婦人科の医師になることを目指していた。マニラの大学で専門の医学部に進む際、彼女がB型肝炎のキャリアだということが分かり、進学を断念することになった。私たちは強く抗議したが、英語圏の医学部では難しいということが分かった。そのことが私たちの背中を押し、プロジェクトを推し進めることとなったが、ドクターはその中心的な存在だった。

17年のときは雨期が長引き、例年より川の増水も激しく、厳しい行動となった。最後に渡る予定の川の橋は流されてしまい、徒渉は危険で水が引くのを待った。結局、まだ流れは強かったが、馬を使って試みた。その旅ではいちばんの冒険となったが、なんとか渡ることができた。たまたまガイドが撮った私たちの姿が格好良く、ドクターは堂々とまたがる馬上の人、彼の

お気に入りの写真となった。大分遅れて目的の村ティンギューに着き、107名の子どもに対し血液検査を実施できた。B型肝炎のキャリアは、25・2%と高かった。

目的地にたどり着くのが精いっぱい旅となり、帰路は一人のメンバーの体調がかなり悪くなってしまい、日数的な余裕もなく、ヘリコプターを呼ぶことになった。山が晴れても下界は雨。結局、1週間も待つこととなり、ようやくドルポから脱出できたが、帰国は大幅に遅れることとなった。私と一緒に旅では2回目の失態、今でも大変申し訳なく思っている。

19年の旅は天候にも恵まれ、すばらしいものとなった。予定どおり計画を進めることができ、ドルポの何ヶ所かの村で、子どもたちや大人も含めての調査を行なった。ドゥでは152人、ティンギューで103人、コマで47人を検査し、やはり感染率は高い所で20%に達していた。感染には主に母子感染である垂直感染と、人と人との接触による水平感染がある。先進国では0・1%、首都カトマンズでは1%と言われている。予防、根絶には乳児のときのワクチン接種が有効とされている。水平感染については、住民たちに感染について理解を深めてもらい、注意してもらえない。主だった村ではリーダーたちとプロジェクトを進めるに当たっての討議を重ね、今後の協力を得られることになった。実りの多いドルポでの予備調査ができ、ドクターは大いに満足げだった。

帰路は、ボン教の総本山サムリン寺や、聖地として知られるシユイ（水晶）寺を訪れた。ドクターはチベット仏教についても十分学んでいて、寺の像や壁に描かれた貴重な仏画をじっくりと見ていた。最後は5000m級の峠を2度ほど越えて、群青色のすばらしい色をしたポクスンド湖に出た。今回は時間切れで果たせなかつた、ドルポ取つて置きのをすべて巡ることができ、誰もが大満足の旅となった。

キャンプでの朝食前に、ドクターと私がお気に入りのカトマンズ・コーヒを淹れるのが、私の日課だった。それから始まる一日だったが、今はドルポの旅のあらゆるシーンが続いて思ひ出される。唇を切った子が運ばれて来て、麻酔なしでの緊急手術、顔見知りの村人たちがやって来て、言葉が通じないが楽しいやりとりと記念写真、峠によりやくたどり着き、風にひるがえるルンタとドクター、夕景を見ながらの贅沢な夕食、満天の星を眺めながら用を足し、Good Night

予備調査を終え受け入れ態勢もでき、今後のプロジェクトをどう進めるか大いに話し合い、これから本番と思っていたのに、これが神尾ドクターとの最後の旅になるとは、残念でならない。なぜ天は彼を召されたのか、早過ぎる。まだまだ多くやることがあったのに……。

計報を、ネパールやパキスタンの友人たちに知らせた。彼ら

は驚き、同様になぜ彼が……と電話の向こうで絶句した。私たちがささやかなお別れの会を開いた日に、彼らは仏に祈り、ボウダナートに108本のロウソクを灯し、何日間も祈つてくれた。

そのとき寄せられた、家族の代筆による神尾ドクター最後の手紙。

「……体調を崩し、休職して治療に専念していましたが、治療にも疲れましたので、帰ることのない旅に出ることにしました。今頃は、千の風になって、秋の大きな空を吹きわたり、朝は鳥となつてさえずり、夜は満天の星空のどこかで輝いていますので、足を止めて風を感じ、耳を澄ませ、夜空を見上げてくださいます。きつとお会いできると思います。」

あきらめられることではないが、現世との見事な別れだったような、死生観に基づくドクターのひとつの美学が終わったようだった。

(大谷映芳)

〈略歴〉

1953年4月…東京生まれ

1974年…宮崎医科大学医学部入学

1980年…ネパール・ヒマラヤのツクチュ・ピークに南西稜

から初登頂

1982年…東京医科大学大学院入学

1983年…エベレスト街道のペリチェにて診療活動



なかむら じゅんじ
(1923~2020)
会員番号 4541

中村 純二さん

1992年…ガツシヤブルムI峰登山隊にドクターとして参加
2000年代から…NPO法人アースワークソサエティに参画、
5回ドルポへ
1994年…落合クリニック院長就任
2004年…『Dr.重さんの山のカルテ』発刊
2015年…日の出ヶ丘病院院長就任
2017年…日本山岳会理事に就任
2020年8月12日…逝去、享年67

かれこれ、もう40年近く昔のことになるのだが、当時、私は中村純二・東大教授を「中村先生」と呼んでいた。したがって、この稿でも中村先生と書かせてもらうことにする。

最初に、大変懇意にしていたいたいたにもかかわらず長い間、ご無沙汰していた非礼をお詫びしなければならぬ。

中村先生に初めてお会いしたのは、本会のルームでのことだった。常任評議員をしていた先生を私に紹介したのは、故佐々保雄会長である。私は青森支部設立を依頼されていたこともあり、その打ち合わせなどで、会長とは以前から面識があった。

私がルームに向いたのは自然保護委員会の席上で、当時、私が推進していた白神山地を分断する春秋林道の建設反対運動に協力を求めるためであり、それに関する経緯や事情を説明する講師として出席した。中村先生は夫人と同席されていた。その後、私との山行のときも、東京でお会いしたときも常に夫人同伴だった。

ご夫妻ともども誠実で、物腰の柔らかい態度が印象に残っている。どちらかと言えば無分別な私とは大分異なる、高い見識の具わった人物に特有の穏やかさが感じられた。そのころ私が上梓した『津軽白神山がたり』（山と溪谷社刊）に、中村先生ご夫妻とお会いしたときの模様が記載されているので、以下に引用する。

《中村先生ご夫妻は、白神山地に林道が開設され、結果としてブナ原生林が伐採されることを憂慮して、近々現地を訪れることを約束されました。それからひと月ほどの間に、先生は毎週のように手紙を下さいましたが、それだけでなくも筆不精の私は一度しか返事を出しませんでした。先生からの手紙には、必ずといっていいほど奥様の手紙も同封されていました。》

中村先生ご夫妻は、5月の連休時に白神山地を訪れた。青森・秋田の県境稜線にあるニッ森まで、私は地元の仲間とともに同行した。その後、ニッ森の山頂から別れて先生ご夫妻は小岳に向かつて縦走し、何日かして下山の途次、迎えに行った私たちと合流した足で藤里駒ヶ岳に登った。

眺望に恵まれ、残雪の峰々が新緑の樹海に浮かび立っていた。その日は5月3日、憲法記念日だ。山頂とともに昼食をとりながら山々を眺め渡し、「今日はいいい日ですね」と、私が何気なく投げ掛けた言葉に中村先生は「そうなんです」と答えた。

私はうらかな日和にまじろむ山々のたたずまいを指して言ったつもりなのだが、受け取った中村先生が返した言葉の内容は、それとは異なるものだった。「家内の父親が憲法制定に関係している」というのだ。それで、めでたい日なのだと。言う。予想もしなかったその言葉を、私は上の空で聞き流した。

後年、何がどう関係していたのだろうかと思議に思い、自分で調べてみて驚いた。現行憲法の制定に多大な貢献をした有名な憲法学者だったのだ。「知らぬが仏」とは、私が聞き流したあのときの無反応ぶりである。認識不足も甚だしく、やはり私は噂にたがわずバカな男だ、と深く恥じ入った次第である。

その後も、中村先生ご夫妻は白神山地を訪れている。断片的だが、思い出に残っているのは夏の赤石川遡行である。ブナ林に囲まれた水量豊かな溪流を、たぶん2泊3日で遡行したはずだった。

白神山地は岩木山とともに、私が高校時代から慣れ親しんだホームグラウンドである。さらには、山神を崇めるマタギと呼ばれた地元の熊撃ち猟師との付き合いから学んだ伝承も加わり、前近代的な山行が愉しめる舞台でもあった。

当時、私は毛バリ釣りと焚火を得意としていた。毛バリで尺イワナを釣り、人数分を揃える。焚火にもこだわりがあつて、紙くずを燃やすように、どうでもいいから拾い集めた薪に火をつけて燃やせばいいというものではなかった。薪も厳選し、焚火は芸術的であり美しくなければならぬ、というのが、今も変わらぬ私の持論である。

私たちは赤石川の遡行中、キャンプしながら焚火であぶった尺イワナを賞味し、ブナ林に育まれた白神山地の自然を満喫した。上流部にある「魚止めの滝」を、通常は右岸の岩場を登つ

て高巻くのだが、私はそのとき、以前、マタギから聞かされていた左岸に続く踏み跡を使って高巻いた。

その高巻き道は私も初めてであり、予想外のヤブ漕ぎ状態に私は失敗したと思った。戻るわけにもいかないし、自称ベテランの案内人を気取っていた私としてはバツが悪かった。が、それに反して中村先生は妙に感心していた。マタギの安全に対する知恵なるものを察知したらしい。その感心した様子を窺いながら、さすが科学者ともなれば、私のような凡俗の徒とは目の着けどころが違う、と内心、私は感服した。

そのころ私は喫煙していて、一服した後の吸い殻を、むしろ取った草木の葉に包んでポケットに入れ、テント場で焚火に放り込んで燃やしていた。

その次の山行ではなかったかと思うが、お会いしたとき、中村先生は私に携帯用の吸い殻入れをプレゼントしてくれたのだ。私はその心遣いに感激の溜息をもらした。やはり、この着眼点といい、私とはいささか人格的にも次元が異なるようだ。

中村先生は第1次・2次・3次の南極観測隊員であり、ほかにも東大のK7（6934m）登山隊で総隊長を務めている。氷雪の世界から文明社会に戻って来たときの思い出話を、溪流で焚火に当たり、杯を傾けながら窺った。その沈着な語り口には味わいがあった。

上京の折、一度だけ自宅にお邪魔したことがある。近所まで

行ったものの捜せなくて、うろついている私を夫人が迎えに出してくれた。そのときも、中村先生は穏やかな笑顔を見せて歓迎してくれたのだが、まだ30代の若かった私は、もとより恐縮の至りで緊張し続けていた。娘さんまでが居間に出てきて挨拶した。庭から採取したのだと言って出された枝豆をつまんで食べたのを覚えている。定かではないが、きつとビールも出されたものと思う。私は呆れられるほどの大酒飲みだから、決して粗相のないように自らを引き締め、早々に辞去した。相手が立派だと、つい人見知りしてしまう性癖が、情けないことに私にはあつたようだ。

たぶん、お目に掛かったのは、このときが最後だった気がする。思うに、私は畏敬の念を持って中村先生に接し、自分にはない、近付きがたいものを感じていたのだ。その感覚は、私と二周りほど異なる年齢差から生じるものだけではなかった。今この稿を書きながら気付かされたのだが、それは科学者としての中村先生から立ち昇る品格である。

短い年数だったが、お付き合いさせていただいた体験は貴重であり、ありがたいと感謝している。同時に、疎遠になっていった長い空白を顧みて、もう少しお近付きができていれば、私自身の成長の糧になっていただろうことを残念に思うのである。この誌面を借りて、衷心よりご冥福をお祈りいたします。

(根深誠)

〈略歴〉

- 1923年9月…滋賀県近江八幡市に生まれる
- 1941年4月…第一高等学校理科に入学、旅行部に入部
- 1944年10月…東京帝国大学理学部物理学科に入学、スキー山岳部入部
- 1947年10月…卒業後、東京大学教養学部助手
- 1956～58年…第1～3次南極地域観測隊に参加
- 1957年7月…日本山岳会に入会、紹介者は平山善吉元会長
- 1967年6月…東京大学アラスカ学術登山隊隊長を務める
- 1975年12月…東京大学スキー山岳部部長に
- 1984年3月…東京天文台併任、東京大学助教、教授を経て停年退官、名誉教授
- 1984年6月…東京大学スキー山岳部カラム学術登山隊総隊長を務める
- 1993～96年…日本山岳会の理事や評議員を歴任したのち副会長に
- 2008年…同名誉会員に推挙される
- 2020年10月21日…逝去、享年97

平井 一正さん



ひらい かずまさ
(1931~2021)
会員番号 4639

2021年2月15日、先生は帰らぬ人となられた。享年89、まだまだ元気に我々後進の指導を願えるものと思っていたが、残念な別れとなった。昨年暮れから入院手術、その後意識をなくされたままお釈迦様が亡くなった同じ日に天に召された。コロナの影響でお見舞いもできずじまいだったことが悔やまれる。「登山では滅法強かったが、病気には勝てなかった」と告別式で追悼の辞があったが、多くの人がそのように思っているであらう。

1950年、京都大学山岳部に入部されて以来、国内では積

雪期の劔尾根に挑戦されるなどご活躍、1958年には京都大学のチヨゴリザ（7654m）遠征に参加、藤平正夫氏とともに頂上に立たれた。最終キャンプから頂上まで、胸まで深いラッセルを終始ひとりで頑張ったと、学生の合宿に参加された、冬の三田原山のテントで昔話に花が咲いたことがある。チヨゴリザの稜線でヘルマン・ブルルが残していたテントを発見して、その中を調べられた話は生々しく、インパクトのある話題であった。

神戸大学山岳部・山岳会では、1953年以降、山岳部長として部員の指導に当たっていた高木正孝先生（マナスル先遣隊、第1次登山隊隊員）が1962年、南太平洋のファッツヒバ島で学術調査中に行方不明になった事件があった。偉大な指導者を失ったところへ、京都大学のチヨゴリザとサルトロ・カンリ（7742m）遠征に参加という輝かしい経歴を持った平井先生が突然、神戸大学に登場された。

神戸大学工学部計測工学科に助教として赴任されたのは1964年、チヨゴリザ初登頂から6年後、サルトロ・カンリ遠征から2年後のことだった。1965年に神戸大学山岳部の副部長に就任され、現役部員の指導に当たられた。

1966年3月、神戸大学山岳部は春山合宿で西鎌尾根から槍ヶ岳を目指して行動中、千丈沢乗越手前で部員が水鉛谷へ滑落する事故があった。先生は捜索隊に参加され、先頭を切つて

雪崩の恐れをもとせず遺体発見と収容に活躍された。それ以来、今日まで神戸大学山岳部と山岳会に深く関わられた。1986年には山岳部部长に、1997年には山岳会会長に就任された。2006年に勇退されるまで、労を惜しむことなく後進の指導に当たられた。2000年3月、神戸大学を退官、甲南大学に赴任され、甲南山岳会の方々と交流された。

1976年、カラコルムのシェルピ・カンリ(7380m)遠征では、初めての海外遠征隊長として見事初登頂に成功された。また、1986年にはチベット学術登山隊を組織、総隊長としてクーラ・カンリ(7554m)初登頂成功と、ラサから成都への川蔵公路の外国人初踏破を含む多くのテーマの学術調査を指揮された。この隊に参加した中国地質大学(武漢)の学生であった李致新氏は、現在、中国登山協会のトップとして活躍されている。加えて1988年には先生指導の下、四川省のチェルル山(6168m)に中国地質大学(武漢)と学生主体の合同登山隊を派遣、初登頂に成功している。登山での国際交流推進は、「ともに苦勞して築いた友好は、平和への大事な礎である」と常に我々に問い掛けられた先生の信念であった。

先生が参加された最後の遠征は2003年、カンリ・カルボ山群のルオニイ峰(6882m)だ。全長280kmの山群に未踏の6000m峰が47座数えられたが、その最高峰への挑戦であった。残念ながら悪天候と絶望的な山容のために敗退した。

遠征当時、ご令室が肺癌を患われていたが、そのことを伏せての総隊長としての参加であった。ご令室の葬儀のときに初めてその事実を知らされ、驚愕した。愛妻家であられたので、当時の苦悩は計り知れないものであったろうと心が痛んだ。その後、神戸大学隊は2009年に山群第2の高峰、ロプチン峰(6805m)に初登頂した。

チヨゴリザを皮切りに5回の海外遠征と4回の初登頂に成功されたが、誰一人犠牲者を出さず登山人を送られた。2010年、瑞宝中綬章を授与されたとき、「山で貰ったんと違うで」と自ら弁明されていたが、誰もがやっぱり山に違いないと思つたものだ。専門のシステム工学での功績と大学間の国際交流での実績が評価されたのではあるが……。

1972年正月、学生たちが合宿でテントを張っている白馬大池に、先生と拇池からスキーで入山した。天狗原までは曇り空で風が少々吹いている程度だったが、乗鞍岳の頂上あたりで吹雪となった。視界不良で大池への降り口が全く分からなかった。頂上の標識が出ていたので、そこで地図と磁石で方位を定めて北西に進み出した。南西の風が左手から吹き付けている中、しばらく進んだが、それらしい場所が出てこない。これはおかしいと、先頭を歩いていた私が立ち止まった。先生は「もう少し行ってみよう」と促された。ものの3分も進んだであら

うか、ふたりとも間違いでであると悟った。風は出発時点と同じ角度から左頬に強く打ち付けていたので、方向は正しいと思ひ込んでいた。もう一度方位を確かめると、北東の小さい窪みへと進んでいた。元に戻って、今度は無事に大池に着いた。地形の影響で風が西から北へと変化していたのに惑わされて、リングワングルに陥っていたようだ。間違つたと疑つたらもう少し進んで、確信できたら引き返す、という基本対応でもう少し進むように促されたのだった。こうして教えられ身に付いた道迷いの対策は、ずっと忘れることはない。

先生との出会いは1966年、私の神戸大学入学時まで遡る。合格発表とともに即山岳部に入部しようとした矢先、前述の遭難事故があった。入部を躊躇しているとき、「チヨゴリザに初登頂しなすごい先生がいるから、会いに行け」と先輩に言われて研究室を訪ねた。小柄で堅い表情の学者という感じだった。「山岳部に入部した新人生です」と挨拶すると、にこやかな表情に変わって親しく歓談させていただいた。それで山を続ける決心がついた。翌年春に、但馬の鉢伏山から澗川山へのスキー縦走に同行いただいた。華麗なシテムクリスチャニアで、新雪を颯爽と滑降する姿に感心した。これが初めて同行いただいた登山だった。

その後、先生は1967年から2年間、ドイツに留学されてしばらく疎遠になっていたが、帰国されると、神戸大学山岳会

で高まりつつあったヒマラヤへの遠征検討に参加された。そして、シエルピ・カンリの遠征計画が持ち上がった。1974年に第1次隊が派遣され、私は副隊長として参加した。この隊はシエルピ・カンリII峰（7003m）の東稜を6500mまで到達するとともに、本峰（7380m）の登路を偵察して帰国した。

これで次は登頂できると見通しも立ち、先生が本隊の隊長を引き受けられ、準備が進められた。豊富な経験から何事も適切に進められるので、私たちは安心して担当の仕事に邁進することができた。シエルピ・カンリは技術的に非常に困難かつ危険な山で、いつ事故が起こっても不思議ではなかった。隊長である先生は登山中、神経をすり減らすような日々を送っていた。それだけに初登頂に成功したときの喜びは大きかったと同時に、「もう一度と隊長はご免だと思った」と吐露されている。

1976年6月16日、シヨーク川岸のカパルーからキャラバンが始まった。150人近くのポーターや隊員が、ザークで川を渡るのは半日仕事であった。私は先発隊として、谷奥にマツシャーブルムのそびえるフーシェ谷の徒渉を偵察するために先を急いだ。川幅300mに数本の流れができていて、膝上までの冷たい濁流が音を立てて流下していた。難なく渡って対岸から引き返し、キャラバンの到着を待った。ポーターの先頭集団

十数名が元気にやって来たので先導して徒渉し、対岸のキャンプ地ハルデイに到着した。遅々として進まないポーターの集団が、徒渉地点に着いたのは午後4時だった。

その後、事件が起きた。夕方の増水で流れに足を取られて数名のポーターが流された。なんとか助けたものの介抱に時間がかかり、その日はキャラバンを止めた。結局ポーターたちは徒渉を拒んでフーシエ谷を溯って橋を渡り、2日間かけてハルデイに着く羽目となった。隊が集合した夕食後に反省会が持たれたが、先生がいの一番に「ポーターたちの協力なくして遠征は成り立たない。彼らも仲間である。それをよく考えて行動せよ」と叱責された。私のミスリードが原因であったが、チームワークの欠如は明白であった。その指摘もあったが、やはりポーターも隊の一員であるとの意識が大切であることを思い知らされた。その後隊は引き締まり、シエルピ・カンリの登頂に成功した。先生の隊員たちの安全に対する気配り、危険回避の指摘などを含めて、リーダーとしての能力はすばらしいものだった。

さて、先生のいったん冷めた未踏峰への熱は、シエルピ・カンリの事後処理が一段落すると再び燃え始めた。当時、ヒマラヤの主たる未踏峰はナムチャ・バルワ(7782m)とクローラ・カンリ(7554m)が残されていて、世界中の登山家が注目

していた。しかし、この2峰は中国領のチベットにあり、しかもインドとチベットの国境紛争地帯に近かった。許可を得るのは極めて無理な話であった。先生は学術訪中団を組織して、訪中した機会を利用して中国登山協会と接触を開始、その後も関係を継続した結果、カンペンチン(7281m)の許可を取得した。しかし、1982年、カラコルムのリモ峰の偵察に出た会員がロロフォンド氷河でクレバスに転落死する事故があった。結果、カンペンチン遠征は消えた。その後カンペンチンは京都大学が登頂した。志を立てて諦めないのが先生。中国語の勉強は片時も忘れずに続けるとともに、あらゆる機会を通じて中国登山協会と折衝を続けられた。そして1984年、ついにクローラ・カンリの許可を取得された。

2011年8月、もうすぐ80歳の先生から「黒部の赤牛に登りたい。一緒に行ってくれるか」と電話があった。2010年9月には、先生が登り残していた3000m峰、塩見岳に同行したが、今回を最後の大きな山行にしたいということだった。太郎兵衛平から入山し、雲ノ平を経て水晶岳を越えて赤牛岳に至り、黒部湖に下山する3泊4日の旅だった。私ひとりでは何かのときに対応ができないと考えて、頼りになる仲間ふたりに参加してもらった。先生はゆっくりとした歩きだったが、毎日、元気に山を楽しまれた。薬師沢出合の山小屋でビールを飲みな

がら、次なる未踏峰の話題を熱心に語り合ったことが忘れられない。奥黒部ヒュッテから黒部第4ダムまで、アップダウンと梯子段が延々と続く道は、きつかったことと思われる。

私事だが、「お前の嫁さんは俺が見付ける」と出会いの場をいただいた。待ち合わせの場所が、なぜか神戸王子動物園の前だった。紹介されて1分も経たないうちに「じゃあ」とその場を去っていかれた。先生らしい、あつけない紹介場面だった。強引さにはへそを曲げて2、3回デートの後、断りを入れた。先生はご立腹でひどく叱られ、出会いの大切さを滾々と諭されたが後の祭り。話はいったん途切れてしまった。彼女の愛らしさに、素敵な人だなと思っていたので、じわじわと後悔の念が沸き心を痛めていった。半年ほどたつて彼女から裁判所の絵葉書が入った、何も書かれていない封書ももらい、恋心に火が点いた。世話の焼ける奴だと思われたことだろうが、結婚に至り媒酌もしていただいた。先生が媒酌の「山屋カッブル」は皆、仲が良い。

山岳会長を勇退されるとき、「後を引き受けよ。拒否権なしだ」「やってきた未知への挑戦を継承するのは、君の責務だ」と説得された。偉大なる会長の後を引き受けるのは荷が重かったが、有言実行、まずは「未知への挑戦」を宣言し、中国登山協会をはじめお世話になった登山界の方々を招いて「シエルピ・

カンリ30周年、クーラ・カンリ20周年記念パーティ」を開催し、退路を断った。2009年カンリ・カルボ山群ロプチン峰（6805m）、2015年ニンチェンタンラ西山群タリ峰（6330m）遠征成功を実現できたが、先生のご指導あつてのことだ。出会いから54年、我が人生を決定的に道付けしていただき、兄弟のように接していただいたことに深く感謝している。

（神戸大学山岳会元会長 井上達男）

（略歴）

- 1931年10月31日…岐阜県生まれ
- 1950年…京都大学工学部入学・山岳部入部
- 1956年…京都大学工学部電気工学科修士課程修了
- 金沢大学工学部電気工学科助手
- 1958年…京大チヨゴリザ遠征隊に参加、同峰に初登頂
- 1961年…京都大学工学部電気工学科助手
- 1962年…京都大学工業教員養成所助教
- 京大サルトロ・カンリ遠征隊に参加
- 1964年…神戸大学工学部計測工学科助教
- 1965年…神戸大学山岳部副部長就任
- 1972年…神戸大学システム工学科教授昇任
- 1976年…シエルピ・カンリ遠征隊長を務める
- 1986～95年…神戸大学山岳部部长を務める
- 1986年…クーラ・カンリ遠征隊総隊長を務める

1995年…神戸大学を退官、名誉教授

甲南大学理学部応用数学科教授

1997～2006年…神戸大学山岳会会長

1988年…チエール山遠征名誉隊長を務める

2003年…ルオニイ峰遠征隊長を務める

2010年…瑞宝中綬章を授与される

2021年2月15日…逝去、享年89

会 務 報 告

2020年（令和2年）4月～2021年（令和3年3月）

（◎総会 □理事会 ◇人事 ☆事業）

◇2020年度役員・評議員・支部長

会 長 古野 淳

副 会 長 野澤誠司、山本宗彦、坂井広志

常務理事 永田弘太郎、萩原浩司、古川研吾

理 事 安井康夫、清登緑郎、神尾重則、清水義浩、飯田邦幸、

柏 澄子、近藤雅幸

監 事 黒川 恵、石川一樹

委員会の担当理事

【総務】 永田、柏

【デジタルメディア】 永田、清水

【財務】 古川

【公益法人運営委員会】 古野

【改革事業推進】 古野

【国際】 古野

【記念事業】 古野、飯田

【支部事業】 坂井

【資料映像】 坂井、清水

【自然保護】 坂井、飯田

【科学】 坂井、近藤

【会報編集】 萩原

【山岳編集】 萩原

【図書】 萩原、近藤

【「山の日」事業】 萩原、清登

【山行】 山本、清登

【遭難対策】 山本

【YOUTH CLUB】 野澤、山本、古川

【家族登山普及】 野澤、飯田

【医療】 野澤、神尾

【山岳研究所】 野澤、安井

【国土地理院WG】 永田、安井

【再生事業WG】 古川

【準会員制度検証PT】 古野

評 議 員 山本良三、成川隆顕、神崎忠男、橋本 清、今村千秋、

吉永英明、古川正幸、伊丹紹泰、小林政志、重廣恒夫、

絹川祥夫、大谷 亮、森 武昭、中山茂樹、野口いづみ

支部長（北海道）藤木俊三・（青森）中村 勉・（岩手）阿部陽子・

（宮城）冨塚和衛・（秋田）鈴木裕子・（山形）野堀嘉裕・

（福島）佐藤一夫・（茨城）浅野勝己・（栃木）渡邊雄二・

（群馬）北原秀介・（埼玉）大山光一・（千葉）松田宏也・

（東京多摩）野口いづみ・（神奈川）込田伸夫・（越後）桐

生恒治・（富山）鍛冶哲郎・（石川）樽矢導章・（福井）森

田信人・（山梨）北原孝浩・（信濃）米倉逸生・（岐阜）高

木基揚・（静岡）有元利通・（東海）高橋玲司・（京都）滋

賀）松下征文・（関西）茂木完治・（山陰）白根 一・（広

島）齋 陽・（四国）尾野益大・（福岡）高木壯輔・（北

九州）日向祥剛・（熊本）中林暉幸・（東九州）加藤英彦・

（宮崎）荒武八起

費の減額処理について審議した。（賛成1名、反対12名で否決）

（永田）

2・特定資産（固定資産）の取り崩し処理の承認について審議した。

（賛成12名、反対なしで承認）（古川）

3・波多野理事退任に伴う委員会担当理事の就任案について審議した。

（賛成12名、反対なしで承認）（古野）

4・埼玉支部長の交代について審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

（永田）

【協議事項】

1・新型コロナウイルス感染症防止に伴う対応および影響について討議した。（古野）

【報告事項】

1・28名の正会員と28名の準会員の入会を承認した旨、報告があった。

（古野）

2・1件の寄附金の事前申請および2件の寄附金受入について報告があった。（古川）

3・2020年度特別事業補助金審査結果の報告があった。（坂井）

4・山研運営委員会の業務報告があった。（安井）

5・国土地理院WGの業務報告があった。（安井）

6・職員への雇用調整助成金の申請について経過報告があった。（近藤）

7・令和2年度4月開催予定の評議員懇談会を中止する旨の報告が

令和2年度第1回（4月度）理事会議事録

日時 令和2年4月15日（水）17時00分～19時00分

場所 集会室＋オンライン（zoom）

出席者 古野会長、山本・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理

事、安井・清登・清水・飯田・柏・近藤各理事、石川監事

欠席者 野澤副会長、神尾理事、黒川監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・新型コロナウイルス対応による令和2年度4～6月の初年度年会

あった。(永田)

8・東京多摩支部からの準会員規程の修正依頼があった。(永田)

9・会報「山」4月号の発行について報告があった。(節田)

令和2年度第2回(5月度)理事会議事録

日時 令和2年5月15日(金)19時00分～21時00分

場所 オンライン

出席者 古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・古川各常務理

事、安井・清水・飯田・柏・近藤・清登、各理事、石川監事

欠席者 萩原常務理事・神尾理事、黒川監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・令和2年度通常総会開催について審議した。プラザエフにて、限

定出席(理事、監事、議事録署名人など)にて開催。インター

ネット中継。懇親会中止(賛成12名、反対0名)(永田)

2・第1・2号議案令和元年度事業報告・決算報告(案)について審

議した。(賛成12名、反対0名)(永田、古川)

3・第3号議案定款施行細則改定(案)について審議した。(賛成12名、

反対0名)(永田)

4・支部長の交代について審議した。(賛成12名、反対0名)(永田)

【協議事項】

1・新型コロナウイルス感染における対応について協議し、山岳4団

体でメッセージを出すことになった。(古野、永田)

2・組織図と海外登山助成審査委員会について協議した。(永田)

【報告事項】

1・入会の承認について報告があった。(古野)

2・寄附金の受入報告(東京多摩支部ザンスカール登山隊宛)12件に

ついて報告があった。(古川)

3・医療委員会担当理事を神尾理事に代わって古野会長が代行する旨、

報告があった。(古野)

4・山研運営委員会の業務の報告があった。(安井)

5・登山届について報告があった。(山本)

6・自然保護委員会のSDGs(持続可能な開発目標)への取り組み

について報告があった。(飯田)

7・4日間にわたるオンライン講習会(はじめての山登り)「山の救

急医療」「基礎の地図読み」と、2回の報告会(「日本ジャ

キャ・ヒマール登山隊2020」(海外登山助成金対象)「東ネ

パール登山隊2020」(創立120周年記念事業)について報

告があった。(永田、柏)

8・会報「山」5月号について報告があった。(節田)

【その他】

1・山梨県からの協力要請

令和2年度第3回（6月度）理事会議事録

日時 令和2年6月10日(水)19時00分～21時00分

場所 集会所およびオンライン

出席者 古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・萩原・古川各

常務理事、安井・清水・清登・飯田・柏・近藤・各理事、黒

川・石川監事

欠席 神尾理事

オブザーバー 節田会報編集人

【協議事項】

1・年次総会について協議があった。（古野、永田）

2・支部合同会議、新入会員オリエンテーション、年次晩餐会など今

後の予定について協議があった。（永田）

【報告事項】

1・7人の正会員と1人の準会員の入会を承認した旨、報告があった。

（古野）

2・2件の寄附金および助成金受入報告について報告があった。（古

川）

3・総会資料の修正について報告があった。（古川・永田）

4・海外登山助成審査委員会について、名称を海外登山助成委員会と

し、従来の助成募集と審査に加え、正会員と準会員による遠征

について助成や支援を行なう旨の報告があった。（坂井）

5・支部特別事業補助金について報告があった。（坂井）

6・全国古道調査についてプロジェクト・リーダーとプロジェクト・

チームを作り進行する旨、報告があった。（飯田）

7・「山小屋エイド」の名義後援依頼に対し承諾した旨、報告があった。

（永田）

8・広島支部の事故調査報告書を受け取り、その内容について報告が

あった。（古野）

9・東海支部の遭難事故について報告があった。（永田）

10・4団体発信のコロナウイルスへの対応について報告があった。（古

野・永田）

11・寄附、公益法人運営委員会、改革事業推進委員会の報告と広報委

員会の設置について報告があった。（古野）

12・会報「山」6月号について報告があった。（節田）

◎令和2年度通常総会

6月20日(土)午後2時00分～

東京都千代田区六番町 主婦会館「プラザエフ」

出席者24名、委任状592名（会員数4618名）

議案 1. 令和2年度事業報告・決算報告

2. 令和2年度事業計画・予算案

議案審議はいずれも原案どおりに可決承認された。

冒頭古野会長は「コロナ禍の中、登山を自粛せざるを得なくなりま

した。ご不便や行事の中止・延期など、準備してきた努力や苦労が報

われない日々が続いたと拝察します。政府の自粛要請に伴い、各業界・団体ごとにガイドラインの提示が要請され、当会を含む山岳4団体でもこれに従っています。これらの内容について、皆様にご理解をいただき、感染防止にご協力いただいていることに深く感謝いたします。今後も発表されるガイドラインを参考に、新しい生活様式、登山様式の下での登山を楽しんでいただければ、と願っています。新たな発想で登山を考え、多様な価値観を取り入れ、次の時代の登山文化を創造したいと希望します」
と挨拶した。

令和2年度第4回（7月度）理事会議事録

日時 令和2年7月15日(水)19時00分

場所 集会所およびオンライン（zoom）

出席者 古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・萩原・古川各
常務理事、安井・清水・清登・飯田・柏・近藤・各理事、石
川監事

欠席者 神尾理事、黒川監事
オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・1件の寄附受入の承認をした。（古川）

【協議事項】

1・通常総会について協議した。（永田）

2・支部助成金送金および新入会員報奨金の送金について協議した。
（古川）

3・支部合同会議について協議した。（永田）

4・年次晩餐会について協議した。（永田）

5・改革事業推進委員会の運営および広報委員会の立ち上げについて
協議した。（古野、永田）

6・広島支部の事故調査報告について協議した。（古野）

【報告事項】

1・正会員13名、準会員2名の入会を承認した旨、報告があった。（古
野）

2・3件の寄附金受入について報告があった。（古川）

3・9月17日に開催する評議員会について報告があった。（古野）

4・山研運営委員会の業務について報告があった。（安井）

5・新入会員オリエンテーションは9月5日にzoomにて開催、同
好会連絡会議は10月以降に開催する旨、報告があった。（永田）

6・エベレスト50周年記念事業について、記念フォーラムは来年4月
25～26日に豊岡市の植村直己冒險館にて開催を予定。プレイベ
ントはzoomを使って講演を行なう旨、報告があった。（飯
田）

7・宮崎支部主催の全国支部懇談会が中止になった旨、報告があった。
（古野）

8・委員会名簿の作成について報告があった。（永田）

9・会報「山」7月号について報告があった。(節田)

■8月の理事会は夏休みのため休会でした

令和2年度第5回(9月度)理事会議事録

日時 令和2年9月9日(水)19時00分～21時30分

場所 集会所およびオンライン

出席者 古野会長、野澤・山本各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清登・清水・飯田・柏・近藤各理事、石川監事

欠席者 坂井副会長、黒川監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・監査法人との財務に関しての指導・助言業務契約の継続について

当年度の太陽有限責任監査法人との財務に関しての指導・助言

業務契約の継続について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

(認)

2・寄附受入れの承認について

寄附受入れおよび管理規定第3条2により東海支部への寄附1

00万円の受け入れについて審議した。(賛成12名、反対なし

で承認)

【協議事項】

1・コロナ対応における新たなHPでの告知について協議し、支部合

同会議において支部の意見を聞くことにした。(古野)

2・支部合同会議の議題について協議した。(永田)

3・評議員懇談会の議題について協議した。(永田)

4・改革事業推進委員会について協議した。(古野)

5・名誉会員の推挙について協議し、評議員懇談会で評議員の意見を

聞くことにした。(古野)

6・公益法人運営委員会の報告をし、寄附などについて協議した。(古

野・永田)

7・本年度の年次晩餐会の実施について協議し、中止とした。(永田)

【報告事項】

1・入会希望者10名、準会員入会希望者2名について入会承認を行なっ

たと報告があった。(古野)

2・寄附金15件の受領について報告があった。(古川)

3・神尾理事死去に伴う医療委員会担当理事について、古野会長が兼

務するとの報告があった。(古野)

4・国際委員会の委員長交代について報告があった。(古野)

5・会員名簿の作成実施について報告があった。(永田)

6・自然保護委員会全国集会の開催について報告があった。(飯田)

7・102号室の図書にカビが発生したとの報告があった。(清水)

8・新しい入会申込書の実施について報告があった。(永田)

9・同好会「アルピニズムクラブ」設立について報告があった。(永田)

10・オンラインで行なわれた新入会員オリエンテーションについて報

告があった。(永田)

11・会報「山」9月号の発行について報告があった。(節田)

*8月12日、闘病中だった神尾重則理事が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

令和2年度第6回(10月度)理事会議事録

日時 令和2年10月15日(木)19時00分～21時15分

場所 集会所およびオンライン

出席者 古野会長、野澤・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理

事、安井・清登・清水・飯田・近藤各理事、石川監事(坂井

副会長は所用のため審議事項は欠席)

欠席者 山本副会長、柏理事、黒川監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・寄附受入承認の例外運用について

審議において、寄附者の匿名表示が保証人を付けることで可能であるか審議した。(賛成10名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・コロナ対応における告知について再度検討することとした。(古野)

2・名誉会員のありかたについて協議し、継続で協議することとした。(古野)

【報告事項】

1・入会希望者5名、準会員入会希望者8名について入会承認を行なったと報告があった。(古野)

2・寄附金2件の受領について報告があった。(古川)

3・花王株式会社から寄附の申し出があったことが報告された。(永田)

4・全国支部懇談会の中止と開催方法の検討について報告があった。(坂井)

5・山岳のデジタル化公開について報告があった。(飯田)

6・博物館連絡会議の開催について報告があった。(清水)

7・支部合同会議について報告があった。(永田)

8・評議員懇談会について報告があった。(永田)

9・会員名簿の返信ハガキについて報告があった。(永田)

10・年次晩餐会のキャンセル費について報告があった。(永田)

11・植村記念財団のエベレスト講演会の名義使用について承諾したという報告があった(永田)

12・会報「山」10月号の発行について報告があった。(節田)

令和2年度第7回(11月度)理事会議事録

日時 令和2年11月11日(水)19時00分～21時30分

場所 集会所およびオンライン(zoom)

出席者 古野会長、山本(21時10分から出席)・野澤各副会長、永田・

萩原・古川各常務理事、安井・清登・清水・飯田・近藤・柏
各理事、黒川・石川各監事

欠席者 坂井副会長

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・寄附受入の承認について

10月29日付けの寄附1件（1000万円）について寄附受入お
よび管理規程第3条2に基づいて審議した。（賛成11名、反対
なしで承認）

2・名譽会員の推薦について

候補者推薦が1名あったが、本年度については該当者なしとし
た。（賛成10名、反対なしで承認）

【協議事項】

1・登山保険の改善および新設の報告（古川）

現状の登山保険の改善および新設についての進捗状況の報告が
あり、協議した。

2・支部連絡会議について（永田）

支部連絡会議について、オンラインを活用し、年2回から3回
に増やすことを協議した。

3・広報委員会の設置（永田）

広報委員会の設置と内容などについて協議した。

4・山の天気ライブ授業への協賛について（飯田）

山の天気ライブ授業への協賛提案について協議した。

5・支部活性化と国土地理院について（安井、永田）

支部活性化のために国土地理院WGが連携できないか協議し
た。

【報告事項】

1・入会希望者7名、準会員入会希望者2名について入会承認を行なっ
たとの報告があった。（古野）

2・審議事項において承認された1件を含む寄附金15件の受領につい
て報告があった。（古川）

3・コロナ対応に関して会報1月号に記事を掲載する旨の報告があつ
た。（古野）

4・名譽会員の審査方法などを、公益法人委員会で検討する旨の報告
があつた。（古野）

5・本年度の上高地山岳研究所の利用状況などについて報告があつた。
（安井）

6・会員名簿の申込みハガキが1700通を越え、会員名簿を発行す
るとの報告があつた。（永田）

7・紺綬褒章伝達式を行なうことについて報告があつた。（永田）

8・今冬から雪山天気予報の配信を再開するとの報告があつた。（古
野）

9・会報「山」11月号の発行について報告があつた。（節田）

☆令和2年度年次晩餐会は、コロナ禍のため中止となりました。

令和2年度第8回（12月度）理事会議事録

日時 令和2年12月9日(水)19時00分～21時30分

場所 集会所およびオンライン（zoom）

出席者 古野会長、山本・野澤各副会長、永田・萩原・古川各常務理

事、安井・清登・清水・飯田・近藤・柏各理事、石川監事

欠席者 坂井副会長、黒川監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・登山保険の改善および新設の提案

新規の短期登山保険を2021年4月（想定）に開始すること
を審議した。（賛成12名、反対なしで承認）

【協議事項】

1・パワハラ防止法について（古野）

労働施策総合推進法に基づく相談窓口を設けることについて協
議した。

2・リニア新幹線工事への対応について（飯田）

静岡支部の支援要望と自然保護委員会の意向、および本部での
対応について協議した。

【報告事項】

1・入会希望者8名、準会員入会希望者4名について入会承認を行なっ

たとの報告があった。（古野）

2・寄附金事前申請1件、寄附金1件の受領について報告があった。

（古川）

3・支部・委員会への計画書、予算案を依頼したとの報告があった。

（古川・永田）

4・登山計画書提出状況について報告があった。（山本）

5・11月28日に開催された博物館連絡会議について報告があった。（清

水）

6・1月30日に開催される支部連絡会議について報告があった。（永

田）

7・会員名簿の発行について報告があった。（永田）

8・12月12日から開催される「エベレスト登頂50周年」写真展の報告

があった。（飯田）

9・山岳古道調査の進捗状況について報告があった。（近藤）

10・チラシによるグッズ販売について報告があった。（永田）

11・北九州支部の20周年行事中止について報告があった。（永田）

12・会報「山」12月号の発行について報告があった。（節田）

令和2年度第9回（1月度）理事会議事録

日時 令和3年1月13日(水)19時00分～21時00分

場所 集会所およびオンライン（Zoom）

出席者 古野会長、野澤・山本・坂井各副会長、永田・萩原・古川各

常務理事、清登・清水・飯田・柏・近藤・各理事、黒川・石川監事

欠席者 安井理事

オブザーバー 節田会報編集人、野口東京多摩支部長

【協議事項】

1・支部連絡会議について（永田）

会議室からオンラインで行なうことが決まった。議題について確認した。

【報告事項】

1・東京多摩支部の遭難事故について報告があった。（古野、野口）

2・正会員5名、準会員3名の入会について承認した。（古野）

3・個人より4名、1支部から寄附の受入れがあったことが報告された。（古川）

た。（古川）

4・会報1月号に、会長の挨拶を載せることが報告された。（古野）

5・リニア新幹線工事への対応について、途中経過が報告された。（飯田）

田）

6・山研について家賃支援給付金を受け入れられたことが報告された。

（野澤）

7・広報委員会の準備委員会を立ち上げ、委員会立ち上げ準備とともに、日々の業務に当たることが報告された。（永田）

8・会報1月号に「新聞記事の配信・配付について」を掲載することが報告された。（永田）

が報告された。（永田）

9・会報1月号に「会員名簿発行の中間報告」を掲載することが報告された。（永田）

10・グッズの販売について、現状の売れ行きなどが報告された。（永田）

11・『YOUTH山』が発行される旨、報告がされた。（永田）

12・会報「山」1月号について報告がされた。（節田）

令和2年度第10回（2月度）理事会議事録

日時 令和3年2月10日（水）19時00分～20時45分

場所 集会所およびオンライン（Zoom）

出席者 古野会長、野澤・坂井各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清登・清水・飯田・柏・近藤・各理事、黒川・石川監事

欠席者 山本副会長

オブザーバー 節田会報編集人

【協議事項】

1・山岳事故の対応について協議（古野）

今年度の事故に触れ、ヒヤリハットや事故事例集の作成、山岳

保険の内容、事故防止の対策などを協議。今後、遭難対策委員

会とともに協議を続けることになった。

【報告事項】

1・正会員1名、準会員1名の入会を承認したことを報告した。（古野）

2・寄附の受入れについて報告があった。（古川）

が報告された。（古川）

3・1月30日に支部連絡会議がオンラインで行なわれ、29支部が出席したことなど報告があった。次回は4月17日にオンラインで開催。(永田)

4・今年度、中止となった公益事業について各支部に報告を求めている旨、報告があった。(古川)

5・登山教室指導者養成講習会の日程を再調整中である旨、報告があった。(坂井)

6・復活会員に関する問合せについて、報告があった。(永田)

7・山研の立木伐採について報告があった。(安井)

8・「山」4月号の取材予定について報告があった。(節田)

9・理事会、評議員懇談会、通常総会の予定について報告があった。(永田)

(永田)

10・会報「山」2月号について報告があった。(節田)

令和2年度第11回(3月度)理事会議事録

日時 令和3年3月10日(水)19時～

場所 集会所およびオンライン(Zoom)

出席者 古野会長、野沢副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・

清登・清水・飯田・柏・近藤・各理事、石川監事

欠席者 坂井・山本副会長、黒川監事

オブザーバー 節田会報編集人

【審議事項】

1・令和3年度事業計画案について審議した。(賛成11名、反対なしで承認) (永田)

2・令和3年度予算案について審議した。(賛成11名、反対なしで承認) (古川)

【報告事項】

1・新入会員(会員78名、準会員2名)の承認について報告があった。(古野)

(古野)

2・会費滞納による除籍予定者について報告があった。(永田)

3・寄附の受け入れについて報告があった。(古川)

4・公益事業の中止について報告があった。(古川)

5・令和3年度委員会等の査定の概要について報告があった。(古川)

6・短期山岳保険の開始延長について報告があった。(古川)

7・支部連絡会議および全国山岳古道調査会議について報告があった。(永田)

(永田)

8・理事の任期について報告があった。(古野)

9・会員名簿について報告があった。(永田)

10・DM委員会からの報告があった。(清水)

11・登山計画書提出状況について報告があった。(山本、永田)

12・「第40回日本登山医学会学術集会」の名義後援依頼について報告があった。(古野)

あった。(古野)

13・公益法人運営委員会での検討内容について報告があった。(古野)

14・会報「山」3月号について報告があった。(節田)

支部の活動報告

北海道支部

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大により支部活も大きな影響を受けた。支部の1年間の活動や予算を話し合う支部総会は毎年4月に開催していたが、昨年は中止して、書面(はがき)による議決とした。また、道の委託事業の高山植物盗掘防止パトロール自体は実施できたが、事前説明を兼ねた自然保護研修会や支部公益事業の柱である登山講演会をはじめ、雪崩研修会や年次晩餐会などの人が集まるイベント、集会も開催を見合わせざるを得なかった。一方、支部山行については登山という行為自体には感染リスクは低いと考え、行き帰りの車や交通機関、宿泊先での感染対策に十分留意しながら5月中旬以降はかなりの回数実施でき、多くの会員、会友が参加して相互の交流を図ることができた。また、年5回の支部通信、会報「ヌプリ」の発行はできた。

《会議》

* 4月11日(土)に開催予定の2020年度支部総会(懇親会含む)は、中止として2019年度事業報告、会計報告、監査報告、

2020年度事業計画、予算案ははがきによる書面議決とした。会員154名のうち83名から賛成の返信があり議案は原案通り可決。

《山行・野外活動》

* 雪崩事故防止講習会 1月16～17日に札幌山岳連盟との共催で、実地訓練を含む札幌地区雪崩研修会を開催の予定だったが、コロナ感染拡大のため中止。

* 岩登り研修は実施せず。

* 沢登り研修 6月27～28日 黒松内町・黒松内川で支部山行に組み込み実施。会員、会友19名参加。

* 氷雪技術の基礎訓練 12月19日(土)～20日(日) 十勝連峰・上ホロカメットク山・安政火口付近で支部山行に組み込み実施。会員、会友7名参加でアイゼン歩行、ロープワークなどを実地で訓練。

* 主な支部山行(夏山)

○ 6月23日豊浦町・岩屋観音～日本一の秘境駅「小幌駅」ト
レッキング 16名参加

○ 7月23～26日 大鳥亮吉「石狩岳から石狩川に沿って」 1

00周年企画 大雪山系・クワウンナイ川／忠別岳／スタ
プヤンベツ川（沢登り）会員、会友4名参加。

○7月27～29日 大雪山系・トムラウシ温泉／トムラウシ山
会員、会友6名参加。

○8月1～2日 湧別川／有明山／白滝天狗岳／クワキンベ
ツ川（沢登り）会員、会友など8名参加。

○9月5～6日 日高山脈・ニシユオマナイ川左股／中ノ岳
／神威岳 会員・会友11名参加。

○10月27～28日 北斗市・当別丸山／福島町・殿様街道トレッ
キング 会員、会友25名参加。

※山岳古道調査の下見を兼ねた山行は右記を含む夏山の支部山
行の回数は合計15回。

*主な支部山行（山スキー&スノーシュー）

○12月19～20日 十勝連峰・三段山／前十勝岳（山スキー）
会員、会友11名参加。

1月10～11日 ニセコ・チセスプリ／羊蹄山ヒラフルート
（山スキー）会員、会友6名参加。

1月22～24日 羊蹄山・京極コース（山スキー） 会員、会
友7名参加。

○1月27日 恵庭岳・オコタンペ湖スノーハイキング（スノー
シュー） 会員、会友14名参加。

2月27～28日 有明山／天塩岳（山スキー） 会員、会友

7名参加。

○3月23日 北白老岳（スノーシュー） 会員、会友11名参加。
上記を含む冬季の支部山行の回数は合計20回。

《プロジェクト・地域活動》

*11月から12月に一般参加者も募集しての、著名登山家の講演
会を計画するもコロナの感染拡大で開催できず。

*大雪山系・十勝連峰高山植物盗掘防止パトロール（花バト）

◇例年パトロール開始前の5月中に開催の、説明会を兼ねた
自然保護研修会は中止。

◇6月1日～9月30日20名の会員・会友で延べ94日のパト
ロール実施。

*美瑛富士避難小屋トイレ管理連絡会による携帯トイレブース
の点検・パトロール。他団体の勘違いにより日程が重複し、
連絡会事務局との調整の結果、当支部は実施見送りとなる。

《広報・出版活動》

*支部通信 年間5回、136～140号発行 会員と会友へ
郵送またはメール送信で配布（約300部）。

*北海道支部会報「スプリ」編集・発行 第50号の編集 20
20年4月発行 山に関する紀行文、エッセイ、山の歴史・
評論などを掲載

《その他行事、集会》

*各種集会

○ 4月11日(土) 支部総会後の懇親会は総会中止のため開催されず。

○ 8月29日(土) 支部夏季交流会 ルーム白石で会員、会友15名、ゲスト2名参加して開催。

○ 北海道山岳団体交流会 11月26日(木) 開催と決まるもコロナの感染拡大で中止。

○ 支部年次晩餐会 12月12日(土) 開催の予定だったがコロナのため中止。

○ 支部新年交流会 1月12日(火) ルーム白石で開催予定だったがコロナで感染拡大で中止。

(工藤嘉高)

青 森 支 部

2020年度の青森支部の活動は新型コロナウイルスによる影響から自粛が続いた。

支部山行は2回のみ。感染を回避するために登山中の注意事項を徹底しての山行であった。公益事業は、天候による影響もあったが、ほぼ予定していたとおりに実施することができた。

大きな事業として中止が悔やまれるのが、6月に予定していた「東北・北海道地区集会」であった。コロナ禍により開催を断念し、延期する運びとなった。担当は引き続き青森支部が担

い、来年度以降に順延することとなった。

《会議》

* 5月16日(土) 通常総会は中止(委任状評決)

《古道調査》

* 南部地域では、古道調査プロジェクトリーダーの遠藤氏を中心に行った「三浦新道(十和田新道)」と、下北半島においては、むつ市在住の前田氏が地元山岳会とともに調査を続けている「恐山街道(川内口)」の2件の推薦を提出。

《支部山行》

* 9月26日(土)~27日(日) 秋山山行(白神岳) 参加者7名。

* 11月8日(日) 晩餐会山行(高森山) 参加者19名(むつ山岳会7名)。

晩餐会を中止し、山行のみ実施。山頂で遭難救助訓練を実施。虫に刺された際の対処方法、一般購入できる医薬品による治療方法を聴講。

《公益事業》

* 6月20日(土)~21日(日) 白神山地ブナ林再生事業 参加者21名(一般参加14名)。

植樹班、草刈り班、杉伐採班、生育測定班に分かれ作業実施。核心地域のブナに「令和二 水戸 北海道」刀傷を確認。モラルの低下を目的にしたりする。

* 7月5日(日) 北八甲田登山道維持ボランティア 参加者10名

酸ヶ湯公共駐車場～仙人岱ヒュッテ。

* 7月25日(土)～26日(日) 北八甲田登山道整備ボランティア 参加者11名
25日⇨酸ヶ湯公共駐車場～八甲田大岳。下山後酸ヶ湯キャンプ場にて個々テントまたは車中泊。26日⇨悪天候により中止。

* 9月5日(土) 北八甲田登山道整備ボランティア 参加者8名

赤倉岳分岐～井戸岳。

* 9月19日(土)～20日(日) 白神山地ブナ林再生事業 参加者20名
(一般参加8名、東京多摩支部2名)。

* 2月24日(水)～26日(金) 八甲田山スキー遭難防止対策 参加者

6名
24日⇨悪天候で中止25日⇨大岳東回りルート。26日⇨宮様ルート。

* 3月29日(月)～31日(水) 八甲田山スキー遭難防止対策 参加者7名
29日⇨銅像ルート、八甲田温泉ルート 30日⇨睡蓮沼ルート、31日⇨箒場ルート。

30日をもって、長年にわたりポール立てにご尽力された青森支部の竹越さん(85歳)がポール立て事業を引退。ご功労を讃えたい。

《中止山行・事業》

* 5月2日(土)～4日(月) 春山山行(八甲田山山岳スキー)。

* 5月17日(月) 通常総会山行(烏帽子岳)。

* 6月27日(土)～28日(日) 東北・北海道地区集会 延期。引き続

き青森支部が担当。

* 7月12日(日) 第10回「八甲田山の日」記念山開き登山大会。

* 8月30日(日) 「山の日」記念登山(高森山)。

* 9月5日(土)～6日(日) 支部山行(岩手山)。

* 11月21日(土)～22日(日) 晩秋山行(北八甲田)。

* 1月9日(土)～10日(日) 山岳スキー研修。

その他 高山植物盗掘パトロール、南八甲田登山道整備、十和田山登山道整備。

《2021年度活動の方向性》

2021年度は役員改選があり、行事内容も長年の基盤を残しつつ、新たな活動を取り入れていこうと考えている。支部山行を毎月計画し、一般参加者を招く機会を多くすることで、青森のすばらしい自然を体験していただき、多くの山々と一緒に楽しめる様、新たな会員の加入に繋げていきたいと考えている。2020年度はコロナ禍により自粛をせざるを得なかったが、医師のアドバイスをいただきながら支部月例山行の実施を検討していく。

(中村 仁)

岩手支部

岩手支部は 令和2年度に7名が入会(準会員からの移行を

含む)した。会員の高齢化が懸念されてきた中で、平成31(令和元)年度には9名、平成30年度に5名、29年度6名の入会と、この4年間で27名もの会員獲得である。これにより支部内は大変活気づいた。特に新型コロナウイルス禍の1年ではあったが、岩手県は全国唯一「感染者ゼロ」を7ヶ月続けた特異性もあり、県境を越えた移動は警戒した。しかしどのようにしたら月例山行などの事業が遂行できるかを試行錯誤しながら継続してきた。具体的には、一般登山愛好家がほとんど登っていない山域の未知のルートで冒険的要素のある計画を取入れ、読図をこまめに行なうなど、多くの会員にとって楽しく学べる山行を繰返し実施するよう努めた。

一方、増加している新会員に対して基本的な技術や知識の習得と、同時に指導者の養成のため、今後とも会員の技術向上に向け、読図力や雪上訓練などの指導を取入れていきたいと思う。

《会議》

- ・ 4月1日(土) 第1回支部役員会(北上市) 出席5名。
- ・ 4月5日(日) 支部委員会(盛岡市) 出席8名。
- ・ 4月5日(日) 通常総会(盛岡市) 2019年度事業報告・決算報告、令和2年度事業計画・予算案の審議 出席23名、委任状34名。
- ・ 7月16日(木) 支部通信編集会議(盛岡市) 出席3名。
- ・ 8月27日(木) 支部通信編集会議(盛岡市) 出席3名。

- ・ 9月26日(土) 令和2年度支部合同会議(東京) 出席・阿部支部長、リモート参加(盛岡市) 高橋事務局長。
- ・ 12月12日(土) 支部拡大委員会(八幡平市) 出席15名。
- ・ 1月16日(土) 第2回支部役員会(盛岡市) 出席3名。
- ・ 1月30日(土) 全国連絡会議 リモート参加(盛岡市) 4名。
- ・ 3月26日(金) 会計監査(紫波町) 出席4名。
- 《山行・野外活動》
- ・ 4月25日(土) 4月例会「小桜山・堂ヶ沢山」(花巻市) 参加13名。
- ・ 5月23日(土) 5月例会「公益C」大麻部山(遠野市) 参加12名。
- ・ 6月20日(土) 岩手山避難小屋への荷上げ 参加9名。
- ・ 6月28日(土) 6月例会「階上岳」(種市町・階上町) 参加14名。
- ・ 7月11日(土) 7月例会「大鉢森山」(奥州市) 参加9名。
- ・ 8月2日(土) 県山協主催沢登り講習(住田町) 参加1名。
- ・ 8月10日(月) 山の日制定記念山行「公益A」猫山(花巻市) 参加16名、うち会員11名、一般5名。
- ・ 9月5・6日(土・日) 「公益A」岩手山8合目避難小屋管理 参加8名。
- ・ 9月12日(土) 9月例会「公益B」鳥古森(大槌町) 参加10名。
- ・ 10月10日(土) 10月例会 和賀岳(西和賀町) 参加9名。
- ・ 11月7日(土) 11月例会 二郷山(遠野市) 参加12名。

・12月5・6日(土)・(日) 県山協主催初冬期講習 三ツ石(八幡平市) 参加4名。

・12月12日(土) 12月例会「七滝」(八幡平市) 参加15名。

・1月9日(土) 1月例会スキー 網張温泉(雲石町) 参加4名。

・2月20日(土) 2月例会 浄仏森(宮古市) 参加13名。

・3月13日(土) 3月例会 念佛森(宮古市) 参加11名。

《広報》

・10月2日(金) 支部通信第52号発行。

・3月31日(水) 支部通信第53号発行。

《その他の行事、懇親会》

・4月5日(日) 支部懇親会(盛岡市) 参加20名。

(阿部陽子)

宮 城 支 部

宮城支部は1958年に設立され今年で63年目を迎える。会員数は漸減が続き、4月1日現在、会員35名、準会員3名の38名で、これに2014年に発足した支部友会会員15名を加えると合計53名となっている。会員はご多分に漏れず、高齢化が進み、会員数は10年前の約半数までに減少して歯止めが掛からない状況が続いている。

例年、宮城支部では主な活動として、公益事業として登山教

室や親子登山教室を共益事業として、主に宮城の里山を中心に月1回の月例山行を実施してきた。しかしながら、2020年度は、中国武漢で確認された新型コロナウイルス感染は宮城県内においても社会、経済活動に多大な影響を及ぼし続け、このような状況下で、支部活動も自粛を余儀なくされた。

2020年度の事業計画では、大まかに4つのカテゴリーで事業を実施することとしていたが、第1四半期はすべての活動を中止することとし、会員などの皆様へは、「新型コロナウイルスへの対応について」と題して支部長名で文章を発送して活動自粛などについて理解を求めた。7月初旬に臨時役員会を開催し、今後の4カテゴリーの実施方針について確認し、一つ目の月例山行は7月以降については、原則、計画通り実施することとした。ただし、公募型の登山教室と県境を跨ぐ遠征登山は中止とし、県内での山行に変更することとした。

また、台湾遠征登山(雪山)は渡航事情が許されず中止に、2つ目の親睦事業である夏の「ビールパーティー」と年末の「支部晚餐会&オークション」も中止とした。3つ目の定例役員会については、県内の感染状況を確認しつつ実施する事とした。4つ目の支部報の発行については、すべての事業を中止とした第1四半期分を除き、計画通り行なった。ほかに、仙台市内小学校が実施している野外活動(登山)のボランティア支援を行なった。支部事業を通じてのコロナ感染は当然のごとく起きて

はないが、実施した山行も参加者が少なく、飲食を伴う会員
同士の集いなども全く開催することができず、会員同士が疎に
なつた1年でもあつた。

《会議》

* 4月26日(日) 令和2年度異動総会(メール総会) 事業報告・
計画、決算・予算の審議 出席者22名(メール出席7名、委
任状15名)。

* 定例役員会(臨時) 7月2日(木)、8月17日(月)、9月16日(水)、
10月21日(水)、11月18日(水)、2月18日(水)、3月17日(水) 出席者
延べ56名。

《山行・野外活動》

* 7月28日(火) 蟬時雨山行(北屏風岳) 参加者8名。

* 8月28日(火) 夏山山行(熊野岳) 参加者9名。

* 9月27日(日) 初秋山行(大東岳) 参加者6名。

* 10月13日(火) 秋季山行(北屏風岳) 参加者8名。

* 11月21日(土) 晚秋山行(五社山) 参加者10名。

* 12月13日(日) 初冬山行(葉菜山) 参加者8名。

* 2月28日(日) 厳冬期山行(三方倉山) 参加者10名。

《広報・出版活動》

* 支部会報「宮城山岳」・情報誌「宮城山岳通信」の発行

今年度は、「宮城山岳」第24号、「宮城山岳通信」(第20〜22
号)を発行して支部会員、準会員、支部友会会員、日本山岳

会(本部および各支部)に送付した。

《その他の行事、懇親会》

* ビールパーティー、支部晩餐会(望年会)は中止した。

(冨塚和衛)

秋 田 支 部

令和2年度秋田支部通常総会は、新型コロナウイルス感染拡
大を懸念して残念ながら中止となつたが、第1回役員会を総会
形式で行ない、委員会報告を支部会員に送付し、承認を得た。

秋田支部の会員は49名。会員の高齢化は避けられない状況で
あり、活動会員が固定化しているなどの問題を抱えながらも、
支部山行や歩道整備活動などを通じ、登山者に働きかけて会員
増の努力をしている。

公益的活動として、秋田県生活環境部自然保護課が山の日制
定事業の一環として行なう、「山の環境整備県民協働事業」の太
平山山頂トイレ防汚剤塗装に参加した。

《会議》

* 4月7日(火) 第1回役員会 13名出席。

令和元年度事業報告 収支決算報告 令和2年度事業計画
(案)、予算(案) 支部山行・太平山山開き市民登山中止につ
いて

*12月11日(金) 第2回役員会 11名出席。

支部会員名簿作成について、令和3年度総会について、山岳古道について。

*1月28日(木) 事務局会議 山岳古道調査の本会への推薦について協議 4名出席。

*3月16日(火) 第3回役員会 11名出席。

令和3年度通常総会に提出する案件について協議、古道調査推薦について。

《山行・野外活動》

*5月23日(土) 春の支部山行 ニツ森 新型コロナウイルス感染症拡大を懸念して中止とした。

*10月17日(土) 秋の里山山行 七座山 参加者12名。

《プロジェクト・地域振興活動・公益的活動》

*毎年協力していた太平山山開き市民登山は、新型コロナウイルス感染症拡大を懸念して中止となった。

*9月19日(土) 山の環境整備県民協働事業 太平山頂トレイル防腐剤塗装 参加者6名。

*11月12日(木) 太平山歩道整備 前岳から三角井戸まで 参加者10名。

*仁別植物園や森林博物館で来園者への説明や森の案内等、支部会員がサポート。太平山自然学習センターが主催する太平山前岳登山等のサポート 4〜11月 小学生および一般参加

者延べ80余名。

*8月10日(月) 森林管理署主催山の日親子自然観察会(一般、子供10名)にサポート。

《広報・出版活動》

*支部会報「秋田山岳」第116号〜第118号まで3回発行。
(鎌田倫夫)

山形支部

2020年度会員動向は、2021年3月末現在、退会者4名で、支部会員数48名(永年会員3名、支部友4名含む)である。

支部退会者が多い1年となった。今年度の特徴は何といっても新型コロナウイルスの影響で中止を余儀なくされた行事が多かったことだ。4月初めの月山春スキーに続き、蔵王地蔵山害虫被害調査登山、荒倉山公益清掃登山、それぞれの上高地、鳥海山滝ノ小屋芋煮会が軒並み中止となった。そのようななか、支部晚餐会と蔵王樹氷原を滑る会だけは、日帰りに縮小して実施できた。久し振りの集合山行を参加者一同楽しんだ。

《会議》

*支部総会 新型コロナウイルスの影響で書面決議とした。郵送による総会議案書に対する葉書での議決権の行使の結果

は、回答者数は27名でこれを出席者とみなすと議決権者数48人の56%に達し、支部規約の総会開催条件を満たした。また、議案に対する回答は賛23名、委任3名、否0名、未記載1名、回答無しが21名。このうち可とする回答は26名で、出席者(回答者)数27名の96%に達したので、支部規約の総会議決条件(過半数)を満たした。これらのことから、1から4号議案についてはすべて可決された。

*役員会 3回(6月27日、10月17日、2月27日。いずれも土曜日)。

*支部長・事務局長会議(リモート会議) 9月26日(土) 支部長出席。

《山行》

*支部山行 蔵王地藏山 害虫被害調査登山 5月10日(日) 新型コロナウイルスにより中止。

*支部山行 公益清掃登山 荒倉山 5月17日(日) 新型コロナウイルスにより中止。

*支部山行 日本山岳会(山研)それぞれの上高地 9月1日(火)～9月4日(木) 新型コロナウイルスにより中止。

*支部山行(鳥海山滝の小屋芋煮会) 10月3日(土)～4日(日) 新型コロナウイルスにより中止。

*支部晩餐会・記念登山(鶴岡市大山・高館山から八森山)昼食会(日帰り)に縮小して実施 11月8日(日) 7名参加。

*支部山行(蔵王樹氷原を滑る会) 2月19日(金) 湯殿山で楽しむ会(日帰り)に縮小して実施 7名参加。

*支部山行(鳥海山スキー登山) 3月7日(土)～8日(日) 参加希望者寡少により中止。

*支部山行(月山春スキー2020年度企画事業) 4月24日(土) 新型コロナウイルスの影響により中止。

《地域振興活動》

*学校から見える山イラストプレゼントは、マエタテクノロジリーサーチファンドからの支援を受けて、北庄内の遊佐町・酒田市・三川町・庄内町内34小学校と教育委員会に、A1サイズのポスター「イヌワシが見る鳥海山」を贈呈した 3月12日(金)。

《公益目的事業》

*第25回アルパインフォトビデオクラブ写真展 6月5日(火)～13日(木) 酒田市総合文化センター クラブ所属支部会員3名を中心に開催、推定1200名来場。

《懇親会》

支部晩餐会は昼食会に縮小して実施、記念登山は鶴岡市大山・高館山から八森山散策 11月8日(日) 7名参加。

《今後の課題》

新型コロナウイルスの影響がいつごろまで続くのか、不確定な中で支部行事を計画しなければならず、苦慮している。蔵王

樹氷原害虫被害調査登山のようなこれまでになかった形態の山行を通じて、支部活動の活性化に今後も尽力していきたいと考えているので、コロナ禍の早い終息を望むばかりである。

(野堀嘉裕)

福島支部

新型コロナウイルス感染のパンデミックの影響により、令和2年度の活動計画はそのほとんどが中止のやむなきに至った。その中でも支部員の高齢化が進み、加えて会員拡大についても成果を上げることができず、支部創立以来最大の停滞期となった。

現状を打破するため平成28年に立ち上げた「四・専門部」についても、コロナ禍の中、唯一「山行委員会」がSNSを通じて公募登山を実施したのみであり、会員拡大の成果にはつながらなかった。

公益事業として3・11大震災・原発事故以降取組んできた「山岳地域放射線量調査・記録化」についても年間活動として継続実施できなかつた。

《会議》

* 4月4日(土) 支部総会 事業報告、計画、決算、予算、役員改選案など原案通り満場一致で可決(総会出席15、委任状38)。

* 11月14日(土) 役員会 令和2年度事業計画の上半期総括と下半期に向けた協議、出席11名。

《山行・野外活動》

* 5月実施予定の「第7回フリークライミング講習会」はコロナ禍のため中止した。

* 8月10日(祝) 第5回山の日記念「親子登山」についても同様に中止した。

* 山行委員会企画の公募登山 5回実施、延べ53人参加。

6月28日(日) 吾妻連峰・塩の川、11名。8月2日(日) 吾妻連峰大滝沢、12名。8月23日(月) 吾妻連峰松川中流域、8名参加。

10月4日(日) 那須連峰甲子・南沢、15名参加。2月6日(土)、7日(日) 真野川アイスクライミング、15名参加。

* 支部後援登山

10月18日(日) 南会津地域主催「ふれあい登山」の後援団体として取組んだ「全国の齋藤さんいらっしやい・齋藤山」登山は主催者が中止決定したことにより不参加。

* 定例山行2回実施 延べ19名参加。

11月8日(日) 霊山縦走登山15名参加。2月28日(日) 万世大路氷柱6名参加。

《プロジェクト・地域振興活動》

* 4月上旬より11月山岳地域放射線測定・公益 吾妻、安達太良、那須甲子の3ヶ所について定点測定実施 参加延べ8名。

《広報、出版》

*「支部会報」(四半期ごと、および臨時)を年度内5回発行。

《その他の行事、懇親会》

*11月8日(日) 霊山縦走登山後に青柳山荘で芋煮会 15名参加。

(渡部展雄)

茨城支部

本年度、茨城支部においては、コロナ禍のため、左記に記した活動が実施されたが、ほかの予定された活動は中止せざるを得なかった。

1 総会と例会

総会を6月13日(土)に開催したほか、例会を9月12日(土)と11月14日(土)開催した。4月および1月の例会は、コロナ禍のため中止した。

2 講演会

第65回の講演会はコロナ禍のため中止したが、以下の講演会は、新型コロナウイルス感染の対策を取った上で開催した。

* 第66回6月13日(土)

「75歳・心臓身障者の日本百名山・百高山単独行」九州大学
名誉教授 真木太一氏。

* 第67回9月12日(土)

「ヒマラヤの測量地図作成小史と、その山の高さ―附・測量・地図作成の基礎知識と、「山の標高」とは―」日本山岳会茨城支部会員 長岡正利氏。

* 第68回11月14日(土)

「チバニアンの時代と地球変動」産業技術総合研究所 倉正展氏。 六

3 支部山行計画

山の日・集中登山のみ実施し、ほかの山行はコロナ禍のため実施しなかった。

(星埜由尚)

栃木支部

栃木支部は設立して14年目となった。令和2年度は1月から感染が確認され始めたコロナ禍により、山岳4団体による登山活動の自粛もあり、支部の公益・共益事業ともに大きな影響を受けることとなった。

公益事業は7月の「親子登山教室」、2月の「山の講演会」のほか、栃木県山岳・SC連盟と共催の「日光清掃登山」・「那須クリーンキャンペーン」・「海外登山の集い」など予定した事業はすべて中止になった。また共益事業の支部山行・懇親会は例

年どおり四季に合わせて4回計画したが、10月の高原山での秋山山行を除いて中止となった。

このようななか、創立120周年記念行事として支部に「山岳古道調査プロジェクト」チームを渡邊支部長直属の組織として発足させた。年度内に3回の会合を持ち、5ルートを支部の調査ルートとして提案した。

ここ数年、支部会員数は50名弱で推移している。今年度は2名の新入会員があつたが退会・退支部の2名があり、結果的に支部会員増には至っていない。支部活動を維持するため、若手会員の増強につながる魅力ある活動がよりいっそう求められている。

《会議》

* 通常総会 コロナ禍のため書面での議決権行使（5月23日送付）6月1日提出期限）により実施。支部会員総数45名中、議決権行使33名。事業報告・計画、決算・予算など提案とおりに承認した。

* 支部役員会 役員会合はコロナ禍により1回のみ開催（10月11日）。支部運営や事業についての協議は常時メールにより実施した。

《山行・野外活動》

* 4月26日(日) 春山山行 高鈴山く御岩神社 コロナ禍により中止。

* 8月22日(土)く23日(日) 夏山山行・懇親会 奥鬼怒・加仁湯 コロナ禍により中止。

* 11月8日(日) 秋山山行 高原山（鷄頂山・釈迦ヶ岳）参加10名（会員外1名含む）。

* 1月16日(土)く17日(日) 冬山山行・新年会 高鈴山・栄蔵室山 コロナ禍により中止。

* ほか、マスターズクラブ・ユース栃木の山行活動は中止。
《プロジェクト・地域振興活動》

* 7月5日(日) 日光清掃登山 栃木県山岳・スポーツクライミング連盟との共催 コロナ禍により中止。

* 7月18日(土)く19日(日) 親子登山教室 奥日光 コロナ禍により中止。

* 9月6日(日) 那須岳クリーンキャンペーン 栃木県山岳・スポーツクライミング連盟、栃木県勤労者山岳連盟との共催 コロナ禍により中止。

* 120周年記念事業「全国山岳古道調査」として支部に「山岳古道調査プロジェクト」チームを発足。11月、2月、3月にチーム会合を開催。調査対象となる古道を検討した。

《広報・出版活動》

* 5月23日(日) 「栃木支部報」第13号を発行した。
《講演会》

* 2月11日(祝) 第14回「山」の講演会 栃木県青年会館共催

日本野鳥の会栃木県支部幹事の刑部節氏を講師に「ながら山歩きの勧め」をテーマに企画。コロナ禍により中止。

*3月16日(火) 栃木県「山の日」協議会事業としてオンライン講演会「コロナ禍における登山について」を開催。協議会構成員として参画した。

*ほか「海外登山の集い」(栃木県山岳・スポーツクライミング連盟海外委員会との共催)はコロナ禍により中止。

(前田文彦)

群馬支部

年初より始まったコロナ禍により、5月に予定していた支部通常総会は書面開催となった。3年目を迎えた「健康登山塾」も短縮開催となり、群馬県庁での「山フェスタ」、谷川岳での「山の日イベント」などの人気行事も中止となった。

公益事業の多くがコロナ禍で中止や縮小となる一方、共益事業では山行、諸会議、会員向けの登山講座等は感染対策を施しながらほぼ予定通り実施することができた。ただ対面で語り合う場が著しく減ったこともあり、支部内の活動全般、情報交換などの点で物足りなさを感じる会員も多かったのではないかと懸念している。

《会議》

会議は隔月(奇数月第3水曜日)の例会を柱に、偶数月に役員会、そのほか必要に応じて臨時会議や委員会を開いた。例会には毎回ほぼ半数近い会員が参加した。通常総会は書面開催とし、1月の新年例会、3月の例会はZOOMでの開催となった。また役員会は夏以降ZOOMで開催した。恒例の新年会はリモートでの開催とした。

《教育活動》

新入会員・ビギナー向けの座学は、開始を遅らせ7月から11月まで毎月1回(計5回)開講した。読図や気象、装備・食料ほか、登山の基本全般を学び、毎回10人近くが参加した。

《山行・野外活動》

支部山行は、低山から雪山訓練まで、ほぼ例年並みの5回行なわれた。また平日山行の同好会や、経験の浅い会員が積雪期にチャレンジするなど山行の深まりと広がりも見られた。

自然保護委員会は7月に湯ノ丸山の高山蝶観察をテーマに、支部自然保護委員会としては初めての一般公募の自然観察山行の準備を進めた。雨天中止となったが、その経験は次年度以降に生かしていきたい。

《プロジェクト・地域貢献活動》

*「ぐんま山フェスタ2020」

岳連、労山などと共催(上毛新聞社ほか後援)。群馬県庁1階の県民ホールをメイン会場に、6月に2日間開催する予定

だったが、コロナ禍で8月に延期後、中止となった。

*「山の日イベント in 谷川岳」

谷川岳エコツアーリズム推進協議会と群馬支部が加盟する群馬県山岳団体連絡協議会が主催する夏の定例行事。初心者から上級者まで毎年およそ百人が参加していたが中止に。

*「ぐんま県境稜線トレイル安全等調査」

ぐんま県境稜線トレイルを定期的にチェックする調査活動。県の委託事業で、群馬県山岳団体連絡協議会の担当する土合から馬蹄形・谷川連峰主稜線を経て三坂峠までの区間のうち、谷川岳トマの耳々平標山間を調査した。7月から10月まで各月1回、全4回実施。送迎（下山地から登山口までの回送）要員も含め延べ14人が参加した。

*「健康登山塾」

例年4月から秋まで7回ほどの実地講習を開いてきたが、開催を遅らせ、9月から12月まで全4回の実地講座を開いた。一般参加者は、120人ほどの応募者の中から抽選で選ばれた23人。また地元紙（上毛新聞）で1年間にわたり紙上登山塾を月1回掲載した。

*会員による地域貢献活動

①「上川淵公民館自主学習グループ」への講師派遣…一昨年から10月から12月まで前橋市上川淵公民館で開かれた同公民館での「0から始める山歩き」受講者によるグループに

根井事務局長が引き続き講師として協力した、21年度以降も継続する。

②「赤城山を活用した教育プログラム」（国立赤城青少年交流の家）検討委員…小中学生向けの教育プログラム開発のための委員会に齋藤繁会員と根井事務局長が参加。同プログラムは21年度から実施される。

《広報・出版活動》

「支部報」を前年度より発行回数を増やし、年3回、12号（5月）、13号（9月）、14号（1月）を発行した。4年前に開設したホームページも順調に更新を続け、2月にはサイトを一新した。インターネットからの入会者は年間7人中3人。

《その他》

関東4支部（千葉・茨城・栃木・群馬）が持ち回りで開催している関東4支部合同懇談会は今年、群馬支部主催で4月の榛名湖畔での開催準備を進めてきたが、新型コロナウイルス感染拡大が続く中、3月の例会で正式に中止を決定した。今後については、状況を踏まえ3支部とも協議して決めていく。

《次年度に向けて》

20年度はコロナ禍での試行錯誤の1年だった。次年度も大規模なイベント開催には引き続き難しい局面が続くと思われるが、小規模な支部山行や公募登山については感染対策の徹底と実施方法を工夫して活動を維持していきたい。また支部の会議

や講座などはZoomを活用したオンライン開催を核に支部内のコミュニケーションを図っていきたい。

(根井康雄)

埼玉支部

一昨年、11月に発生した潜伏性の高い新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大は、未曾有のパンデミック(世界的大流行)により、瞬く間に日本を含む全世界に蔓延し、入国制限、オリンピック・パラリンピックの延期、そして再開と、かつて人類が過去に経験したことのない事態に陥り、今日に至っている。

感染症の予防策として、3密(密閉・密集・密接)の回避、マスク着用の義務化、手洗い・アルコール消毒の励行、等々。新たな生活様式と働き方を求められ、日常生活も大きな戸惑いと変化を経験した。

また、長期にわたる外出自粛要請、公共施設の閉鎖により、組織の運営に関わる総会、支部委員会、各委員会などの開催もままならない事態に遭遇した。

このような状況下、登山形態も大きな変化を余儀なくされ、富士山の登山禁止、各山域に点在する山小屋の営業休止および再開に伴う宿泊制限など。登山者も新型コロナウイルスの感染

防止策を講じての不自由な登山を余儀なくされ、十分な登山活動ができなかった。

また、2018年度から登山ガイドの会員をコーチ・講師として、一般登山者を対象に開講してきた登山教室「埼玉やま塾」も、残念ながら新型コロナウイルスの感染症拡大により中止した。

2020年4月に10周年を迎えた埼玉支部の設立記念式典・祝賀会・記念講演等も開催時期の変更を模索したが、残念ながら中止を決断した。支部会員のご尽力により活動の集大成として「10周年記念誌」を発行することができたことが救いになった。深く感謝申し上げる。

○総会

・4月11日(土)、2020年度通常総会(埼玉会館4階4A室)は、新型コロナウイルスの感染拡大防止による会場閉鎖で、急遽、書面審議による総会に変更した。

○埼玉支部委員会

・毎月開催の支部委員会は、会場の閉鎖期間中は、本部の指針に沿って少人数とZoomによるオンライン会議で開催した。

○ふれあい登山・自然観察会、行事・講演会・講習会・等

・当初4月5日(日)、埼玉県障害者スポーツ協会と共催で開催予定だった、大久保春美記念「第10回ふれあい登山」は、

新型コロナウイルスの感染症対策を講じて、11月8日(日)に実施。飯能駅から「あさひ山展望公園」を巡る周回コースで昼食後、飯能駅に戻った。散策中、休憩時間に障がい者との交流を図った。参加者は76名(障がい者+付き添い37名含む)。

・11月14日(土)～15日(日)開催の第5回高尾グリーンセンター森づくり研修会に自然保護委員会から7名が参加。

・11月29日(日) 石川久明氏(越生町教育委員会)より、大高取山に関わる自然・歴史・文化財の概要について説明後、3班に分かれて自然観察会を実施した。参加者23名。

・12月12日(土) 城峯山は当初、4月の総会山行、10周年記念山行に予定していたが、新型コロナウイルスの感染症拡大を懸念して中止となり、忘年山行として実施した。3班に分かれて、西門平登山口より鐘掛城山経由で石間峠へ向かう。地元会員の宮崎稔氏からコーヒーマシンの接待あり。昼食後、城峯山の山頂で記念写真を撮る。下山は往路を慎重に下る。参加者28名。

・1月16日(土) 新年山行は、奥武蔵の官ノ倉山。東武竹沢駅から3班に分かれて、黙歩で天王池を経て官ノ倉山へ。浅い山並みを眺めながら休憩。下山は、北向地蔵を經由して八幡神社にて新年の安全祈願。晴雲酒造玉ノ井で昼食弁当を受取り解散。参加者23名。

・安全登山委員会では、新型コロナウイルスの感染症拡大を考慮して、2020年度の講習会および講演会をすべて中止した。

○支部山行

・当初の月例山行は、会津駒ヶ岳と燧ヶ岳登頂の1泊2日だったが、コロナ過における宿泊自粛の影響で9月19日(土)の燧ヶ岳の日帰り登山に変更した。沼山峠から長英新道を経て燧ヶ岳に登頂後、熊田代から尾瀬御池に下山。10名が参加した。

・10月3日(土)～4日(日) 秋山山行は、柏原新道から爺ヶ岳を経由して冷池山荘(泊)、翌日、鹿島槍ヶ岳(南峰)登頂後、赤谷尾根を大谷原に下山、参加者7名。

・11月12日 平日山行は初狩駅から女坂を経て高川山へ。山頂から富士山の眺望を楽しみ、富士急行末生駅に下山。参加者9名。

・3月13日(土) 月例山行は、武川岳・二子山を計画したが、雨天により安全を考慮して、武川岳の往復に変更。参加者18名。

○支部報の発行、オンライン導入、ホームページの活用など

・「埼玉支部報」は、30号(7月)、31号(12月)、32号(3月)に発行した。

・デジタルメディア委員会の協力を得て、オンライン会議の

導入。また、埼玉支部ホームページの活用として、山行・行事・支部報の情報を会員に迅速に提供するとともに、一般登山愛好者にも埼玉支部の活動状況を紹介すること、新規会員の入会促進が期待される。

(林 信行)

千葉支部

コロナの影響で支部活動は低迷した1年だった。毎年5月に予定していた支部通常総会は中止して、書面により決議を行なった。緊急事態宣言の発出により4月から6月は県外への山行全面中止。また2度目の緊急事態宣言中の年明け1月から1ヶ月間も支部山行は中止した。ただし緊急事態が延長された2月からは、感染に留意しつつ体力を落とさないように県内でのウォーキングと個人山行は徐々に再開した。そのほかの期間については、マスクと消毒液を標準個人装備として山行を行なうことができたが、計画した年間支部山行のうち、約5割が中止になった。

公益事業では、これまで行なってきた児童養護施設の山行支援、親子登山教室が中止になった。

8月10日の山の日には、「山の日つどい」と題して講演会を行なった。会員会友を中心に49名が参加する盛況ぶりだった

が、第2部として企画していた懇親会は中止した。会員数は3月末時点で93名。新入会員と退会者がほぼ同数いるので、近年の総数はほとんど変わらない。準会員2名のうち1名が正会員に移行、1名は退会したので、準会員は在籍ゼロになった。また日本山岳会に入会していない支部会友は41名いる。

《山行》

- 6月6日 北習志野ウォーク 8名参加。
- 6月20日 手賀沼ウォーク 11名参加。
- 7月5日 東京・自然教育園見学(自然観察会) 9名参加。
- 7月17～22日 トムラウシ山・アポイ岳・羊蹄山 4名参加。
- 7月24日 大菩薩嶺 6名参加。
- 8月3～5日 尾瀬・燧ヶ岳 2名参加。
- 8月4～8日 雲ノ平・黒部周遊 4名参加。
- 8月22～24日 四阿山ほか 6名参加。
- 8月21～22日 宝剣岳と三ノ沢岳 5名参加。
- 8月29～30日 八ヶ岳・青年小屋 3名参加。
- 9月5～7日 霧ヶ峰、北横岳 10名参加。
- 9月6日 手賀沼・東京湾ウォーク④ 8名参加。
- 9月11～12日 両神山 7名参加。
- 9月13日 手賀沼・東京湾ウォーク⑤ 5名参加。
- 9月20日 成田空港・新勝寺ウォーク 13名参加。

9月19～20日 大水上山 7名参加。
 10月3日 顔振峠（自然観察会） 20名参加。
 10月4日 行徳・篠崎地区ウォーク 7名参加。
 10月11～12日 吾妻・大倉深沢 5名参加。
 10月10～12日 湯ノ丸・高峰山 5名参加。
 10月18～19日 西沢溪谷スケッチ旅 13名参加。
 10月19日 海老川から花見川ウォーク 4名参加。
 10月22～26日 佐渡ヶ島 13名参加。
 10月23～26日 信越トレイル 3名参加。
 11月3日 黒川鶏冠山 11名参加。
 11月8日 成田空港・新勝寺ウォーク 10名参加。
 11月8～9日 浅間隠山と鼻曲山 6名参加。
 11月13～15日 八丈島・三宅島 10名参加。
 11月14日 三浦・大楠山 7名参加。
 11月19～24日 屋久島 5名参加。
 11月21日 筑波山（自然観察会） 13名参加。
 11月21日 奥多摩・御前山 3名参加。
 11月22日 手賀沼ほぼ一周ウォーク 3名参加。
 11月28日 湘南アルプス 5名参加。
 12月4～5日 乾徳山 5名参加。
 12月6日 房総の沢・小糸川溪谷 6名参加。
 12月6日 三浦アルプス 8名参加。

12月7日 手賀川を歩く 7名参加。
 12月12日 栗ノ木洞（自然観察会） 14名参加。
 12月12～13日 飯盛山と夏沢鉱泉 9名参加。
 12月19～20日 忘年山行・烏場山 12名参加。
 12月26～29日 八ヶ岳硫黄岳・赤岳 5名参加。
 2月14日 昭和の森一周ウォーク 7名参加。
 2月27日 江戸川河口ウォーク 13名参加。
 3月23日 江戸川・野田市内ウォーク 5名参加。
 3月25日 三頭山 5名参加。
 3月28日 高尾山（自然観察会） 18名参加。
 《山の日》
 8月10日 千葉市文化センターにて講演会。
 安間繁樹会員「人生を決めた西表島」、松田宏也会員「グレイト・ヒマラヤ・トラバース踏査報告」。写真・絵画展を併設。
 《会議》
 通常支部総会は中止、書面による決議を行なった。
 ※役員会議 4、5、8、12、1、2月は中止した。3月はリモート開催した。
 《広報・出版活動》
 『房総半島軍会尾根踏査報告書』B5判32ページ、「千葉支部だより」50、51、52号の3回発行した。

（三田博）

東京多摩支部

2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、首都圏では2020年4月7日から5月24日までと、2021年2月7日から3月21日までの2度にわたり緊急事態宣言が発令された。日本山岳会を含む山岳4団体は、事態収束までの山岳スポーツ自粛を呼びかけ、日本山岳会では古野会長名で会員向けに緊急事態宣言期間中の登山を含む不要不急の外出自粛、外出時の三密（密閉、密集、密接）回避とともに、遭難事故を惹起した場合の医療システムへの負荷も考慮した、節度ある論理的思考での行動を求めた。

これを受け、東京多摩支部においては、2020年度支部総会を郵送による議決権方式に変更して開催した。

ほか、支部設立10周年記念事業の柱でもあった、インド・ヒマラヤのザンスカール未踏峰遠征および海外トレッキングを中止し、国内行事として計画していた集中登山なども中止した。また、各種講演会、講習会、定例山行、平日山行、登山教室、会員による親睦行事など、多くの事業が中止を余儀なくされた。

《会員動向》

*会員数 2021年3月末現在311名（前年度末比 8名減）、正会員231名（前年比 16名減）、準会員79名（前年比 8名増）支部友1名。

*入会者 正会員8名、準会員24名（準会員から正会員への移行1名）。

*退会者 正会員24名、準会員16名。

《会議》

*支部通常総会（5月9日（土））コロナ感染防止対策のため、議決権行使書による総会実施。出席（議決権行使書）181名。

*幹事会 毎月1回開催。会議室での開催が困難な場合は、Zoomを使用して開催。幹事・監事が延べ155名出席。

*委員会等 毎月1回開催。Zoomの共同利用ができるよう支部共用IDを設定。総務、財務、会報、ICT、山行、自然保護、安全対策、奥多摩BC運営の8つの委員会と登山教室、10周年記念事業実行委員会の2つのPTがほぼ毎月開催。

《山行》

*定例山行 4回実施、延べ52名参加。中止8回。

8月1日（土）小橋山（14名）。

9月13日（日）三頭山（4名）。

11月4日（土）鶴ヶ鳥屋山（20名）。

12月12日（土）鍋割山（14名）。

*平日山行 3回実施、延べ32名参加。中止8回。

7月16日（木）高岩山（9名）。

10月21日（木）大桶山（14名）。

11月19日（木）守屋山（9名）。

《自然保護活動》

* 6月7日(日) 身近な水環境の全国一斉調査 2名参加。

* 10月23日(金) 野火止保全林見学。

* 観察会 (10名参加)。

* 野火止保全活動(地域調査、伐採等) (延べ9回、69名参加)。

* 2月に野火止保全活動P.Tを設立。

《登山教室》

* 第8期初級登山教室は中止し、受講予定者に対して次年度の受講を勧奨した。

* 第9期初心者・初級登山教室 (29名応募) は中止した。

* 4月～3月 第2期中級登山教室。

6月20日(土) 南高尾山稜縦走 (13名)。

9月5日(土) 天目山 (11名)。

9月21日(祝) 乾徳山 (11名)。

7月25日(土) 鋸山・大岳山 (10名)。

10月31日(土) クライミングジム講習 (13名)。

12月12日 同来山 (9名)。

3月20日 どころ松山 (10名)。

※コロナ禍でテント泊など、宿泊を伴う山行は中止となった。

《広報活動》

* 「会報たま」40～43号発行。5、8、11、2月に年4回発行。

「会報たま」のメール配信対象者は、3月31日現在71名。

* ホームページの運営。

* 管理および入会問合せ対応。

* メールマガジン「たま便り」58回配信、配信対象者は、3月31日現在 275名。

《講演会》

* 10月29日(木) 自然保護講演会「高尾山人気の秘密と植生の不思議」(講師1名、一般15名、会員21名、計37名参加)。

《安全講習会》

* 11月18日(水) 「事故発生時の現地対応シミュレーション」講習 (20名参加)。

《その他の行事・懇親会》

* 8月 エベレスト登頂50周年記念資料。

* 写真展 (来場者87名)。

* 9月17日(木) 新入会員オリエンテーション (26名参加)。

* 10～11月 おくたまアートフェスティバル (来場者14名)。

* 11月28日(土) 錦秋の奥多摩散策と芋煮会 (11名参加)。

《サテライト・サロン》

* 吉祥寺、立川、多摩の3ヶ所で開催しているが、密にならないう状態での会議室使用が困難なため、開催に至らなかった。

《同好会》

* スキー同好会、沢登り同好会、海外登山研究会、山の唄を歌う会。

(近藤雅幸)

神奈川支部

令和2年度は、支部設立を記念して立ち上げた「かながわ山岳誌プロジェクト」の活動を加速させ、月2回の踏査山行を実施続け（7・8月を除く）、2つのグレード（ハイキング・登山初級程度のレベルⅡL、登山中上級のレベルⅡH）山行を実施予定だったが、新型コロナウイルスのため4～6月での山行は中止。9月2回（L、H）、10月1回（Hのみ。Lは雨天中止）、11月2回（L、H）、12月2回（L、H）、1月2回、2月2回、3月1回（L）も新型コロナウイルスのために中止。3月1回（H3月27日）は実施ということで、Lにて3回、Hにて5回、計8回という程度の山行結果となった。

計8回の山行により、約80のコース・282ポイントのうち8コース・24ポイントを踏査した（累計で現在、57コース197ポイント）。

本プロジェクトは、支部公益目的事業として5年計画で実施するもので、神奈川県下のほぼすべての山と主要な峠を踏査し、日本山岳誌の神奈川版を作成する。単なる登山ガイドにとどまらず、地学、気象、動植物、山岳信仰や山名の由来などの文化的な情報も加えた総合的山岳記録誌を目指しており、その情報

提供などを通して社会へ貢献することを目的としている。踏査山行は、プロジェクトチームを中心に支部会員が協力して行ない、ハイキング・登山初級程度のレベルの山行は原則として支部会員以外の一般の方にも公開している。

なお、今年度では、前述の文化的情報の原稿も専門家の方々から入手し、報告書の構成・目次など、編集まとめ作業についても着手した。

このほかの支部公益事業として、近藤和美氏による公開講演会「8000m峰全山挑戦の軌跡」、および神奈川大学山岳部の活動報告会を開催する予定であったが、新型コロナウイルスのために中止となった。

他支部との交流として、南関東ブロック3支部（東京多摩・埼玉）合同懇親山行を10月末に実施する予定であったが、これも新型コロナウイルスのため、1年延期とさせて頂いた。

さらに、支部員の提案による米国オレゴン州でのツアーも企画されたが、新型コロナウイルスのために中止となった。

自然観察会も4月予定していたが、新型コロナウイルスのため、中止となった。

支部報（電子版）は、年度中に4回発行し、JAC神奈川支部会員にメール配信を行なった（郵送は有償で希望者のみ）。

《かながわ山岳誌 踏査山行（実施分）》

*9月5日(土) 大室山（H）4名参加。

* 9月19日(土) 仏塚山(L) 10名参加。

* 10月24日(土) 三増峠・城山(H) 9名参加。

* 11月14日(土) 高倉山・金剛山(L) 11名参加。

* 11月28日(土) 檜洞丸(H) 5名参加。

* 12月12日(土) 衣張山(L) 17名参加。

* 12月19日(土) 柏原ノ頭(L) 7名参加。

* 3月27日(土) 峰山(H) 9名参加。

《他支部との交流》

* 10月3日(土)～4日(日) 全国支部懇談会(宮崎支部) 新型コロナのため中止。

* 10月31日(土) 南関東B(東京多摩・埼玉) 合同懇親山行(当支部主催) 新型コロナのため中止。

《その他の山行》

* 4月18日(土) 自然観察会(こども植物園)(講師・舟根・渡辺会員) 新型コロナのため中止。

* 5月29日(金)～6月8日(月) 米国オレゴン州ツアー 新型コロナのため中止。

* 妙高赤倉スキー・スノーシュー山行 新型コロナのため中止。

《委員会・懇親会等》

* 1月9日(土) 新年会 新型コロナのため中止。

《会議等》

* 5月23日(土) 支部通常総会に代わり書面議決が行われ、議案

5件に対し、過半数を越えすべて可決承認された。(議決権行使有資格者…151名。支部長・事務局長への委任状による議決者…54名、書面議決者(議案賛成)…28名、議案賛成者は82名)。

* 9月29日(土) 支部合同会議 主婦会館プラザエフ(四谷) & web 2名出席(支部長、事務局長)。

* 1月30日(土) 支部連絡会議(web) 1名出席(事務局長)。
* 役員会 神奈川工科大学横浜事務所にて5月(web)・6月・7月・9月・10月・11月・12月・1月(web)・2月(web)・3月(web)の第3水曜日(2月は第3水曜日)に計11回開催(4月は中止)。山行計画やプロジェクト、予算・決算などについて、審議・報告を行なった。執行体制は、役員15名、監事2名、顧問3名、オブザーバー1名(3月末現在)。

《その他》

神奈川県山岳連盟(県岳連)に加盟(3月)。

県岳連には、県内62の山岳団体が加盟しており、人的交流も含め、より充実した山岳活動が可能になると同時に、社会貢献の一環としても山に親しむ活動の普及や発展にいつそう寄与できるものと判断し、この度、県岳連に加盟した。支部会員の役員ほか20名、県岳連の理事として2名(長島、永井)、代議員2名(込田、砂田)を選出した。

(永井泰樹)

越後支部

令和2年度の会員動向は退会0名、物故会員が9名、新入会員5名で会員減少は止まらない。今後も高齢化による会員の退会・物故者は避けられない厳しい現状である。ただ若い年齢層の入会が増えている。これからも新入会員獲得と支部活性化に努めたい。

毎年7月25日「山の日」制定記念事業として、弥彦山大平園地・高頭仁兵衛寿像前で高頭祭を実施している。その寿像碑が冬の寒気・豪雪と夏の猛暑・豪雨に加え日本海からの潮風に曝され続けて、長年の経年劣化で寿像碑石壁に亀裂や剥離をしていた。このため高頭仁兵衛寿像碑の修復を行なうこととなり、越後支部会員のみならず、全国の日本山岳会関係者の皆様に募金のご協力をお願いした。あらためてお礼申し上げる。同時に「写真で見える高頭祭のあゆみ」を発行し、高頭仁兵衛翁の功績を紹介。今後も高頭祭の歴史と経緯を後世に継承する行事として継続したい。

《会議》
* 5月23日(土) 総会は書面議決にて実施。事業報告・決算・計画・予算などが賛成多数で可決。はがき回収総数119、回

収率68・3%

* 役員委員会 5月23日(土) 第1回理事会は中止、6月27日(土) 第1回委員長会議、10月10日(土) 第2回委員長会議、12月12日(土) 第2回理事會、3月6日(土) 第3回委員長会議、3月21日(日) 越後山岳古道調査会議、支部会員が集まり、支部運営や事業について協議。延べ75名出席。子ども登山教室実行委員会、越後山岳古道調査会議など、適宜会議を開き事業運営について協議。

《山行・野外活動》

- * 4月23日(木) 平日トレッキング 八石山 中止。
- * 5月14日(木) 平日トレッキング大仏山・須刈岳 中止。
- * 5月24日(日) 親陸登山 西会津 大山祇神社参道 中止。
- * 6月14日(日) 公募登山 妙高・神奈山 中止。
- * 6月27日(土)～28日(日) 靴音・寄り合いの集い 長岡・風谷山 中止
- * 「山の日」記念事業7月25日(土) 第63回高頭祭を弥彦山大平園地で規模を縮小して開催 24名が参加、献花・献酒だけで記念講演、たいまつ登山祭は中止。
- * 「山の日」記念事業 8月9日(日)～10日(月) 第4回糸魚川ジオパーク子ども登山教室 蓮華温泉～白馬大池周辺 中止。
- * 8月22日(土)～23日(日) 上高地集会 美ヶ原・西穂高岳 中止。
- * 11月1日(日) 靴音・寄り合いの集い 三条市・番屋山 19名

参加。

*越後スノートレッキング同好会 12月27日(日)米山 14名参加、1月11日(月)弥彦山 大雪のため中止、2月20日(土)妙高・神奈山 22名参加、3月27日(土)頸城・前烏帽子岳 18名参加、4月8日(木)魚沼・笠倉山 16名参加。

【プロジェクト・地域振興活動】

*7月25日(土) 清掃登山・弥彦山 24名参加。

*11月1日(日) 清掃登山・番屋山(三条市) 19名参加。

【広報・出版活動】

*6月15日(木)「越後支部報」第28号発行、10月15日(木)「越後支部報」第29号発行、2月15日(月)「越後支部報」第30号発行。

*12月4日(金)「写真で見る高頭祭のあゆみ」発行。

《講演会》

*10月3日(土)〜4日(日) 登山セミナー「山の天気ライブ授業と海外登山の話聞く」講師 猪熊隆之氏(ヤマテン代表取締役)、坂井広志氏(日本山岳会副会長) 中止。

《その他の行事、懇親会》

*新潟県山岳協会登山講習会への講師派遣、3月13日(土) 残雪期安全登山教室。

令和3年度はコロナ禍でも、できる事業を模索して実行に移していきたい。120周年記念事業の山岳古道調査については、越後支部会員の活性化および新会員獲得につながるように

越後山岳古道調査プロジェクトチームを立ち上げた。隣接する他県と連携を図り古道調査が順調に進むよう調整したい。

高頭祭は修復記念竣工式を兼ねて開催予定。

(小泉良夫)

富山支部

令和2年度は、新型コロナウイルスの感染防止対策として多くの事業、行事が中止あるいは規模縮小などの前代未聞の事態となった。恒例の「播隆祭」は第35回を迎えた。コロナ対策のため参加者は20名と少人数で播隆上人の生家跡に建立した「播隆上人顕頌碑」前において実施した。「生家の会」からは代表者おひとりの参加で、例年の播隆上人関連資料の展示などは中止とした。例年、この後に実施している高頭山記念登山は中止とし、播隆祭の1週間前に行なってきた高頭山登山道整備を播隆祭当日に実施した。参加者は13名だった。

本部主催の全国支部懇談会や、今年は石川支部がホスト支部の予定だった5支部合同懇親山行も相次いで中止となり、まさに異例の年となった。

8月11日に予定していた「山の日記念」の親子登山も中止を余儀なくされた。

例会山行も毎年実施していた南アルプスへのアプローチの災

害被災や山小屋のコロナ対策での営業自粛などの影響で実施できず、近郊の山へ個人山行という形態で行なわれた。

5月には待望の「富山県のグレーディング」が製作され、印刷物として無料配布された。発行した富山県自然保護課のHPからのダウンロードも可能となった。富山県山岳遭難対策協議会、富山県警察本部地域部山岳安全課、富山県山岳連盟、立山ガイド協会、立山山荘組合の協力のもと、富山県自然保護課が製作したものである。県内92ルートの難易度について紹介されており、登山の参考資料として貴重なものとして位置づけられている。全国としては当時10番目の策定と聞いている。これを受けて富山県内の山を紹介した『富山の百山』にもこのグレーディング情報を加筆した改訂版の作業が進んでおり、令和3年度には改訂版の発行が予定されている。

山岳遭難関連では令和になって特に黒部川・下ノ廊下での転落事故のニュースが増えてきているという印象を受ける。ここ数年、テレビ番組で山岳ルートを紹介した番組が急が増えてきている。その理由としてビデオカメラの高性能化と小型軽量化が進み山岳地帯に簡単に持ち込めることも影響している。問題はそのルートの紹介の仕方だと考えられる。下ノ廊下の水平歩道から仙人池のコース紹介のフリップが、まるで低山ハイキングの散策コースのように紹介されていて驚いたことがある。誰でも気軽にいける初心者コースであるかのような印象を与えて

いることが転落事故につながってはいないだろうか。紹介の仕方についても注意が必要な状況となってきていることを強く感じただきことだった。

《会議》

・ 4月15日(水) 支部総会 事業報告および収支決算報告、事業計画および予算案を書面議決にて承認。

・ 1月20日(水) 親睦会総会。第9回役員会の後に開催。出席10名。

・ 役員会は11回開催（6月から3月まで毎月1回開催）。

・ 9月26日(土) 全国支部合同会議 支部長・事務局長リポートで参加。

・ 1月30日(土) 全国支部連絡会議 支部長・事務局長リポートで参加。

《山行・野外活動》

・ 4月8日(水) 負釣山 参加6名。

・ 5月15日(金) 瀬戸蔵山 参加4名。

・ 5月23日(土) 唐堀山 参加5名。

・ 6月16日(火) 毘沙門岳 参加4名。

・ 7月3日(土)～4日(日) 例会山行 浅草岳・弥彦山 参加4名。

・ 8月6日(木)～7日(金) 浄土山・竜王岳・雄山 参加5名。

・ 8月8日(土)～9日(日) 例会山行 浅間隠山・両神山 参加6名。

・9月5日(土)～6日(日) 例会山行 戸隠山系・高妻山 参加7名。

・10月3日(土)～4日(日) 第36回全国支部懇談会 コロナ禍のため中止。

・11月7日(土)～8日(日) 5支部合同懇親山行(石川支部担当) コロナ禍のため中止。

・2月 5支部合同スキー山行 コロナ禍のため中止。
《プロジェクト・地域振興活動》

・6月7日(日) 高頭山登山道整備(公益) 参加13名。
・6月7日(日) 第35回播隆祭(公益) 式典参加20名。

《広報・出版活動》
・「富山支部会報」発行 10月20日 第114号、3月17日 第115号

・第12回山岳講演会 コロナ禍のため中止。
《その他の行事、懇親会》

・8月 例会・懇親会 コロナ禍のため中止。

・12月16日(水) 例会・懇親会 山行報告(ニュージールランド・トレッキング報告)、懇親会は中止。とやま市民交流館 参加15名。

(河合義則)

石川支部

令和2年度となった矢先の4月7日に、緊急事態宣言が発令され、窮屈な生活を強いられることとなった。山岳4団体からメッセージも出され、山小屋や施設の休業・閉鎖や制限付きの利用などで登山に出掛けることも難しい状況となった。支部として団体登山は中止としたが、個人山行は制限せず、各自の判断とした。

石川支部として継続をしていた公益事業の第6回となる「白山親子登山教室」は、大人数での登山は密になることと宿泊予定の山小屋の利用制限により、やむなく中止とした。

ふるさと登山道整備は支部員有志少人数にて富士写ヶ岳・不惑新道および杉峠の2ヶ所を実施した。

会員構成は退会者2名。総会は開催できたが会場の会議室が利用自粛となったため、一時期、月例集会を開催できなかった。

《会議・月例会会場は金沢市総合体育館会議室》

*4月4日(土) 金沢市総合体育館会議室にて支部定期総会を開催、密を避けるため定員100名の会議室に出席16名、委任状21名にて事業報告、計画案、会計報告・予算案などを全員で審議・可決した。

*5、6月は金沢市総合体育館会議室が利用自粛要請となったため、月例会は休止となった。

* 7月5日(水) 月例会 会議室が使用可能となったので再開した 出席4名。

* 8月19日(水) 月例会 白山の情報などを共有、活動再開について協議 出席4名。

* 9月16日(水) 月例会 19時から26日に行なわれる支部合同会議(Zoom会議)のリハーサルがあり、会議室にて接続訓練を行なう。26日に富士写ヶ岳登山道整備について実施とし、案内はメールにて配信とする。ほか、月例山行計画について個人山行を月例山行の一部として発案する。出席6名。

* 10月21日(水) 月例会 支部員夏山個人山行報告。写真をプロジェクターにて披露 出席4名。

* 11月18日(水) 月例会 古道調査について協議 出席4名。

* 12月16日(水) 月例会 会員への連絡方法にLINEを検討、さっそく石川支部グループを立ち上げ、事務局から各位へ案内メールをすることとした。来期の予算計画。事業計画を策定、事務局から本部へメールにて提出する。令和2年は支部費など集めたが、何も還元できなかったため、令和3年度は考慮することとした 出席4名。

* 令和2年1月20日(水) 月例会 次回役員会の準備ほか。出席4名。

* 令和2年2月17日(水) 月例会 役員会とした。総会準備のため、総会議事などについて意見調整・審議 出席4名。

* 3月29日(日) 先月の役員会に基づき総会提出議案検討、総会資料確認。出席6名。

《公益事業・地域振興活動》

* 6月17日 杉峠登山道整備 参加1名。

* 10月3日 富士写ヶ岳 火燈古道・大内登山道・不惑新道登山道点検整備 参加6名。

《行事・懇親会・その他》

* 9月26日支部合同会議 Zoom会議 参加1名。

* 5支部合同懇親山行、山祭り集会・懇親会、年次晩餐会、5支部合同スキー山行は中止となった。

(堀正春)

福井支部

令和2年に入り、新型コロナウイルス感染の報道が毎日のようにテレビや新聞をにぎわすようになった。福井県でも3月から4月にかけて感染者が急増し、一時は人口当たりの患者数が日本一の状態となったため、4月14日に県独自に「緊急事態宣言」を発令、4月16日には国が全国に「緊急事態宣言」を発令する事態となった。三密を避け、不要不急の外出自粛が始まり、感染拡大予防のため、福井支部では4月中は山行など会の行事すべてを中止とした。

5月に入り、森づくりはマスクをし、三密を避けながら再開した。また、山行については5月から8月は現地集合とし、9月からは1台の車に2〜3名同乗して行なった。

《会議》

*令和2年4月11日(土) 通常総会 新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止。

*令和3年3月13日(土) 福井市研修センターにて幹事会 出席者6名。午前10時〜正午 令和3年度の支部活動計(案)の検討や活動等の意見交換をした。

《支部山行》

*4月(新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止)

*5月9日(土) 三床山〜牧山 7名参加。

25日(月) 西方ヶ岳〜蝶螺 4名参加。

*6月7日(土) 火燈山〜浄法寺山 8名参加。

22日(月) 銀杏峰 7名参加。

*7月20日(月) 杣山 5名参加。

*8月2日(日) 三ノ峰 6名参加。

8日(土) 権現山 8名参加。

*9月6日(日) 取立山 4名参加。

14日(月) 白山 3名参加。

*10月4日(日) 岩籠山 6名参加。

12日(月) 越前甲 2名参加。

24日(土) 三十三間山 5名参加。

*11月1日(日) 鶯鞍岳 9名参加。

14日(土) 野見ヶ岳 5名参加。

30日(月) 文殊山 6名参加。

*1月17日(日) 日野山 9名参加。

*2月6日(土) 西方ヶ岳 8名参加。

20日(土) 乗鞍岳 9名参加。

*3月7日(日) 護摩堂山 7名参加。

20日(土) 火燈山 7名参加。

令和2年度は天候不順の日が多く、何回か山行が中止になった。

《その他の行事》

新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止となる。

*5月16日(土)〜17日(日) 第36回全国支部懇談会(宮崎支部主管)。

*11月7日(土)〜8日(日) 5支部合同懇親会(石川支部支部主管)。

*12月7日(土) 日本山岳会晩餐会。

《公益年間プロジェクト》

新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止となる。

*5月31日(日) 泰澄祭&泰澄ウォーク。

*森づくり 4月は新型コロナウイルス感染予防のため中止。

5月11月と年明け、3月末、越前町五と生の現地にて活動。池に繁殖したガマの撤去作業、遊歩道および周囲の除草、花壇・遊歩道の整備、雑木の伐採とクリの植樹、ナラの伐採木にシイタケ菌種付などを行なった。昨年末には、作業用道具や材料を収納出来る小屋の盛土がほぼ完成した。

(船田洋子)

山梨支部

新型コロナウイルス感染症感染防止を徹底するため支部活動は何を行なうにも三密を避けるなどさまざまな制約や、もどかしさを感じるコロナに振り回された1年だった。すべての活動について、そのときどきの新型コロナウイルスの状況を踏まえて適切に活動することに努めた。

新年度に入って間もなくの4月16日には緊急事態宣言が山梨県を含む全国に拡大され、その2日後の支部総会はもとにもコロナの影響を受けた。予約会場が急遽利用不可になり、会場探しのほか、総会規模縮小に伴う総会決議に必要な出席支部員の調整(出席予定者の委任状への切替依頼)などの対応に追われるなど慌しい状況での2020年度が始まった。

年度計画重点事項としては、山の日制定記念事業としてのやまなし登山基礎講座の継続実施、地域行政と協働の第3回田部

祭および第61回木暮祭の開催、やまなし登山基礎講座受講修了生を対象にした支部山行と雪山入門ステップアップ登山講習会の実施、機関誌「支部通信」および『甲斐山岳』発行による広報活動の充実、これらに加えてJAC創立120周年記念事業の山岳古道調査初年度として調査対象山岳古道の候補選定に必要な事前調査や情報収集を円滑効率的に行なう体制作りなどだ。支部山行や登山講習会は支部員増加につなげる重要なものと位置付けている。また機関誌による広報活動は支部員相互の交流促進と支部活性化を図ることに欠かせぬものと考えている。

(1) 公益目的事業の状況

①第6回やまなし登山基礎講座(9月8日～11月17日、机上講座8回、野外講座3回)。山の日制定記念事業として2015年に第1回を開催し、以後毎年実施している講座。受講生を15名(例年は30名内外)に縮小するも、講座の内容容および回数は当初計画どおり実施した。

②第39回深田祭(深田久弥を忍ぶ碑前祭と茅ヶ岳記念登山。4月19日。主催は山梨県韮崎市観光協会。山梨支部は例年式典に参加。支部独自に茅ヶ岳記念登山を実施) 韮崎市が開催を中止した。

③第3回田部祭(奥秩父を世に広めた田部重治の遺徳を忍ぶ碑前祭。5月17日、山梨県山梨市三富支所主催。山梨支部

は協賛・協力支援。山梨支部が数年前に開催を行政に働きかけて実現した経緯あり）山梨市が開催を中止。

④第61回木暮祭（田部重治とともに奥秩父を開拓し世に広めた木暮理太郎の遺徳を忍ぶ碑前祭。10月18日、山梨県北杜市の協力支援のもと、山梨支部が主管）碑前祭のみ実施し、懇親会は中止した。

⑤月例支部山行（やまなし登山基礎講座受講修了生等の参加を募った山行）上半期は4月19日茅ヶ岳山行のみ実施、そのほかの計画は中止。初めて計画した家族登山（5月30日）も残念ながら中止した。

下半期は10月18日（五里山、木暮祭記念山行）、11月28日（たいら山）は実施し、1月17日（鳥谷山）および3月21日（浜石岳）の計画は三密回避に不安があり、中止した。

⑥雪山入門ステップアップ講習山行（やまなし登山基礎講座受講修了生の参加を募った講習山行）1月30日（入笠山）、2月20日（北横岳）ともに計画どおり実施。

⑦「甲斐山岳」第11号別冊『甲斐百山』の販売促進 山梨支部創立70周年記念企画した『甲斐百山』は山梨支部が対象とする山を選定、実査、記述、編集をしたもので、2019年12月に400冊発行した。大変好評でまたたく間に在庫がなくなり、その後2回の増刷をして合計1200冊発行。支部員への配布、関係先へ寄贈したほか、山梨県内書

店店頭販売をして完売となった。

⑧山岳古道調査委員会の立上げ 調査山岳古道（案）の選定2020年4月開催の支部総会で「山岳古道調査委員会」を設置することを決めた。支部理事会においてこの委員会の構成、運営方法などを決め、委員には支部役員のほか、支部員からも公募し、第1回委員会を11月25日に開催し、以後原則毎月開催するなど支部総力をあげて取り組む体制が整った。調査対象古道候補（案）は2021年3月に本部あてに報告。

(2) 共益目的事業の状況

①会員山行 中止。

②支部広報活動の積極推進（機関誌の発行、ホームページへの情報発信）。

ア「支部通信」の発行。第3期8号（6月25日）および第3期9号（12月21日）を計画どおり発行した。

イ「甲斐山岳」第12号（2021年3月31日）を計画どおり発行。

ウ ホームページの活用。支部山行、やまなし登山基礎講座、その他のイベント（田部祭、木暮祭、深田祭など）について適時情報発信を行なう。

③山梨県山岳レインジャー委託事業活動（山梨県希少野生

動植物種の保護に関する条例」で定めた特定種の保護を目的に行なう調査業務)。

前年の台風で林道崩壊による公共交通機関の運休や南アルプスの山小屋(テント場も)の多くが閉鎖で原則1泊2日の活動が難しい状況になり、山梨県との協議の末6〜7月は調査山域を変更して日帰り2日(回)に分けての活動になった。

ア 北岳(定経路外の探索)は、北岳(6月27日)バットレス沢まで)と櫛形山(6月29日)に分けて実施した。

イ 甲斐駒ヶ岳(探索)は、甲斐駒ヶ岳(7月15日)七丈小屋直下梯子まで)と日向山(7月17日)に分けて実施。

ウ 鳳凰三山(定経路)は山小屋の営業開始に伴い8月8〜9日に予定通り実施。

④第10回中部ブロック交流会への参加 毎年ブロック支部(越後、信濃、静岡、山梨)が持ち回り(今年度は信濃支部担当)で開催する会員相互の情報交換、懇親を図る目的の交流会は中止(延期)になった。

⑤会員増への取り組み やまなし登山基礎講座受講生・受講修了生や支部員の友人・知人への勧誘など会員増を図った(新規加入者は正会員2名、準会員3名)。また、準会員の正会員への移行を適時勧奨した(正会員移行1名)。

(3) その他

恒例の定時総会後開催の懇親会、および1月開催の新年会は中止した。

2021年度について

複数のコロナの変異種が日本国内でも猛威を振るいつつあり、収まる気配なく先が見通せぬ状況が続いている。ワクチン接種が行き渡り、その効果などが出てコロナ禍前の状況の下で、今年度諸計画が滞りなく適切に推進実施できるよう努めていきたい。

(北原孝浩)

信 濃 支 部

令和2年1月から始まった原因不明の呼吸器感染症は、その後新型コロナウイルスが原因と分かり、3月11日に世界保健機構(WHO)がパンデミック(世界流行)を宣言した。これに合わせ、政府は4月16日全国に「緊急事態宣言」を発令し国民の移動が制限された。山岳スポーツ4団体(日本山岳・スポーツクライミング協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本山岳ガイド協会)は、事態の収束を見るまで山岳スポーツ行為を厳に自粛するよう要請し、これに合わせ北ア南部の山小屋25軒でつくる北アルプス山小屋友交会は7月15日まで営業開始を見送り、一部には年間を通じて営業しない山小屋もあった。5

月ごろにはいったん終息されるかに見えたが、その後再拡大し治まる兆しがなく、日本山岳会信濃支部も新型コロナウイルス感染症に振り回され活動がほぼストップした1年だった。

信濃支部においては、4月19日の支部通常総会の出席者を絞り、会場をホテルから松本市城山公園に移しオープンで開催した。総会では今年度の事業計画を審議したが、支部参考については当分の間見合わせることにした。第74回ウエストン祭について実施方法を協議した結果、日本山岳会が主催し信濃支部が主管する最大の行事であることから、役員を中心に6月7日(日)に上高地ウエストン広場で恒例の時間に碑前祭のみ縮小して開催することとした。信濃支部が幹事となり今年度開催予定だった中部ブロック4支部交流会も、延期の末中止し、次年度に繰り越すこととした。

日本山岳会創立120年記念事業として推進されている「山岳古道調査」について、信濃支部としてプロジェクトを立ち上げ、徳本峠を含む長野県内5件の古道を候補として選り本部に推薦した。

信濃支部長が役員を務める「第9回岳都・松本山岳フォーラム」は、テーマを「コロナ禍と山の未来を考える」として会期を1日に短縮して松本市内で3月21日に開催された。パネリストとして穂苅大輔会員(槍ヶ岳山荘社長・信濃支部)が参加した。同フォーラムで山小屋友交会・山田直会長(横尾山荘・信

濃支部会員)は、昨年、友交会のほとんどの山小屋が赤字経営となり、このままでは山小屋が担っている登山道整備など大切な役割が果たせなくなるとして、宿泊の予約制や宿泊料金値上げの实情を訴えた。

《支部行事》

4月18日 上高地山岳研究所開所 上高地。

4月19日 令和2年度信濃支部通常総会 松本市城山公園。

4月27日 上高地開山祭(中止)。

5月 明神島々登山道整備(中止)。

5月23・24日 第9回全国支部懇談会(宮崎支部・中止)。

6月6日 第74回ウエストン祭徳本峠記念山行(中止)。

6月7日 第74回ウエストン祭碑前祭(縮小開催) 上高地 出席者13名。

7月 信濃支部自然観察教室(中止)。

9月26日 全国支部合同会議(Zoomにてオンライン開催)。

10月17・18日 第10回中部ブロック4支部交流会(中止)。

11月7日 上高地産学研究所開所 上高地。

12月5日 日本山岳会年次晩餐会・支部代表者会議(中止)。

1月19日 信濃支部新年会・役員会(中止)。

3月14日 岳都松本・山岳フォーラム(縮小開催) 松本市。

3月20日 信濃支部監査会 安曇野市内。

《支部山行》

支部山行は、海外遠征（台湾・玉山）を含み13回計画されたが、新型コロナウイルス感染症のためほとんどが中止となり、5月23日の岩殿山（山梨県大月市。参加者2名）のみ実施された。

《加盟団体》

長野県山岳協会、岳都松本・山岳フォーラム、信州ゆたかな環境づくり県民会議、松本市海外都市交流委員会。

（古幡開太郎）

岐阜支部

コロナ禍で大きな混乱を招いた令和2年度だが、岐阜支部では可能な限りの活動を行なってきた。第1回目の緊急事態宣言下では慎重な行動をとり、すべての行動を中止したが、5月より活動を再開している。

会員は、「自粛するよりは前向きに動いた方が良い」という意見が多かったため、政府指針の定められた範囲内で可能な限りの活動を行なう判断をとった。

岐阜支部では山岳4団体や医療機関からのコロナ対策指針に基づき、計画書内に対策方針を記載し、山行に参加する会員に注意を呼び掛けた。山行実施日と前後の体調チェック・移動の車中での換気・登山開始後30分休憩での体調チェックなどを徹底

し、各警察署に登山届けを提出する際には我々の方針を説明した。

難しい判断を強いられたが、感染対策を徹底したことで、会員のコロナ感染は確認されていない。最新の注意を払いながら、ワクチンの摂取の進捗も見ながら、本年度は会の活動を拡大していく予定だ。

◎令和2年度 行事

*森林作り委員会

- 4 / 4 小屋開きなど 3名。 4 / 18 倒木の切断整理、登山道の修復など4名。 5 / 9 権現山頂上事前の、登山道修復など3名。 5 / 23 ヒノキの枝切りなど3名。 6 / 13 ヒノキ切り枝整理、下草刈など。 6 / 27 ヒノキ切り枝整理、下草刈など。 9 / 12 拡張伐採作業・防獣ネット修復など。 9 / 26 植拡張伐採作業など。 10 / 10 植栽地の下草刈りなど。 10 / 24 植栽地中腹から袖道への拡張伐採作業など。 11 / 7 小屋じまいなど芋煮会。

*写真展委員会

- 2 / 18 写真展開始 ハートフルスクエアG。 3 / 4 写真展終了 ハートフルスクエアG。
- *今西錦司行事委員会
- 3 / 7 今西錦司記念山行…高畑山 高木。

*自然保護委員会

6 / 14 清掃登山 山本 中止。 6 / 21 自然観察会(藤田) 中止。 2 / 14 自然観察会 渥美半島 西條・渡部 中止。

*海外山行委員会

6 / 22 + 29 ポーランド最高峰リシイ山 竹中 中止。

*例会山行

4 / 26 御在所岳 今峰 中止。 5 / 17 多田ヶ岳 後藤 中止。 5 / 24 山城シリーズ 藤井 中止。 6 / 7 経ヶ峰 馬淵 中止。 7 / 5 福地山 東明。 8 / 9 家族登山・高賀山 古田。 9 / 6 南木曾岳 東明(県民スポーツ大会) 小津権現山より変更)。 10 / 10 + 11 陀羅仏小屋・キノコ山行 村松。 11 / 8 山城シリーズ 藤井。 12 / 6 仙ヶ岳 荻谷。 1 / 24 南宮山 竹中美 中止。 3 / 7 今西錦司記念山行・高畑山 高木。

*国内山行委員会(パリエーション)

5 / 10 青波 堀 中止。 7 / 11 + 12 日 山研合宿 山田 中止。 8 / 2 沢登り乗鞍長倉谷 木下・矢口 中止。 9 / 20 上河和 堀。 10 / 3 + 4 燕岳・餓鬼岳 窪田。 10 / 25 黒壁 山本。 11 / 15 花房山・小津権現山 竹中美。 2 / 7 霊仙山 東明 中止。 3 / 14 小白山 神山 中止。
*国内山行委員会(研修・清掃)
4 / 12 地図ナビ 山田 中止。 6 / 14 清掃登山 山本

中止。 6 / 21 自然観察会 藤田 中止。 7 / 12 地図ナビ

山田 中止。 12 / 13 清掃登山 山本。 2 / 14 自然観察会 渥美半島 西條・渡部 中止。

*総務委員会

4 / 25 + 26 総会&懇親山行(国民宿舍湯の山ロッジ) 中止。 10 / 24 山岳講演会。 2 / 13 山岳講演会。

*企画広報委員会

5 / 16 + 17 全国支部懇談会(宮崎) 中止。 1 / 16 新春懇談会。

*岐阜県山岳連盟(主だった行事のみ)

6 / 14 岐阜県山岳連盟 理事会。 9 / 5 + 6 県民スポーツ 大会 中止。

*岐阜市山岳協同行事

11 / 1 市民登山。

*会員増強(会員増強アクション)

4 / 5 宣伝山行 岐阜周辺の山 中止。 7 / 4 宣伝山行 岐阜周辺の山。 9 / 27 宣伝山行 岐阜周辺の山。 12 / 27 宣伝山行 岐阜周辺の山

*会員増強(百名山)

4 / 18 + 19 丹沢山 塩入 中止。 5 / 23 + 24 越後駒ヶ岳 東明 中止。 6 / 21 白山 東明 6名。 7 / 23 + 26 笠ヶ岳 東明。 8 / 13 + 16 槍ヶ岳・穂高岳 東明。 9 / 19 + 22

薬師岳 雲ノ平 梅田。10/17、18 火打・妙高 東明。11/21、23 大山 梅田。12/19、20 蓼科山 東明 中止。1/17 車山 東明 中止。2/20、21 蔵王 矢口 中止。3/27、28 恵那山前宮ルート 東明。

＊事務局

4/25 例会&総会 中止。5/14 例会 中止。6/11 例会。7/9 例会。8/6 例会。9/10 例会。10/8 例会。11/12。例会。12/11 例会&忘年会。1/16 新春懇談会中止。1/21 例会。2/18 例会。3/11 例会。

(東明 裕)

静岡支部

静岡支部は2020年2月26日「支部創立70周年」を迎えるに当たり、約2年前より実行委員会を立ち上げ、記念行事の計画・準備を進めてきた。そのほかの事業も新型コロナウイルス対策を充分にして推進を図った。

《公益事業委員会》

5月30日(土)、6月6日(土)、9月12日(土) 森づくり事業「NPO静岡山の文化交流センター」主宰葦科川上流、「尾崎林業地、下草刈り」会員延べ19名参加。

8月10日(月) 山の日記念親子登山「高山市民の森・牛ヶ峰71

4m」親子5組11名、会員9名参加。

10月18日(日) 静岡県スポーツフェスティバル登山「山伏」「八紘嶺」1名参加。

10月24日(土)、11月7日(土)、11月21日(土) 浜松市積志協働センター「初心者登山教室」開催・机上講習、各回受講生21名、会員延べ20名参加 講師は会員で行なった。

11月28日(土) 実技・湖西連峰「神石山325m」受講生11名、会員11名参加。

10月25日(日) ハイキングセミナー「愛鷹山」山田明氏同行、セミナー生13名、会員11名参加。

11月3日(火)～8日(日) 県山岳4団体「第3回南アルプス写真展」来場者延べ702名。

11月6日(金) 森林組合おおいがわ・職員研修(70名)「山の安全な歩き方」講師・山本良三。

3月14日(日)9名、31日(水)5名、4月1日(木) 5名 森づくり事業「NPO静岡山の文化交流センター」主宰(静岡流通センター所有地・植樹・整備)。

《山行委員会》

6月3日(水) 平日会員山行「高ドッキョー」8名参加。

9月19日(土)～20日(月) 会員山行「南アルプス・白峰南嶺」4名参加。

11月14日(土)～15日(日) 懇親山行「十枚山・直登コース」16名(会

員外2名)参加。

12月16日(水)～17日(木) 平日会員山行「伊豆・猫越岳」13名参加。
2月6日(土)～7日(日) 会員山行「雪山とスキー」四阿山・根子岳 12名参加。

《文珠山荘運営委員会》

4月11日(土)～12日(日) 「山菜天ぷらを食す会」 6名参加。
6月13日(土)～14日(日) 「ヒメ螢鑑賞会」 8名参加。
9月5日(土)～6日(日) 「納涼祭」 13名参加。
10月30日(土)～11月1日(日) 「ハロウィン」 9名参加。
12月12日(土)～13日(日) 「忘年会」 12名参加。
3月6日(土)～7日(日) 山荘をベースに山に登る会「下十枚山」。
12名、一般3名(山行のみ2名)参加。

《会報編集出版委員会》

4月 「支部創立70周年記念誌」発行、(123ページ、一部カラー)。

6月 支部会報「不盡」87号発行、(70周年記念20ページ、フルカラー)。

12月 支部会報「不盡」88号発行、(70周年記念20ページ、フルカラー)。

《会計・集会委員会》

8月12日(水) 納涼懇親会(会員の親睦を図る)会場・静岡駅南口「鶏采」16名参加。

《事務局》

4月8日(水) 支部通常総会 静岡労政会館
12月6日(日) 支部創立70周年記念式典・講演会「江崎ビル、9F江崎ホール」演題「山の文化とヒマラヤ登山の軌跡」講師・山本良三・聴講者(一般含め)52名 祝賀会・ホテルグランヒルズ静岡 来賓6名含め、35名。

★支部創立70周年記念・支部旗制作2旗 8月に中サイズ(728mm×1030mm・ポリエステル製)、2月に大サイズ(1456mm×1030mm・合成布製)。

《定例会》(原則・第2水曜日、労政会館)

7月8日「労政会館」18名、9月9日「あざれあ」17名、10月14日「あざれあ」16名、11月11日「あざれあ」16名、12月9日「あざれあ」13名、1月13日「あざれあ」15名、3月10日「あざれあ」15名。

《役員会》(原則・第4水曜日、チロル)

7月29日、8月26日、9月23日、10月28日、11月25日、1月27日、2月10日「番町市民活動センター」、2月24日、3月24日。
★延期、変更、中止となった事業

4月26日(日) 支部創立70周年記念、集中登山「竜爪山」中止。
5月1日(金)～6日(水) 支部創立70周年記念、海外登山「玉山」中止。

6月7日(日) ハイキングセミナー「大丸山・金丸山」中止。

6月28日(日) 文珠山荘「天気と天気図・三角点について」延期、中止。

7月17日(金)～19日(日) 会員山行「横窪沢小屋を訪ねる」変更。

7月23日(木)～26日(日) 会員山行「横窪沢小屋を訪ねる」南アルプス南部縦走、中止。

10月3日(土)～4日(日) 第36回全国支部懇談会・宮崎支部 変更、中止。

10月17日(土)～18日(日) 中部4支部交流会・信濃支部 変更、中止。

1月10日(日) 支部新年会 中止。

2月14日(日) ハイキングセミナー「高鉢山・西白塚」中止。

定例会―5月13日、6月10日、2月10日 中止。

新型コロナウイルス感染症の影響で延期や中止となった事業があったが、「支部創立70周年記念式典、講演会、祝賀会」は延期して開催した。コロナ禍で参加者が少なかった。今年度、新たにNPO「静岡山の文化交流センター」主宰の森づくりに参加することになり事業推進を計った。今後も継続していく。

浜松市積志協働センターより「初心者登山教室」の依頼があり開催した。講師は会員で行なった。

2021年度も、新型コロナウイルス感染症の影響が心配されるが、充分な対策をして事業推進を図っていく。

(木村勝利)

東 海 支 部

2020年度は、コロナ禍により山小屋の休業など、取り巻く環境の規制があり、思うような活動ができなかった。また、山行計画も予定どおり実施できなかった。ただ、28名の方が入会し、17名の退会であったため、11名を増員することができ、3月末現在の支部員数は353名となった。高齢化による退会があったが、5年前から取り組んでいる登山学校、あるいは、冬山フェスタなどの積極的な勧誘などが効を奏す結果となった。ともに若い方の入会も目立った年であった。

《会議》

*支部通常総会5月16日(日)開催。コロナ禍のため、書面開催とした。本年度は評議員1名が退任、副支部長の交代として、

服田康弘氏が新任副支部長となった。

*常務委員会

毎月第4水曜日開催(支部長、副支部長、各委員長が参加) 支部運営の基本事項について審議)。

*正副支部長会議

毎月第3水曜日開催(支部長、副支部長、総務委員長が参加) 常務委員会に先立ち、主要事項の事前審議)。

*各委員会(22委員会) 毎月1回開催(各委員会の活動内容の審議)。

《山行・野外活動》

* 山行委員会 定例山行(計画62、実施29参加者累計148名)。
* 青年部(随時行った個人山行に加え、春、夏、冬期の合宿の他、親子登山、きのこ山行などを実施した。

* 支部友会定例山行(計画51、実施20回、参加者累計108名)。

* 東海ユース 原則入会時45歳以下の男女で向上心のある登山初心者15名が毎月1〜2回の定例山行に加え、安全登山のための勉強会なども実施している。

* 亀の会 月1回の定例山行は1回のみ開催(参加者人)。加え自主山行を5回実施(65人参加)。「歩こう会」17は2回実施(延べ30名参加)。60山ラリー山行を5回実施し、46名参加。会員数48名。

* 登山学校第4期―7月開校。未組織登山者への安全登山の啓発、支部の人材の確保と育成、支部活動の活性化を目的として運営。経験および技量に合わせ、初級、中級および上級の3つのグループに分け、1年間の実践・学習を通して技術の習得を目指していただくこととしている。令和2年度は山行、座学とも規模縮小。生徒数…初級16名、中級12名、上級7名、指導員23名で対応。毎月1回の山行と年間6回の座学を実施。令和2年度から下部組織として「同窓会」を設立。学校卒業生の支部での活動の場を提供している。

* ボランティア活動

① 視聴覚障がい者懇親登山を10月3日、兩生山にて実施、参加16名(内13名が支部員ほかの支援者)。
第2回を12月5日京ヶ峰にて実施、参加者11名(内支部員他支援者8名)。

② 視覚障がい者支援登山 中止。

③ 親子ふれあい登山 中止。

④ 知的障害者支援登山(SON愛知と協働) 中止。

⑤ タンポポ登山(少年補導委託登山)―家庭裁判所との協働事業 中止。

* 森づくり活動

① 愛知県有林「やまじの森」における保健保安林・土砂流出防護保安林の整備に加え、遊歩道の維持・水土保全・生物多様性などの環境機能の向上を目指した諸作業。

② 東大演習林での間伐作業。

③ JAC所有の山桜フィールド整備。

④ 民有地での間伐作業。

⑤ 自然観察会 随時。

* 森の音楽祭 中止。

* 「第17回東海岳人写真展」2月に開催した。

* 同好会の活動 同好の士と本支部の事業目的に沿った多様な活動を通じて、有意義なクラブライフを享受している(現在8つの同好会が活動中)。

《事故防止事業》

- *指導者研修講習会 6月から11月にかけて6回実施。
- *留守番電話とファックス・メールによる登山届の提出促進(通年)。

*安全登山啓発のための情報発信。

*遭難予防講習会の開催。

《プロジェクト・地域振興活動》

*第7回夏山フェスタは中止となり、12月26日冬山フェスタが開催され、協力した。

*60周年記念行事―東海支部は2021年に60周年を迎えるこ

とから次の60周年記念行事を計画(一部実行中)

①海外登山(インド・ヒマラヤのカンチエンナップ北壁)計画中。

②海外トレッキング 未定。

③60山ラリー 実施中。

④60周年記念出版(「東海山岳」60周年記念12号、東海支部報合本版) 編纂中。

⑤60周年記念記念式典および懇親会(準備開始) マカルー登頂(南東稜初登攀) 50周年記念講演会開催に向けて準備開始。

《広報・出版活動》

*「支部報」の発行(4月、7月、10月、1月の4回)。

*ホームページを利用した支部活動の情報発信(通年)。

*メールマガジン・月1回のペースで支部員・支部友会員・東海ユース・猿投の森づくりの会の希望者に支部活動及び講演会などの情報を配信した。

《講演会》

*7月 気象予報士 小田切正氏 「夏山の気象の基本」と題して開催。

《「山の日」啓発活動》

*各委員会にて啓発チラシの配布。

(今津英一朗)

京都・滋賀支部

2020年度は、新型コロナウイルスの蔓延禍により、多くの例会などが中止せざるを得なかった。通常の例会に加え、若手会員向けの「未知の山旅」。登山講習会を充実させた。高齢化する会員が参加しやすい「平日例会山行」や、緩やかな山旅の「山歩会」、さらに緩やかな「巨木探訪」を拡充させた。

物故、退会、希望退会などで会員の減少が続いている。若い力のある会員の獲得は支部の継承と発展のために引き続き重要な課題となっている。

支部として地元「京都新聞社」の『丹波の山々』の連載を、

2019年1月から2020年3月まで実施。引き続き『京都の山々』として2020年4月から2021年3月まで月1回連載している。執筆者は若手にも門戸を広げた。

《会議》

*第35回通常総会 4月4日(土)を書面議決にて開催(支部会員137名中74名で書面議決した)。事業報告、決算報告、役員選定、事業計画、予算を審議。記念講演は安間繁樹氏(2019年秩父宮山岳賞受賞)を予定していたが、新型コロナウイルスの蔓延禍で中止となった。京都『今西錦司賞』は酒井敏明会員(地理学的視点から山岳や探検文化を掘り起こした研究による功績)。

*支部役員会毎月第1水曜日(祝日月は第2水曜日)。京都・鴨沂会館もしくはオンラインで12回開催。延べ222名出席。各例会山行報告、各委員会報告、各部会報告。各課題は審議。《山行》

*「山の日」事業。日本山岳会京都・滋賀支部と京都新聞連携企画。11月29日(日)京都の山々(大江山)は新型コロナ禍で中止。

*「定例山行」5回実施、延べ26名参加。
7月24日(金)〜26日(日) 山岳展望と巨木 長野県千曲方面。
10月17日(土)〜21日(水) 未知の山旅(越後・会津方面) 御神楽岳・二王子岳・五頭山・松平山。
10月24日(土)〜25日(日) テント泊山行 川上岳。

12月14日(月) 武奈ヶ岳(1214m)の日。
2月13日(土)〜14日(日) スキー例会 敷原スキー場。
*「平日例会山行」2回実施、延べ7名参加。
12月17日(木) 平日例会山行 蹴上〜琵琶湖疎水。
3月18日(木) 平日例会山行 岩門沙利山。

*「山歩会山行」6回実施、延べ66名参加。
6月30日(火) 山歩会 笹ヶ岳(信楽)。
9月22日(火) 山歩会 小谷山(湖北)。
10月27日(火) 山歩会 黒尾山(周山)。
11月24日(火) 山歩会 阿星山(湖南)。
12月8日(火) 山歩会 鷹峯三山。
3月23日(火) 山歩会 鏡山。

*「登山講習会」4回実施、延べ35名参加。
6月7日(日) 健幸登山教室 皆子山。
8月2日(日) 健幸登山教室 明王谷沢登り。
10月2日(日) 健幸登山教室 堂満岳。
12月20日(日) 健幸登山教室 綿向山。
*「巨木探訪会」8回実施、延べ41名参加。

5月27日(木) 巨木探訪 京都府美山方面。
6月26日(水) 巨木探訪 福井県若狭方面。
7月29日(水) 巨木探訪 福井県今庄・広野方面。
8月26日(水) 巨木探訪 兵庫県青垣方面。

9月30日(水) 巨木探訪 滋賀県米原・長浜方面。

10月29日(木) 巨木探訪 福井県武生・鯖江方面。

11月25日(水) 巨木探訪 福井県若狭方面。

3月24日(水) 巨木探訪 三重県亀山方面。

《会報》

139号 6月15日、140号 9月15日、141号12月15

日、142号 3月15日の年4回発行された。

《懇親会》

1月13日(水) 支部新年会を南禅寺「順正」にて開催予定だったが新型コロナウイルスの蔓延禍で中止した。

《他支部懇親山行》

京都滋賀・福井・岐阜・富山・石川5支部懇親山行。広島・

京都滋賀交流山行。

京都滋賀・福井・岐阜・富山・石川5支部スキー山行は、新型コロナウイルスの蔓延禍で中止となった。

《支部関連事業活動》

*京都「陀羅佛会」、長野県大町市で陀羅佛小屋という山小屋を管理運営。

*滋賀「藤尾の森づくりの会」、滋賀県大津市の県有林「結の森」で森林整備事業と里山復元活動を実施。

(伊原哲士)

関西支部

新型コロナウイルスが日本を襲い、異例の1年だった。3～5月と12～2月の山行や行事の多く、たとえば「山の日講演会」や新年会などを中止し、スケッチ展は次年度に延期した。その中にもあっても自然保護全国大会を関西支部主管で10月に吉野で開催し、「著者と語る会」を11月に開催することができた。

また、登山文化研究会は日本山岳会本部の特別事業補助金を得て、継続して活動。3月に研究会報告書を発行した。登山教室においては重廣恒夫会員に続く指導者を育てるための指導者養成講座を実施、継続している。

さらに会員の動向と考えの傾向と世代分布のアンケート調査を行ない、その結果を踏まえて、山行についてはベテランと新人の交流を図るために夏山合宿、岩場歩きトレーニングを新たに始め、沢登り例会を定例とすることができた。令和2年度の活動詳細は以下のとおり。

*通常総会 書面審査で実施、34名参加。

*評議員会 中止。

*役員会 7回開催、延べ81名参加。

《山行》

*ゆるやか山行 4回 延べ97名参加。

*しつかり歩こう 3回 延べ20名参加。

*月例会 5回 延べ57名参加。

*六甲山を歩く 1回 6名参加。

*沢登り 4回 延べ21名参加。

*岩トレ 1回 11名参加。

*夏山合宿 9名参加。

*登山教室（座学、初級、中級、上級）延べ82名参加。

《安全》登山医学講習会 7名（リモート2名含む）参加。

《自然保護》

*本山寺山の森林づくり活動 森林整備とやまみち保全活動20

回 延べ204名参加。会報「あかがし」4号発行（5月）。

*東お多福山スキ草原保全・再生活動で刈り払い作業など2回、延べ4名参加。

*自然保護全国集会10月24～25日奈良県吉野山・太鼓判花夢花夢にて「吉野に学ぶ持続可能な自然との共生」16名参加。

*その他 森林体験。

《山の日》

*山の日講演会 中止。

*山の日関連行事・著者と語る講演会 和田城志氏「剣沢大滝とナンガ・パルパット」36名参加。

《その他》

*スケッチ同好会 2回実施、延べ25名参加。

*登山文化研究会 3回実施、延べ17名参加。

3月に報告書発刊

《広報》

*支部報180～183号を発行。

*ホームページ適宜更新。

（茂木完治）

山陰支部

コロナ禍の影響下にあった支部活動を振り返る。年末の創立70周年記念事業のために取り組んでいる。会員の増減はなく、38名。一様に年を重ねた。若手会員の加入ははかばかしくない。例会出席も同じ顔ぶれとなつて久しい。例会場を大山に移して8月と10月に2回、1泊または日帰りの集会のもとに実行しているが活動は楽しいものとなつた。

記録の重要なことを思い知らされるが、これについては図書、資料も管理が今後の問題となつている。大切さは分かっているが場所の確保が困難である。だれかの奉仕がなければ厳しい。会員も高齢化し、貴重な書籍を一括管理できれば寄贈したい。人もいて、今後の管理を委ねたいとの意向も受けている。亡くなった方の資料を参考にした人が家族に問うたら、持ち主の家族も知らない人がトラックで運んでいったとの話も聞いた。今後早々に解決したいことである。貴重な資料の散逸を防ぎた

い。

コロナ禍の中で支部創立70周年は規模を縮小し、来賓の参加なしで行なった。関連記念事業は未決のものもあるが、漸次実行していく予定である（記念誌、『雲伯百山』発刊）。

大山概念図の充実への努力。1989年5月初版以来、小改訂を行ない、2020年12月第10版を発行することができた。新しい発見の追加など、正確さを追及できた。案内として利用者の信頼を得るとともに登山者はもとより警察や救助にも利用され、遭難防止や救助に役立っている。

【主な年間事業の報告】

《会議》

- ・運営委員会、支部活動一般について意見交換する 4月11日。
 - ・支部推薦山岳古道について、伊澤宅 役員5名 1月2日。
 - ・例会打合せ会、白根宅 3名 7月12日。
- 《例会》
- ・4月中止 会場使用禁止となった。書面賛否により新役員を決定する。

- ・5月 中止 支部事務引き継ぎ、5月4日、白根宅5名、5月11日ナムチエバザール 3名。
- ・6月 開催 6月26日。
- ・7月 開催 7月31日。
- ・8月 大山山小屋にて開催 宿泊者は遅くまで活発な話題に

興ずる。紅葉のように見えるナラ枯れも話題。

- ・9月 開催 9月25日。
- ・10月 開催 大山山小屋にて 10月23日～24日。
- ・11月 開催 11月27日。
- ・1月 中止 1月28日 コロナ拡散のため。
- ・2月 開催 2月26日 山岳古道 70周年記念誌報告。
- ・3月 開催 3月26日。

《交流、自然保護》

- ・大山山開き祭 6月6～7日 3名参加。
 - ・大山山岳環境保全協議会 7月31日、2月17日。
 - ・大山ナラ枯れについて 講演会 於大山ロイヤルホテル 4名参加 9月2日。
 - ・ブナを育てる会 ナラ枯れについて 9月26日 勉強会、10月3日 10月17日 現場。
 - ・鳥取県植樹祭 大山会場 1名参加 10月31日。
 - ・大山頂上避難小屋完成式典 大山頂上にて 1名参加 11月5日。
 - ・日本山岳会山陰支部晩餐会および70周年記念式典 12月12日。
- 《山行》
- ・大山冬山パトロール 1月13日～14日 1名。
 - ・仙の山 2月7日 銀山を訪ねた 2月14日 銀の積み出し

港を訪ねた。

- ・大山冬山パトロール 3月6―7日 2名。
- ・大山(三瓶山を雨天のため変更) 7月23―24日。
- ・甲川支流の滝の確認 10月21日 大山概念図部分修正用。

(白根二)

広島支部

令和2年度は、前年度3月のアルパインクラブユースの個人山行で大山北壁における滑落事故が発生し、最悪の事態は免れたものの、この原因究明および再発防止の対策に追われ、期初からクラブ例会山行にも制限を行なわざるを得なかった。これについては、ユースクラブへのサポートおよびメンバー育成態勢の再構築を行なって対応することで落ち着きを見ることができた。ただ、この間新型コロナウイルス感染禍によっても4月から支部活動は自粛をやむなくされた。例年実施していた四国支部、山陰支部との3支部交流会をはじめ、京都・滋賀支部および北九州支部との交流会も順延、中止を余儀なくされ、5月に予定していた支部総会も書面での審議および議決を行なわざるを得なかった。その後、緊急事態宣言解除を受けて7月に「withコロナ」のガイドラインを遵守することでクラブ例会山行を中心に活動を再開したが、12月から再度の自粛もあり、支

部活動は大きく制約を受けたものになったことは否めない。

《会議》

*支部総会・新型コロナウイルス感染禍で支部活動を自粛し、5月10日に予定していた支部総会を中止として、書面をもつての議決権行使とした。議決権付き議案書発送149件、回収102件(賛成100件、否決0件、保留2件)、総会議案はすべて承認。

*総務部会…12/3(5)、3/9(5)、4/27(10)
○内は参加者数

*執行部会…7/9(8)、12/3(8)、3/9(8)

*役員会…4/9(10)、6/25(27)、7/28(23)、10/15(18)、1/26(27)、3/18(23)

*大山北壁における滑落事故調査委員会(3/7事故発生・大山北壁)事故調査委員会設置準備会3/8(17) 事故調査委員会…3/14(15)、4/6(9)、5/10(10)、5/25事故報告書完成。

*山岳古道調査プロジェクト…11/25プロジェクト立ち上げ準備会 以降はZoomによる会議を含めて3月末までに支部推薦山岳古道を選定。

推薦古道 1・津和野街道 2・石見街道 3・中郡古道 そのほか個人推薦 萩往還(山口市―萩市) 石見銀山街道(3古道)。

*新入会員オリエンテーション・新入会員が少なく、各クラブのミーティングにおいて個別に実施。

《山行・野外活動》

*アルパイン（シニア）クラブ（登録11名）

4月..4 / 4自主練（ロープワーク講習） 5名、4 / 13例会（天応） 自粛中止。

5月..5 / 2 / 5 / 6例会（北アルプス・立山） 自粛中止。

6月..6 / 15自主練（天応・クライミング） 6名、6 / 20 / 21例会（犬屎峽・沢登り） 9名。

7月..7 / 11例会（三段峽・沢登り） 自粛中止、7 / 18自主練（天応・クライミング） 10名。

8月..8 / 1自主練（二ノ原谷・沢登り） 4名。

8 / 8 / 9自主練（三段峽・沢登り） 5名、8 / 8 / 9例会（北アルプス・金木戸川・沢登り） 自粛中止。

9月..9 / 14 / 16例会（岡山備中・クライミング） 6名。

10月..10 / 17 / 18例会（大山・槍ヶ峰、剣ヶ峰） 5名、10 / 24、31自主練（天応・クライミング） 各2名。

11月..11 / 21、22自主練（天応・クライミング） 計11名、11 / 23 / 24例会（雪彦山・クライミング） 6名。

12月..12 / 14 / 15例会（大万木山） 自粛中止、12 / 16自主練（天応・アイゼンワーク） 6名。

1月..1 / 30 / 31例会（大山・八号尾根） 自粛中止。

2月..2 / 20 / 21例会（大山・弥山尾根西陵） 自粛中止。

3月..3 / 20 / 21例会（山口県・陶ヶ岳） 中止。

*アルパイン（ユース）クラブ（登録26名）

6月..6 / 7自主練（三倉岳・ロープワーク） 6名。

7月..7 / 18自主練（犬屎峽・沢登り） 7名。

8月..8 / 2自主練（三段峽・徒渉訓練） 10名。

9月..9 / 12自主練（三倉岳・レスキュー訓練） 雨天中止。

10月..10 / 10自主練（県民の森・ツエルト設営、搬送訓練） 10名。

11月..11 / 7自主練（三倉岳・ロープワーク） 10名。

12月..12 / 12講習会（雪崩講習・座学） 15名。

1月..1 / 9講習会（蔵王・日山協伝達講習） 12名、1 / 30自主練（臥竜山・雪山読図訓練） 15名。

2月..2 / 6自主練（大山・雪上訓練） 積雪不足・コロナ禍により休止。

3月..3 / 27 / 28例会（備中帝釈峽） 6名。

*山楽山学クラブ（登録42名）

4月..4 / 4 / 6例会（萩往還） 8名。

6月..6 / 20有志山行（恐羅漢山） 8名、6 / 23例会（極楽寺山） 9名。

7月..7 / 18例会（恐羅漢山） 14名。

8月..8 / 8 / 9例会（カレイ谷） 15名、8 / 29 / 30例会（石

鉦山) 10名。

9月…9/11〜12例会(白石山) 7名、9/8例会(煤井谷) 11名、9/19〜21例会(剣山、三嶺) 9名。

10月…10/18例会交流(十方山) 17名、10/24〜25例会(氷ノ山) 14名。

11月…11/1例会(行者山、笠山) 18名、11/15有志山行(比婆山縦走) 7名、11/20〜23例会(ダイヤモンドトレイル) 9名。

12月…12/5〜6有志山行(石田ヶ岳、助ヶ岳) 17名、12/12例会(岩淵山) 10名。

2月…2/13有志山行(十方山) 6名、2/20〜21有志山行(中野冠山、天狗石山) 19名。

3月…3/13例会(十種ヶ峰) 11名。

有志山行は個人山行であるがクラブ員全員に募集したものの。

クライミング、岩稜歩きの自主練は、三倉岳17日、福山市蔵王1日の合計18回を実施、参加延べ156名。

*ゆうゆうクラブ(登録39名)

4〜6月新型コロナウイルス感染禍対応のため、支部活動自粛につき例会休止。

7月…7/17例会(寂地山) 16名、7/25例会(大神ヶ岳) 雨天中止。

8月…8/2例会(釜峰山) 10名、8/19例会(久地冠山)

13名。

9月…9/24〜26例会・支部交流(高野山町石道) 12名。

10月…10/4例会(秋吉台) 14名、10/24例会(西中国山地)

12名、10/28例会(鷹ノ巣山) 18名。

11月…11/3例会(比婆山山系) 16名、11/7例会・支部交流(宮島三ツ丸子山) 23名。

11/23例会(大師山・白滝山) 18名。

12月…12/14例会(大黒山、竜ヶ岳) 14名。

3月…3/17例会(東郷山) 16名、3/24例会(小田山) 18名。

クラブ内写真クラブが(12/1〜当面展示継続) ルーム内で写真展を実施。ゆうゆうクラブとして「高齢者いきいき活動ポイント事業」活動団体申請(10/20) 10/24恐羅漢周辺よりポイント付与開始(広島市・府中町在住の65歳以上対象)。

*スキークラブ(登録38名 他クラブとの重複可)

今シーズンには昨年12月中旬から県内のスキー場が滑走可能となり、ゲレンデスキーを楽しんだ。一方、西中国山地は思ったより降雪量が少なく、バックカントリースキーは楽しめなかった。また、コロナ禍のため、当初の例会などはことごとく中止となった。唯一、会員向けに雪崩対策講習会を実施した。

12/8 雪崩対策講習会(支部ゲストルーム) 参加15名。

1/20～1/24 信州スキー合宿 5名。

《プロジェクト・地域振興》

*支部事業

・ 娑婆山国際スカイランへのサポート…新型コロナウイルス感染症禍により中止。

・ ひろしま山の日…ジュニアツリークライミング、登山教室
新型コロナウイルス感染症禍により中止。

・ 西中国山地国定公園指定50周年記念フォーラム参加…新型コロナウイルス感染症禍により活動休止。

・ 忘年登山…参加者6名 11/29 天狗石山（北広島町）。

・ 新年互礼登山…1/10コロナ禍により極楽寺山に変更して実施を計画したが、活動自粛延長で順延後、中止。

*山行指導部

月次のミーティングを行ない、提出されたすべての登山計画書やリスク評価のチェックおよび山行指導を実施するとともに、安全登山への意識向上に取り組んだ。

・ 登山計画書審査275件（支部計画17件、クラブ例会34件、個人山行224件）。

・ 会員講習会実施…延べ161名が参加。

山岳ロープワーク研修会を6月から月次2回開催 参加者延べ88名、スタッフ延べ73名。

*公益事業部

1・自然環境委員会

・ 霧ヶ谷湿原の保全&環境整備 4/19 新型コロナウイルス感染症禍により中止。

・ ひろしま山の日県民の集い 6/7 霧ヶ谷湿原の保全&整備とツリークライミング 新型コロナウイルス感染症禍により中止。

・ 高岳聖別れ〜奥匹見中央分水嶺登山道整備 9/5～6台風のため順延したが参加者が少なく中止。

・ JAC自然保護全国集会 10/24～25 奈良県吉野郡吉野町「太鼓判・花夢花夢」にて開催。支部長以下3名出席。講演と支部活動報告・意見交換を行ない、フィールドスタデイが吉野山であった。

・ 登山道整備活動（兼忘年会・忘年登山）11/28～29 霧ヶ谷湿原入口から猿木峠までと峠から臥龍山、掛頭山への稜線の整備を36名の参加者で実施した。

・ 西中国山地国定公園制定50周年記念事業検討会参画 新型コロナウイルス感染症禍を支部で検討し自粛とした。 新型コ

2・登山振興委員会

・ 親子登山教室…季節に合わせたテーマで親子ハイキングを募集して、子どもたちの屋外活動をサポート計画。

・ 「ひろしま山の日」参加…初心者登山教室・ジュニアツリークライミング計画。

・県民ハイキング（広島県山岳・スポーツクライミング連盟主催）のサポート実施計画。

・新規活動として7月、10月自然（植物）観察会および全国「山の日」8／11清掃登山を計画。

いずれも新型コロナウイルス感染禍を支部で検討し自粛とした。

《広報・文化活動》

1・広報委員会

・支部報（「JAC H I R O S H I M A」、メール配信）発行。

5月号、8月号、11月号、2月号を発刊。

2・図書委員会

・会員・他支部からの寄贈図書&本部からの寄託図書 約1600冊収蔵、整理。委託図書以外を貸出し。

3・交流委員会

・中国・四国3支部交流会（ブロック会議）、京都・滋賀支部との交流会、北九州支部との交流会のいずれも新型コロナウイルス感染禍により中止（山楽サロン部会）。

・自然観察（内藤先生）新型コロナウイルス感染禍により中止。

4・IT委員会

・ホームページへの支部活動アップ。Zoomによる会議アウント取得の検討。

5・保健委員会

・withコロナ対策支部ガイドライン制定に伴う監修を実施。

《監事会》

外部1名を含めて3名の監事を置き、各部の運営や安全登山への会員意識向上に向けて会計はもとより業務の監査と提言を行なった。監事会…1月、4月、支部ルームで実施。

《その他の行事ほか》

・本部総会…6／20 委任状提出。

・全国支部懇談会…中止。

・支部合同会議…9／26 副支部長ほか1名が参加。

・年次晩餐会…中止。

・支部連絡会議…1／30 支部長ほか3名が参加。

《会員動向》3月31日現在

・会員 126名（前年149名） 準会員14名（前年17名） 会友1名（前年1名）。

（近藤道明）

四 国 支 部

桜吹雪の中、執り行なわれる小島烏水祭とともに四国支部の1年は始まる、これまではそうであった。しかし、2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大を受け、烏水祭の春の開催

は延期された。活動の出鼻をくじかれた感がある。

その後、全国的に緊急事態宣言が出されることとなり、ステイホームが推奨され、不要不急の外出や県境をまたぐ移動の自粛が求められた。通常なら山野を駆け巡っている支部会員の士気は、なかなか上がらない。

そのような状況下ではあるが、活動に際しては、マスク着用や手指消毒、三密を避けることなど、基本的な感染症対策を徹底し、少しずつ活動を開始した。

《会議》

*通常総会 当初4月18日開催予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け開催できなかった。代替策として5月22日総会資料を会員に送付し、理解を得た。内容は元年度事業報告および会計報告、2年度事業計画および支部予算案、支部役員改選である。

*サロン会 会員有志による情報交換会として、月1回開催。コロナ禍の中、参加者は例年より少なかった。

《山行・野外活動》

*10月31日(土) 三嶺 参加者4名。

*11月8日(日) 烏帽子山 参加者6名。

*11月28日(土)～29日(日) 砥石権現(読図講習)、ファガスの森(ロープワーク講習) 参加者10名。

*12月20日(日) 丸笹山(雪山) 参加者3名。

*1月17日(日) 天狗峠(雪山) 参加者3名。

*フラワートレッキング講座 愛媛県内を中心に49回開催、参加者延べ319名。

《広報・出版活動》

*支部報「四国山岳」第7号 4月発行。

《プロジェクト・地域振興活動》

*10月26日(日) 登山道整備事業(落合峠～前烏帽子山) NPO法人との合同実施、参加支部会員6名。

*11月14日(土) 第8回小島烏水祭 参加者四国支部会員21名。

当初4月開催予定、コロナ禍の中、規模縮小し実施したものである。
*山の日イベント事業(徳島県主催事業)はコロナ禍のため中止。

2020年度は新型コロナウイルスが猛威を振るった1年であった。そして2021年度は、そのウイルスの変異株が猛威を振るいそうな気配である。1日も早い終息を願うばかりである。

(森山宏昭)

福岡支部

《会議》

1・令和2年度通常総会

◇日時…令和2年5月30日(土) 14時

開催予定であったが新型コロナウイルス禍にあり中止とし書面決議とした。

会員数…61名、準会員数2名、委任状による議案承認者…43名、であり各議案は承認された。

2・役員会…原則各月第2木曜日に開催することとした。

《プロジェクト・地域振興活動》

1・第5回夏山フェスタin福岡2020(中止)

◇日時…令和2(2020)年6月20日(土)、21日(日)。

◇場所…電気ビル共創館(4階/みらいホール)福岡市中央区渡辺通2-1-82 開催として準備したが、新型コロナウイルス禍にあり中止とした。

2・「岳人のつどい」山の講演会(中止)。

例年2月に開催していたが、新型コロナウイルス禍にあり中止とした。

3・当初計画していた支部山行、自然観察会、清掃登山など行事は全て中止とした。

《広報・出版活動》

「支部報」№34を令和3(2021)年3月19日に発行した。

主な内容…1・永年会員に列するを祝す(倉智清司) 2・特別講演「ヒマラヤの成り立ち」酒井治孝(京都大学名誉教授) 3・会員の上梓を祝す「屋久島の神と仏」(太田五雄)特別寄稿 4・海外の旅…◎「ミャンマー・ピクトリア山登頂とバガン遺跡の

旅(渡部秀樹) ◎憧れのネパール・ムスタン王都ローマントンの旅(渡部秀樹) 5・私の山登り事始めなど(中馬董人) 6・令和2年度支部活動報告など

《令和3年度の主な新規事業計画(案)》

1・ロングトレイル・古道をテーマとした登山教室

地域の大縦走路をテーマとし会員、一般の方々双方を対象に「登山教室」を開講予定。

・脊振山系全山縦走(基山から十坊山まで約75km)

・宝満山から英彦山修験道トレイル(約75km)

それぞれを何回かに分けて全山縦走と古道調査を行なう予定。

2・自然観察会「地質・ジオパークをテーマとする」

福岡支部の地質の専門家を講師に「阿蘇ユネスコジオパークと周辺観察会」など地元九州の山歩きを味わいながら、山の地形や地質など自然環境を間近かに観察し、さらに最近頻発する自然災害や復興など人間社会との関わりを考えるための、野外活動を立案する。

(渡部秀樹)

北九州支部

支部役員も任期2年目でやっと慣れてきたと思ったが、コロ

ナウイルス関係で難しい舵取りを行なうこととなった。年4回実施している山岳専科や岩登り教室、家庭裁判所の補導委託登山、小学生登山、幼稚園の遠足登山の支援活動もほとんどがコロナウイルス関係で中止や延期せざるを得ない状況となった。

《会議等》

・総会 4月18日(土)午後3時より第21回通常総会を北九州市小倉北区紺屋町の毎日西部会館5階会議室での開催予定がコロナウイルスによる緊急事態宣言の発令に伴う感染拡大防止のため、各種会合やイベント、登山、総会などが中止となり、大変な状況となった。

北九州支部の総会も開催中止となり、4月18日、支部長、両副支部長、事務局がルームで以下を確認した。委任状21人、インターネットメールおよび電話などで賛否確認、賛成24人、計45名で会員65人に対し過半数に達し、総会議案は成立すると認定し承認した。本来ならば総会開催で承認を得るところだが、やむを得ない状況でこの様な承認となった。

《役員会》

定例役員会…5月11日(月)、7月1日(水)、9月2日(水)、11月4日

(水)、1月13日(水)、3月3日(水)

臨時役員会…10月29日(木)、2月24日(水)、3月29日(月)

《講習会等》

1・支部山岳指導員研修 2回(2回中止) 延べ人数17人。

2・山岳専科 1回(3回中止)…延べ人数6人。
3・岩登り教室 2回…延べ人数18人。

《自然環境保全活動》

・九州森林管理局より委嘱を受けた森林保全巡視員12人が森林保全巡視活動を行なうとともに、登山道の清掃など自然環境保全活動を行なった。

・英彦山頂上に設置されたバイオトイレの清掃作業を地元山岳会と交代で9回行なった。

・5月24日(日) 英彦山清掃登山はコロナウイルス関係で中止とし、当支部会員のみ8人の個人山行としてゴミ収集を実施した。

・平尾台(小倉南区)にある広谷湿原のラムサール条約登録を
目指す支援活動を行なった。

《行事・野外活動》

・5月31日(日) 英彦山山開き コロナウイルス関係で中止。

・8月11日(日) 山の日制定家族登山(風師山) コロナウイルス

関係で中止。

・10月18日(日) 榎有恒碑前祭(風師山) 少人数の総勢21人で実施。森武昭元会長、高木莊輔福岡支部長ほか参加。

・12月12日(土) 「忘年の集い」コロナウイルス感染拡大防止で中止。

《支援活動》

・さいわい幼稚園児の遠足登山・風師山（年2回）コロナウイルス感染拡大防止で中止。

・10月23日（金）福岡家裁小倉支部の補導委託登山サポーターの実施予定が1回となり、5月はコロナウイルス感染拡大防止で中止。少年1人、保護者1人、裁判所2人、当支部6人 総勢10人。

・11月 行橋市立延永小学校5年生「英彦山研修登山」コロナウイルス感染拡大防止で中止。

・3月 さいわい幼稚園卒園児の矢筈山お別れ登山サポーター コロナウイルス感染拡大防止により中止。

《他支部との交流会》

・11月3日（火）～4日（水）宮崎ウエストン祭はコロナウイルス感染拡大防止により中止。

・10月10日（土）～11日（日）広島支部との交流会（国東ロングトレイル）コロナウイルス感染拡大防止により来年度に延期。

《支部山行》月例山行13回実施（中止11回）、延べ23人参加。

・4月12日 由布岳中止、4月29日 十種ヶ峰中止、6月14日 三股山中止、7月23～25日 屋久島中止、8月20～27日 檜ヶ

岳等中止、9月19～21日 傾山～祖母山中止、11月14～17日 台湾玉山中止、12月12日 在自山 14人、1月9～10日 坊

がつる中止、2月7日 久住中岳 中止、2月27日 観梅会中止、3月7日 英彦山護摩焚き 中止、3月14日 足立山

～戸ノ上山縦走 9人。

《広報出版活動》

会報誌「北九だより」の発行3回（4月、10月、1月）。7月号はコロナウイルスのため原稿が少なく発行停止。

《同好会活動》

①版画教室 18回開催（ルーム）伊藤旧支部長の指導（7人）。

②ポレポレの会（軽登山・花鑑賞探索）12回、延べ32人参加。

（榊俊一）

熊 本 支 部

令和2年度は年当初からの新型コロナウイルス感染症問題で支部活動は大部分が中止という稀有の年度となった。4月当初予定した支部事業のうち予定通り実施できたのはわずか4事業だけである。三密を避けて原則、現地集合解散としたため、近隣の山に限られ、屋内での行事も会場を確保できずに中止した。近年支部行事の充実に努めていただけに、残念な結果となった。

《会議》

*支部総会 4月19日（日）9時30分より、熊本県婦人会館において実施予定であったが、会場閉鎖のため文書による総会に変更。会員32名中25名の議決書により成立決議された。なお、準会員・会友35名中24名の意向も集約された。

*役員会 毎月1回の定例役員会であるが、会場閉鎖で4月は中止。5、6月は屋外の東屋で、1、2月は中止するなど、会場を変更したり、メールでの連絡など簡略化した。

《行事・事業》

- * 5月2日(土) 6日(木) 残雪期・涸沢・穂高岳 中止。
- * 5月10日(日) 春の登山教室・山野草アケボノツツジ観賞(宇土内谷から大崩山) 中止。
- * 5月31日(日) 登山技術講習会(岩登り)(岩野山) 中止。
- * 6月7日(日) 春の森林保全巡視登山・久住山 赤川登山口集合解散で実施、18名参加。
- * 6月21日(日) 登山技術講習会Ⅱ(岩登り)(岩野山) 中止。
- * 7月8日(水) 20日(月) ヨーロッパアルプス遠征 中止。
- * 8月1日(土) 2日(日) 登山研修会(沢登り) 中止。
- * 8月10日(月) 「山の日」登山祭 中止。
- * 8月22日(土) 夏季例会(ビールパーティ) 中止。
- * 9月18日(金) 22日(火) 北アルプス遠征 中止。
- * 9月26日(土) 27日(日) 九州脊振山脈トレイルラン支援 中止。
- * 10月11日(日) 秋の森林保全巡視登山(三ノ岳) 吉次峠登山口集合解散で実施 18名参加 登山道の巡視、整備。
- * 10月17日(土) 18日(日) ファストエイト講習会 中止。
- * 10月25日(日) 秋の登山教室(雲仙・普賢岳) 例年の一般参加

者募集をせず、会員・会友のみで実施、20名参加。

* 11月3日(日) 4日(月) 宮崎ウエストン祭・高千穂町五ヶ所三秀台、中止。

* 12月5日(土) 20日(日) 第13回山の写真展・会員撮影の登山記録写真、出展者13名、出展数45点、観覧記者106名。

* 12月13日(日) 登山報告会 中止。

* 1月19日(土) 支部新春晩餐会 中止。

* 1月23日(土) 24日(日) 冬山登山講習会・くじゅう 中止。

* 2月21日(日) 22日(月) 雪山実技研修会(大山) 中止。

* 3月7日(日) 干支の山(丑年・牛斬山) 中止。

* 3月 宮崎支部との交流会 中止

《同好会活動》(実施した行事と参加者)

* 花を愛でる会 7月20日(月) 白岩山(9名)、9月20日蓼原湿原(13名)。

* 写真同好会 12月22日 令和3年1月24日 わいふ一番館写真展(出展14名)。

* 里山低山クラブ 6月12日 立神峠・オオトング(4名)、7月14日 菊池川源流(8名)、8月25日 菊池観音岳(7名)、

9月8日 吉無田官山(4名)、10月13日 宇土大岳(6名)、11月10日 芦北鶴掛山(6名) 12月8日 砥用鎌倉山・手蝶山(7名)、1月11日 木葉山縦走(11名)。

* トレーニング同好会 11月22日 俵山(8名)、12月5日 釈

迦院（4名）、3月13日 鞍岳（6名）。

《広報出版活動》

「熊本支部報」第47号（4月）、第48号（8月）、第49号（1月）
「支部通信」毎月末（12回）発行。

（中林暉幸）

東九州支部

令和2年度は新型コロナウイルスとの対応に終始した年であったといえる。支部規約により4月に開催しなければならぬ定期総会も、開催時期を延期しつつ事態の推移を見守ったが、会員の書面議決による総会開催に踏み切ることになった。こうして決まった事業計画であるが、なんとか動き出したのは6月の月例山行からで、三密を避けての支部行事が進められたが、この年度の最大の課題は、前年度から準備してきた支部創立60周年記念事業の実施であった。

1960年に支部創立以来60周年を迎えるに当たったの記念事業として、I・10月に中心行事の記念集会の実施（①記念式典、②記念講演会・③記念祝賀会）。これに合わせて、II・記念山行（①集会記念山行（由布岳）、②記念国内山行（富士山）、③記念海外山行（ピサンピーク）Ⅲ・『大分百山』3訂版の発行、IV・60周年記念誌の発行などを一連の事業として計画して準備

してきたのである。

しかし、実施予定の10月が迫るにつれ、新型コロナウイルスの感染状況が一向に好転しないため、実施時期を11月に下げて事態の推移を見守ることになった。そして実施時期が迫る中で決断したのは、記念の集会の会場を予約していたホテルを解約して、三密を避けるため、定数200席余のホールに変更して、記念式典と記念講演会のみ実施し、記念の祝賀会・懇親会は中止。全国各支部への招待はせず、支部会員のみの内輪だけの行事とすることとした。また、記念国内山行、記念海外山行は中止することとなった。

しかし、参加費を主財源に計画してきた行事であるため、それに代わるものとして急遽、支部会員などからの募金を募ることとした。わずか2ヶ月の期間に90名の会員・準会員・会友有志の募金や部外者からの寄付金などで、当初目標の50万円を大きく上回る100万円余の浄財を集めることができた。

こうして、11月21日(土)に大分市ホルトホールで、古野会長をお迎えして記念式典並びに古野会長の記念講演などを実施したのである。また、翌日の記念山行は、当初の全国支部からの参加者を迎えて由布岳で実施予定を、登山者の希な鎧ヶ岳（840m）に変更して支部会員のみで実施した。さらに『大分百山』3訂版発行と60周年記念誌の発行も記念行事に間に合わせるこ

支部の公益的事業としては、8期目を迎える登山入門教室、19回目の実施を迎える青少年体験登山大会はいずれも中止することとした。「山の日登山」は、大分県で開催される予定の全国山の日大会に合わせて、九重山で実施の構想があったが、全国大会が1年延期となったため、この計画も見合わせる事となった、

法華院温泉山荘と共催で実施する11回目を迎える「山の安全を祈る集い」は8月に実施した。また、毎年2回実施している、祖母・傾山系でのスズタケの枯死とシカの食害状況調査活動は、6月は見合わせたが10月は実施した。

共益事業では支部の登山活動の基点として位置づけている毎月1回の月例山行を、昨年に引き続いて「県境の山を登ろう」をテーマに今年も熊本県との県境稜線歩きであったが、再開したのは6月からであった。さらに会員の研修山行とし通算6回実施した。喜寿を迎える会員の慶祝登山会は10月に実施した。このほか、毎年恒例の忘年登山会は忘年会抜きで山行のみ実施した。韓国山岳会蔚山支部との交流は、政治情勢やコロナウイルスのため2年続けて実施を見合わせる事となった。

《会議》

・定期総会

6月に延期の末、会員の書面議決で令和元年度事業報告・決算報告・監査報告、令和2年度事業計画・予算などを決

定。

・役員会

第1回役員会 5月29日(金)ソレイユ 定期総会書面議決方式
決定ほか。

第2回役員会 6月26日(金)コンパルホール 定期総会書面議決開票ほか。

第3回役員会 7月30日(木)コンパルホール 60周年記念事業実施ほか。

第4回役員会 8月26日(木)コンパルホール 大分百山編集・60周年記念誌編集ほか。

第5回役員会 9月24日(木)コンパルホール 60周年記念事業ほか。

第6回役員会 10月21日(木)コンパルホール 60周年記念事業ほか。

臨時役員会 11月13日(水)大分西部公民館 60周年記念準備。
臨時役員会 11月26日(金)大分西部公民館 60周年記念準備整理。

第7回役員会 12月25日(木)コンパルホール 令和3年度事業計画(本部提出)ほか。

第8回役員会 1月28日(木)コンパルホール 令和2年度事業計報告(本部提出)ほか。

第9回役員会 2月25日(木)コンパルホール 古道調査ほか。

第10回役員会 3月24日(木)コンパルホール 定期総会各種議案審議ほか。

・会計監査 日時 4月6日(火)(コンパルホール)。

《公益的事業の実施》

・第8期登山入門教室 中止。

・第19回青少年体験登山大会(青少年登山教室) 中止。

・『山の日登山』ふるさとの山を登ろう 中止。

・山の安全を祈る集い

日時 8月2日(日) 場所 池の小屋の上の遭難慰霊碑前

参加支部会員42名(ほかに一般参加者13名)。

・スズタケ枯死とシカの食害調査

第13回 6月 中止。

第14回 10月3日(土)参加支部会員10名 場所 本谷山西の稜

線調査記録。

・清掃登山 中止。

《公益事業の実施》

・月例山行 2020年度のテーマ「県境の山を登る」(「研修山行」)

6月21日(日) ハナグロ山(1086m) 参加者15名。

7月17日(土) 九六位山(452m) 参加者18名。

8月22日(土) へべ山(950m) 参加者20名。

9月13日(日) シシガ城(808m) 参加者9名。

10月16日(土) 保慶山(1015m) 参加者14名。

11月8日(日) 尾ノ岳(1041m) 参加者11名。

12月13日(日) 元越山(582m) 忘年登山。

1月17日(日) 十文字(901m)・松ヶ鼻(875m) 参加者17名。

2月14日(日) 中ノ原(721m) 参加者16名。

3月14日(日) 亀石山(943m)・吉武山(926m) 参加者23名。

4月25日(日) 麻生釣ヶ浦蓋山麓 中止。

23名。

・リーダー育成研修

第1回 7月18日(土) 九六位山南尾根。

第2回 8月22日(土) へべ山(由布岳)。

第3回 9月19日(土) センゲン谷(傾山)。

第4回 11月14日(土) 大谷岩場(高崎山)。

第5回 1月24日(日) 霊山・飛来山。

第6回 2月19日(金)〜21日(日) 伯耆大山。

・忘年登山および忘年会

12月13日(日)元越山(582m) 参加者37名(恒例の忘年会は中止)。

・喜寿お祝い登山

10月21日(日) 獵師山(1423m) 慶祝該当者7名(うち4

名出席) 参加者45名。

・合宿登山 中止。
・支部ルーム開設。
毎月第1金曜日午後6～9時 大分市西部公民館研修室を借り上げて、支部会員のミーティングや研修、諸会議等の場として定期開設。

《支部創立60周年記念行事》

・記念集会 11月21日(土) 記念式典 13時30分～14時00分、記念講演会 14時00分～16時00分 講師Ⅱ古野淳(日本山岳会会長) 演題Ⅱ「エベレスト50」ビデオ放映「コー・イ・モン デイ峰登山報告」(1965年)参加者101名(支部会員のみ)。

・記念山行 11月22日(日) 鎧ヶ岳(840m) 参加者69名。

《出版活動》

・『新・大分百山』(『大分百山』3訂版) 11月20日 3000部発行。
・支部創立60周年記念誌 11月20日 250部発行。

・「支部報」89号(春季号・4月25日)、90号(夏季号・7月25日)、91号(秋季号・10月25日)、92号(冬季号・1月25日)。
次年度の目標など

コロナ禍がいつまで続くかまだ展望が見えない中、当分の間はいかにしてコロナと上手な付き合いをしながら登山活動を進めるかということだ。前年度は中止した事業も含めて、総会で

決めた各種の事業を、三密回避などに留意しながら実践していくなかで、支部の活性化と会員の拡充などを目指すことにしている。

(飯田勝之)

宮崎支部

令和2年度は、新型コロナウイルスに翻弄された1年であった。支部活動も大幅な変更を余儀なくされた。特に宮崎支部担当で2020年5月開催を目指して準備を進めてきた第36回全国支部懇談会は、次第に拡大しつつある新型コロナウイルス感染のため10月開催に延期したが、夏を過ぎても終息の兆が見えないことから中止を決定した。全国から170名を超える会員が参加を希望されていたが、まことに申し訳ない結果となった。

例年開催している公益事業の中で、7月に予定した一般公募型の「ときめき家族登山」および11月、高千穂町との共催で開催を予定した「第36回宮崎ウエスタン祭」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のために中止した。3月開催予定であった諸塚村主催の「第36回日本一早い山開き」は、1日のイベント型からオンラインで23日間のキャンペーン方式として行われた。例年どおり実施できたのは、今回で27回目となる宮崎家庭

裁判所委託補導登山、宮崎市近郊にあり市民の憩いの山でもある双石山清掃登山や登山道整備などであった。共益事業としての定例山行、月例山岳研究会などの支部行事も新型コロナウイルス感染症拡大防止により変更あるいは中止せざるを得なかった。以下に概要を記す。新年度に入りコロナ禍は落ち着くかと思われたが、変異株が勢いを増し依然として安心できない状況が続いている。引き続き感染対策を万全にした上で可能な範囲で支部活動を進めていきたい。

《会議》

*令和2年度宮崎支部通常総会…4月18日(土) 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため書面表決とした。提出した議案に対し、46名中45名から承認を受けた。

*支部役員・委員長会議…毎月第1木曜日に計画した。うち3回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、臨時役員会に変更して行なった(延べ100名参加)。

*定例登山研究会…毎月第1木曜日に計画した。うち5回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止した(延べ112名参加)。

《公益事業》

*7月11日 小谷登山道植樹後の下草刈り作業「予定通り実施」30名。

*7月26日 ときめき家族登山「中止」。

*8月11日 山の日関連事業「中止」。

*10月31日 小谷登山道補植作業「予定通り実施」52名。

*11月3日 第36回宮崎ウェストン祭「中止」。

*11月18日 第27回宮崎家庭裁判所委託補導登山「予定通り実施」8名。

*12月12日 小谷登山口周辺県道脇清掃「予定通り実施」40名。

*3月6～28日 第36回諸塚山山開きキャンペーン「変更して実施」。

*3月28日 双石山山開き「予定通り実施」30名。

《定例山行・野外活動》

*4月25日 4月定例山行 遠見場山「中止」。

*5月1日 5月定例山行1 白鳥山・時雨岳「中止」。

*5月23日 5月定例山行2 大幡山「中止」。

*6月7日 6月定例山行 韓国岳「予定通り実施」23名。

*7月12日 7月定例山行 えびの岳「中止」。

*8月15日 8月定例山行 くるそん峡「中止」。

*9月6日 9月定例山行1 尾鈴山「中止」。

*9月19日 9月定例山行2 えびの岳「予定通り実施」14名。

*10月4日 10月定例山行1 日向岬めぐり「予定通り実施」20名。

*10月24日 10月定例山行2 くんばち山「予定通り実施」5名。

* 11月21日 11月定例山行 尾鈴山「予定通り実施」10名。

* 12月12日 清掃登山・双石山「予定通り実施」11名。

* 1月10日 1月定例山行1 小松山「中止」。

* 1月16日 1月定例山行2 薩摩街道「中止」。

* 2月7日 2月定例山行1 釈迦ヶ岳「中止」。

* 2月20日 2月定例山行2 薩摩街道「予定通り実施」13名。

(注:「中止」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため)

《出版事業》

「宮崎支部報」発行 7月15日(72号)、10月15日(73号)、1月15日(74号)。

(荒武八起)

委員会の活動報告

総務委員会

本会の運営をサポートする部門として、各種会議や各種行事の運営・サポート、パンフレットや各種資料の作成、販売品の企画・販売などを行なっている。毎月第1・3月曜日に定例の委員会を開催し、そのほかに各行事の打合せや事前準備のために年十数回、臨時の委員会や作業日を設けている。

しかし、令和2年度は新型コロナウイルス感染防止対応のため、委員会はオンライン（Zoom）で開催し、行事も減ったことから月1回の開催となった。

1・新入会員オリエンテーション

9月5日(土) 会員番号16531～16666、A0255～A0315の合計226名対象。会場は本部ルーム。

新入会員が早期に当会への理解を深め、また充実したクラブライフを過ごせるよう、その年に入会した会員を対象に年1回開催している。今回はコロナ禍の下での感染予防のため、オンラインで開催した。役員の挨拶の後、会の歴史・組織・活動、山岳保険、ルーム・図書室・山岳研究所などの施設や、Webサイトの利用

方法などを動画も交えて説明した。また委員会や同好会から、オンラインあるいはリアルで参加してもらい、それぞれの紹介をした。従来は集客室で役員、委員会、同好会関係者を交えた懇親会を開催していたが、今回は見送った。

2・同好会連絡会議

10月19日(月) 15同好会が出席（28同好会中）

同好会活動の活性化を図り、業務上必要な事項を連絡するため年1回開催している。令和2年度は、コロナ禍の下での密を避けるために代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催した。

高齢化による構成員の減少、活動の減少が問題となった。休眠中の同好会もあった。活性化のためアイデアなどが提案された。

3・JACオリジナルグッズの製作と販売

会員サービスの一環として（一般も購入可能）、オリジナルグッズを企画・製作している。年次晚餐会を中心にルームでの直販やWebサイトで販売しているが、令和2年度はコロナの影響で晚餐会が中止になったため、チラシを作成して会報「山」に同封した。また、グッズのサイトをスマホ用のデザインに刷新した。

グッズは、「H/A/R/V/E/S/T」デザインによるネットゲイターとシューズバッグを新たに作成。多くが売り切れになるなど好評を博した。

4・支部合同会議

9月26日(土) プラザエフ(東京・四谷) 14:00～18:00

各支部の支部長・事務局長が出席し、事務局の主管で年1回開催している。前年までは1泊2日をかけて開催していたが、令和2年度はコロナ禍のためにオンラインで1日に短縮した。会場には、支部長および事務局長が14名、本部役員など16名、計30名が出席した。オンライン会議はZoomを利用しYouTubeでも中継した。Zoomには支部・本部役員合わせて41名が出席、YouTubeでのオンタイムでの閲覧は約40名(後日の閲覧者は100名以上)。

5・年次晩餐会

12月5日(土) 京王プラザホテル(東京・新宿)

新型コロナウイルス感染予防のため中止。

6・入会希望者への説明会

会員増加のための取り組みとして、入会を検討している方に対する説明会を定期的に開催している。これまで偶数月の第4金曜日に本部ルームで行なっていたが、令和2年度はオンライン(Zoom)による個別の説明会を行なった。令和2年度は40名に説明を行ない、30名が入会した。

(今田明子)

デジタルメディア(DM)委員会

DM委員会はインターネット利用による本会の広報、事務連絡の支援を目的として活動している。公益社団法人としての公開情報および当会主催のイベントの案内を行なうWebサイト(ホームページ)の運用、会員向けメールマガジンの発行、および会務に関わるメールの運用管理を1997年以降行ってきた。毎月定例会議を開催するのに加えて、必要に応じて記事の掲載、編集検討を行なうなど、通信事業者のサーバーを利用したインターネット・メールに関わる運用を行なっている。2020年度の活動は以下のとおり。

1・Webサイト運営

広報的内容に重点を置いたHOME、会員を対象としたROOMと2つに分けていた構造を1つにまとめる作業は細部の構築まで概ね完了し、各支部の個性を生かしたHPの制作公開を進めるとともに、委員会、支部など主催の各種行事、会員募集に関わる記事をWebサイトに掲載している。

また、パソコンだけでなく、スマートフォンやタブレットからも手軽に利用できるように内容の見直しを図ったことで、管理の利便性が向上した。

2・メールの運用

日本山岳会の会務、委員会、支部、同好会の活動を支援するため、本会独自のメールアドレス（ドメイン）のメールシステムを運用している。種類は(1)通常のメールを送受信するメール (2)特定のグループを対象としたメーリングリストなどが準備されている。

3・メールマガジンの発行

メールマガジンはサイトの会員専用ページを閲覧するためのパスワードを申請した会員、およびメールマガジン配信を希望申請した会員を対象としている。右記Webサイトに掲載された委員会、支部などのイベント紹介にリンクして、最新情報とともに当会が協賛するイベントや、登山関連の有用なニュース・情報提供を目的に概ね隔週に発行している。バックナンバーもHPで公開している。

4・SNSの活用

ウェブサイトに掲載された記事へのアクセス数向上、および外部への活動紹介を展開させるために、Facebook、Twitter、Instagramを活用し、イベントなどの紹介をしている。一般登山者がSNSで紹介されたイベントに参加し、本会へ入会する事例も増え、本会の広報に有効に機能している。

5・雪山天気予報の配信

気象遭難防止を目的に、北アルプスエリアおよび八ヶ岳エリアを対象に、冬期は年末年始を中心に、春期はゴールデン・ウィーク

期間を中心に配信している。

6・日本山岳会が所有する図書および資料のデジタル化と公開

本会は、山に関連した貴重な図書や資料を所有する。過去の貴重な図書や資料を会内外に公表し、共有の財産とすることが望まれる。また、災害や経年劣化などに対応したコンテンツの恒久的保存を目的とし、順次デジタル化することが必要である。デジタル化したものはホームページで公開をしている。

・会報「山」および機関誌「山岳」のデジタル化を、創刊号から現在まで実施し、公開した。

・『エベレスト登頂』と『マナスル初登』の遠征隊記録をスキャンし、3月末まで全ての作業が完了した。

・『写真で見る日本山岳会の100年』をデジタル化して、HPで公開した。

・『シュラーギントワイト・アトラス』をデジタル化して、HPで公開した。

・97枚の『蘭花譜』木版画の画像をデジタル化する作業が全て完了した。

・「日本山岳会所蔵のヒマラヤ登山映像」400余りのVHSおよびDVDのうち、JACに著作権がある3本のデジタル化の準備を進めている。

7・JACサーバー全体のバックアップ

日本山岳会はZenclogi、KDDI双方のサーバーをレ

ンタルしているが、データを紛失事故から守るため、サーバー全体のローカルバックアップを定期的に行なっている。

DM委員会は、Webサイトの編集にさらに改善を加えるべく検討を進めているが、各委員会、支部などには記事の充実のために会報への紹介と併せてWebサイトへのイベント案内、活動報告の投稿（またはDM委員会への原稿提供）をお願いしたい。

連絡先：internet@iacor.jp

（大塚幸美）

記念事業委員会

国内外に関連するPJもあり、2019年12月に中国湖北省武漢市の原因不明の肺炎の集団発生から始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大に大きな影響を受けた1年であった。

①グレート・ヒマラヤ・トラバースPJ

2月29日ネパールに入国した後、3月7日登山基地のタブレジュンを出発した。カンチェンジュンガ南面からグンサを経由して、カンチェンジュンガ北面BCに向かう途中、カトマンズからの電話でコロナ禍のため今春の登山が中止となり、国際線の運航停止がされるといふニュースを受け取った。しかし、予定通りの踏査を行なうことにした。3月31日、バブクターの湖の近くにベースキャンプを作り、4月3日にバブクカン（6244m）の登山を開始したが、6日、59

20mに到達して登山活動を終えた。その後、オランチュンゴラ・レレップを経て18日ロックダウン下のカトマンズに戻った。その後2日間の外出禁止を経て、5月15日、ネパール航空のチャーター便で成田空港に帰着し、その後2週間の自宅待機となった。

踏査中はフェースブックで行程を公開、カトマンズ帰着後リモートで報告会を開催、一般公開した。その様子はユーチューブで配信、また、踏査中の画像を英語表記で公開している。

②エベレスト登頂50周年記念フォーラム

5月に予定していた「記念フォーラム」が1年延期されたために、ウエブ講演会を企画。第1回を10月7日「みんなで登ろうエベレスト」をテーマに近藤謙司氏の講演、第2回を「ヒマラヤ気象予報最前線と氷河の行方」をテーマに飯田肇、猪熊隆之氏の講演を行ない、いずれもユーチューブ配信している。

第3回は12月5日「登山史最大のミステリー マロリーとアーヴィンを捜して」をテーマに、1999年の遺体搜索の模様を「マロリー捜索隊」のメンバーであった米コラド州在住のジェイク・ノートン氏によるオンライン講演会を実施した。

また、12月12日から1月11日まで、板橋の植村冒險館を会場にして、「写真で振り返る日本人のエベレスト」展を開催した。

③日本山岳会所蔵図書・資料デジタル化PJ

会報「山」のPDF化および公開、会報「山」総目次の掲載、「山岳」のPDF化と公開、「写真で見る日本山岳会の100年」、「シユラーギ

ントホワイトアトラス』のデジタル化と公開、「蘭花譜」のデジタル化と公開、「ヒマラヤ登山映像のデジタル化」のための確認作業をデジタルメディア委員会、資料映像委員会の協力を得て行なった。

④ 全国山岳古道調査PJ

9月の全国支部合同会議で、調査の骨子や方針を発表。全国の支部や個人からの調査対象の推薦を依頼。また、会報「山」やチラシを封入して告知、併せて「全国山岳古道調査」をホームページで告知した。ヒマラヤキャンプPJ、山の天気ライブ授業PJ、日本・エクアドル外交関係樹立100周年記念友好登山PJなどの実施は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中断した。

(重廣恒夫)

支部事業委員会

2020年度は、コロナ感染症の影響で各支部とも集会などの開催が制限され、全国支部懇談会をはじめ多くの事業が中止あるいは延期される活動低迷の年であった。

* 特別事業補助金

2020年度の特別事業補助金は、7支部からの応募があり、支部事業委員会が審査し理事会で承認された。福島支部は3年目継続事業となる会員増強事業「フリークライミング講習会」、埼玉支部は3年目継続事業となる会員増強事業「第3期埼玉やま塾」、東京多摩支部は3

年目継続事業となるリーダー育成事業「中級登山教室におけるリーダー育成」、越後支部は新規事業として会員増強「リーダー育成・その他事業」越後YOUTH育成3ヶ年計画」、関西支部は3年目継続事業として会員増強・その他事業「登山文化伝承」、東九州支部は2年目継続事業として会員増強事業「リーダー育成のための研修事業」、京都・滋賀支部は新規事業として会員増強、リーダー育成、その他事業「健幸登山教室」の7事業が承認され、総額83万円の補助金が助成された。

* 第10回登山教室指導者講習会

例年どおり2月に開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症による非常事態宣言が発令されたため、次年度4月に延期となった。支部開催が延期されている「山の天気ライブ授業」は講習内容として開催予定。

* 山の天気ライブ事業

新型コロナウイルス感染症のため検討されていた神奈川支部の企画が中止された。

* 全国支部懇談会

宮崎支部で開催準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症のため中止された。また、来年度は東海支部の予定であったが中止となった。

(宮崎紘二)

資料映像委員会

令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大により、例年とは環境の

異なる状態での会務となった。

1・第24回全国山岳博物館等連絡会議の開催

・全国山岳博物館等連絡会議は、全国の山岳関連博物館などを結び付ける、全国で唯一の会議体であり、山岳関係館の情報交換・連携を通して、山岳文化の促進に寄与している。今年はコロナ禍のため、11月28日(土)にweb会議にて開催した(博物館など6館、本会から理事と委員11名、傍聴者1名が参加)。出席2館からの話題提供と各館より情報提供と意見交換を行なった。24年にわたり継続している会議で、本年も参加館同士の連携および本会との協力関係を強める有意義な会議となった。コロナ禍で各館とも企画展や行事が変更を余儀なくされ、思いどおりにならない様子であった。

2・絵画・資料・映像資料の保存と活用

・収蔵絵画・資料(登録500件、個別資料数1000点)および映像資料(380タイトル)の保管・管理・調査を継続実施した。

・本会資料室に保管し切れない絵画・資料については、適切な保管や管理を実施し、また展示・研究などに活用していただける博物館や美術館計8館に寄託している。

・創立120周年記念事業として、所蔵絵画のweb公開のため『蘭花譜』の写真撮影(97点)を行なった。資料のデジタル化の一環で、画像データとアルバムを作成し保管した。

・資料の外部対応(博物館、新聞社、雑誌社などへの貸出し8件、問合せ4件)、資料の受入れ(寄贈受入れ3件)。

3・企画展「エベレスト登頂50周年記念 写真で振り返る日本人のエベレスト展」を行なった(本会主催、於東京都板橋区・植村冒険館、エベレスト登頂50周年記念プロジェクトの一部)。

4・『写真で見る日本山岳会の100年』(資料映像委員会編集、日本山岳会発行済)のデジタル化・web公開に伴い、改めて校正、誤表記の修正を行なった(修正済web掲載中)。

5・本部102号室(資料収蔵室)のカビ対策

梅雨期の悪天候とコロナ禍による人の出入り減少で、部屋の空調条件の適正維持が難しくなりカビが大発生した。102号室の温度・湿度の計測管理を実施。令和3年度燻蒸作業を行なう計画を立案した。資料の燻蒸については、新型コロナの感染状況が落ち着き次第、実施を予定している。

6・委員会の広報活動の取り組み

登山史上の資料から美術および映像作品まで貴重な資料を収蔵しており、登山だけではなく、文化的側面からアプローチできるのも本会の魅力となっている。「エベレスト展」や「写真で見る日本山岳会の100年」の公開などは、本委員会の活動や所蔵山岳資料について会内外に知っていただく機会となった。また、全国山岳博物館等連絡会議を通じて日本山岳会の紹介も行なった。

(溝口洋三)

科学委員会

科学委員会は山の自然の持つ魅力を科学の目を通して見ることで、登山をより楽しく豊かなものにするこや、より安全な登山に不可欠な地図や装備、食料などに関する科学的知識を登山愛好者に伝えることを目的に活動している。委員会が年間で行ってきたイベントには「フォーラム 自然を楽しくする科学」、科学的に興味深い自然を实地踏査する「探索山行」、委員同士の研鑽のために実施する「研修山行」や「内部研修」があるが、2020年度は新型コロナウイルスの感染蔓延のため、残念ながらそのほとんどを実施することができなかった。厳しい状況の中、毎月実施している委員会例会をZoomによるリモート会議として継続、必要最小限の委員会活動を続けているのが実態である。以下には本年度中に実施した事項を記す。

1・エベレスト登頂50周年記念フォーラムの展示への協力(公益事業)
2021年に豊岡市で開催される予定の表記フォーラムで、エベレストの成因に関するポスター展示に協力。

2・「山のマナーノート」の作成配布(公益事業)
医療委員会、自然保護委員会との協働で作成した「山のマナーノート」は日本語版6万部、英語版1万部を印刷、全国の登山基地や山小屋、観光センターなどに配布した。

3・「山の安全ハンドブック」の作成(公益事業)
遭難対策委員会、医療委員会との協働で本年度中の刊行を期し

て作業を進めたが、コロナ禍により中断している。

4・研修山行(共益事業)

ほとんどの活動が中止を余儀なくされるなか、「岩殿山礫岩層、猿橋溶岩流の踏査」をテーマに11月29日(日)、講師2名を含む16名の参加で実施した。

5・内部研修(共益事業)

委員の相互研鑽を目的に委員が講師となって例会中で行なってきた内部研修は、本年度は「奥武蔵古道を辿る里修験峰入り道」、「山で見つけた自然の不思議」の2テーマについて実施した。

来年度こそ委員各位の協力のもと、2年間中止となってしまうたフォーラムや探索山行を再開し、活発な事業の展開を図りたい。(平野裕也)

会報編集委員会

前年度同様、出版社で編集経験のある節田重節(会員番号6720)と原邦三会員(同9080)のふたりで毎月、編集作業を分担して進行した。読物や論説、イベント・会議などの報告、本部からのお知らせなど前半部を節田が受け持ち、後半部のいわゆる「決まりもの」ページを原会員が担当した。

ご存じのように昨年から今年にかけて、新型コロナウイルス感染防止のため本部並びに各支部のイベントや会議が軒並み中止または延期

となり、正直、毎月の会報のネタ探しに苦勞した1年であった。初めて「島の山旅への誘い」という連載記事を書いたが、原稿確保の意味もあって企画したものである。とはいっても、会報は本来、会員たちの自由な発表の場である。ページに余裕のある今こそ、ぜひ皆さんに、積極的にご投稿いただきたいと願っている。

昨年の製作費総額は948万5496円で、対前年比28万1455円の増となっている。印刷・製本費の若干の増加と、発送作業費の値上がりによるものである。内訳は印刷・製本費が377万6050円で、月平均31万4671円。発送作業費が453万7053円、通信・運搬費が11万8883円、編集費が101万1600円、写真原稿料が4万1910円となっている。

(節田重節)

『山岳』編集委員会

機関紙『山岳』第百十五年(2020年)は、担当の社長幹雄編集長以下、節田重節委員を中心に昨年と同様のスタッフで編集作業が進められ、8月下旬に発刊された。2020年は、新型コロナウイルスの感染拡大が続き、不要不急の外出を控えるよう要請され、なかなか打ち合わせもできず、編集作業も滞りがちになってしまった。その影響も受けて、8月の発行が常態化してしまっただけで、なんとか下旬には会員のもとへ発送することができた。

表紙は、この号から画家で写真家である小谷明さんの画を使わせてもらうことになった。エベレスト、ローツェと名峰アマ・ダブラムを望む画は、『山岳』の表紙にふさわしい力強いものとなった。

今号は少し趣向を変えて「特集」ページを作ることにした。

2020年は、日本山岳会隊がエベレストに初登頂して50年の節目の年に当たる。そこで4つの視点から50年を振り返る特集を組んでみた。1970年の日本山岳会隊の成り立ちや意義、成果などを改めて検証してみようという企画だった。

まず、これまであまり表に出てこなかったスキー隊の動向にも注目しながら、日本山岳会の「山」「山岳」などの資料を駆使して、新聞記者でもあった江本嘉伸会員に長文のレポートを書いてもらった。続いて神崎忠男、鹿野勝彦、嵯峨野宏の3人の隊員に集まってもらい、当時の登山隊を振り返ってもらう座談会を開催した。また、第2次登頂者の平林克敏会員には、登頂に至るまでの経緯を手記で綴ってもらい、最後に池田常道会員には、その後のエベレストと日本人とのかかわりを中心に俯瞰してもらった。「エベレスト登頂50周年」という100ページにおよぶ大特集になったが、当時を知る隊員が欠けていくなかで、記録として残しておくことの重要性も再認識できたと思う。

記録は3本掲載した。3回目の挑戦で厳冬の剣岳北方稜線を完全縦走した佐藤勇介氏の記録は、剣岳と正面から向き合った渾身のレポートとなった。続いて静岡支部の大島康弘会員による本州分水嶺縦走の記録は、竜飛岬から上越国境・三国峠まで、18年間をかけて都合

40回の山行で踏破した苦労がしのばれるものとなった。最後は河口慧海の足跡を追って、西ネパールのドルポやムスタンなど辺境の地に通った稲葉香氏による踏査の記録で、読み応えのある貴重なレポートとなった。

調査・研究もバラエティに富んだものとなった。明治大学名誉教授の小疇尚会員による上高地、岳沢の氷河地形に関する考察は、涸沢や槍沢などと比べても、その氷河地形についての調査・研究が少なかつただけに注目される論考となった。木下喜代男会員による奥飛驒の登山案内人たち、特に近代登山の黎明期における彼らの活躍と素顔は興味深いものがある。熊本支部の田上敏行会員は、当時の新聞記事や山麓の旧家に残る日記などからウエストンの旅程を推定して、登山中の足取りを再現している。また、田村俊介会員によるパミールに関する考察では、「パミール高原」という名称に疑問を呈し、なお最近のパミールの登山事情を紹介してくれた。

紀行は2本で、ともに中央アジアに関するほぼ半世紀ぶりの探訪記が並んだ。吉川正幸会員のコーカサスと高橋善護会員のヒンズー・クシユの再訪記で、ともに半世紀の時を経て再訪した懐かしい山々や歴史上の考察などが旅行記の随想としてまとめられている。

今回の英文サマリーは、東京多摩支部の石塚嘉一会員にお願いした。ジャパンタイムズで活躍された石塚会員によって、英文サマリーを短期間で英訳してもらえたが、改めて日本山岳会の豊富な人材を再認識させられた。

なお、昨年は特集の編集ページが増加したことにより、製作費総額は420万8072円。内訳は、印刷・製本費343万円、発送作業・封筒代66万6909円、編集費50万8770円、その他経費1万3608円。印刷部数は4800部であった。

(神長幹雄)

図書委員会

2020年度の図書委員会は、ほかの委員会と同様、コロナ禍に振り回された1年となってしまった。

委員長に就任して2年、ようやく図書委員会のあり方が少し理解できてきた矢先のコロナの感染拡大で、残念ながらリアルな形での活動はほとんどできなかつた。

日本有数の山岳図書館として、蔵書の保管とそのさらなる充実、そして多くの利用者へ便宜を図ることを目標としてきたが、前者はある程度達成できたものの、後者はコロナ禍のため来場利用者が激減してしまった。マンシヨンの一室に図書室があるため、その利用に制限がかり、今回のコロナ禍でほとんど利用してもらえなかつた。私設の山岳図書館の構想もあり、今後もコロナ禍との関わりを見ながら図書室のありようを模索していきたいと思っている。また、図書館ソフト「情報館」の見直しも、担当者と直接細かい部分での話ができず、料金面も含めて検索機能の改善など、新たな方策を探りたいと思っている。

図書委員会の歴史や伝統をいかに若い会員に引き継いでいけるかが昨年度の課題であったが、「山岳史懇談会」も「山岳図書を読む夕べ」も、会員外も含めたリアルな催しがほとんどできなかった。「山岳図書を読む夕べ」は、昨年4月に岡田喜秋氏を迎えて準備を進めていたが、コロナ禍のため、中止。その後、リアルな講演会活動はまったくできなかったが、唯一、12月16日、MCCの読書会に打田鏝一氏を招き、リアルとZooomの双方で開催、図書委員の一部も参加することができた。

例年好評だった「図書交換会」も年次晩餐会が中止になったことで、開催できなかった。首都圏の会員だけでなく地方の支部会員も参加できるため、交流の場としても有効だと思われるが、開催はコロナ禍の終息次第である。次回の図書交換会の再開が待たれる。

2020年度は、記念事業委員会の「記念フォーラム」PJの一環として、昨年12月から1ヶ月、東京・板橋の植村冒険館で写真展を開催した。その際、エベレスト登頂関連の書籍も展示、400人以上の来場者があり、写真展も大変好評だった。

こうした活動とともに、毎月の例会で、各出版社から送られてくる書籍を選択し、会報「山」への掲載の選定、執筆の依頼をして「図書紹介」欄に発表する活動もしている。紹介する本の選定↓執筆者の選定↓依頼↓原稿の入稿までをコンスタントに行なうのが図書委員会の役割である。昨年度はやはりコロナ禍の影響で、「山」のページに空きができたため、ほぼ毎月のように山岳書を紹介することになり、広く

会員にも図書紹介欄をアピールすることができたと思う。

昨年度はリアルな図書委員会を毎月招集することができず、リアルとZooomの併用、もしくはZooomのみの委員会しか開催できなかった。特にリアルな委員会を楽しみにしていた委員には課題の残る年となってしまった。

(神長幹雄)

「山の日」事業委員会

「山の日」が国民の祝日になってから5年目の2020年。日本山岳会にとって一つの転機が訪れた年だったと思う。祝日「山の日」制定の趣旨、理念を共有して活動する一般財団法人全国山の日協議会(以下全国協議会)との連携を強める動きがそれである。

*年度初めの事業委員会。(在籍メンバーは14人)

諸事情で初回が8月14日にずれ込んだが、委員7人と全国協議会の梶正彦理事長(役員の改選により6月就任)がJACの古野会長ら6人がそろえた。委員2人がオンライン参加し、JACの古野会長ら6人がオブザーバーとしてオンライン参加した。

当委員会のメンバーで全国協議会常務理事(事務局長)の手塚友恵と梶理事長から協議会の第2期活動計画について説明があった。「山の日」運動がより広範な支持と参加を得るための活動展開(有効な情報発信、効率的な運営に向けてのデジタル化、全国的なネットワーク

の構築など)、組織の強化(活動を支える賛助会員の勧誘、資金の確保など)が当面の課題として挙げられた。日本山岳会に対し、第2期活動への強い協力要請があり、意見交換した。

*2回目の事業委は10月23日にルームで開かれた(出席者は7人)。

引き続き全国協議会との連携・協働が議題となり、山岳会120周年記念事業として企画された「全国山岳古道調査」での連携が検討された。

全国各支部への働き掛けでは、前年度からの申し送り「新型コロナウイルス禍の影響で社会全体が停滞している情勢から、会報『山』などの媒体を使った活動に集中する」を受けて、運動を活性化するための情報提供に重点を置いた。会報「山」でのシリーズ企画《地域発「山の日」レポート》が10月から始まっていた。山梨支部(北原孝浩、11月)越後(桐生恒治)、12月)小林千穂さん(山梨県在住、全国協議会アンバサダー)、1月)群馬(根井康雄)、2月)広島(前垣壽男)、3月)東九州(加藤英彦)と続いている。

*3回目は年明けの2月8日。オンラインでの開催に10人が参加し、次年度の事業計画、予算請求などを審議した。

当事業委員会のメンバーに異動があった。栃木県に住んでアウトドア活動に取り組んできた水野雅章が加わり、直江俊武が退会(退任)した。来期の委員長は成川から久保田賢次に代わることになった。

停滞を余儀なくされた新型コロナウイルス禍の2020年。目立った事業展開はない。4月には「山の日マガジン2020」山を知る。

日本を知る。―」が全国協議会から発刊された。JACは編集に協力した。特集記事のトップ「九州の山と自然を知ろう」の筆者は元熊本支部長の工藤文昭である。残念ながら大分県で開催予定の山の日記念全国大会は中止(1年延期)となった。

2021年度の活動にかかわる「山岳基本法」(仮称)について記しておきたい。山の国・日本に環境保全、持続可能な開発・利用などの基本理念を定めた「基本法(親法)」を作ろうという、昨年6月以降の動きである。国や地方公共団体、事業者、国民に総合的な施策を促すための法律づくりである。

事案は国会マターではあるが、発起人としての役割が期待されているのは全国山の日協議会や日本山岳会など。組織としてどう取り組むか、難しいところだ。

(成川隆顕)

国際委員会

国際委員会は、2020年度に左記の活動を行なった。

①海外からの問合せへの対応

年間を通じて、海外からの問合せに対応をしている。内容としては、(1)日本の山に行きたいから情報を教えて欲しいという問合せ、(2)日本人の登攀記録や歴史の資料などのリサーチクエス
ト、に大別される。

(1)はコロナの影響もあり、さすがに今年度は少なかったが、これまで北アルプスを縦走したいという一般的なものから、「ブリ街道」を歩きたいという〈通〉なリクエストまで多岐にわたるリクエストがあった。コロナが収束したら日本の山をスキーで滑りたい、というドイツ人にも情報提供をしたが、スイスの山岳会に所属しているということなので今後の国際交流の芽につながれば、と密かに期待している。

日本の山の情報は、(日本在住の)外国人を中心に、英語での情報発信が増えているとはいえ、言語の観点から限られていることを痛感している。率直に言えば面倒なことも多いが、日本の山に対する関心の高さはうれしいことだし、JACの英語ホームページのおかげで問合せに至ったというご縁もあり、今後もできるだけいいねいに回答したいと考えている。

(2)は、過去の日本人のヒマラヤ登山の報告書を探して英訳したり、20世紀初め、すなわち日本の登山黎明期に日本の山を旅したカナダ人女性について本を執筆中なので記録を探して欲しい、といったリクエストに対応した。ウエストンの歩いた道を現代版ガイドブックとして出版したい、という英国人ライターには、信濃支部長の米倉さんにもご協力をいただいた。JACの生き字引のような先輩方の知恵や、図書室の豊富な資料のおかげで、先方の期待に応えることができた。JACの人的にも物的にも豊富なリソースに感謝である。

②海外ゲストを招いたウェビナーの開催

12月5日に、エベレストの日本人初登頂50周年を記念したイベントの一環で、「登山史上最大のミステリー——マロリーとアーヴィンを捜して」と題し、ジョージ・マロリーの遺体捜索隊に参加した米国人のゲスト(Jake Norton氏)を招いてウェビナーを開催した(なお、開催に至る経緯は、会報「山」2021年2月号に詳述)。当日は、委員の笹生博夫氏に通訳をしていただき、多くの人に視聴いただいた。今後も、Zoomなどを用いた講演会に取り組んでいきたい。

そのほか、9月には平出和也氏、中島健郎氏のピオレドール受賞インタビューも行なった。個人的な話で恐縮だが、本件は前記の国際委員会活動を通じて知り合った関係者からひと足早く情報を得ることができたおかげで、インタビューが実現した。今後も、海外の山岳関係者と日本山岳会のネットワークに力を入れていきたい。また、今後はJACとして日本の山や登山文化の情報発信にも取り組んでいきたいと考えている。

(和田薫)

山行委員会

1・山行委員会の役割について

山行委員会の役割は、理事会の指導の下、「国内外の登山の企

画・実施」を行ない、会員相互の交流、懇親を図り、会員一人一人の登山技術の習得、向上を目指し、ひいては日本山岳会の設立目的である（登山を通じてあまねく体育、文化、および自然愛護の精神の高揚を図ること）に貢献することにあると考えている。当委員会は日本山岳会の本部委員会にあつて、最も山岳会らしい委員会の一つだ。山行委員会は、「会員の役に立つ、会員のためになる委員会」を目指して、国内・海外の山行、講習会などの企画、運営、実施に取り組んでいく。

2・活動方針（安全に楽しく、全国の仲間と一緒にあこがれの山に登ろう）

前記役割と会員ニーズを踏まえ、当面の活動方針を以下の通り定めている。

①全国の会員が自由に参加でき、かつ楽しく有意義な山行を企画する。山行に当たっては、何よりも「安全」に最大限に配慮する。

②会員の多数は、60歳代、70歳代の会員だ。その大多数の中高年会員を主な対象とした山行を実施する。山行以外にも安全登山に資する講習会等を企画する。

③軽ハイキングから日本アルプス縦走までの幅広い、積雪期も含めたオールラウンドな山行を行なう。会員ニーズに応えた、日本山岳会らしいユニークな海外トレッキングツアーも企画する。

④ 何よりも「山を楽しむ」ことを最優先し、単に山に登るだけに留まらない楽しいプラスワン（植物、地形、歴史、文化、温泉など）の山行を志向していく。

⑤ 山行を通じて会員相互の交流を図っていく。

⑥ 全国の支部、ほかの委員会などのコラボレーションを積極的に図っていく。

3・活動内容

①公益事業

「登山リーダーのための救急救助講習会」を6月に開催の予定だったが、新型コロナウイルスの感染状況に鑑み中止した。

②会員向け事業

令和2年度は、平成29年度、以下の8山行を企画、実施した。ほか5山行を計画したが新型コロナウイルス感染症対策の影響で中止した。山行参加者は延べ61名。各山行には、山行委員が2名以上参加している。

3月19～28日「四国遍路逆打ち①香川」（7名）。

6月20～29日「四国遍路逆打ち②愛媛」（7名）

7月10～11日「新緑の大杉谷～大台ヶ原」（8名）

9月11～13日「紅葉の北アルプス（常念岳・大天井岳）を行く」（9名）

9月22～25日「熊野古道中辺路滝尻王子から那智本宮大社」（10名）

10月15～25日「四国遍路逆打ち③高知」(7名)

11月7日「日帰りアルプスシリーズ1回 小鹿野アルプス」(7名)

11月14～27日「四国遍路逆打ち④徳島」(6名)

③研修会の実施

11月14～15日「山行委員会研修会」を実施し、年間計画の策定を行なうとともに、委員各自の研鑽と委員会内のコミュニケーションの向上を図った。翌日幕山に登り、軽ハイキングを行なう。

④月例会

毎月第1水曜日、例会を開催。理事会からの情報伝達、各山行の行程、安全管理等運営に関する検討を行なっている。令和2年度は大半の例会はリモートで実施した。

(征矢三樹)

YOUTH CLUB委員会

YOUTH CLUB委員会は青年部、ワンダーフォーゲル部、学生部の3部によって構成される組織である。また、若年登山者の新規入会につながる、非会員を対象とした机上・実地の登山教室を月1回開催してきたが、昨年度はコロナ禍により開催を見送ることとなった。

3つの部の中で新型コロナウイルスの影響を最も強く受けたと言えるのが学

生部かもしれない。例会は月に1回程度オンラインにて開催し、大学山岳部間の情報交換などに努めていたが、長年続いているマラソン&クライミング大会は中止、そして、2月のアイス&安全講習会も中止となり、実地での催しを一度も開催することができなかった。

青年部、WV部とも4～5月はオンライン例会以外の活動を休止していたが、6月に入ったところから、少しずつ山行を再開した。どちらの部も大人数が集まる合宿や講習会などは催さず、比較的少人数での個人山行やクライミングを中心に活動した。昨年6月から今年3月まで、青年部は延べ52回の山行やクライミングを行ない、さらに平日を中心にクライミングジムでの練習を51日実施した。

WV部は昨年6月から今年3月までに36回の山行を実施した。ただし、WV部では緊急事態宣言の再発出に伴い、2021年1～3月も活動は原則休止した。そのほかにWV部では、5～8月に月1回、オンラインによる講習を開催した。WV部の初級班を対象に、第1回・計画書作成のポイント、第2回・地形図、第3回・医療、第4回・天気図基礎、という内容で実施された。

YOUTH CLUBはこの春でちょうど発足10年を迎える。これまで本会の60歳未満の新規入会者(地方在住者を除く)のほとんどは、WV部がその受け皿の役割を果たしてきた。その結果WV部の在籍者は一時200名を超えるまでになったが、同時にWV部リーダー陣の負担も年々増大し、もはや限界に近い状態となっていた。

昨年夏から新しいYOUTH CLUBのあり方について検討会が

重ねられ、持続可能なシステムを模索した結果、入会者の受け入れのやり方を下記のように改めることになった。

①新規入会者で希望する方には、まずは新しく発行するメールアドレス（MM）に登録してもらおう。

②そのMMにWV部、青年部の情報を掲載するとともに、年4回実施する交流山行の案内を載せる。

③入部希望者には交流山行への参加を通じて両部の雰囲気を感じてもらった上で、所属を検討していただく。

また、この機会にWV部のMM登録者に今後の継続への意思を改めて問うたところ、約150名（昨年時点）の登録者中、80余名が残る結果となった。次なる10年に向けて、今後も試行錯誤しながら、よりよい形に近づけていきたい。

（中山茂樹）

山岳研究所運営委員会

当委員会は、上高地の本会の山岳研究所（以下「山研」）の運営・維持・管理を目的に活動しているが、2020年度は新型コロナウイルスの感染症予防対策に明け暮れた1年であった。

4月下旬に予定していた開所も、全国に発令された緊急事態宣言を受け、開所の時期も遅らせざるを得なかった。当時は現在よりも未知のウイルスにどう対応していくべきか、旅館や山小屋の対策マニュアル

を参考にしながら、2週間に1回のペースで委員会をオンラインで開催し、委員一同で知恵を絞った。最終的には、6月初旬に建物自体は開所し、7月15日に利用受け入れを開始したが、それまでの間は、最適解を模索する日々であった。なお、今年度から新しい管理人として山田和人会員を迎えている。

以下、2020年度の主な活動を列挙する。

【山研管理・維持事業】

- ・6月初旬…複数回に分けて開所作業（水周り、雪囲いを外すなど）
 - ・7月15日…利用開始
 - ・11月8日…閉所
- （通年）

・開所中のライブカメラ起動

・ブログ、SNS（Facebook）を通じた情報発信。

・そのほか、管理人と委員会が協力して上高地関連の行事（町会総会など）に出席。

なお、水力発電は、残念ながらコロナの影響（通水作業に必要な人員が入れず）、5月ごろから発生していた群発地震や大雨などの懸念から2020年度は研究活動は行なわなかった（なお、2021年5月現在は発電を再開）。

【感染症対策】

利用人数の制限、玄関に体温計と非接触のアルコール噴霧器を設置、また、利用者に寝袋持参をお願いするなどの対策を行なった。202

1年度も継続している（人数制限は、居室にカーテンを設置することで若干緩和した）。

【長期の修繕計画作成】

建物の傷みや不具合を有志の委員で確認し、今後予想される問題点を中長期的な視点で洗い出し、対策を検討した。掛けられる予算も限られているため、自分たちでできることや省費用できる工夫を毎月の委員会で議論した。

【そのほか】

・老朽化していた家電（冷蔵庫、ストーブ、管理入用洗濯機と乾燥機、除湿機）を購入し搬入した。冷蔵庫等は1995年に購入したもので、故障・消費電力の観点から買い替えを以前より検討していた。また、除湿機は特に地下の湿気が建物の保存状態に悪影響があり、対策が急務であったため能力が高いものを導入した。

・今年度より、改定した利用料金の適用を開始している（会員と会員外の差を従来の1000円から2000円に引き上げ、会員料金が適用される「会員の家族」についてより明確に定義した）。

山研は、建設当時から30年近くが経過しており、補修が必要な箇所も増えている。委員会が一九となって維持に取り組んでおり、今後とも会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

（和田 薫）

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Volume 116 No.174

Issued August 2021

CONTENTS

Contribution

- Fascinated by the scenes of ancient mountain roads Yasuyuki Takeuchi (8)
COVID-19 and Mountaineering—2020, the year Japanese mountaineering
community kept searching ways to cope with the pandemic
..... Sumiko Kashiwa (20)

Records

- “Great Himalaya Traverse” gets underway Tsuneo Shigehiro (64)
Photo shooting in Kangchenjunga Kenro Nakajima (86)

Reading

- 50 years after Kyuya Fukada’s death; He lived a valiant life Sadao Karibe (110)
Mountain worship of the world Yoichiro Kuroda (126)

Research and study

- On the beginning of working people’s mountaineering groups Norio Jojima (180)
“Educational cultural property” of Shinshu—Where is school mountaineering going?
..... Toshiro Kikuchi (197)
Usui Kojima’s writings about Hida Kiyoo Kinoshita (213)

*

- Book Reviews (229)
In Memoriam (257)

*

- Minutes of Meeting for JAC during April/2020—March/2021 (279)
Report from the Local Sections during 2020—2021 (299)

- Catalogue of Japanese Mountain Books in 2019 (A19)
English Summary (A11)

Fascinated by the scenes of ancient mountain roads

Yasuyuki Takeuchi

Walking on ancient roads and trails is in a sort of boom. It's probably because people in modern days find in old roads images of those old days when villages and villagers are connected via mountains and passes, as the author says in the article that the essence of ancient roads lies in the hearts and minds, and figures of people who traveled on the roads for daily living and worship.

The author freely walked around mountains and passes in Kitayama mountain areas deep in northern Kyoto in his high-school days. While walking on mountain trails extending in all directions, he writes, he was taught that what is important is a good balance of natural landscape and human landscape and the feeling of oneness of a wide range of elements. Kitayama is surely the starting point of his lifelong walking on old roads and trails. As the next step, Takeuchi moves his activity base to Oku-Mino (north of Gifu). What he has learned in these mountain areas is a wide perspective capable of accepting all natural features and climate as they are.

On that extension are those well-known religious mountain trails such as "Ganzandaishi-michi," and "Omine Okugake-michi" introduced in this article. As the author writes that the original point of old mountain roads lies in roads over mountain passes, the real fun, and the original point, of walking in Japanese mountains is in there – which you cannot have just through "peak-hunting" or climbing mountains for the sole reaching the top.

COVID-19 and Mountaineering - 2020, the year Japanese mountaineering community kept searching ways to cope with the pandemic

Sumiko Kashiwa

On April 20, 2020, the four major Japanese mountaineering organizations – the Japanese Alpine Club, the Japan Mountaineering and Sport Climbing Association, Japan Workers' Alpine Federation, and Japan Mountain Guide Association – called on their members to refrain from mountaineering due to the rapid spread of the novel coronavirus disease COVID-19. This was probably the first time in history. Even during the last world war, there were no such calls made officially for restraints of mountaineering.

In this article, the author looks back from the standpoint of a reporter and writer on how the Japanese mountaineering community was and how it tried to cope with the unprecedented situation in 2020, to be remembered as "the first year of coronavirus." She thinks about how we should take part in mountaineering under the coronavirus pandemic,

and discusses what preparations were made and anti-coronavirus measures were taken at mountain huts for reopening their facilities for mountaineers. Comments of major mountain hut operators in popular areas, such as the Northern Japan Alps, the Southern Alps and Yatsugadake, are also introduced in the article. The problems facing the mountain hut operators and other mountaineering-related businesses are not new but are the problems existing even before the pandemic hit us. They only came to the surface with COVID-19.

The article also briefly introduces activities of sustainable “eco-mountaineering” being promoted in the southern part of the Southern Alps by the “Minami-Shinshu sangaku bunka dento-no kai” (Southern Shinshu mountain culture tradition association). Their activities are powerful enough as if to bring us in tough times back to the origin of mountaineering.

● Records

“Great Himalaya Traverse” gets underway

Tsuneo Shigehiro

“Great Himalaya Traverse,” planned as part of the projects to mark the 120th anniversary of the Japanese Alpine Club’s founding in 2025, has three purposes: conducting surveys of changes in the Himalaya mountains region; climbing unclimbed Himalayan peaks and/or already-scaled peaks via uncharted routes in hard exploratory mountaineering style; and handing down to the next generation the adventure spirit of developing a dream out of a piece of map into action through the field survey traversing the 5,000-kilometer Himalaya mountains. The field study is divided into three areas: Nepal in the first period, India in the second period, and Pakistan in the third period. In Nepal, the survey will be conducted in six stages, and the first stage of survey already began in the 2000 pre-monsoon season.

The “Great Himalaya Traverse” thus started with the expedition to Mount Pabukkang in the Kangchenjunga mountains in the spring of 2020. The expedition party left Taplejung and, after trekking between Ghunsa and Kangchenjunga BC, went north to scale Mount Pabukkang (6,244m). However, the party was hampered by the deep snow and windcrust, finally being forced to pull back at the point of 5,971 meters in altitude.

The expedition party returned to Taplejung and then Kathmandu, locked down due to the coronavirus pandemic, where it was forced to stay at the CosmoTrek office for 27 days before obtaining charter flight tickets to Japan.

Photo shooting in Kangchenjunga

Kenro Nakajima

When it comes to photo shooting in the Himalaya, usually, very careful preparations are essential. However, this photo shooting team was told that the scheduled departure date would be moved forward due to the COVID-19 pandemic. After the final meeting of arrangements of the trip at Narita, the shooting team decided to go ahead with the plan and take a chance. They left for Nepal. The purpose of this author and his team was shooting photos of the Kangchenjunga mountains on the Great Himalaya Trail (GHT). It was necessary to reach the foot of the mountain before restrictions are imposed on entry into mountain areas, and the team drove to Taplejung and headed for Ghunsa, the innermost village, where the team joined the Japanese Alpine Club's Great Himalaya Traverse expedition. After exchanging information, Nakajima's team went on to shooting Mount Jannu and Kangchenjunga.

However, this team could not proceed to another shooting point of Boktoh Peak because a permit to enter a valley to set up a base camp was not issued because of the rapid increase in the number of COVID-19 cases in Nepal. It found a route to reach the Boktoh Peak directly from Ghunsa, and on the day of shooting, the team managed to reach the east peak of the summit after struggling with deep snow on sharp slopes and, in the final section, climbing on the precarious snowy route. Fortunately, it was clear and windless on the mountain top, and the team could take photos of great panoramic views of the Kangchenjunga mountains under blue skies. Furthermore, it succeeded in taking aerial views using a drone.

The shooting team managed to return to Kathmandu, but it had to endure 24 days of hard conditions as if under house arrest while Nepal repeatedly imposed nationwide lockdowns, before the team finally could leave for home by chartered flight.

● Reading

50 years after Kyuya Fukada's death; He lived a valiant life

Sadao Karibe

This year marked the 50th year after Kyuya Fukada died of brain he while chimbing Kayagadake. Behind Fukada's popularity thanks to his "Nihon Hyakumeizan" (Hundred Mountains of Japan), the author says in this article that it is unfortunate that people do not talk very much about the author of the celebrated book. Therefore, the author looks back at Fukada's achievements, discussing such topics as reasons why Fukada chose those 100

mountains as “meizan” (eminent mountains) and relationships between each of those mountains and pioneering people of mountaineering. The editors who worked with Fukada say he was famous for being slow in writing, but Karibe points out that it was because he spent much time for research before writing. He carefully researched materials in Britain, the U.S., Germany, and France, not just in Japan, to write one piece on a mountain, and needed considerably long time before he actually started writing. The article also reveals about his private life – he was decisive and lived a challenging life. The author considers these traits come from where he was born and grew up – Daishoji in Kaga (Ishikawa Prefecture).

As Fukada’s achievements, the author naturally names “Nihon Hyakumeizan” and “Himaraya-no Koho” (Great Himalayan peaks). He points out essays that were not included in the book on the 100 mountains, and introduces to us another way to enjoy the great book. On the book on Himalayan mountains on which Fukada spent all his energy in his last years, this article introduces an interesting episode about the author’s first meeting with Fukada. It also tells about repeated exchanges of letters between Fukada and Eizo Suwata, an alpinist familiar with the Himalayas. Those letters show his warm feeling toward Suwata.

Mountain worship of the world

Yoichiro Kuroda

After the celebrated book, “Nihon Hyakumeizan” (One Hundred Mountains of Japan), the author, Kyuya Fukada tried to write a book on the world’s 100 mountains, but unfortunately died in a mountain he was climbing, before finishing the project. After his death, “Sekai Hyakumeizan – Zeppitsu 41 za” (Hundred Mountains of the World – a compilation of the author’s last articles on 41 mountains) was published with the articles he had written before his death. The author of this article, who had been under Fukada’s tutelage, decided to take over Fukada’s unfinished project and write on the world’s 100 mountains of his own choice to return Fukada’s favor.

The author majored in molecular genetics at the University of Tokyo’s Graduate School of Medicine but switched his study area to brain research after his study in Britain. Fortunately, as he had many chances to attend academic meetings abroad, he could look closely at more than 200 mountains in various countries of the world, using those occasions as well as his own holidays. He has been serializing articles on world mountains he has viewed in the quarterly journal of medical culture “microscopia.” Sixty-six mountains have so far been introduced.

Research on Japanese mountain worship is active in Japan and there are many good books on the subject. But there are few reference materials on the world’s mountain

worship. Therefore, from among the 100 mountains of the world he had viewed and chosen, the author selected mountains well-known as the objects of worshipping by local people and put his research reports and discussions on them in this article. The article is made up of two parts: Part one explains why mountain worship began from the standpoint of a brain scientist, and Part two describes “eminent mountains around the world and mountain worship” by region and by mountain.

● Research and study

On the beginning of working people’s mountaineering groups

Norio Jojima

The author surveyed the timing of establishment of working people’s mountaineering groups and compiled them for analysis. The period covered for the survey is the 100 years from 1900 to 1999. Reference materials used for the survey included a table of mountaineering groups in Japan, published in the Japanese Alpine Club’s “Yama Nikki” (Mountain Diary) and a table of working people’s mountaineering groups published in the “Yama-to Keikoku” magazine, as well as the Websites of the Japan Mountaineering and Sport Climbing Association and Japan Workers’ Alpine Federation. The mountaineering groups whose inauguration time is known numbered a total of 2,683 groups: 2,333 general groups and 350 groups at workplace.

Working people’s mountaineering groups began to be established around 120 years ago, but already in the 1880s, worship groups came to be organized to visit shrines and temples and during their worship tours many people enjoyed walking or climbing mountains. In 1892, the Ministry of Education issued orders to encourage school excursions, and this is regarded as the beginning of students’ and school children’s mountaineering. Other styles of mountaineering such as mountaineering for botanical and geographical surveys and observations also began. During the 1910s, many schools saw mountaineering clubs established, and the number of such clubs sharply increased during the next decade. In these days, group walking was encouraged by the government and the Ministry of Railways started the hiking movement. This way, improving physical strength was promoted all over the country. Although in the 1940s the number of mountaineering groups decreased because of the Pacific War, the number of mountaineering groups set up in the postwar years rapidly increased mainly in big companies, under the occupation policies. So did the trend of student mountaineering. In the 1950s, the number of working people’s mountaineering groups established remarkably increased. This increasing trend continued into the 1960s, giving rise to a leisure boom and ski boom. Following declines in the 1970s, “tour mountaineering” promoted by commercial tour companies became a national fad,

with many mountain guide groups set up to meet the new needs of mountaineering tours.

“Educational cultural property” of Shinshu – Where is school mountaineering going?

Toshiro Kikuchi

“Gakko tozan” – mountaineering as school excursion – that has been practiced for more than 120 years in Shinshu (Nagano Prefecture) is now in danger of survival despite a long tradition and many achievements, the author says. The number of schools implementing school mountain climbing – which has been the original point of education in Shinshu – has begun decreasing and the number could further decline due to the COVID-19 pandemic.

The author begins with explaining the history of education in Shinshu and educators’ efforts in their early days. He points out that mountaineering by schoolgirls, which was rare in Japan in those days, was encouraged in Shinshu and he also tells about achievements of Nagano Shihan (today’s teachers’ college that trained elementary and middle school teachers). Despite the tragic 1913 accident in typhoon-hit Nishi-Komgadake, where 11 of the 38 schoolchildren and teachers died, school excursion-type mountaineering continued, after the cause of the accident was thoroughly examined. School mountain climbing became an established school event at junior high schools, after many years of trials and errors, but it inevitably began changing in nature and quality. The changes began visible around the time when responsibility of management shifted to the prefecture’s tourism section from the Education Board. Contributing to this change were such factors as the growing gap between schoolchildren’s physical constitution and physical strength, and the lack of experienced teachers and staffs who accompany and guide pupils on their mountaineering.

The author is a former journalist at the Shinano Mainichi Shimbun. Having a sense of crisis, Kikuchi set up an “association to promote school mountain climbing in Shinshu” after having a series of discussion with people in the mountaineering community and education-related community to preserve and put the tradition back on the track as it is regarded in Nagano Prefecture as important “educational cultural property.”

Usui Kojima’s writings about Hida

Kiyoo Kinoshita

Usui Kojima showed great interest in Hida. It is said that Kojima’s interest in Hida was aroused apparently by Shigetaka Shiga’s book “Nihon Fukeiron” (Theory of the Japanese landscape). In May 1896, when he visited Hida (northern part of Gifu Prefecture), Shiga wrote a travel piece titled “Hida-ni-iru ki” (An account on my visit to Hida). After reading that piece, Hida became a “land of longing” for Kojima. He visited Hida several times on his

way to and from mountaineering and produced many travel writings, which covered a wide range of topics, ranging from natural science to history and folkloric matters.

Kojima was well-known as a literary critic since he was young for his literary activities, such as publishing a literary magazine "Gakuto" with his literary friends during his days as a student at Yokohama Commerce High School and writing commentaries in the magazine for young people of literature "Bunko." He had regular contacts with young people aspiring to become writers in Hida since he was an editorial member for the magazine and regularly obtained information for writing from those mountaineers and literary people whom he associated with. In those days, there was a magazine readers' association in Takayama called "Hida Tokuhitsukai," where aspiring young writers gathered from across Hida for exchange of information and posted pieces to "Bunko" to receive Kojima's evaluation.

Kojima became even more interested in mountaineering, especially after he got a distant view of the Hida Mountains, such as Yarigadake and Norikuradake from Inakura-toge, on his way to Mount Asama and a tour of Kiso. His ascent of Yarigatake became a pioneering record of modern alpinism in Japan, and its account "Yarigatake Tankenki" (The Exploration to Yarigatake) received high reputation, earning him a nickname "Yama hakase" (mountain doctor). Thus he became involved more deeply in mountaineering.

● Book Reviews

"Himaraya Juso (Himalaya Traverse)" by Katsuhiko Kano (Review by Yoshinobu Emoto); "Ningen-no Tochie (Toward human land)" by Yuka Komatsu (Review by Yumi Inoue); "Yama-no Tabibito (Mountain traveler)" by Masatoshi Kuriaki (Review by Takeshi Mizukoshi); "Gezan-no Tetsugaku (Philosophy of descending a mountain) by Hiroataka Takeuchi (Review by Masato Arai); "Ryukkusakku VX (Rucksack VX)" by Waseda Alpine Club (Review by Jusetsu Setsuda); "Death Zone" by Satoshi Kono (Review by Toshiho Iida); "Tsuioke-no Himaraya (Himalaya in retrospect) by Noboru Onoe (Review by Hironori Taniyama); "Chizuzukuri-no Genzaikei (Present form of map making)" by Hiroshi Une (Reew by Masahiko Kondo): "Into Wile Mongolia" by G. B. Schaller (Review by Shigeru Kodama

● In Memoriam

Susumu Ohashi (by Kazuo Koshida); Shigenori Kamio (by Eiho Otani)
Junji Nakamura (by Makoto Nebuka); Kazumasa Hirai (by Tatsuo Inoue);

山岳図書目録 (2020 年)

日本山岳会図書委員会

この「山岳図書目録」は、1 年間に出版された山岳図書をリストアップして、それをまとめて整理し直して一覧にしたものです。書名は五十音順に掲載してありますが、今回から書名を優先させて、文庫名などは後付けにしました。

毎月行なわれる図書委員会では、新刊書籍を中心に独自に調査をしてきました。特に最近は、図書流通センター (TRC) から資料を定期的に取り寄せることができるようになり、図書に精通した委員の人たちの協力もあって、その年に出版された山岳書のリスト化がある程度できるようになりました。

また、毎月出版されるこうした新刊書のリストを基にして、図書委員会では、本会図書室に必要と思われる書籍を選択し、寄贈してもらえるように依頼、図書室の充実化を図るようになっています。さらに会報「山」や『山岳』で紹介すべき本を選択し、「図書紹介」欄で随時、紹介してきました。

こうして集められた山岳図書ですが、いくつかの傾向が顕著に見られるようになってきました。いわゆる山岳図書と呼ばれる書籍の数が減ってきて、実用書と文庫、コミックが増えてきたことです。特にこの1年は、コロナ禍の影響からかキャンプやレシピ本などの実用書が大きな比率を占めるようになってきました。また、安価で手軽な文庫本も多数出版されるようになってきました。それでも数点、読みものやノンフィクションのジャンルで目を引く書籍もあり、今後に期待したいところです。

*判型が数字で表示されているものの単位は mm (天地×左右)、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

山岳図書目録

書名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
【あ】					
OUT OF GOLD	杉野 保	山と溪谷社	2,200	A5判	248p
OUTDOOR FABRIC アウトドアファブリック大全	長谷部雅一	グラフィック社	2,000	B5変型判	160p
秋田・白神入山禁止を問う	佐藤昌明	無名舎出版	1,600	四六判	240p
「雨飾高原二百景 日本百名山雨飾山」杉本英彦写真集	杉本英彦/撮影・編著	ほおずき書籍	3,000	210×297	150p
アルパインクライミング〈ヤマケイ登山学校〉	保科雅則	山と溪谷社	2,200	B5判	152p
いくつになっても山は楽しい 百名山をめぐる60年	戸田祐一	風詠社	1,818	A5判	211p
いざ！登る 信濃の山城 戦国の舞台イラスト案内図	中嶋 豊	信濃毎日新聞社	2,000	A5判	280p
植村直己冒険の軌跡〈ヤマケイ文庫〉	中出水勲	山と溪谷社	900	文庫判	301p
内澤句子の鳥へんろの記	内澤句子	光文社	1,600	四六判	368p
うめしゅんの世界花探訪	梅沢 俊	北海道新聞社	2,200	B5判	160p
雲上浪漫 わが心の中央アルプス	津野祐次/写真・文	信濃毎日新聞社	1,500	220×210	83p
尾根も沢も岩稜も がむしやらに登り続けた21年の追想	千葉紀栄子	山と溪谷社	1,500	188×128	216p
おもしろ樹木図鑑 びっくり！ヘンテコ！不思議！	林 将之	主婦の友社	2,200	21cm	256p
俺は沢ヤだ！ 新編増補〈ヤマケイ文庫〉	成瀬陽一	山と溪谷社	1,200	文庫判	366p
【か】					
画文集 山の独奏曲〈ヤマケイ文庫〉	串田孫一	山と溪谷社	1,000	文庫判	200p
環境考古学と富士山4 Environmental Archaeology and Mt.Fuji	ふじのくに地球環境史ミュージアム/編集	雄山閣	2,600	ムック	95p
関西周辺 週末の山登り ベストコース123〈ヤマケイアルペンガイド〉	加藤芳樹	山と溪谷社	2,300	A5判	256p
関西トレイルランニングコースガイド 新版	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1,900	A5判	120p
関西山のほり&ハイキング BESTコース	ライフスタイル編集部/編集・制作	KADOKAWA	1,300	A5判	159p
簡単シェラカップレシビ カップひとつで作れるソロごはん。	蓮池陽子	山と溪谷社	1,400	A5判	124p
関東周辺 週末の山登り ベストコース160〈ヤマケイアルペンガイド〉	石丸哲也	山と溪谷社	2,500	A5判	272p
関東周辺 マルチピッチルート・スーパーガイド	菊地敏之	白山書房	2,200	A5判	152p

遷層からのヒマラヤ探訪記 総延長2700キロのトレッキング全行程	大矢統士	花乱社	2,200		338p
木と人間 生物多様性と人々の暮らし (えひめブックス29)	松井宏光	愛媛県文化振興財団	1,200	新書判	169p
Q&Aでわかる山の快適歩行術 膝を痛めない、疲れない	野中径隆	山と溪谷社	1,500	A5判	143p
Q&A登山の基本〈ヤマケイ新書〉	ワンダーフォーゲル編集部/編	山と溪谷社	1,000	新書判	126p
九州・沖縄の巨樹：遥かなるいのちの旅	榊 晃弘	花乱社	4,000	225×295	128p
九州の希少植物探訪Ⅰ 草本(早春～晩夏)編	大工園 認	南方新社	3,800	B6判	290p
九州の希少植物探訪Ⅱ 草本(秋・冬)・つる・木本編	大工園 認	南方新社	3,800	B6判	330p
九州の山〈ヤマケイアルペンガイド〉	山と溪谷社/編	山と溪谷社	2,700	A5判	232p
「霧島春秋 花鳥諷詠」黒木親敏写真集	黒木親敏	鉾脈社	2,200	206×296	112p
CLIMBING GUIDE BOOKS 関東周辺マルチピッチルートスーパーガイド	菊地敏之/編著	白山書房	2,200	A5判	151p
くらべてわかるシダ 識別ポイントで見分ける	桶川修/文、大作晃一/写真	山と溪谷社	2,400	B5判	208p
下山の哲学 登るために下る	竹内洋岳	太郎次郎社エディタス	1,800	四六判	254p
現代山岳信仰曼荼羅	藤田庄市	天夢人	1,800	A5判	240p
現代ネパールを知るための60章	日本ネパール協会/編	明石書店	2,000	四六判	396p
原野から見た山〈ヤマケイ文庫〉	坂本直行	山と溪谷社	900	文庫判	240p
ここはチベット ベールを脱いだ秘境の姿	鄭堆主/編、三好祥子/訳	科学出版社東京	4,800	B5判	234p
古地図で楽しむ富士山	大高康正/編著	風媒社	1,700	A5判	181p
小屋番三六五日〈ヤマケイ文庫〉	山と溪谷社/編	山と溪谷社	900	文庫判	319p
【さ】					
最高におもしろい人生の引き寄せ方	高橋大輔	アスコム	1,500	四六判	304p
最新科学が映し出す火山 その成り立ちから火山災害の防災、富士山大噴火	萬年一剛	ベストブック	1,400	190×	239p
里山・高山で見た 信州の希少種	南澤正史	しなのき書房	1,500	A5判	208p
里山に暮らすアナグマたち フィールドワーカーと野生動物	金子弥生	東京大学出版会	3,800	四六判	248p
里山の地衣類ハンドブック	柏谷博之、大村嘉人	文一総合出版	1,800	新書判	136p
里山風土記 山野草編	高久育男	国書刊行会	3,300	A5判	392p
サバイバル家族	服部文祥	中央公論新社	1,650	四六判	247p
山岳信仰と考古学 3	山の考古学研究会/編	同成社	9,000	A5判	370p

山岳科学 Mountain Science	松岡憲知・泉山茂之・楢本正明・松本潔/編	古今書院	4,000	B5判	127p
シートン動物記<ヤマケイ文庫>	白土三平、岡本鉄二	山と溪谷社	1,200	文庫判	592p
シェルパ斉藤の親子旅20年物語	斉藤政喜	産業編集センター	1,100	B6変形判	284p
シェルパのボルバ エベレストにのぼる	石川直樹/文、梨木羊/絵	岩波書店	1,800	A4判	32p
シェルパのボルバ 冬虫夏草とおおきなヤク	石川直樹/文、梨木羊/絵	岩波書店	1,800	A4判	32p
自然に生きる力 24時間の自然を満喫する	辰野 勇	KADOKAWA	1,500	四六判	224p
写真で楽しむ山梨百名山	山梨日日新聞社編	山梨日日新聞社	1,800	A5判	160p
狩猟教書 熊撃ち久保俊治	久保俊治	山と溪谷社	2,800	A5判	320p
新うつくしま百名山	福島テレビ/編	福島テレビ	1,800	A5判	218p
深淵の森 伊豆天城連山	土屋正英	風景写真出版	3,000	250×260	113p
人生を走る ウルトラトレイル女王の哲学	リジー・ホーカー著 /藤村奈緒美訳	草思社	2,000	四六判	384p
森林の系統生態学 ブナ科を中心に	広木詔三	名古屋大学出版会	5,400	A5判	388p
すぐできる ひもとロープの結び方		リベラル社	800	文庫判	176p
脊振山系徹底底踏査!	チームN編	海鳥社	1,800	B5判	144p
それでも僕は歩き続ける	田中陽希	平凡社	1,400	四六判	216p
ソロ登山の知恵<ヤマケイ新書>	山と溪谷編集部/編	山と溪谷社	1,000	新書判	144p
ソロトレッキングの登山術 ひとりですぐ楽しく安全に山を歩くためのガイドブック	長谷川治宏	文芸社	1,100	四六判	160p
【た】					
高尾山に咲く花	勝山輝男/著、村川博實/写真	有隣堂	1,800	新書判	256p
高尾山の麓から 自然を見つめて	菱山忠三郎	揺籃社	1,700	A5判	164p
高尾山ハイキング案内 高尾山・小仏城山・景信山・陣馬山・八王子城山・南高尾山稜を歩く	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1,800	A5判変形	207p
高尾山歴史の散歩道	外山 徹	ふこく出版 星雲社	3,000	A5判	249p
焚き火の本	猪野正哉	山と溪谷社	1,800	A5判	174p
藜食う人々	遠藤ケイ	山と溪谷社	1,500	四六判	336p
玉まつり 深田久弥『日本百名山』と『津軽の野づら』と	門 玲子	幻戯書房	2,800	四六判	224p
丹沢<ヤマケイアルペンガイド>	三宅岳	山と溪谷社	2,300	A5判	220p
丹沢・大山・相模の村里と山伏 一歴史資料を読みとく	城川隆生	夢工房	1,700	?	159p
地図づくりの現在形 地球を測り、図を描く	宇根 寛	講談社	1,700	四六判	251p
ちゅうごく山歩き vol. 7	松島 宏	中国新聞社	476	B5判	47p

鳥海山を登る	佐藤 要	佐藤 要	2,700	A5判	298p
ツキノワグマのすべて 森と生きる。	小池伸介/著、澤井俊彦/写真	文一総合出版	1,800	A5判	126p
剣岳一線の記 平安時代の初登顶ミステリーに挑む	高橋大輔	朝日新聞出版	1,700	四六判	259p
剣人 剣に魅せられた男たち増補文庫版〈ヤマケイ文庫〉	星野秀樹	山と溪谷社	800	文庫判	238p
定本 山小屋主人の炉端話〈ヤマケイ文庫〉	工藤隆雄	山と溪谷社	900	文庫判	347p
定本 山のミステリー 異界としての山〈ヤマケイ文庫〉	工藤隆雄	山と溪谷社	800	文庫判	320p
テーピングで快適！登山&スポーツクライミング〈ヤマケイ新書〉	高橋 仁	山と溪谷社	1,000	新書判	183p
手塚治虫の山〈ヤマケイ文庫〉	手塚治虫、手塚プロダクション	山と溪谷社	1,000	文庫判	400p
東京起点沢登りルート100 新版	宗像兵一	山と溪谷社	2,000	A5判	239p
東京発半日徒歩旅行調子に乗ってもう一周！ まだまだある！朝寝した休日でもたっぷり楽しめる東京近郊「超」小さな旅〈ヤマケイ新書〉	佐藤徹也	山と溪谷社	1,000	新書判	320p
東京もっこり散歩 街中のふくらみを愉しむ	いからしひろき/文、芳澤ルミ子/写真	自由国民社	1,400	A5変形判	127p
ときめく雲図鑑	菊池真以/写真・文	山と溪谷社	1,600	A5判	128p
ドキュメント山小屋とコロナ〈ヤマケイ新書〉	山と溪谷社/編	山と溪谷社	1,000	新書判	255p
【な】					
雪崩事故事例集190	出川あずさ	山と溪谷社	2,700	B5判	144p
新田次郎 続・山の歳時記〈ヤマケイ文庫〉	新田次郎	山と溪谷社	880	文庫判	320p
日本鳥類図鑑	久保敬親	山と溪谷社	4,200	A4変形判	304p
日本の川読み歩き 百冊の時代小説で楽しむ	岡村直樹	天夢人	1,600	B6判	245p
日本100岩場4 東海・関西 増補改訂最新版	北山 真	山と溪谷社	2,300	A5変形判	200p
日本百名山登山ガイド 上・下〈ヤマケイアルペンガイド〉		山と溪谷社	各 2,500	A5判	232p
【は】					
萩原編集長 危機一発！ 今だから話せる遭難未遂と教訓〈ヤマケイ文庫〉	萩原浩司	山と溪谷社	1,000	新書判	352p
白山*立山花ガイド	梶 典雅/文・写真	橋本確文堂	1,500	150×94	192p
白山登山 全コースガイドと白山手取川ジオパーク	柚本寿二/編著	北國新聞社	2,000	A5判	203p
白嶺の金剛夜叉 山岳写真家白旗史朗	井ノ部康之	山と溪谷社	2,000	四六判	328p
はじめよう！ソロキャンプ	森 風美	山と溪谷社	1,300	A5判	119p

旗振り山と航空灯台	柴田昭彦	ナカニシヤ出版	3,000	A5判	323p
パフォーマンスロッククライミング 新装版	Dale Goddard、Udo Neumann/著、森尾直康/翻訳	山と溪谷社	2,000	A5変形判	208p
東アジアの「伝統の森」100撰 山・草・里・海をつなぐ森の文化	藪田 稔/監修、李春子/編著	サンライズ出版	3,200	A5判	288p
東ヒマラヤ 都市なき豊かさの文明	安藤和雄/編著	京都大学学術出版会	6,500	A5判	537p
ヒゲマ学への招待 自然と文化で考える	増田隆一/編著	北海道大学出版会	3,600	A5判	369p
ヒゲマ大全	門崎允昭	北海道新聞社	2,200	A5変形	272p
飛騨の乗鞍岳	木下喜代男	岐阜新聞社	2,000	A5判	322p
人を襲うクマ 遭遇事例とその生態 (ヤマケイ文庫)	羽根田治/著、山崎晃司/解説	山と溪谷社	880	文庫判	253p
ヒマラヤ縦走―「鉄の時代」のヒマラヤ登山	鹿野勝彦	本の泉社	3,500	A5判	434p
ヒマラヤを歩く 60歳から始めるネパールのトレッキング YAMAKEI CREATIVE SELECTION	安藤哲雄	山と溪谷社	2,000	A5判	120p
百名山わずらい	牧野恵子	風媒社	1,800	A5判	245p
ピリカ	半田菜摘	エイアンドエフ	1,800	B5変型	136p
フィールドで使える 図説 植物検索ハンドブック 種類 改訂新版	埼玉県絶滅危惧植物種調査団	さきたま出版会	3,000	A5判	527p
福智山系徹底踏査! 美しき樹林と大展望の頂が呼んでいる TETTEI TOUSA SERIES	挾間照生	海鳥社	1,800	170×260	127p
富士山学 第1号	静岡県富士山世界遺産センター/編	雄山閣	2,600	B5判	92p
富士山境目図鑑 境目だから面白い、五合目の地質と動植物	山梨県富士山科学研究所編著	丸善出版	2,200	A5判	160p
「富士山と山麓の野鳥 季節ごとに」水越文孝写真集	水越文孝	三省堂書店 創英社	2,200	28cm	153p
富士山にのぼる 増補版	石川直樹	アリス館	1,400	A4判横長	43p
富士山八十八景 Eighty-eight views of Mt. Fuji	パイインターナショナル/編著、伏原玲子/訳	パイインターナショナル	2,000	A4判変形	112p
富士山噴火の考古学 火山と人類の共生史	富士山考古学研究会/編	吉川弘文館	4,500	A5判	347p
冬の旅 ザンスカール、最果ての谷へ	山本高樹	雷鳥社	1,800	A5変形	288p
ぶらっとヒマラヤ	藤原章生	毎日新聞出版	1,300	新書判	240p
ふるさとの山を歩く子供たち	伊藤大三郎/写真・文	岐阜新聞社	2,000	大型本	191p
別子銅山の森 銅山に付属した森林の荒廃と再生	馬場孝三	鳥影社	1,800	B6判	212p
北海道の野鳥 改訂第2版	北海道新聞社編	北海道新聞社	2,500	B6判	392p

北海道 夏山ガイド3 大雪、十勝連峰の山々 3版	東・北 最新第 3版	梅沢 俊、菅原靖彦、 長谷川 哲	北海道新聞社	2,300	B6判	272p
北海道夏山ガイド4 最新第3版	日高山脈	長谷川 哲、菅原靖 彦	北海道新聞社	2,300	B6判	232p
北海道野鳥観察地ガイド 増補 新版		大橋弘一	北海道新聞社	2,000	A5判	240p
北海道の山〈ヤマケイアルペン ガイド〉		伊藤健次	山と溪谷社	2,600	A5判	184p
北極探検隊の謎を追って		ベア・ウースマ/著、 ヘレンハルメ美穂/ 訳	青土社	2,200	四六判	316p

【ま】

マタギに学ぶ登山技術〈ヤマケ イ新書〉		工藤隆雄	山と溪谷社	890	新書判	240p
マタギ奇談〈ヤマケイ文庫〉		工藤隆雄	山と溪谷社	750	文庫判	235p
真夏の刺身弁当 旅は道連れ世 は情け		沢野ひとし	産業編集セン ター	1,100	173×114	304p
まほろばの山と高原 続々		みず森ひろ史	白山書房	1,400	四六判	292p
道しるべに会いに行く 丹沢・ 不老山周辺の岩田潤泉さんの道 標		浅井紀子/著、三宅 岳/写真	風人社	1,600	A5変形判	140p
南アルプス〈ヤマケイアルペン ガイド〉		中西俊明、伊藤哲哉、 岸田 明	山と溪谷社	2,500	A5判	244p
みんなの山歩き 新越中百山		山凱会/編著	富山テレビ放送	2,800	A5判	240p
ムネヤス先生が、いた。コロポ ックル・ヒュッテ幻想譚 (YAMAKEI CREATIVE SELECTION)		伊藤秀雄	山と溪谷社	2,000	B6判	316p
もっともっとゆる山歩き まい にちが山日和		西野淑子	東京新聞出版局	1,200	四六判	128p
森のふしぎ		馬場孝三	鳥影社	1,200	四六判	165p

【や】

野外毒本 被害事例から知る日 本の危険生物〈ヤマケイ文庫〉		羽根田 治	山と溪谷社	1,200	文庫判	171p
八ヶ岳の野鳥に逢いにきました。		柳生 博、高柳明音	東京ニュース通 信社	2,000	A5判	112p
柳林のヤマセミたち		中林光生	溪水社	2,500	四六判	232p
藪岩魂 続		打田鉄一	山と溪谷社	2,200	A5変形判	223p
山怪2 山人が語る不思議な話 〈ヤマケイ文庫〉		田中康弘	山と溪谷社	800	文庫判	317p
山小屋の灯〈ヤマケイ文庫〉		小林百合子/文、野 川かさね/写真	山と溪谷社	1,000	文庫判	207p
山里を襲った土砂災害の体験記 令和元年台風19号 老研究者が 鳴らす山里・山裾住人への警鐘		塚本良則	白山書房	1,300	A5判	102p
山旅句 エッセー集		高澤光雄	北海道出版企画 センター	1,600	B6判	232p
山旅ときめき紀行 山は愉し みに満ちている		渡辺国男	日本機関紙出版 センター	1,500	A5判	292p

山地図本 春編 九州・山口の登山ルートガイド		西日本新聞社	1,300	B5判	120p
山とあめ玉と絵具箱	川原真由美/文・絵	リトルモア	1,800	四六判	165p
山と獣と肉と皮	繁延あづさ	亜紀書房	1,600	四六判	238p
山とけものと猟師の話 Woodlands, wild animals, and the hunter's story	高橋秀樹	静岡新聞社	1,200	四六判	136p
山と森を愉しむ 中年からの山歩き	武田信照	白山書房	1,500	四六版	236p
山に立つ神と仏 柱立てと懸造の心性史	松崎照明	講談社	1,950	四六判	288p
山の朝霧 里の湯煙〈ヤマケイ文庫〉	池内 紀	山と溪谷社	800	文庫判	288p
山の足音 山のえくぼ〈ヤマケイ文庫〉	畦地梅太郎	山と溪谷社	900	文庫判	252p
山の観天望気 雲が教えてくれる山の天気〈ヤマケイ新書〉	猪熊隆之、海保芽生	山と溪谷社	1,000	新書判	144p
山の旅人 冬季アラスカ単独行	栗秋正寿	閑人堂	2,400	四六判	255p
山の出べそ〈ヤマケイ文庫〉	畦地梅太郎	山と溪谷社	1,100	文庫判	368p
山の不可思議事件簿〈ヤマケイ文庫〉	上村信太郎	山と溪谷社	750	文庫判	232p
山登りでつくる感染症に強い体 コロナウイルスへの対処法〈ヤマケイ新書〉	齋藤 繁	山と溪谷社	900	新書判	240p
山は登ってみなければ分からない	石丸謙二郎	敬文舎	1,500	四六判	255p
山へ帰る道	中谷寶悦郎	白山書房	1,800	四六判	266p
山を買う〈ヤマケイ新書〉	福崎 剛	山と溪谷社	1,000	新書判	224p
山をつくる 東京チェンソーズの挑戦	菅 聖子	小峰書店	1,500	四六判	203p
山を渡る VOL.3 三多摩大岳部録	空木哲生	KADOKAWA	680	B6判	168p
夢の山岳鉄道〈ヤマケイ文庫〉	宮脇俊三	山と溪谷社	850	文庫判	253p
You are what you read. あなたは読んだものに他ならない	服部文祥	本の雑誌社	1,700	四六判	264p
吉野と大峰 山岳修験の考古学	森下恵介	東方出版	3,800	A5判	250p
【ら】					
レスキュー・ハンドブック 野山・水辺ですぐ役立つファーストエイド&レスキューの最新テクニック 増補改訂新版	藤原尚雄、羽根田治	山と溪谷社	1,200	小B6判	176p
六甲山を歩こう！ おすすめ25コース	根岸真理	神戸新聞総合出版センター	1,600	A5判	128p

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

Office Bearers and Committee

(May 2020)

President : FURUNO Kiyoshi

Vice-President : NOZAWA Seiji, YAMAMOTO Munehiko
SAKAI Hiroshi

Honorary Secretary : NAGATA Koutaro, HAGIWARA Hiroshi

Honorary Treasurer : FURUKAWA Kengo

Honorary Editor : KAMINAGA Mikio

Auditor : KUROKAWA Satosh, ISHIKAWA Kazuki

Commitee

YASUI Yasuo

SHIMIZU Yoshihiro

KONDO Masayuki

KIYOTO Rokuro

IIDA Kuniyuki

KAMIO Sigenori

KASHWA Sumiko

Council

YAMAMOTO Ryoza

HASHOMOTO Kiyoshi

YOSHIKAWA Masayuki

SHIGEHIRO Tsuneo

MORI Takeaki

NARIKAWA Takaaki

IMAMURA Chiaki

ITAMI Tsuguyasu

KINUGAWA Sachio

NAKAYAMA Shigeki

KANZAKI Tadao

YOSHINAGA Hideaki

KOBAYASHI Masashi

OTANI Ryo

NOGUCHI Idumi

Chair of Local Section

Hokkaido : FUJIKI Shunzo

Aomori : NAKAMURA Tsutomu

Iwate : ABE Yoko

Miyagi : TOMIDUKA Kazuei

Akita : SUZUKI Yuko

Yamagata : NOBORI Yoshihiro

Fukushima : SATO Kazuo

Ibaraki : ASANO katsumi

Tochigi : WATANABE Yuji

Gunma : KITAHARA Shunsuke

Saitama : OYAMA Kouiti

Chiba : MATSUDA Hironari

Totyo-tama : NOGUCHI Idumi

Kanagawa : KOMITA Nobuo

Echigo : KIRYU Koji

Toyama : KAJI Tetsuro

Ishikawa : TARUYA Michiaki

Fukui : MORITA Makoto

Yamanashi : KITAHARA Takahiro

Shinano : YONEKURA Itsuo

Gifu : TAKAGI Motoaki

Shizuoka : ARIMOTO Toshimichi

Tokai : TAKAHASHI Reiji

Kyoto-Shiga : MATSUSHITA Masafumi

Kansai : MOTEGI Kanji

Sanin : SHIRANE Hitoshi

Hiroshima : ITSUKI Takashi

Sikoku : ONO Yasuhiro

Fukuoka : TAKAKI Sousuke

Kita-kyushu : HYUGA Shogo

Kumamoto : NAKABAYASHI Teruyuki

Higashikyushu : KATO Hidehiko

Miyazaki : ARATAKE Yatsuki

公益社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

—1905(明治38)年設立—

住所：〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 サンビューハイツ四番町

2020年度役員・評議員・支部長名簿

会 長	古野 淳			
副 会 長	野澤 誠司	山本 宗彦	坂井 広志	
常務理事	永田弘太郎	萩原 浩司	古川 研吾	
理 事	安井 康夫	清登 緑郎	神尾 重則	
	清水 義浩	飯田 邦幸	柏 澄子	
	近藤 雅幸			
監 事	黒川 恵	石川 一樹		

評 議 員	山本 良三	成川 隆顕	神崎 忠男	
	橋本 清	今村 千秋	吉永 英明	
	吉川 正幸	伊丹 紹泰	小林 政志	
	重廣 恒夫	絹川 祥夫	大谷 亮	
	森 武昭	中山 茂樹	野口いづみ	

支部長	北海道=藤木 俊三	青 森=中村 勉	岩 手=阿部 陽子
宮 城=富塚 和衛	秋 田=鈴木 裕子	山 形=野堀 嘉裕	
福 島=佐藤 一夫	茨 城=浅野 勝己	栃 木=渡邊 雄二	
群 馬=北原 秀介	埼 玉=大山 光一	千 葉=松田 宏也	
東京多摩=野口いづみ	神奈川=込田 伸夫	越 後=桐生 恒治	
富 山=鍛冶 哲郎	石 川=樽矢 導章	福 井=森田 信人	
山 梨=北原 孝治	信 濃=米倉 逸生	岐 阜=高木 基揚	
静 岡=有元 利通	東 海=高橋 玲司	京 都・滋 賀=松下 征文	
関 西=茂木 完治	山 陰=白根 一	広 島=斎 陽	
四 国=尾野 益大	福 岡=高木 荘輔	北九州=日向 祥剛	
熊 本=中林 暉幸	東九州=加藤 英彦	宮 崎=荒武 八起	

編集後記

まさか新型コロナウイルスの感染拡大がこれほど長引き、さらに新たな変異株が出現、猛威を振るって感染者数が飛躍的に増大し、医療態勢も逼迫しているという現状には驚くばかりです。緊急事態宣言の発出も不要不急の外出自粛もなぜか緊張感に乏しく、ついつい『山岳』の編集作業も滞りがちでした。その影響からか進行も遅れがちなりましたが、なんとか『山岳』2021年も校了の時期を迎えることができました。例年より半月遅れての刊行でした。

さて、表紙画は昨年より画家・写真家の小谷明氏の画になりました。今回の画はパタゴニアのドレス・トールとアマルガ湖で、湖面に映る神秘的な山容が魅力的です。

巻頭の寄稿は2本、まず古道歩き楽しさ、奥の深さを竹内康之氏に綴ってもらいました。記念事業委員会の「全国山岳古道調査」プロジェクトも活動を始めたことですし、支部会員から募った地元のご道紹介など、今後の展開が楽しみです。2本目はコロナ禍の1年を俯瞰した原稿です。登山者と山小屋、医療従事者、それぞれの視点から、コロナ禍をいかに防ぎ感染させないか、安全に山を楽しめるか、柏澄子会員の長文のレポートです。

記録は2本、ともにカンチエンジュンガ山群、「グレート・ヒマラヤ・トラバース」隊のパプタガン登山の記録とNHKのピクチャー・ブック撮影隊の記録です。新型コロナウイルス感染拡大の影響をまともに受けて、入山も下山もぎりぎりのところでクリア、最後はカトマンズで長期の軟禁生活を強いられ、チャーター便で帰国するという、稀有な体験の記録となりました。

奇しくも深田久弥に関する読物が2本。折から没後50年、果敢な人生を歩んできた深田久弥の人となりや業績を、雁部貞夫会員が振り返ってくれました。一方、深田に私淑していた脳科

学者の黒田洋一郎会員による寄稿は、「世界百名山」の中から、山岳信仰の対象となる名山を選んでまとめたものです。山岳宗教を解説した1部と、世界各地の名山を地域別、山別に記した2部で構成され、興味深い記事になりました。

調査・研究も盛りだくさんです。社会人登山団体発足の歴史をまとめた城島紀夫会員、信州の学校登山の行方をレポートした菊地俊明会員、そして、小島烏水が遺した飛騨の著作をまとめた木下喜代男会員と、バラエティに富んだ内容になりました。追悼は4名の方たち。それぞれに山岳会で直接お世話になった旧知の方たちばかりで、淋しさが募ります。心からご冥福をお祈りいたします。

最後の委員会の活動報告ですが、やはりコロナ禍の影響でいくつかの委員会は活動ができず、報告も一部休載になったものがあります。

今回の英文サマリーも、東京多摩支部の石塚嘉一会員にお願いしました。英文サマリーは原稿が一番最後になるので、時間をかけて翻訳してもらおうゆとりもなく、ご迷惑をかけてばかりです。今回も大変な急ぎ足で、翻訳していただきました。

長年にわたって、当山岳会の販売の面倒をみていただいていた茗溪堂が、今年をもって廃業となりました。販売自体は直販になりますが、ほんとうに長い間、お世話になりました。ありがとうございました。

また、この号から久保田賢次会員に編集部に加わってもらいました。編集のベテランですので、今後の『山岳』に新風を吹き込んでくれることでしょう。

(神長幹雄)

『山岳』編集委員会

担当理事／萩原浩司、委員長／神長幹雄

委員／節田重節、原邦三、久保田賢次、小泉弘、成川隆顕

山岳 第百十六年（通卷一七四号）

二〇二一年八月三十一日発行

発行所

公益社
団法人

日本山岳会

東京都千代田区四番町五十四

サンビュールハイツ四番町

（〒一〇二一〇〇八一）

電話 〇三二三二六一―四四三三

振替口座 〇〇一三〇一―四八二九

発行人 古野 淳

編集人 神長 幹雄

印刷所 株式会社 東京印刷

定価三八五〇円

（本体三五〇〇円＋税10%）

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載
を禁じます。